3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第4巻第5号・昭和34年5月1日発行(毎月1回)

# 裏窓

女性解放悲史・特集

5月号

裏窓

女性解放悲史特集号

5

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号・

定価 120円
IBM 1807

あまとりあ社の特撰単行本

異色官能サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！ ¥.250 〒.40

どれを読んでも素敵な面白さ

続・隠密覚書 **忍び夜秘帖** 島本春雄・著 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀隠密鳴子善四郎！ ¥.260 〒.40

これこそ読者の満足する本

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著 喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！ ¥.250 〒.40

御送金は書留か現金為替で

エロチックミステリイ **あやかしの夜** 岡田鯱彦・著 笠井 一・装幀

ねっとりとよどんだ夜の底にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作 ¥.260 〒.40

最寄の有名書店にあります

耽奇サスペンス **妖しい花粉** 狩久・著 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリイ!! ¥.230 〒.40

ハガキ下さい図書目録送呈

エロチックサイエンス **甘美な謎** 矢野 徹・著 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？ ¥.250 〒.40

＝東京都中野区江古田1の2302 （振替口座・東京10756 久保書店宛） 株式会社 あまとりあ社＝



# マンハント 4月号絶賛発売中！

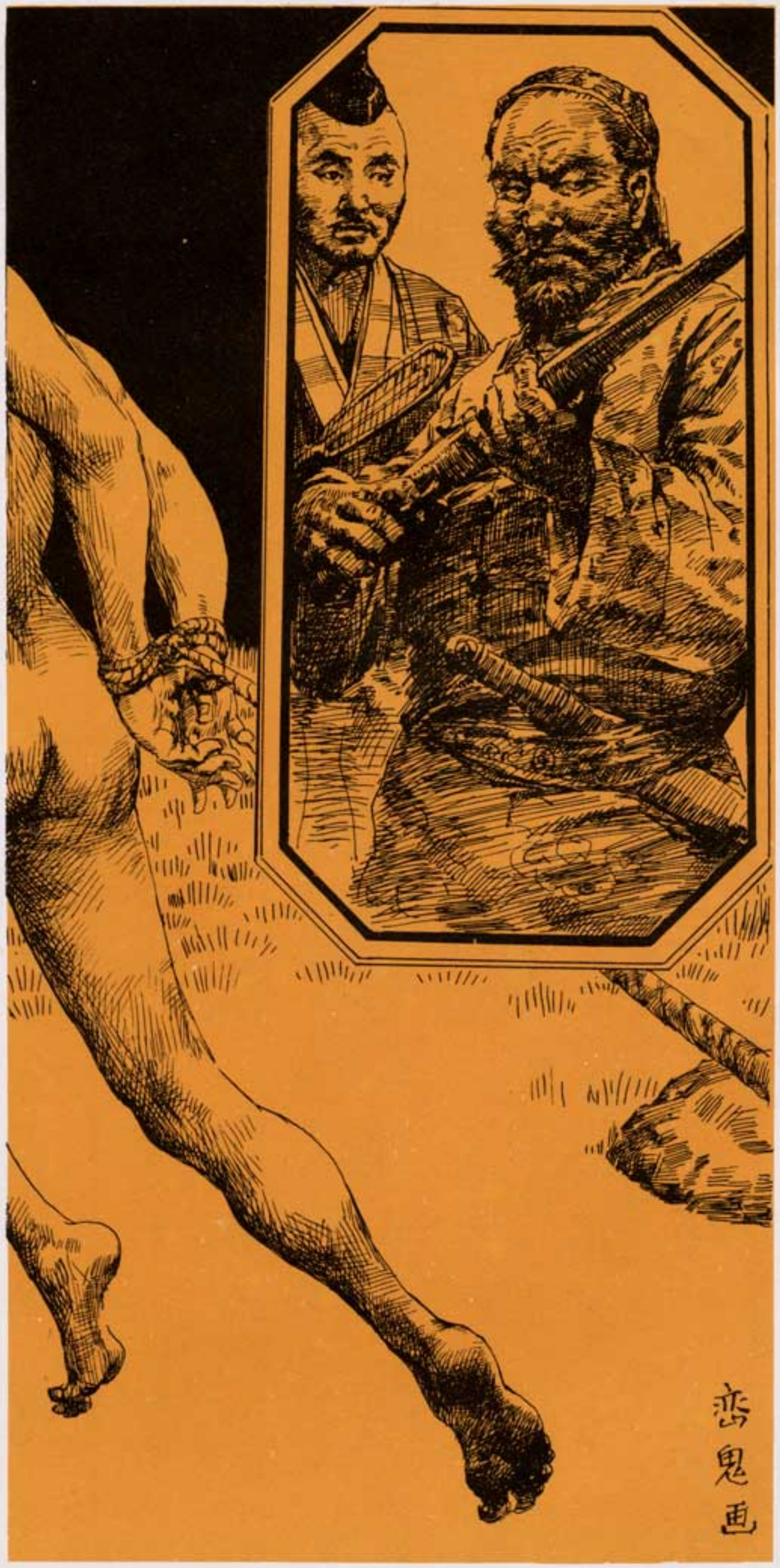
スリル！
スピード！
セックス！
100万人の探偵雑誌

ハードボイルド名探偵・特集

伯母さんは意地っぱり H・Q・マシュー
わき腹を見せる女 F・ケーン
義足と裸と機関銃（トミイ・ガン） R・デミング
にくらしい曲線 C・ライス
秘密写真の女 E・ハンタア
危険な金髪 R・マクドナルド
こわいお取巻 R・エリントン
見てしまった男 R・ブレイト
鍵穴にささった鍵 H・ケーン
泣虫美人と爆弾美人 R・S・ブレイザー

現代無用語辞典 川崎はじめ 騎士九郎 ジャック・尾木
ポケットの中の本棚 編集部
スクリーンつまみ食い 永久闇太郎
マンハント・スクエア 上月健
あちら版・浮世風呂 編集部
グラマア・フォト P・ゴウランド
未封切映画紹介

総142頁 定価100円 ￥8円 東京中野 久保書店




鉄砲伝来秘史

# 海の魔王と女たち

生きた裸女の的を狙って魔王の武器は火を吐いた！鉄砲伝来にまつわる怪奇と残虐の秘史！

小田桐爽 画・秋吉巒鬼

★本文二二四頁を御覧下さい★

■あまとりあ社の特撰単行本を御覧下さい!!

封建刑罰悲史

## 江戸暗黒秘録

封建の江戸に行われたおぞましい公刑私刑の種々相を描いた興味篇

鈴木和夫・著

〒240 230円

耽奇サスペンス

## 夜光裸身

暗黒の中に輝く美女の裸体!!覗き見る男の眼前に切なく身をもがく

葉田光・著

〒240 250円

妖美艶色物語

## 濡れた夜曲

探訪記者の鋭い眼がとらえた妖しくもおぞましい裸女美人の種々相

島本春雄・著

〒240 200円

（ハガキを下されば目録スグ送ります 東京都中野区江古田一 あまとりあ社）

■

裏窓・五月号・目次

◎表紙……堂昌一　◎目次カット……石塚芳幸
◎目次裏口絵……秋吉繖　◎トビラカット……江村良

巻頭絵物語　**太腿に眼をつけろ**　文・豊田一狼　画・古正英生　(11)

グラビア　**ヌード傑作選**（女体とロープ）……藤澤修　(19)

砂漠の女囚……南村蘭　(50)

**女性解放悲史・特集**

**繰り子地獄**……矢桐重八　(62)

からゆき悲歌……葉田光　(76)

**緋縮緬伝法**……島本春雄　(172)

紅怨無限……橋爪彦七　(192)

**海の魔王と女たち**……小田桐爽　(224)

江戸暗黒秘録色絵物語　**女体と圧政**……鈴木和夫　文　中島喜美　画　(136)

**刺青小町**　(27)

時代巷談　美女蒲鉾……明石汐子　(90)

妖異夜話　血（けつよう）……溝呂木寂子　(102)

時代巷談　**巷説緋扱帯呪文**……高月大三　(36)

マゾの犯罪色頁随筆　惣太の黒魔術……尾嶋新　(150)

未整理棚の中から……偏執子　(163)

連載妖異サスペンス　**怪異愛霊教**……飯田豊吉　(118)

あぶちっくすとおりい　狂（きょうむ）夢……京極美岐　(214)

あぶちっくすりらあ　闇の誘い……潮井拓　(240)

恥奇の女　肉（にくかい）塊……奈良原鉄夫　(254)

ホンキイトンク　こんどはお前だ……黒羽新　(266)

黒髪執着　髪行燈……志摩不二　(186)

まぼろし侍破魔暦　**柔肌燈篭**……黒木忍　(280)

# 次号予告

本誌六月号は
**伝奇秘宝録の**
大特集です！
御期待下さい

**夜叉姫絵図** 小田桐爽
**阿修羅秘帖** 中林節三
**伝奇紅蓮党** 矢桐重八
**肌絵双紙** 藤見郁
**魔童子秘文** 島本春雄
**絵図面地獄** 高月大三

**連載妖異サスペンス**

## 怪異愛霊教

第五回

**飯田豊吉**
**山田彬弘・画**

おそいかかる剛造の魔手の下に、美貌の処女は身をもがく！裏窓愛読者に大好評の怪異愛霊教はいよいよ佳境に入って波乱は波乱を呼ぶ！

本文一一八頁を御覧下さい！

# 裏窓絵物語
# 太腿に眼をつけろ！

豊田一狼
絵・古正英生

## ①ヌード奇術

日本の国際都市K港は、指折りの大都会であり、また同時に、国際的密輸、売春、そして、麻薬の取引の巣として知られている。

その繁華街の一角にいま「ヌード奇術竜金蘭一行」と書かれた、テント張りの小屋が建っていた。表の絵看板には、だいたんなヌード美人が乳房をむきだし腰をくねらせて客を呼んでいる。

毒々しい、刺激的な絵看板である。

「へえー。ヌード奇術とは新しいアイデアだな。近頃の客は、平凡な手品なんか見たってサッパリおどろかねえからな」

一人の男が、その小屋の前で感心してつぶやいた。みすぼらしい身なりだが、ガッチリした体格の、眼の鋭い男である。

その男は、やがて一人うなずくと、テント張りの小屋のうしろへまわった。楽屋口である。そこへ、ずかずかと踏みこんで、

「ごめんよ。座長の金蘭さんに逢いてえんだがね」——ザックバランな口調である。

## ② ナイフを投げる虎

「金蘭はあたしだけど、なにか用?」
肉体の線そのままの、ぴっちりした中国服。濃艶な美女だ。男は、その身体から溢れるむんむんした色っぽさに押されて、眼をパチクリさせたが、
「おれをこの一座で使ってくれよ。名前は、虎っていってね、気のやさしい男さ、お得意はナイフ投げだ。まア、そこで一つ、見ていておくンなさい」
虎と名のった男は、そばにいた女座員のテルミを、壁際に立たせた。
「うごくんじゃねえよ。そらッ、いくぜ!」——虎の手からナイフが飛んだ。

## ③ セムシの嫉妬

両手を横に、水平にのばしたテルミの、その裸身の周囲に虎のなげるナイフが、ぶつつと突きささった。いい腕だ。

「どうです、座長。ちょっとイカスでしょう」

虎は、自慢げに鼻をうごめかす。

「フフフ。まアね——いいわ。使ってあげよう。うちの一座は、刺激の強いのが売りものなんだから、お前のナイフも、使いようによっちゃ、客をよろこばすことができるわ」

座長の金蘭、どうやらこの男が、お気に召したらしい。

と——金蘭のうしろに、影のようにつきそっているセムシ男の珍助が、不満を顔にあらわしていった。

「座長。こんな、どこの馬の骨ともわからねえ奴を雇って、大丈夫ですかい？」

「おだまり、珍助。あたしだって、たまには変ったモノを食べたいさ」

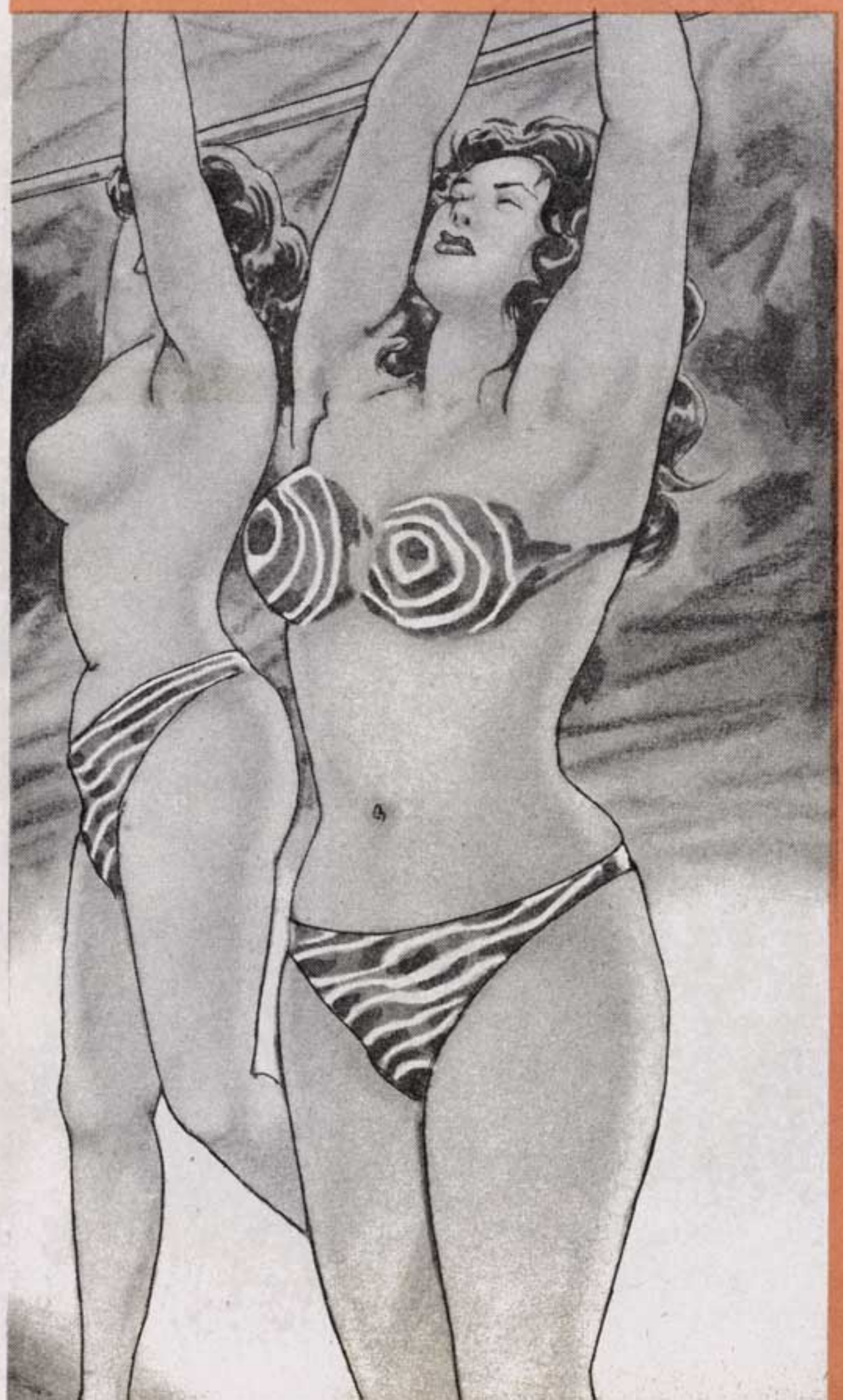
金蘭は、妖しくうるむ瞳で、虎の全身をじっと眺める。

（ちくしょう！　おれの座長を、こんな流れ者にとられてたまるか！）——セムシ男珍助の眼が、嫉妬に燃えて不気味な光りを放った。

## ④ 危機一発

観客の前で、いよいよ虎の芸がはじまる。若い女座員を裸にして、舞台の端の柱に十文字に縛りつける。その縛った身体すれすれに虎のナイフが飛ぶのだ。つぎつぎと突きささって、いよいよ最後、女の咽喉のわきへ。一番危険なところだ。虎も慎重に狙いをつける。

と——いつのまにか舞台の天井裏にのぼったセムシ男の珍助が、スポット・ライトを、いきなり、虎の顔にあてた。強烈な光線だ。



## ⑤ みごとな腕前

さてつぎは、三人の縛った女を、舞台の天井裏から、宙ぶらりんに吊りさげる。ちょうど、縛られたあやつり人形だ。

その空中に張った縄を、虎の投げるナイフが、プツリプツリと切って落すのだ。下には、もちろん、網が張ってある。これは、エロとサスペンスの効果をねらって、座長の金蘭が考案した演出である。

「はアい！」

かけ声もろとも、ナイフは飛んで縄を切り縛られた女体は、つぎつぎに、もんどりうって、下の網のなかに落下する。

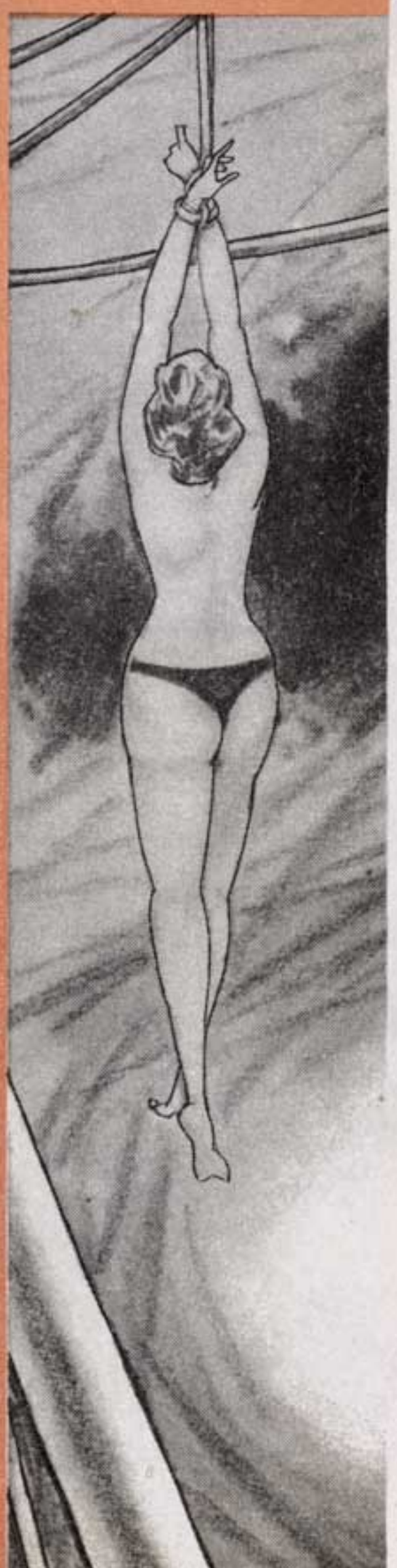
みごとな演技に、見物客は口をあけたまま声もなく陶酔する。

（ちくしょう！……）

天井裏では珍助が、女を吊した縄を、しきりに左右にゆりうごかして、虎を失敗させようとするが、すべては無駄であった。

「あッ！」——眼をやられて、虎の手もとが狂った。観客の中からも声があがった。

だが——マトの女は無事だった。ナイフは咽喉すれすれに突きささっていた。すばらしい虎の腕。どっと観衆が拍手した。



## ⑥ 太腿切断

さて、ヌード奇術竜金蘭一行のクライマックスの舞台は、さすが刺激のショウを誇る一座だけあって、凄い奇術であった。

まず、一座の花形、テルミ嬢をヌードにして、ギリギリとうしろ手に縛りあげる。まっ白な柔肌に、むごたらしい縄。それだけでも観客は、奇術な興奮にひきずりこまれる。

そのテルミを、さらに椅子に縛りつけて、座長の金蘭が、ノコギリでその足をつけねから切り落すのである。ちょうど太腿のあたりに、ノコギリの刃をあてるのだ。縛られたテルミが、その苦痛に身をのけぞらして悲鳴をあげるのが、凄絶惨忍であった。

もちろん、タネはある。切り落される太腿は人形の足だ。鏡の反射を応用したトリックなのだが、演技が真に迫っているので、見物人は、ドギモをぬかれる。スリル百パーセントのショウであった。

## ⑦ トランクの中身

真夜中――大きなトランクを抱えた金蘭が寝静まった町を歩いていく。どこへ？――途中、パトロールの警官に怪しまれた。

「そのトランクの中身は、なんですか？」

ニッコリ笑った金蘭、黙ってトランクをあけると、なかには、切断された女の太腿！

「こ、これは！」――おどろく警官。

「ホホホ。人形の足ですよ。あたしは女奇術師。奇術の道具を、修理にいくんですよ」

そう説明されて、警官もうなずいた。金蘭の着いたところは「竜海洋行」と看板のある店。と――尾行してきた虎の眼が光った。

## ⑧ 虎を殺せ！

セムシ男の珍助が、そっと金蘭の耳にささやいた。

「座長。ゆうべ、虎の野郎が、座長のあとをこっそりつけていったのを知ってますかい」

「なんだって！」――金蘭の顔色が変った。

「だから、いわねえこっちゃねえ。奴は、どうも、ただものじゃありませんぜ」

「よし。――珍助。虎をやっておくれ！」

金蘭は、唇を噛んで命令した。

「へへへ。ありがてえ！　これで恨みが晴らせるってもンだ」

その夜——珍助は、小屋裏の川っぷちに、虎を呼びだした。

「おい、虎。座長が人形の足を運ぶところをなんでつけやがったンだ。覚悟しろ！」

珍助のドスが、虎の腹に突っかかる。

「待て！　人形の足をつけただけでどうしておれが殺されるンだ！」

虎は、わめきながら、川の中へ転落した。

## ⑨ 不審尋問

コツコツ……寝静まった街を、今夜も大きなトランクをさげた金蘭が歩いていく。

「もしもし、そのトランクの中身は？」

また、パトロールの不審尋問だ。

妖しい微笑をうかべた金蘭が、トランクをひらく。まっ白い女の太腿があらわれる。

「ホホホ。これは奇術の材料なんですよ。人形の足なんですのよ……」

落着き払った金蘭の返答である。と——



## ⑩ 快心の微笑

金蘭の背後から、べつの声がかかった。

「待て！——その足のなかには、大量の麻薬が詰めこまれてある。竜海洋行という麻薬密売所へ運ぶんだ。そうだろう！」

顔色を失った金蘭、思わずふりかえる。

「あッ、お前は、虎！……」

思わず、快心の微笑を洩らすのである。終

「おかげで、やっと動かぬ証拠をつかむことができた。やれやれ、苦労したよ……」

ナイフ投げの虎こと、麻薬取締官辺見虎夫

# ヌード傑作選

女体とロープ

カメラ・藤澤　修

裏窓絵物語

# 刺青小町

絵と文　中島哲夫

①お京は、湯舟の中でうっとりと体を浸たしながら、柘榴口の前で声高に話をしている女連中のおしゃべりを聞いていた。

「あたしはね、葵の葉をつるして置いて一度葵小僧に来てもらおうと思ってんのよ」

「やだね、お前さんのは困っているんじゃなくて浮気するためにかい……あきれたもんだよ」

「だってさ、成駒屋のようないい男だって評判だもの。……女冥利に一目おがみたいやねえ」

「そんなことと留さんに聞かせてごらんよ、また出刃庖丁ものだよ。ははは」

②「おやお京ちゃんじゃないか、お前さんはいつ見ても羨しいくらいきれいだね」
「小母さん、ひやかしちゃいやッ」
「お由さん、あたしこんなにきれいに生れてたらと思うよ」
「全くねえ、玉の輿にのれるもの。だけどお京ちゃん気をつけな↖

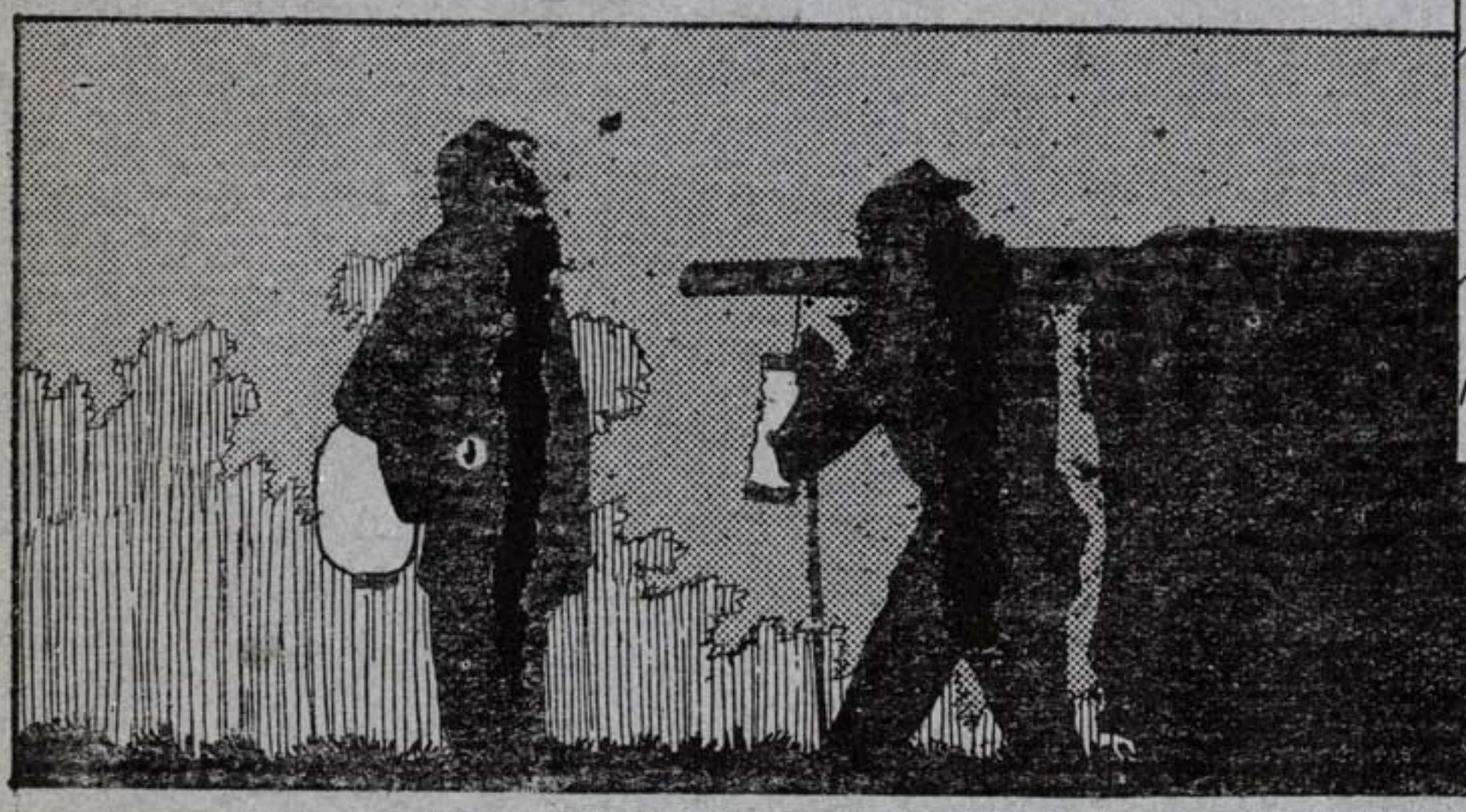
③「本当だよ、お京ちゃんときたらあたし達おばあちゃんだって惚れ惚れするような娘だもの、助平な神様ならうっちゃとかないよ、ほんとうに気をつけなきゃだめだよ……さあ遠慮しないで背中をだしなよ。流してあげるから」
「済みません、お願いします」
お由と呼ばれた女は白羽二重のようなお京の背中に糠袋をあてた
「全くまぶしいような肌だねえ、流し甲斐があるよ……」

↘この町内で二人ばかり若い娘が神隠しにあっちまったからね」

「まあ、ほんとう？おどかしちゃいやよ……」

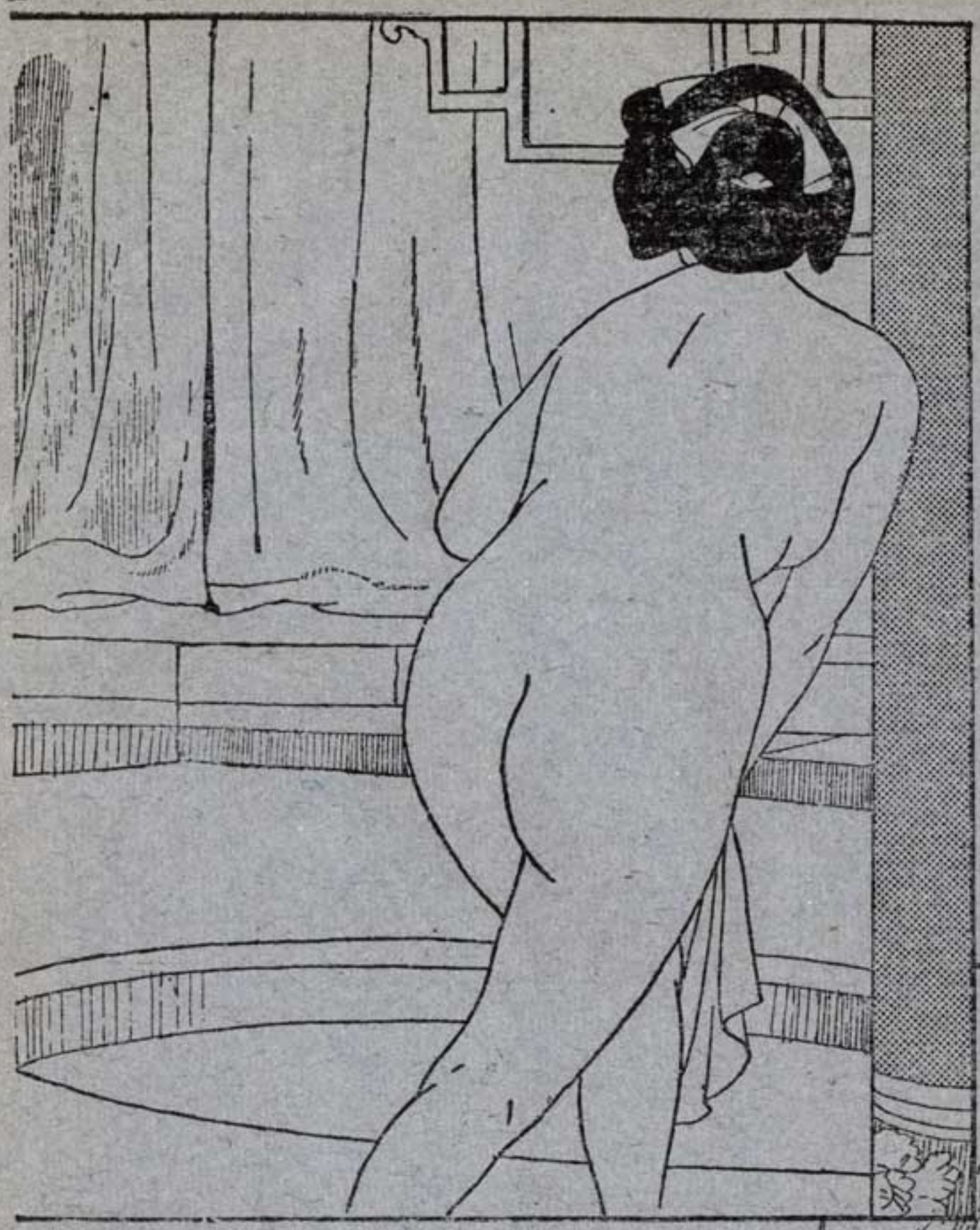
④日本橋の問屋筋でも、有名な伊丹屋からお京を行儀見習に出さないかと云ってきた。いずれどこかへ一度は行儀見習に出さなければと思っていた両親は、伊丹屋さんならば豪商と云われ、武家屋敷と違い商家のことだからと喜んで承諾した。

お京は、どうせ一度は嫁入り前に行儀見習に奉公へ出るのは覚悟の上だったが全然今まで関係のなかった伊丹屋さんがどうしてお京を知っていたのかと、腑に落ちないままに奉公に上る日が近づいた。



⑤初めての奉公とて娘らしい不安はあったが、あまり裕福でない家庭に育ったお京は日本橋の問屋で指折りの分限者と云われる伊丹屋の家庭に憧憬に似たものを感じていたしそれにお嬢さま付きの上女中であることも一つの魅力だった。

不安と希望を胸に、出迎えの駕籠に乗ったお京の体は日本橋ではなく向島の寮へ運ばれた。



⑥お京は息をのむとその場に立ちすくんだ。無理もない、案内された湯殿は目の覚めるような唐風の華麗な装飾がほどこされていて、まるで揚貴姫が湯浴みしそうな豪華なギヤマン風呂だった。お京は本能的に身の危険を感じとった。

薄い絹の帳幔の向うから己れの裸身を見つめている気配を感じるとあわてて湯舟の中に身を沈めた。しかし湯舟はギヤマン風呂だ。

⑦お嬢さま付きと云うのも嘘らしく、二三人の使用人以外広い寮には人影がなかった。二日目の朝お京はお由の話を思い出して庭の立葵の葉を一枚裏木戸に吊り下げた。葵小僧が見つけたら救い出してくれるかも知れないと云う空頼みで……。

附近に人影がなかった。お京は二歩三歩と裏木戸を離れて……今だ……と思った瞬間、植込みの中から、

「逃げるか」

と見張りの男に捕まった。見張りの男の裏は桜湯の三助に似ていた。

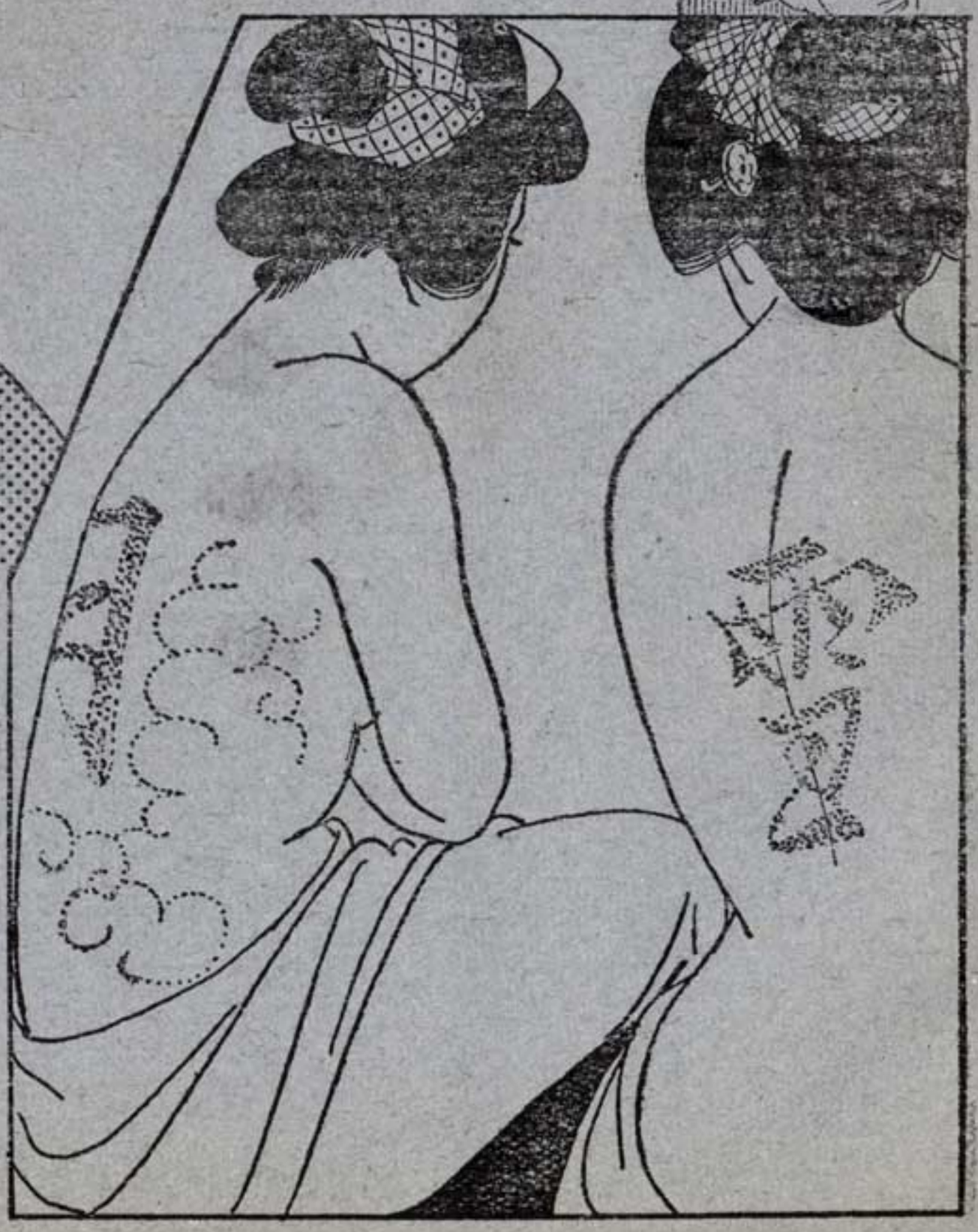
⑧逃げそこねたお京は座敷の中で俯伏せに寝かされ、背中に刺青の下絵が描かれている。

「どうです。この肌の艶は……」

彫師にとっちゃ一生に一度会えるか会えねえ位の肌ですぜ」

「これで雪、月、花と三つ揃う訳じゃが、一番の傑作ができそうじゃ、楽しみですわい。明日から針を入れると来月の中頃は、三幅対が見られる、結構、結構」

伊丹屋万兵衛は大満足の態だ。



⑨「お京さんあれを見て御覧」

番頭らしい男に云われてお京は隣室を見ると二人の娘が後向きに坐っている、その背中のみごとな刺青がお京の目をうばった。

「ここの御主人の道楽さ、その代り生涯栄耀栄華に暮せるだけのことはしてあげますよ」

お京はこの言葉に反駁を感じた

⑩逃げられないように腰のもの一枚で座敷牢のような部屋に入れられてしまった。
あの娘達は栄耀栄華な暮しができるという話に肌へ刺青をさせたのだ。
——わたしはそれまでして贅沢な暮しをしたいとは思わない——
ぐずぐずしていて刺青をされちゃたまらない。葵小僧に神通力があってあの裏木戸の葉を見てくれないかぎりわたしはこの部屋から逃げられないと思うと、お京は絶望を感じた

⑪天井板が一枚ぽっかりとはずされた。
「……」
お京ははっとして本能的に部屋の隅に身をさけるとはずされた個所を見上げた。すると盗人かぶりにした顔が空間に現われて
「娘さん、助けてやるぜ」
と小声に叫ぶと、するすると一本の縄が下って来た。お京は葵小僧が助けにきたと信じて、急いで縄を体に縛りつけた。一刻も早くこの部屋から逃げ出したかったから……

⑫ピンと縄が張られるとお京の裸身がじりじりと畳から離れて行く、お京は必死に縄にすがりついていた。部屋の中の行燈が宙吊りになったお京の姿を照らし出している。盗人かぶりの男の手がすっと伸びたと思うとお京の白い躰をぐっと抱き上げて天井裏に姿を消してしまい。天井板が元のようにふさがれた。

⑬「やっぱりあの葵の葉を見て助けてくださったのね」

——これが有名な葵小僧とお京は恐る恐る見上げた。朧月夜に見る葵小僧の色白なきりっと締った顔つきは盗人と思えない品のよさがあった——噂の通り成駒屋に瓜二つだわ、とお京は思わず胸をときめかせた。が当の葵小僧はなぜか沈鬱な顔で歩いていた。天井裏から外へ出ると、いつ手に入れたかお京に着物を着せて、葵小僧は向島の堤へ出たのだった。お京はこのまま果てのない道を歩いて行きたい欲望に娘心を燃やしていた。

⑭桜湯の湯舟の中でおかみさん達の話に今日もお京は耳をかたむけていた。神隠しに会った娘が帰ってきてからあの家は暮しが楽になったこと、桜湯の三助が行方不明になったこと……

「やっぱりあの町の見張りだったんだわ、それでわたしがあの寮へ連れていかれたのがわかったわ」

——神隠しに会ったのもあの娘に違いない寮でのできごとも葵小僧の話も、誰にも話さないと葵小僧と約束したお京はそれを固く守っているので両親も真相を知らなかった。

⑮銭湯から帰って来たお京は父と対座している客の顔を見ると思わず湯上りの美しい顔を上気させた。

「あっ、あなたは葵小僧……」

「これこれ失礼な、この方は伊丹屋の若旦那さまだ」

あっ気にとられたお京に若旦那の与兵衛が説明した。それによると父親の悪癖が取巻き連に悪用され、娘を連れ出して刺青をする程になったので、あの日葵の葉を見て葵小僧になりすましてお京を救いその後二人の娘も莫大な金子で処置し、万兵衛も間もなく卒中で死去したと云う。

「お京さん、葵小僧でなくちゃいけないかしら」

と与兵衛はささやいた。お京はだまったまま真赤になって首を振り続けていた。(終)

# 裏窓

五　月　号

## 女性解放悲史・特集

第四巻・第五号

英名
緋扱帯吸文
高井丹七
狩野古法眼

# 忍び駕籠

そう云ったのは、泉州浪人桂木甚内。着流しの黒い着物に、単色の小切れで覆面をしている。懐手をしたままで、駕籠の右傍にぴったりとよりそい、飛ぶように歩を運んでいるのに駕籠屋にかけた声は、息切れさえも感じられない。

「へい……」

駕籠屋はさすがに、額のあたりがじっとりと汗だった。

急げぬか、と云われて、後棒の兄い株が、呼吸をはずませながら、ぷッ、と仏頂面をしたのは、酒手の約束がどうやらあやぶまれてきたのかも知れない。

「……向うに着けば、酒手はうんとくれてやる。急げ、急げ！」

「へ、へい。だ、旦那、が、合点で」

おい、と後棒が前に声をかけると、無理矢理に調子がついて、

エッ、ホ。

えッ、ほ。

と口の中でかけ声をかけながら、今までよりも早くなる。

ぎッ、ぎッ。ぎッ、ぎッ。

駕籠のきしむ音が、静かな屋敷町の、人っ子一人通らない道を、空気を刻むように調子づいて、その音が、甚内の胸の中をほくほくとさせているのだ。

駕籠の中には甚内が泉州堺から追ってきた金づるが、ちゃんと乗せてある。

ヒタ、ヒタヒタ。

足音を忍ぶように、その町駕籠は、武家屋敷の片側塀に寄りそって急いでいた。

ちょうど、斜に照らす朧月の光りが、夜ふけの道の片側を明るく、そして片側を塀にさえぎられて暗く影を落していて、音を忍んだ駕籠はその小暗い塀の蔭を縫うようにして、急いでいるのだ。

「……駕籠屋」

「へ、へい」

「もうちと、急げぬか」

## 紅毛人の造った水中軍船の絵図面をめぐり正邪入り乱れて争う緋扱帯呪文!!★★★★

、ふッふッ。この女が金になるのは、時刻の問題だ。一歩々々が、ふッ、何千両と云う小判の山につながっているのだ）

甚内は心の中でにやにやとしていた。

こたえられないような笑いが、顔を包んだ覆面の中ではじけそうになるのである。

ぎッ、ぎッ。ぎッ、ぎッ。

駕籠のきしむ音につれて、歩速を合わせながら、甚内は、気になるように、ハタハタと動く駕籠の垂れを見る。

わざと提灯をつけさせないのは、誰かに見とがめられるのを恐れてのことなのか。

（ふ、ふ。おとなしいな。もっとも、あばれようとしても、どうすることもできないが。それにしても随分と手間を取らせたものだ……やっとの思いだったが、もうこれで、……）

懐の右手を、毛だらけの胸元から出して、あごをなぜ、またにやにやとするのだった。

そんな甚内の様子を、後棒の兄い株は、それとなく見て見ぬふりをしているが、日本橋の旅籠から、美しい娘をかついで出て来たこの風体のよくない浪人者を、決して良い客だとは思っていないのだ。

酒手ははずむぞ。そう云いはしたものの、どう見ても、金にはあまり縁のありそうもない浪人だし、第一、気を失ったままの美しい娘をどこに運ぶつもりか、それも気になるのだった。

どうせ、よくないこともやっている辻待駕籠の二人組だ。ちょっと金になることなら、かどわかしの片棒どころか、自分たちでもやりかねない雲助どもだったが、相手が、どうやら数段上らしい。

さっき暗いところで、一度駕籠を止め、ぐったりしている娘を用心深く縛り上げたのも、気になっているのだ。

「行く先は、どちらで……」

そう聞いても、

「拙者の云う通りに、行けばよい」

そう応じるだけなのだ。

勝手にしやがれ！　こう思うのは腹の中で動作はそれと反対に、浪人者の言葉の通りになっている。

恐ろしいのだった。

きらり、と、時おりするどく光る侍の眼が、駕籠屋の肝をつかんでしまっていたのである。

## 出会いがしら

「あッ！」

駕籠屋が出し抜けに、とっ拍子もない声を出したのは、いきなり、武家屋敷の曲り角から提灯が飛び出したからだった。

がちッ。

棒鼻が突き当って息杖がたあいもなく、地面に転がった。

「無礼なッ！」

そう叫んだのは、月あかりの中を駕籠をかこんで歩いていた武士である。

出会いがしらに、駕籠と駕籠の棒鼻がぶつかりあって、それが、あとで桂木甚内を口惜しがらせる結果になったのだ。

「無礼なッ。この夜中、灯りもつけずに歩行するとは、何たることだ！」

向うの駕籠を、左右から囲むようにして歩いてきた二人の武士が、気負い立って、甚内の先棒に一喝する。

チッ！　口の中で、思わず舌打ちをした甚内。どんな奴か知らぬが、悪いところで、へまをしてしまった。何とか旨く通らぬと、せっかくの金づるが……、そんな事を考えている。

まだ、大きくゆれている先方の提灯に、剣花菱の蔭紋がついているのを、ちらと甚内は眼の中に入れていた。

ふところ手が、いつの間にか出ていて、気負い立っている武士の前に甚内は立っている。

金づるを乗せた駕籠屋は、相手の出方に恐れをなして、そのまま五六歩駕籠をかついだまンま、あとずさって、腰を落していた。

「む、灯もなく、無礼な駕籠だ！」

甚円の姿を見て、相手が浪人者と見てとると、頭から抑えつけるように、もう一人の侍が叫ぶ。

「う、失礼をば致した。病人を乗せておるので、急いでいたゆえ……お許し願いたい」

「な、なにッ。病人ッ！」

言葉につまったように侍二人は互に顔を見合わせる。

それを見てとった甚内。とっさについた嘘の効果に心の中で喜んだ。

「そう、病人でござる。急ぎます故、何卒、平に……」

シン……と、ひととき、静かになったお互の間に、殺気のようなものが流れて、それをうしろの塀の蔭で見守っている、もう一つの人影が、同じように感じとっていた。

相手の駕籠からいつの間に出て来たのか、でっぷりと肥った人物の立ち姿だ。

武士ではない。

「その病人、拙が診て進ぜよう」

あッ！　甚内は胸の中であわてる。こいつは、とんだ、やぶへびだ！　総髪にしているので、はじめは何者かと思ったが、この相手は医者なのか。

「そ、それには及ばぬ……そ、それには」

「いや、御遠慮は御無用になされ、拙は、蜂須賀家江戸屋敷のお抱え医師、堀部了庵でござる」

しまったッ！　口から出まかせの嘘が、こんなところで却って自分を縛り上げようとは思わなかった。

甚内、思わず、左手を刀の鯉口にかけてジリッと居合の間合いを計る形になっている。

シン……と、ひととき、静かになったお互の間に、殺気のようなものが流れて、それをうしろの塀の蔭で見守っている、もう一つの人影が、同じように感じとっていた。

## 水中船の秘図

「ヘン、馬鹿々々しいったら、ありゃあしないやね。相手は、何のこたあない、ヘロヘロした田舎侍二人と、でぶでぶのじじいじゃないか桂木甚内ともあろう男が、それを、どうしたって云うのさ。例の居合い抜きはどうしたンだろうねえ、ほんとに、あきれ……」

「云うなッ！」

「ヘン、今頃になっていきまくのは、お門違いだろうよ」

「くそッ……ちえッ」

甚内。左足の傷が痛むのか、白布を巻いた太腿を大げさな身ぶりで抱えて、お龍の毒舌を聞きながら、眉をしかめている。

「あたしゃね、お前さんがあのとき、やるなッておもったンだよ、そしたら……」

お龍の云う通りだった。

甚内は、あのとき、一人二人を傷つけても駕籠の中の娘を、自分のかくれ家に運び込みたかったのである。

だから、その気になっていた。

嘘がかえって悪い結果になったと知った時、いつの場合でもすぐに破れかぶれになってしまう甚内が、得意の居合いで、急場を切りぬけようとしたのもこの男の考え方からすれば、無理ではなかったかも知れないのだ。

女賊のお龍は、少し離れた塀ぎわで、あの騒ぎを始めから見ていたのである。

甚内が右手を動かそうとしたとき、駕籠の中から、娘が転がり出たのだ。

胸元も裾も乱れるままになった娘が、後手に縛られたまま、転がり出したのだ。

「おッ！」

相手の視線が、剣花菱の提灯に照らし出された娘の姿を認めたと思ったとき、甚内の心の中に瞬間動揺が起った。

数千両の価値のある物を抱いている娘だ。いま、これを見られては……そう思う心の配りが、ちょっとの間、居合いの手をにぶらせたのだ。

了庵と名乗る本道の片手に、月あかりにも黒々と光る、南蛮渡来の懐鉄砲が、その黒い銃口をこちらにむけて、ゆっくりと構えられているのに気がついたのは、そのあとであった。

甚内が、衝動的に刀を抜くより一瞬早く、その懐鉄砲が火を吐いてた。

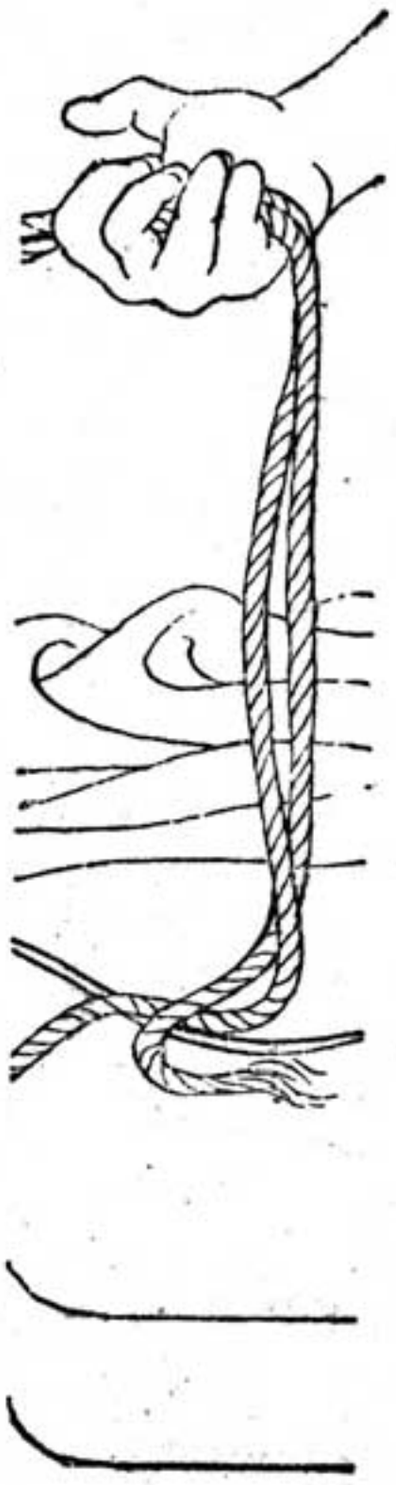
左の高腿に焼火箸を突きさしたような激痛を感じ、膝をついたまま立てなくなってしまったのだ。

「相手の駕籠に娘は乗せられて、行ってしまったよ。行く先は、阿波守の江戸屋敷。でなければ、了庵とか云った鍼じじいの家さ。一体、どこからかどわかして、どう売りさばく筋あいの娘か知らないが、へッ、鳶に油揚をさらわれたってのは、このことさね」

「うぬッ。だ、だまれッ！」

傷口の痛みに甚内、顔をしかめながら、お龍の毒舌を抑えようとする。いや、傷の痛みだけではない。せっかく、手に入れたえものを、みすみす眼の前で持って行かれた口惜しさに甚内のはらわたは、さながら、煮えくりかえるようだった。

手傷を負った甚内を、娘を運んできた駕籠に乗せて、自分のねぐらに連れ込んだのはお龍だった。だから、甚内はお龍に助けられたことになる。しかし、お龍の毒舌には、どうにもならないいらだたしさを感じるのだ。



旨く事が運んでいれば、今頃は、あの美しいお美奈を、自分の隠れ家に連れ込んで、お美奈の持っている、水中軍船の秘図をこちらの物にした上、ゆっくりと楽しんでいる頃なのである。

もし、あの秘図を、お美奈が渡すことを拒んだとしても、出させずにはおかなかったのに……。一枚々々着ている物を引き剝がしていってその羞しさに悶える姿を見ながら、秘図のありかを探るのだ。

うむッそ、それをッ……くそッ。

甚内は歯ぎしりして口惜しがった。

お美奈の美しい、むっちりとした弾力のある雪のように白い膚が、甚内の脳裡にちらついて、色と欲とに狂ったようになっている男の悪魔の思いは、どこまでも拡がっていった。

女賊のお龍は、そんな甚内の心も知らずに、裾前を乱しながら、先刻つけた酒のあたたまり具合を、ちょいとふれてみるのだった。

# 色欲の鬼

「なに、堺の商人、河内屋清左衛門の娘だとッ。そ、それでは、そちが、お美奈と申す女だなッ」

お美奈は、ハッとしたように下をむいた。

まさかと思っていたのだが、だから正直に父の名を口に出してしまって、それをおうむ返しに、自分の名まで相手が知っていると判った時、これはとんでもないことになってしまったと、後悔した。

お美奈が、まさか江戸に来てまで自分のことを隠す必要もないと、ついうっかり思ったのか、あとあと吾が身をどのような辛い地獄に落す破目になるかを知らなかったからであった。

いや、自分が、いろいろの人達から狙われていることは、お美奈はよく知っていたはずだったが、思わぬ油断から甚内に捕われて、ああしてどこかに運び去られようとしたとき、助けられたあとであってみれば、その生命の恩人とでも云うべき、この堀部了庵に、つい安心して、ふと父の名を洩らしてしまったのも仕方のないことなのかもしれない。

ただ、不運なめぐりあわせだったことにはこの了庵が河内屋清左衛門の秘密を知っていたことだし、これは了庵だけでなく、阿波の国主蜂須賀阿波守重喜みずからが、清左衛門の水中軍船の秘図を欲しがっていたのである。

水中軍船の秘図。

それは、一体どんなものだろうか。天領堺の港には、戦国の昔から南蛮人が渡来して、交易を行っていた。河内屋清左衛門はその堺の七人衆に数えられる豪商だったが、難波した紅毛人を、ふとした事から助けたのがもとで、その異人のもっていた水中軍船の図引きの秘図を手に入れたのだ。

タアトルと名付けられたその水中軍船とは、今で云う潜水艦の初期のもので、水中を自由に航行し、海中に隠れたままで敵の船を襲い、沈めることができる船である。

清左衛門は驚喜した。

誰も考え及ばないような魔法の船が、これをもとにして造ることができるのだ。水中を走り廻る船なぞ、吉利支丹の魔法でもとうていできないことなのだったからだ。

秘図はうすくなめした羊皮に細かく書かれていて、その船の形は、さながら亀に似ていた。この船をこの図引きの通りに造って、海中に浮かすことができたら、一体どれほどの利益があるだろうか？

軍船としてだけでなく、密交易にも利用される為に、莫大な金で売れるかも知れないのだ。

清左衛門が、秘密にして、口外しなかったのは賢明だったが、しかし、どこからどう洩れて耳に入ったものか、堺の代官、新見太郎兵衛が、それを渡せと云って来たのは、昨年の夏のことなのである。

「家宝でござります。こればかりは、お渡し致す訳には参りませぬ」

そう云って、何度も断わる清左衛門の態度に代官は怒った。

河内屋が、何者とも知れぬ曲者におびやかされるようになったのはこのことがあってからだった。

幕府を狙うある大名が、その水中軍船の秘図を手に入れたがっているとも云い、また、堺の代官が、吾が身の栄達の為に、それを欲しがっているとも思われたが……。

蜂須賀阿波守も、堺に散らした諜者の報告で、水中軍船の秘図のこ
とを知っていたのでもあろうか。
「ふふふふ。やっぱりそうか。そうだったのじゃな」
堀部了庵は、お美奈のうつむいた美しい襟足を、なめるような眼つ
きで見ながら、脂切った顔をほころばせて二重顎をふくらませた。
「……」
「と、すると、水中軍船の秘図を持っている訳じゃな？」
救われた、と思ったのもつかの間、この前にいる男も敵なのだ！
お美奈は、そう思って思わず全身を固くする。
「秘図を拙にゆずってくれぬか？」
声は静かだが、その底には不気味な響があった。
「な、なンで私が、そ、そのようなものを」
「云うな」
了庵は、お美奈の言葉を抑えて云った。
「知っているのじゃ。みンな知っているのじゃ」
「……？」
「そちの父、河内屋清左衛門の家が、何でもないような事を根に持た
れて、あげくの果に取りつぶされた事も、毒を盛られて、河内屋がや
がて死んだこともな……」
「あ！」
お美奈はハッと胸を抑えて顔色を変えた。
「どうじゃ。秘図を渡さぬか。うんと、こころよく首をタテに振れば
金もやる、住家もやろう。仕たいほうだいの事をさせてやるのじゃが
……」
「……も、もし、いやだと申し上げましたら？」
「ふふふふ。よい覚悟じゃの、拙には、その方がおもしろいのじゃ。
ゆっくりと責めつけて、泣き声まじりに、渡しますと云わせてみせる
までじゃよ。ふふふふ」
了庵の相貌は、だんだんいやらしく変っていった。
この男の心の中にも、秘図を手に入れて阿波守に取り入る権勢欲と
そして、美しいお美奈の姿を冒瀆しようとする色欲とが、あわせて含
まれているのであろうか？

## 捕えられた鼠

お美奈は、堀部了庵の屋敷の隠し部屋に投げ込まれていた。
あれから、五日になる。
了庵は根気よくお美奈を口説いた。
それは、さも、鼠を捕えた猫が、えものをゆっくり楽しんでいるよ
うな、そう云った態度だった。
隠し部屋と云うのは、外から見るとちょっと判らぬような場所に作
ってある中二階で、了庵の居間の天井裏になっていた。
空気抜きと明り取りとを兼ねそなえた、小さな窓が、中庭に向いて
あるばかりで、その窓にも厳重な木格子がはまっている。
二度の食事はこの家の下働きらしい年増の女が運んでくれていた
が、木梯子の上にそっと置くと、逃げるように降りて行くのだ。主人
の了庵に、強く言いふくめられているのかも知れなかった。
お美奈は、何者かに毒を盛られて、死んでゆく直前の父の言葉を思
い出している。
「お、お美奈……。こ、この絵図面は、どんなことがあっても他の者

に渡してはならぬ、わ、わたしがもし死んだら、すぐに江戸へお舟手奉行の海堂甲斐守様に、手ずからお渡しするのじゃ……な、よいか……。ど、どんなことがあっても……」

お美奈には、父の言う事の意味がよく判った。権力や政争の具に、この絵図面が供されたり、また、このために世の中に騒動が持ち上ったりすることを、清左衛門は必死になってさけようとしているのだ。それなら、いっそ、焼いてしまえばいい。いやしかし、この得がたい秘図は、日本の国には何物にもかえがたい大切なものなのだ。

はじめ、清左衛門は、自分の利益のことのみを考えていた。それが堺の代官に圧迫され、何度も、この秘図の為に襲われたりするうちに、だんだん気持が変って来たのだった。

誰もがこれほど欲しがるこの秘図は、もしその持主の利用の仕方によっては、大変なことになる。そう云う考えが、清左衛門の頭の中に芽生えてきた。

一番いいことは、国を治める権力者に、これを預けることだ。清左衛門の終局の考えはそうだったに違いない。

それで、麹町甲斐坂に屋敷を持つ、旗本八千五百石、お舟手奉行の海堂甲斐守に白羽の矢を立てたのだ。

お美奈は父の遺志をついで、泉州堺の街をあとにした。河内屋は、父の死の直前に抜け荷買いを口実に取りつぶされてしまっていたし、たった一人残ったお美奈には、もう堺の街に思い残すこともなかった。

羊皮に描かれた水中軍船の秘図は、扱帯の中に巻き込んで肌身離さず待ったまま、東海道を江戸に向って旅立ったのだったが……。

堺代官新見太郎兵衛の手先きと思われる、桂木甚内にあとをつけ狙われる破目になったのだ。そして、そのあげくの果が、了庵に捕われてしまった。

お美奈は、もう、身も世もない思いでいる。

「ふ、ふふふ。お美奈。もう、そろそろわしもしびれが切れてきたぞ。これほど云っても渡さぬなら、どんな目に逢うても、自分の強情ゆえと思え。よいか……今日の日まで、優しくしてやっていたが、もう許さん。今夜は、どうしても、全身を調べてやるのじゃ」

了庵はこう云って、にやりと笑ったではないか。あの笑いが、どんな意味を持つものかお美奈の本能が、痛いほどよく知っていた。

「……いよいよ、強情の皮をむく時がくるのじゃぞ。そのときになって、吠え面をかいても、慈悲はかけぬぞ……」

そして、また、お美奈が両手で耳を覆いたくなるような、下卑た羞かしめの言葉も吐いたのだ。

「あられもない娘の身で、一枚々々着物の縫い目を調べられた上、もし、絵図面があったとしても、それだけでは許さんのじゃ。今日までの強情を張った仕置きは、きっとつけねばおかぬのじゃ……どうじゃな

一絲まとわぬ真っ裸のまま、この了庵の眼の前で、一番辛い海老責めにでもされてみるか……」

昼間きてそう云った了庵が、もう日暮れとともにやって来るかも知れない時刻だった。

小さな窓の木格子にすがりついて、何とかして助かれないものかとおぞましさに身をふるわせて、暮れて行く空をあおぐお美奈の美しい眼には、絶望だけが映っている——。

そっと抑える腰のあたりに、あの秘図を巻き込んだ色あざやかな緋扱帯が、柔らかな布地の手ざわりをみせて触れるのだ。

これを、これを何とかして……。

お美奈の頭の中は、めまぐるしく回転した。

# 隠し部屋の悲鳴

築山がある。泉水がある。

深い植込みもある。

庭のおもむきは、なかなかに数寄をこらした風情で、この邸の主の当もつかない……」

当惑したように、お龍はよけいに癇にさなみなみならぬ裕福ぶりを思わせて、だからわっでいるのだ。

「ちえっ。入って見ると、案外、この邸は広いじゃないか。たかがお抱え医者と思ったのが、こちらの眼違いさ。これじゃあ、どこにあの娘が閉じこめられていることやら、すぐにゃあわかりそうもないやね……」

お龍は、口のうちでそんなことを、ぶつぶつとつぶやいている。

ふとしたことから知りあった、悪党仲間の顔みしりと云うだけで、あの夜、甚内をかくれ家に連れて帰ったお龍だったが、傷を負って、滅法機嫌の悪い桂木甚内の口から、あの娘の素性や前後のいきさつを聞き出したのだ。

お龍が一時江戸を売って、上方を流れ歩いていたとき、浪華で知りあった二人だったがお互に、今までても、何度か、勝手のいい時だけは儲けずくで力になりあっていたこともある。

欲にあせった甚内が、傷の痛さに呻吟しながら、お龍に事の次第を話したのも、みすみす逃がした玉が大きかった故かも知れない。

お龍が、堀部了庵の邸に忍び込んだのは、そんなわけで、お美奈をどうにかして、了庵の手から、こちらにとり返したい考えだったのだ。

「ちえッ。三日三晩、こうして張ってみても、裏の土蔵の中は、人影見なくても済むのだぞ……」

了庵である。

こいつは、あぐらを組んだ膝の前に、酒器を並べ立てて、グビリ、

グビリとあおりながら、眼の前に引きすえたお美奈の全身を、なめ廻すような眼つきで見ているのだ。

お美奈、腰のもの一枚っきりの裸だ。

両の腕は、骨の鳴るほどに背中にねじ上げられ、その柔かい手首にも、むっちり盛り上った胸のあたりにも、情容赦もない呪縛の麻縄がぎりぎりと蛇のように巻きつき、喰い込んでいる。

「ふふふ。美しい女子の、こんな姿は、またたまらない風情じゃ……」

了庵は口元をだらしなく開いて、テラテラと酒焼けのした脂切った額を叩いた。

もう、時刻の問題だと思っている。いずれは口を割らせてやる。いや、そんなことよりも、どのみち、このとり散らかった着類の中に、水中軍船の秘図は縫い込んであるに違いないのだから、手に入ったも同然だ。あとは、この娘を、どう料理するかだった。

「ヒ、ヒ、いい軀つきじゃのう、これ」

じりりッ、狒々おやじが膝をずらせて寄ってくる。

「あッ！」

お美奈、あとに退こうにも、了庵の手に、しっかりと縄尻がにぎられているのだ。

色とりどりの華やかな色彩が、隠し部屋のじっとりと汚れたような畳の上に散らばって、その、脱ぎ捨てられたお美奈の衣類の上を、裸の犠牲が、くくり猿のように身を二重に折って悶えるのだ。

必死に左右に首を振るお美奈。

ハラリ、と元どりが切れて、緑の黒髪が右に左に、円味を見せた両肩から、乳房のあたりへとたれ下る。

狒々の血走った眼から、たとえそれはいくらかであったにもせよ、肌をかくす役目をしてくれるのは、追いつめられた絶望の渕にあるお美奈にとって、毛筋ほどの救いだったかも知れぬ。

「う、ふふふ。うふ」

そんな風情が、また、たまらなく了庵の心をこそぐるのだ。

ゆっくり時刻をかけて、捕えた小鼠をいたぶる猫のように、了庵はお美奈を楽しんでいるのであった。

それがまた、風にもたえぬ犠牲には、死ぬにも勝る地獄だった。

縄目の痛さ苦しさもさることながら、昼間了庵の云ったように、海老責めとやらに、このままされるとしたら……

ああ、そんな我身の姿を、悩乱の極に想像しただけでも、お美奈は総身の血が逆流し、気が狂ってしまうのではないかと思うのだ。

「ちくしょうッ！　何てえ奴だろうねえッ」

木格子の小さな小窓の間から、中の様子をのぞいているお龍は、もう、じりじりしている。

あの娘を、どうにかして、こちらの手に入れる手だてはないものか第一、甚内の云うように、水中軍船の秘図が、あの娘の肌身につけている物の中にあるのなら、もうそれは、了庵の手の中に入ったも同然である。それは、莫大もない金目な宝物だと甚内は云ったが、お龍は、それが欲しかった。

じりじりッ。了庵の魔手は犠牲に迫って、グイグイと引きしめられる縄尻は、地獄に近づく引導だった。

「あれッ！……あッ！」

のけぞるようにそり返ったお美奈の軀が、了庵の眼前に、海老のように踊って、パッ、とひるがえるように畳を掃いた真赤な腰のものが

緋々の眼に毒と映ったか、薬と映ったか——。

「下手に騒いだりしちゃあ、かえってまずいことになるだろうと思ってさ。あたしゃあ、虫を押えて引き退って来たンだけれどねえ、ほンとうにもう、あの緋々じじい奴、胸くそが悪いったら……」

「そ、それでは……」

甚内は蒲団の上に起き上って、ゴクリと唾をのみこんだ。

お龍の知らせを、いまこまごまと聞き終ったところで、小窓の外から眺めた妖しい地獄図が、まざまざと甚内の脳裡に、活人画を見るように浮び上っている。

「そ、それでは、お美奈は、あの籔医者の手で……は、はだかに……うぬッ」

それは、あの夜、自分がやることだったとは、さすがにお龍の前では口に出さなかったが、当身を入れて駕籠に乗せる時にかかえた娘のむっちりと弾力のある重量感が、今になってみて、痛いほどこの男の両手の感覚の中によみがえってくるのだった。

ましして、その上に、手に入れれば何千両にもなるはずの、あの水中軍船の秘図も、むちむちした膚と一緒に、了庵の手中に落ちたものと見なければなるまい。

あれが、お舟手奉行海堂甲斐守の手に入ったらおしまいだし、蜂須賀阿波守の手に渡っても、とり返しがつかない。

「う、う、残念だ」

甚内は呻った。

右の高股の傷は、どうにか歩けるまでにでも半月はかかるだろうし全部癒りきるには三ケ月もかかるかもしれぬ。

この足の傷さえなかったら、桂木甚内、了庵の邸に単身斬り込んでも、お美奈と秘図をとり返しに行きたかった。

「甚内さん。そんなに起き上っては、傷にさわるよ。ちゃんと静かにしていなくちゃあ」

「う、うむ」

「やっと昨日あたりから、熱が出なくなったばかりじゃないかえ、傷口から毒が入らなかったから、よかったようなものの、片足なくなりでもしたら、大変じゃないかねえ」

そう云うお龍も、決して甚内の身を思って云っている訳ではなかった。自分に足りない力を、この甚内が持っていると云うところが、何かの時にそれを使ってと考える、女賊一流の胸の中だった。

恩を売りつけるのも、それが、やがては何かの儲けにつながっていることである。その証拠に、お美奈の水中軍船の秘図のことを、ちゃんと聞き出せたのだ。

「あ、そうだったよ、うっかりして忘れるところだった。こんなものを、拾って来たンだがね……えふふふ」

「……なンだ？」

「お笑い草さ、あの木格子の小窓の外の屋根の上に、ほら、こんな匹田絞りの緋扱帯が……」

「えッ！」

「そんなことより、何とかいい知恵が浮ばないものかねえ、その何千両にも売れると云う秘図とやらのことさ。それをこっちに盗み出して……」

「ち、ちょっと、それを見せてみろ」
「え？　これかい。ちえッ、目の色を変えてるよ、この人は、あの娘の結んでいた扱帯が、そんなに気になるのかイ？」
「み、みせろ」
「色気より、慾を出しておくれ、どうにかしてその秘図を…あッ！」
甚内は、いきなりお龍が手に持っている緋扱帯を、身を伸ばして引ったくった。
甚内は、その扱帯の中に、羊皮に描いた水中軍船の秘図が隠されているとは、今まで夢にも知らなかったが、お美奈が、了庵の手から秘図を守る為に、すきを見て、窓の外の屋根に落しておいたものかもしれないと、ふと、考えたのである。
お龍も、いま、やっと、朧気ながらも、そんなことに気がついてきた。
そのころ、了庵邸で。
「ないッ！　どこにも無い！」
了庵は、狂ったように探している。
先刻、小窓の外で人の気配がして、ハッと思ったときには、もう、曲者の姿は見当らなかったが、そのときから、了庵は、お美奈を楽しもうとしている色餓鬼ではなく、秘図を手に入れて権勢を張ろうとする。了庵にかえっていた。
家中の男手や、侍たちを邸の周囲に走らせて、曲者の正体を見きわめようとしたが、それが、やがて無駄だとわかったとき、了庵は秘図のことが気になりだしたのだ。
邪魔が入らぬうちに、まず、あの絵図面とやらを手に入れておかねばならぬ。今まではうっかり安心していて、娘の色責めの方にばかり気をとられてしまったのだが、娘の方のことは、あとでゆっくり…。
それよりも大切な秘図は貰っておかねば……。
そこで、お美奈の衣類をば、全部、ビリビリと引きさいて調べてみたのだ。
ところが、どこにも、それらしいものは見当らない。
お美奈が、了庵のやってくる前に、格子窓の外に、絵図の入った緋扱帯を、そっと落してしまっていたことには、全然気がついてない了庵は、必死になって探した。
「ないッ。帯の合わせ目も着物の縫いこみも、みんな引き裂いて探したが……」
それは本当だった。
了庵は、もうこれ以上探すところがないほど探したのである。
「……おッ！」
緋々の眼が、その場に突っ伏すように身をかがめている、お美奈の裸身にぴったりと吸いついた。
「ふふふふ。そうか、忘れていたわい。まだもう一ヵ所、探してないところが残っていたわい……」
了庵の吸いつくような眼が、縛られて身も世もない思いの、お美奈の腰のものにそそがれている。
お美奈は、ハッとして、耐えられない思いは全身を火のように熱くしていた。

**お美奈はどうなる？　以下、次号の巷説絵図面地獄に続く**

暗黒大陸

# 砂漠の女囚

南村

根元

裕・画

蘭

## 夜のカサブランカ

〝阿呆鳥の糞〟――という妙な名前の酒場。三等水夫、港湾労働者、スリ、モク拾い、かっぱらい、そんな人種が、むせかえるような紫煙と安酒の匂いのなかにわめいている。酒を浴び、歌をうたい、よだれを流し、淫売女の大きな乳房に顔をうずめてねむりこける。彼らにとって、解放された一番たのしい時間だ。夜のふけるのを知らない。

〝阿呆鳥の糞〟は、カサブランカ第一の下等酒場だ。見栄もていさいもない連中ばかりが、夜になると集まってくる。底ぬけに騒ぐことが、唯一の慰安だった。

だが、片腕のポポだけは、カラになったコップを前におき、テーブルの上に、頭をかかえて眠っていた。

ポポには、そのアダ名のとおり、右腕がない。左手でタバコの吸ガラをひろい、乾して巻きかえして、こ

# 乾ききった砂漠の監獄で飢えた女囚達は旅の男を待っている。そこには姐御もいるんだ

## 女性解放悲史・特集

どうしたンだ。ギニヤの鮫にでも喰われたのか？」

すると、ポポは、もの憂げな眼をあげてこたえる。

「ラムを一パイおごれよ。そしたら、この腕が、女に喰われた話をきかせてやらァ」

ポポの顔は、意外に若い。鼻すじがとおって色が白く、男娼とでも呼びたいような美青年だ。

酔った水夫は、ふと好奇心にかられる。

「おやじ、酒だ。この片腕のねえ可愛い坊やに、ついでやってくンな！」

カウンターの親爺を怒鳴りつけて、ラムをとり寄せてやる。

すると、ポポは、死んだ魚のようなうつろな瞳に、ひとかけらの炎を燃やす。

酒で唇を濡らすと、ボソボソと語りだすのである。

### 砂漠の監獄

おれが、フランスのリヨンをでて、あちこちの港をさまよったあげく、このカサブランカへやってきたのは、いまから三年前だ。

といっても、アテもなく流れこんできたわけじゃねえ。おれには、ちゃんとした目的があった。

たまに、どこか遠い国の水夫が、この〝阿呆鳥の糞〟にまぎれこんできて、いい気持に酔っぱらったあげく、ポポにからむことがある。

「よう、おめえ、バカに静かじゃねえか、誰のお通夜だい。まァこっちへきて一パイつきあえよ。――おや、おめえ、片腕がねえのかい。

の酒場に集まってくる男たちに売る。

アンジェリ姉御を助けだすために、はるばるジブラルタル海峡を越えてきたンだ。

姉御が、モロッコの警察に捕まったという知らせが耳に入ったとき、おれはガックリきた。それからは、一晩だって眠れやしねえ。姉御は、おれの生き甲斐だった。生命だった。

おれは、どんなことがあっても、姉御を助けだそうと決心した。

危険な仕事だ。だが、おれはためらってはいられなかった。

おれは仲間から離れて、たった一人で、とうとう、このカサブランカへやってきた。

そして、この酒場で、シリヤ人の蛇皮売りから、アンジェリ姉御が、ホワイト・シティにいるってことをきいた。

そうだ。ホワイト・シティだ。

白い街だ——。

なんだ、おめえ、知らねえのかい？

じゃ、教えてやろう。

その白い街は、フランス領西アフリカ、イギシス砂漠の北、メクネスからひろがる大砂漠のまんなかにある。

見渡すかぎりの砂の海のなかに、ポツンと一つ建っている、小さな街だ。

街の周囲には、高い、厚い石の塀が、ぐるりと張りめぐらされている。

そのなかには——。

女ばかりが住んでいるンだ。オンナばかりだぜ。……

ただし、みんな、肩書きつきの、おあねえさンばかりだ。殺人、強盗、火つけ、詐欺、麻薬売買。……ありとあらゆる罪状を背負った女たちが、その白い壁のなかに、閉じこめられている。

閉じこめられているんだ。

そうだよ。監獄なんだ。しかも、女囚ばかりの……。

おッと、眼をまるくするのは、まだ早いンだ。その、ホワイト・シティの鉄の門が、金を持った男になら、自由にあけられる、ときいたら、おめえ、どうする？

そうだ。金さえだせば、誰でもその街のなかに入れるンだ。といったって、見物するだけじゃねえぜ。

なかにいる女たちの身体まで、自由に頂くことができるっていう仕掛けなんだ。

ただし、その女の身体全部を、大金だしてそっくり買いとり、ホワイト・シティから解放してやろうなんて、もの好きな男は、いやしねえ。

長くて一晩、短かくて三十分。ベッドのなかでもみくちゃにして、さようならだ。

別れ際に女は、その男の首ッ玉にキスしてさけぶ。

「あンた、大好き。またきてね！」

男も眼尻をさげて、

「またくるぜ」

と、調子よく女のケツッペたを叩く。

街の出入口の鉄の門に、銃を持って監視している憲兵までが、

「毎度ありいッ……」

と、その男にウインクを送るンだ。

おどろいたかい？

嘘じゃねえ。ほんとうのことなんだ。

女囚が、監獄のなかで、堂々と売春してやがンだ。

## 売春女囚

まったく、ひでえ監獄さ。

わけは、こうなンだ。

そこにいる女囚たちは、罪の重い、つまり刑期の長い者ばかりだが、補償金さえ積めばそいつが短かくなる法律がある。

つまり、三十年の刑期をもつ女でも、金さ

えだせば、五年で出られるっていうわけさ。
ところが、みんな身体一つで捕まって、そこへ放りこまれた女ばかりだ。持ってるものは、自分の肉体だけよ。そいつを売って金を溜め、補償金を積むよりほかに、手はねえ。
モロッコの政府も、そいつを認めた。それどころか、奨励しやがった。
なぜなら——。
政府だって、金が欲しいンだ。この国は、昔から、ひどい貧乏なんだ。
知ってるとおり、アフリカ北西部のこのあたりは、ほとんどがフランスの保護領だ。残りのわずかな区域も、スペイン領とタンジール国際管理区という、ややこしい土地になっている。
国のまんなかには、アトラス山脈がどっかりかまえてやがるし、ほかは砂漠だ。
生えるものもなけりゃ、獲れるものもありゃしねえ。政府のふところに入るのは、むかしっから有名な、モロッコ革の輸出で儲ける金だけ——。
そこで、赤字財政に苦しんだあげく、女囚たちから、金をまきあげることを考えつきやがった。一番のお得意は、女に飢えている外人部隊の兵隊たちや、たんまり金を儲けた各国の隊商たちだ。その上、自分の国の兵隊まで、カモにしている始末よ。
苦肉の策とはいいながら、あんまりひでえやり方じゃねえか。
おれは、そのことを知ったとき、まったく腹がたったぜ。この土地は、むかしっから、暗黒大陸なんていうけど、そのとおりだ。
——なにがおかしいンだ。
おれがムキになって怒ってるのがおかしいのか。
そうよ。
おれはパリッ子さ。フェミニストさ。女が無法に苛められているのを、とても黙って見ちゃいられねえンだ。
古い言葉だが、罪を憎んでその人を憎まずってやつだ。おれは、はじめてラクダってえやつに乗った。尻の落ちつかねえ乗物だった。
二日二晩ゆられて、やがておれたちは、めざすホワイト・シティに着いた。
なるほど、白い街だ。高く張りめぐらした石の塀。塀のなかの建物も、アフリカの強烈な太陽光線に照りつけられて、白く乾ききっすまねえ。いつも、こうなんだ。
先を話すぜ。おれが、そのホウイト・シティに捕まっている、アンジェリ姉御を助けにいく話だ。おもしれえぜ。
その前に、もう一パイ飲ませろよ。
ケチケチするないながら、あんまりひでえなに？　アンジェリの罪名？
麻薬密売さ。地中海の女豹っていう異名のすげえ麻薬の女王だよ。ラバットの港で捕まって、五年の刑をくらいこんだンだ。

## 裸女の挑発

おれは、アラビヤ人の隊商のなかにまぎれこんだ。金をやって、うまくわたりをつけたンだ。
しこたま儲けて、これから、砂漠のなかの国営売春窟、ホワイト・シティへ遊びにでかけようという、十五、六人ばかりの商人たちだ。おれは、はじめてラクダってえやつに乗った。尻の落ちつかねえ乗物だった。
二日二晩ゆられて、やがておれたちは、めざすホワイト・シティに着いた。
なるほど、白い街だ。高く張りめぐらした石の塀。塀のなかの建物も、アフリカの強烈な太陽光線に照りつけられて、白く乾ききっ

ている。砂漠のなかの巨大な墓場だ。そこに肉欲地獄にあえぐ女囚たちが押しこめられているとは、とても思えねえ。

おれたちは、そこだけがいかめしく、黒い鉄の門に着いた。それが、この街唯一の出入口だった。

門の横に憲兵詰所があり、その隣りに診療所が建っている。

隊商の長老が、憲兵を相手に交渉をはじめた。奴らの応待も馴れたもンだ。ニヤニヤしながら、すぐにうなずいて門をあけた。

いくら政府奨励の売春街で、来客歓迎とはいえ、あまりにも簡単すぎる。

おれはおどろいた。そして、また腹がたってきた。

隊商たちは、ラクダや荷を塀外の小屋につなぎ、早くも好色の眼をたぎらせて、門のなかへ入っていく。おれは、一番あとから、門をくぐった。

中央の白い道路が、チカチカと日光を反射して眼に痛い。なるほど、街と呼ばれるだけあって、鉄格子や、錠の掛った暗い部屋はねえ。女たちは、暑さを避けて、みんな建物のなかに入ってるンだろう。一人も見えねえ。やっぱり刑務所だ。殺風景な街だった。

が——男の一隊が、五十メートルも進んだときだ。

「キャアッ！」

建物の一角から、ふいに、するどい叫び声があがった。人殺しの場に居あわせた女のような悲鳴だった。だが、そいつは恐怖のためにあげた声じゃなかったンだ。

「男だ、男だ！　男がきたよ！」

石造りのバルコニーから、一人の女が、髪をふり乱してわめいているのが見えた。こっちを見て、大きなそぶりで指をさしている。

「ワアッ！」

「ワアッ！」

「ワアッ！」

絶叫が、つぎからつぎへ、波のように伝わった。黄色い喚声が、獣じみた合唱となっておれたちをおどろかせた。

同時に、白い建物の戸口から、半裸の女たちが、いっせいに姿をあらわし、むかって殺到してきたンだ。

「あたいを買っておくれ！」

「あたいと寝ておくれ！　うんとサービスするよ！」

半裸といったが、半裸どころじゃねえ。乳房と腰だけに布きれを巻きつけた姿だ。もとはスカートであり、パンティであり、ブラジャーだったに違えねえ。

それが、着たきりのままだから、アフリカの太陽にさらされ、砂漠の熱風に吹きつけられて、いつのまにか、色あせた一枚の布きれになっちまったンだ。

なかには、その布きれすらつけていない女もいた。陽にやけた大きな乳房を、両手でかかえながら、走ってくるンだ。

その裸の女たちは、男たちのまわりにひしめき、とり巻いて、口々に交渉をはじめる。

ウインクをパチパチやらかし、乳房を眼の前でブルブルふるわす。腰をクネクネとゆすり、鼻を鳴らす。あらゆる媚態をみせて、ろこつに男を挑発するンだ。

世界中の、どこの国へいったって、こんなすげえ売春窟はあるめえ。白人、黒人、黄色い女、赤髪、金髪、中年、若いの、娘ッ子、よりどりみどりだ。

アラビヤの商人たちは、

「ホウッ、ホウッ」

と、歓声をあげてこたえながら、自分の気に入った女をえらびだし、それぞれの部屋へ消えていく。

だが、おれはそんな女どもを相手にしちゃ

いられねえ。おれは、しがみついてくる女をかきわけながら、アンジェリ姉御の姿をさがした。

「どいてくれ！　おれは、おめえ達に用はねえンだ」

アンジェリが、どこかのバルコニーに、顔を見せちゃいねえだろうかと、眼をサラのようにして、あちこちを見渡した。

## 奇妙な哀願

そして、おれは、とうとうアンジェリをみつけたンだ。おれの胸は、うれしさとなつかしさで、ドキドキと鳴った。

さすがは〝地中海の女豹〟だ。アンジェリは、たった一人、建物の戸口によりかかり、腕を組み、男を奪いあう女たちを、冷ややかに見おろしていた。

「姉御！」

と、おれは首をのばして叫んだ。

アンジェリの眼が、チラとおれをみた。一瞬、さすがに、ハッとした表情で、組んでいた腕を解いた。

「おれだよ、姉御！　ポポだ！」

おれは、手をふった。群がる女たちを押しわけて、アンジェリのそばへ馳けていった。

「ポポ！」

アンジェリは、白い腕をおれの前にさしのべた。おれは、膝まづいて、その手に頬ずりした。

「姉御、よく、お元気で……」

おれは、感激で鼻がつまった。

「ポポ。よくここがわかったね」
アンジェリも、うれしそうだった。
「苦労しましたぜ。はじめは、姉御がどこで捕まったのかわからねえもンだから、マルセーユからジェノア、バルセロナ。貨物船の底にもぐって、あちこちの港を、ねずみみてえにうろつきまわりました……」
「うれしいわ」
アンジェリは、おれの肩を抱いて、自分の部屋につれていった。
みすぼらしい部屋だった。部屋というよりは、石の壁で区切られた穴蔵だ。監獄なんだから、無理もねえけどな。
ベッドが一台、その前にカーテンが垂れさがっている。
「姉御……お変りなくて、何よりで……」
と、おれは改まってもう一度いったが、麻薬の女王として、地中海一帯の業者たちに名を売ったアンジェリが、よれよれのワンピースに身を包んだ姿は、おれの胸を痛くしめつけた。
「たいへんな変りようさ……」
彼女は、髪のうしろに手をやると、そのまま投げだすようにして、ベッドの上にひっくりかえった。
それから——。
なに？　アンジェリと、たっぷり、いい時間をすごしたろうって？
じょうだンじゃねえ。おれと姉御は、そんな仲じゃねえンだ。
姉御は、つまり、どこまでいっても姉御なンだ。おれは、姉御に可愛がられたチンピラにすぎねえ。
「——姉御の身代金を用意してくるのがあたり前なんだが、仲間たちが散りぢりになっちまって、どうにも金の工面がつかねえ。だから、ここは一つ、あっしと一緒にこっそりずらかりましょう」
と、おれは声を低くしていった。そろそろこの世で、一番崇拝し、尊敬しているアンジェリが、モロッコの兵隊や外人部隊の無頼漢どもに身体をまかせるなンて、おれは考えてみただけでも、こわかったンだ。
「逃げる？」
「そうです。来たときと同じように、あのアラビヤの隊商のなかへ、うまくまぎれこむンです。服から靴まで、みんな用意してあるンです。男に化けて脱けだすわけでさァ。あっしにまかせて下さい」
おれは、力をこめていった。
「駄目。憲兵たちの眼がきびしいわ。この刑務所は、なかがこんなにめちゃくちゃなもんだから、脱走するのも簡単だろうと誰でも一度は思うんだよ。だけど、それがそうはいかないの。この国の政府にとって、ここの女囚一人一人が、たいせつな金ヅルなのさ、おいそれと逃がしやしないンだ……」
彼女は、すっかりあきらめている口調だ。
「だといって、このまま、こんなところで、年をとるつもりですかい？」
「仕方がないわ。刑期が終るまで……。でも早く出られるように、あたしだって、少しづつ、お金を溜めているンだよ」
「えッ、と、姉御もやっぱり……
おれは、ギクリとした。
この世で、一番崇拝し、尊敬しているアンジェリが、モロッコの兵隊や外人部隊の無頼漢どもに身体をまかせるなンて、おれは考えてみただけでも、こわかったンだ。
「逃げそこなって捕まったら、殺されるか、刑期が倍に延びるか、どっちかよ。あたしには、そんな冒険をする勇気が、もうなくなってしまった……」
おれは、力をこめていった。
なんてえ、ナサケねえことをいうようになっちまったンだ。二十人からの男を、顎の先で使っていたアンジェリが……。おれは口惜しかった。

そのとき、門の方角でラッパが鳴った。

引きあげの合図だ。三時間にこの街へ入ったアラビヤの商人たちは、全部、女から離れて、門の前に集合しなければならない。

残りたい男は、新たに憲兵に追加料金を払ってから、気にいって離れられなくなった女のベッドに、またもぐりこむんだ。

「ポポ。ラッパが鳴ったわ」

と、アンジェリがいった。

「おれは帰らねえ。ここにいる。おれは姉御のそばにいるンだ」

おれは、駄々をこねるようにいった。おれは、姉御に拾われた十五才のときにかえっていた。

おれはあまえた。おれは強情だった。おれは哀願した。

長いあいだ、苦しい思いをしてやっと探しあてたアンジェリのそばを離れるのは、もうイヤだった。耐えられなかった。

おれは、ついにアンジェリをおがみ倒し、説得した。

ホワイト・シティの、女囚の部屋に、おれはそうして住むようになったンだ。

まったく、ケッサクな話さ。

砂漠のなかの女監獄に、外から来た男が、こっそり居つくなんてことはな。

だが、そのときのおれは必死だった。アンジェリは、おれの熱意に負けたのか、ほださレたのか、眼をつぶって、仕方がなかった。

街に入ったアラビヤの隊商の数が、門を出るときに一人足りないことを知って、警備の憲兵たちは、街中を捜索にきた。

おれは、彼女のベッドの下にかくれて、ついにこの監獄にとどまることに成功した。

やつらは、不思議そうな顔で捜索を中止した。

## 脱獄計画

おれは、そのまま、アンジェリのベッドの下にかくれて暮すことにした。

室内の周囲はかたい石の壁で、家具もなにもない。おれの身体をかくす場所といったらベッドの下しかなかった。

だが、おれは平気だった。満足だった。以前にもおれは、彼女のベッドの下で寝たことがある。

パリで一流の、豪勢なアパートだった。そのころ、おれはメトロの浮浪児だった。

親のねえ不良少年を拾って、アンジェリは育ててくれた。悪戯半分だったのかも知れねえ。ベッドの下へ寝かせて、まるで犬っころみてえな可愛がりかたをした。

おれは、アンジェリの残飯を喰って、大きくなったンだ。あの味は忘れられねえ。あのときのおれが、生涯のうちで一番しあわせだったな。

ホワイト・シティ・ホテルのベッドは、木製のゴツゴツしたやつだ。だが、文句はいえねえ。

食事は、彼女の食べ残したやつを喰った。ひどく、なつかしかった。ただし、黒パンにじゃがいものスープ。

そしておれは、やがて悲しい事実を知らされた——。

この監獄を警備している憲兵隊は、およそ十四、五名ほどいる。中で一番えらい奴が、ギラルドという大尉だった。

そのギラルド大尉が、夜になると、アンジェリの部屋へやってくるンだ。彼女も、両手をひろげて、彼をむかえる。

つまり、アンジェリは、ギラルド大尉の、オンリーだったンだ。彼女が、ほかの女囚に

対しても、憲兵たちに対しても、一種特別な気持、ほかの者にゃわかるめえ。わかりっこねえ。

位置にいることが、おれにもわかった。

だが、狂いそうなおれの頭に、そのとき、いい考えがうかんだンだ。

ギラルド大尉の鼻の下に、すごく立派な口ひげをみたとき、おれはギョッとした。アンジェリは、どういうものか、ひげの生えている男に、強烈なセックス・アピールをうけるンだ。おまけに奴の胸毛は熊みてえだった。

黒々と盛りあがった口ひげは、先のほうがピンととがって、まるで昔のカイゼルひげというやつだ。

夜、ベッドの下で、息を殺して這いつくばっているおれの頭の上で、アンジェリとギラルドのひげ野郎が抱きあうンだ。

「ひげ、ひげ、このひげ、ステキだわ……」

ベッドが、ぎしぎし鳴る。

アンジェリの咽喉が、黄色いうめきを洩らす。ひげの野郎、まるで猛獣みてえに派手に吠えやがるンだ。おれの頭の上でだぜ。

そのときのおれは、強引にやるつもりだった。

「こいつを楯にして逃げるンだ。さ、姉御、早く！」

おれは、ひげ大尉の腰から拳銃をぬいた。それから、腹を蹴っとばした。

「おきろ！　助平大尉！」

奴は、頭を左右にふりながら、半身をおこした。おれの顔をみて、眼をまるくした。ひげがふるえた。無理もねえ。

カーテンをひき裂いて、奴をうしろ手に縛りあげた。その背中に、拳銃の先をぐいぐい押しつけていった。

「さァ、歩け。部下の憲兵どもに、門をあけるように命令するンだ。ヘタなことをしやがると、てめえの背中に穴があくぜ！」

ギラルド大尉、青くなってブルブルふるえだした。

アンジェリは、やっとおれの考えがわかったらしい。

「ポポ！　お前は……。でも、あぶないわ。やめたほうがいいわ。やつらは機関銃をもってンのよ！」

おれの腕をつかんでゆすぶった。

「もう遅いよ、姉御。こうなったら、途中でやめることはできねえ。イチかバチかだ。さ

ア、一緒に逃げるんだ！」

おれは、ギラルドを突きとばして外の道路へでた。

「ポポ、やめて！」

だが、いまはもう仕方なく、アンジェリもおれのあとについてきた。

「しっかりしてくれよ、姉御！」

彼女は、このスリルに青ざめていた。はげしい緊張に肩がふるえていた。

## 地獄の叫喚

外は、死んだような月夜だった。

ホワイト・シティは、青白い月光を浴びて真夜中の墓場だ。

おれは、そのまんなかに立って、大声で叫んだ。

「おい、可哀そうな女たち、みんな起きろ。起きておれのいうことをよくきけ。おれはこれから、この監獄を破るぞ。このとおり、隊長は捕虜にしてある。おれのあとからついてくれば、みんなここから逃げられるぞ！」

声は、びんびん響いた。

女囚たちは、みんなとび起きて、窓や戸口から顔をだし、おれのほうをむいた。

意外な光景に眼をみはり、事態を察した彼女らは、ワアッと歓声をあげた。そして、いっせいに、外へとびだしてきた。

「さァ、みんなこい！」

おれは、ギラルドの背中に拳銃をつきつけたまま、門の前まで進んだ。

すでに、この騒ぎに気づいた憲兵たちは、塀の上の監視台にのぼって、こっちに機関銃をむけている。

おれは、そいつらにむかって努鳴った。

「やいやい。てめえらは、てめえらの隊長に機関銃をむけンのかい！　みんな両手をあげて機関銃からはなれろ！　さもなきゃ、親分の背中に拳銃の弾丸をぶっぱなすぜ！」

憲兵たちは、ろうばいして門の上で右往左

往した。
おれは、ギラルドの耳に口をくっつけて命令した。
「門をあけるようにいえ」
ギラルドはうなづき、ふるえながら部下にむかって叫んだ。
「門をあけろ！　仕方がないンだ。そうしないと、おれは殺される！」
憲兵たちは、どうしたらいいか途惑ってる様子だ。おれは奴らによく見えるように、拳銃の銃口を、ギラルドの頭にむけた。その銃口を、わざとずらして、空へむけて一発ぶっぱなした。
「あけろ！　早く！」
ひげは、真ッ青になり、かすれ声でわめいた。
ギギギッ——と音がして、ついに門があいた。
おれの背後にひしめいていた女囚の群が、
「ワアアッ」
という喚声をあげた。あいた門にむかってキチガイのように突進した。髪をふり乱し、まるで白い猛牛の群だ。
「憲兵詰所の横に馬小屋がある。みんな馬に乗って勝手に逃げろ！」
おれは女囚たちにむかって努鳴った。
「ワアアッ」
「ワアアッ」
解放された女たちは、意味のわからない歓声をあげて、われがちに門をくぐった。馬をひっぱりだすと、二人三人とまたがり、砂漠にむかって走りだした。
おれも一頭の馬をつかまえ、まずギラルド大尉をはなしてやった。
おれの手から、ギラルド大尉がはなれたとみた奴らは、あわてて機関銃の銃口を、おれにむけた。
ダダダダッ……。
いっせい射撃だった。
おれのまわりにいた女囚たちが、悲鳴をあげてのけぞった。
月夜がいけなかった。
真ッ昼間の明るさだ。奴らは、高い石塀の上から狙い射ちだった。
馬にのった女も、吹ッ飛ばされて落ちた。
太腿がザックリ割れて、血しぶきがあがる。
いままでの歓声は、恐怖の悲鳴に変った。
ビュンビュンと飛んでくる弾丸が、地上にはねて砂煙をあげる。
おれは、背中をまるめて、ころがりながら逃げた。
そばを馳けぬける馬の首に、必死でしがみついた。
「アンジェリ！　アンジェリ！」
おれは泣き声だった。涙で顔じゅうに砂がついた。
監視台の憲兵たちが、この急変に気がついた。
ダダダダッ……。
ダダダダッ……。

逃げかけた女たちも、背後から射たれて、バタバタ倒れた。
砂が女たちの血を、ずんずん吸いこんだ。
みるまに死体の山だ。
地獄だった。
血だらけの女が、おれをみて睨んだ。
おれは、めちゃくちゃに馬を走らせた。
追っかけてきた一弾が、ついにおれの右の肩にあたった。
「ちくしょう！」
熱かった。
腕がしびれ、血の匂いがした。それから激痛がきた。
でっけえ弾丸だった。おれの肩の骨は、コナゴナになった。
血がドクドク流れた。身体中の血が、肩から溢れた。
「走れ！　走れ！」
おれは砂漠のなかで死にたくはなかった。
足で馬の腹を蹴りつづけた。
そしておれは、馬の首を抱いたまま、気が遠くなっちまった……。

## 可哀そうな男

「――ふうん……。で、その、アンジェリとかいう、お前の姉御は？」
と、水夫が、ポポにきいた。
〝阿呆鳥の糞〟の夜はふけて、店内のあちこちに、酔いつぶれた男たちが、大きないびきをたてていた。
「ラムを、もう一パイ……」
と、片腕ポポがいった。
「もうやめろよ、ポポ。今夜はだいぶ飲んでるぜ」
と、酒場の親爺がいった。
「アンジェリは、ホワイト・シティにいるンだ、いまでも……」
と、ポポが、うわごとのようにこたえた。
「どうして、お前と一緒に逃げなかったンだろうな、その女」
この水夫も、もの好きだった。
「アンジェリは、あの、ひげの大尉に、ほんとに惚れてやがったンだ。それだけさ。――どうも、ひげはいけねえ。ひげは大嫌いだ」
「ひげか。なるほどな。しかし、ひでえ女だな……」
と、水夫が腹をたてたようにいった。
「ひでえ女さ。――だからおれは、こうしてあいつの出てくるのを待ってるンだ」
「いつ出てくるンだ？」
「あと三ヵ月たったら……」
「刑期が終るわけだな。出てきたら、どうするンだ？」
「まだ、わからねえ。きめてねえ」
「憎い女だ。殺しちまえよ」
「わからねえ。……ただ、こうして待っているだけなンだ……」
ポポは、ぐずぐずとつぶやいて、テーブルの上に顔をつっ伏した。
酔いつぶれたのだ。
酒場の主人が、カウンターのなかからでてきて、もの好きな水夫の肩をたたいた。
片眼をつぶって、首をふってみせた。
もうポポを相手にするな、という意味だ。
それから主人は、水夫の耳もとに、そっとささやいた。
「アンジェリは去年、ホワイト・シティのなかで、熱病にかかって死んじまったンだ。」
「へええ？」
こいつは、それを知っているくせに、こうしてその女を待ちつづけているンだ。可哀そうな男よ……」

〔完〕

女工哀史

# 繰り子地獄

矢桐重八

栗原伸・画

## 夜の盗み喰い

お初のおなかが、ぐうッと鳴った。

その音に、自分でおどろいて、お初は目をさました。腹が鳴ったのは、すききっていたからである。

うす暗い行燈の灯かげに、仲間の繰り子たちの、さまざまな寝相がみえる。

いびきをかいている者、寝言をいっている者、掛布団の上にふとい足をのせて、ボリボリかいている者。この部屋には、十畳ほどの広さのなかに十五人の娘が押し込まれ、重なりあって眠っているのだった。

昼間のはげしい労働に疲れて、泥のように眠りをむさぼっている。

（ああ、腹がへった……）

こう腹がへっては、眠っていられない。

無理もなかった。

三度の食事は、芋殻に草籌の芽や実をいれた雑炊である。汁は一つかみほどの味噌に、塩だくさんのものを、一杯ずつ与えられるだけであった。

お初は、寝床のなかから、そろそろと這いだした。

つめたい飯が、底のほうに少しばかり残っていた。それをつかみだして頬ばった。ポロポロの麦飯である。

（ああ、うめえ！……）

かたい麦飯も、飢えたお初の口には香ばしく、あまかった。飯粒が膝にこぼれた。

「誰だ、そこにいるのは――」

お初の背中に、いぶかる声がした。

主人の虎太郎である。厠にでも起きたのだろう。手燭の灯がゆらいで近づいた。

お初の身体が、恐怖にかたくなった。

虎太郎は、暗闇のなかを小腰をかがめてすかしみた。

「誰だ。お小夜か、お光か、お咲か、おしげか、お初か――」

自分の名を呼ばれたとき、お初は腰をうかせた。両手に飯粒をつけたまま、ねずみのように逃げだした。

「待て――」

虎太郎は、そのあとを追い、お初の衿首をつかんだ。

「かんにん、かんにん……」

お初は、もう泣き声をあげた。

女性解放悲史・特集

# 鉄砲包みの苛刑に白い柔肌がのたうつ！しかしお小夜は解放の悲願を胸に必死に耐えた

「お初だな。また盗み喰いか。こいつ、よくよくの泥棒猫だな」

虎太郎は、お初の身体を、そのままずるると糸置き蔵のなかへひきずっていった。

「旦那さま、かんにん。もう、けっして、しねえからよゥ」

この主人の折檻は、きちがいじみている。お初は手をあわせておがんだ。

だが、虎太郎はきかなかった。荒縄をつかむと、床に這いずって許しを乞うお初を、うしろ手に縛りあげた。

「いてえ、いてえ」

お初は泣いた。そのまるい頬を、虎太郎はピシリッと叩いた。

お初は、おびえて黙った。ツギハギだらけの袷の裾から、肉づきのゆたかな白い膝が、チラリとまくれた。

思いきりぶちのめしてくれようとした虎太郎の心が、その白い膝をみて、ふと、ほぐれた。怒りの眼が、急にやわらいで、お初の肩や胸、腰のあたりを、珍らしいものでも見るように眺めまわした。

荒縄が、胸にくびれるほど喰いこんでいるのは、そのあたりの肉づきが、女らしく盛りあがっているためである。

「お初、お前、いくつになる？」

急に年をきかれて、お初はうわ目使いに主人の顔をみた。暗いので、表情はよくわからない。

「十五……」

首をすくませてこたえる。

「十五か。もう、おとなだな……」

お初は、美濃の太田在の水呑百姓の娘だった。諏訪湖にみぞれの降るつめたい日、父親に手をひかれて、この糸虎へ奉公にきたときは、まだ色の黒い、ひねこびた子供だった。

奉公というよりも、つまり売られてきたのである。五両で、十年の年期証文をいれて、父親は帰っていった。

あれから、四年たつ——。

ごぼうのような手足には、いつのまにか、白い肉がついていた。

虎太郎は、もう一度、お初の胸から腰のあたりをなめるようにみた。

その眼の異様な光りをおそれて、お初は尻ごみし、背をまるめて肩をおとした。

「旦那さま、かんにん……」

縛られた両腕が痛い。胸をしめつける。うしろにくくりあわされた手首が、ひきちぎれそうだった。

「もう盗み喰いなんぞ、しねえから……」

だが、虎太郎は不気味な気迫をみせて、無言のまま、お初ににじり寄った。その哀願の肩に、好色の両手がかかっていた。

## 狂女お初

糸虎——糸屋虎太郎の糸繰り場には、二十数人の娘が、繰り子として住み込んでいた。

百姓から買い集めた繭を、その娘たちの手によって生糸に繰りだす。その糸を鉄砲造りという梱包にして、岐阜商人に売り渡すのである。

鉄砲造りというのは、大枠からはずして、ねじりあげた三百匁の生糸を、紐で五ヵ所結ぶ。その形が、ちょうど鉄砲に似ていたために、そう呼ばれた。これらの生糸は、はじめは京大阪だけに売られていたが、生産の量がふえてくると、上州、武州、江戸にも出荷されるようになった。

糸虎は、この上諏訪地方の同業者のなかでも、五指に屈せられるほどの製糸量を誇っていた。

虎太郎一代において、これだけの財をなし

遂げたというのが、彼の自慢であった。その
かげには、悪辣な取引や、繰り子たちに対す
る並ならぬ酷使があった。
彼は、座繰り場の後方に、一段と高い三畳
の桟席をつくった。朝から晩まで、そこにあ
ぐらをかいて、繰り子たちの仕事の監視をし
た。木枠をまわしながら糸をひく二十数人の
娘たちの仕事ぶりを、この三畳の高桟席にふ
んぞりかえって、一望に見渡すのだ。
「お小夜、なにを横むいてしゃべってる！」
「お光、また居眠りしてやがるわい！」
な！」
「お常、手が遊んでるわい！」
娘たちの背後から、細い竹の鞭
を鳴らして叱咤する。
朝は夜明けに叩き起し、夜は四
ツ過ぎまで働らかせた。娘たちが
息をつく時間は、三度の飯どきと
厠へいくときだけである。
娘たちは交替に厠へ入って、し
やがんだまま、疲れた身体を休め
た。前の晩が遅いので用を足しな
がら居眠りをする者もいた。
それに気づいた虎太郎は、桟席
からおりてとんでくる。厠の戸を
ドンドン叩いてわめくのだ。
「ど阿呆！　いつまでしょんべん垂れてやが
る。早く尻ふいて糸ひけ！」
ほとんどが貧農の生れで、年貢の金の工面
のために、売られてきた娘たちだった。運命
とあきらめて、この苛酷な生活に服従してい
る。時たま、あまりの虐待に、白い眼をみせ
て反抗する者がいた。
すると虎太郎は、火のように怒って、その
娘を、責めさいなむのだ。まる裸にして荒縄
で手足を縛り、竹の鞭でなぐりつける。娘た
ちは、おびえてふるえあがり、主人の命令に
服した。
「ふふふ。さア、糸ひけ、糸ひけ」
虎太郎は、二十数名の娘たちが、自分の威
力に怖れて、手足のように動くのがうれしく
てたまらない。一国の王、一城の主になった
ような気がする。
虎太郎の父親は、上野の安中で馬方をして
いた。ひどい貧乏のために、虎太郎は幼ない
ときに、妙義山のふもとに捨てられた。それ
から彼は、各地を乞食して放浪しながら成長
し、二十二才のときに、この上諏訪に流れこ
んで、繭玉商の下男に住み込んだ。
ある日、一念発起して百姓家をまわり、腐
れ繭玉をもらい集めた。朽ちた物置小屋を借
りると、そのなかでほそぼそと糸をひきはじ
めた。
それから、屈辱と忍従の長い年月がつづい
た。血のでるような苦しみであった。
二十年後に、乞食の虎太郎は、糸屋の旦那
に出世していた。苦しみ甲斐があって、今で
は、五人の下男を使い、二十四名の繰り子を
顎のさきでうごかしている。年に三百貫の生
糸を、天龍川から積みだす。
たいした出世をしたものだ。
（だが、これからだ、これからだ……）
虎太郎は、蓄財の鬼になっていた。金儲け
に身を打ちこんでいるために、女房をもらう
ひまがなかった。
繰り子のなかから、よさそうなのをひっこ
ぬいては、常時、その欲望を満たした。
夜なかに飯を盗み喰いしていたお初を捕え
て、犯したのもそれである。
だが、十五才になったばかりのお初は、は
じめてのその恐怖と衝撃に、もろくもその夜
から気が狂ってしまった。
狂人になっては、座繰りのこまかい仕事は
できない。
（ちえッ、お初のガキなんかに、まだ手をだ

すんじゃなかった)

虎太郎は、腹のなかでくやしがった。

だが、狂人になったからといって、遊ばせておくような虎太郎ではない。台所仕事や、生糸出荷の大さっぱな用をいいつけて、鞭でおどしながら、狂女のお初を使った。

それでも、座繰り場で、朝から晩までこき使われている娘たちにくらべると、労働の量が、ぐんと減った。

「あーあ。あたしも、いっそのこと、キチガイになりたいよ」

と、ほかの繰り子たちが嘆息した。

そのうちに、お初の腹が、次第にセリだしてきた。虎太郎の子供をハラんだのである。

「くそッ、どこまで世話をやかせるガキなんだ!」

虎太郎は、うつろな瞳で腹をさすっているお初をみて、ののしった。もとより、彼にはいくら猿ぐつわを噛ませて口をふさいでもその地獄の絶叫は、夜気にひびいた。

昼間の疲れで、ぐったりと眠りこんでいる繰り子たちの目まで、ぜんぶひらかせてしまった。

娘たちは、互いに肩を抱きあって、お初の泣きわめく悲痛な声をきいた。みんな寝床に起きあがって、底知れぬ恐怖におののいた。

やがて、お初の腹の子は流れてしまった。

(あぶなかった。よけいな口を、一つふやすところだった……)

虎太郎は満足した。幼ないとき、彼が両親から捨てられたのは、口べらしのためであった。そのためか、彼は新しく子供が生れてくるということに、妙な憎しみと畏怖感をもっていた。

子供が流産してから、お初の狂女ぶりは、ますますはげしくなった。身体を痛めたせいもあって、終日、糸置き蔵のなかで不貞寝をしていた。それが、この虐げられた娘の、たった一つの抵抗のようでもあった。

無理に働らかせようとすると、

「殺せ。あたいは死にたい。さア殺せ！」

と、地面にひっくりかえって着物の裾をまくった。

それから、虎太郎が自分を犯したときの模様を、でたらめな調子で、声をはりあげてわめきたてるのである。

表の店には、生糸の仲買人が始終出入りしている。狂女の大声は、そこまでひびく。

さすがの虎太郎も、そんなお初には手こずった。

## お小夜の決意

お小夜が、虎太郎の非道を、代官所へ告訴しようと心に決したのは、あの夜、井戸端でのお初の悲鳴を、ききながらであった。

お小夜は、信濃の小田井の郷士の娘に生れた。父が死んで、やはり家が極貧に瀕したため、みずからすすんで、年期奉公に身を売った。ほかの貧農の娘たちと違って、読み書きもでき、利発な頭をもっていた。

「あたしたち、このままでいたら、みんな、お初ちゃんのようになってしまうよ。みんなで力をあわせて、この家のことを、お奉行所に訴えでようよ」

と、お小夜は、ほかの繰り子たちに語りかけた。

娘たちは、お小夜の言葉に黙ってうなずいたが、その眼の底には、脅えがあった。

お役人、ときいただけで、娘たちの身体はふるえがくる。百姓たちは、代々役人のために苛めつくされてきた。自分がこんなところに売られてきて、苛酷な労働にあえいでいる

き、ある者は、かすかな憤りをみせて唇を噛んだ。すべて、蒼白になって、ふるえながらむざんな死体に手をあわせて拝んだ。

その夜、お小夜の提供した直訴の件は、一人の反対者もなく、まとまった。お常のすさまじい死にかたを見て、みんな興奮の眼をギラギラさせていた。

「やるべえ、やるべえ。鬼虎は人殺しだ。お常ちゃんは、たしかに奴に殺された。おらたち、みんなが証人だ」

「お小夜ちゃんのいうことをきいて、お役人に訴えでよう」

娘たちは、ひっつめ髪を寄せあって、真剣な表情で、語りあった。

お小夜は、いよいよ最後の決意をした。

駈け込み訴えは御法度になっている。ことにこのように、奉公人たちが謀議して、主人を訴えるなどということは、首謀者はまず死罪をまぬかれない。

お小夜は死を覚悟して、いままでの虎太郎の非道悪事を、すべて半紙に書きつらねて訴状とした。終りに自分の名を書いて、その上に指を切って血判をおした。

二十四人の娘のうち、自分の名の書ける者が七名いた。あとの無筆の者は、お小夜が代筆した。みんな眼をつぶって剃刀で小指を切り、血判した。

すべては深夜、とぼしいろうそくの灯の下で、こっそりと運ばれた。訴状は念のために二通つくった。

ほっとひと息ついて、ここで困ったことはこの訴状を持って、代官所へ馳けこむことのできる者がいないことだった。

お常が逃走して失敗したあと、繰り子たちに対する見張りは、一層きびしくなった。昼夜の別なく、五人の男たちが、この家の出入り口をかためて、交替で監視している。

一同は、額を集めてこの家から脱けだす方法を考えたが、名案はでない。

そのうち、お咲という娘が、突拍子もないことをいいだした。

「いいことがあるよ。糸師の五平は、お小夜ちゃんに前から惚れてる。だから、お小夜ちゃんが、五平にうまく頼んで、この訴状を奉行所に投げこんでもらえばいい」

ほかの娘も、わざとひょうきんな口調でいった。

「そうだ、そうだ。そろそろ、また五平がやってくる頃だ。くればまたべたべたお小夜ちゃんのそばに寄ってくるから、そのとき、うまくだまくらかして頼めばいい。あの男ならすばしっこいから、きっとうまくやってくれるよ」

お小夜は、ちょっと顔を赤らめて、しばらくためらっていたが、

「やってみるわ」

と、いった。ほかにいい思案がないのだ。

糸師というのは、生糸仲買人のことで、五平は岐阜に店をもって信濃の生糸を買いあつめ、京大阪に売りさばく男である。

糸虎へ出入りする糸師のなかで、まだ若いうえ、気品のあるお小夜の美しさに眼を惹かれ、この地方へ商売にくるたびに、櫛やかんざしを買ってきて、お小夜にそっと贈るのであった。お小夜は、五平の商人らしい油断のない眼の配りがあまり好きでなく、いつも逃げるようにしていた。

しかし、こんな境遇にいる自分に、いつもやさしい言葉をかけてくれる男には、つい、ほだされてしまう心ももっているお小夜であった。

五平のほうは、かなりの執着をもって、お

小夜をのぞんでいた。一度は虎太郎に、あの娘をゆずってくれと、かけあったこともあった。だが、虎太郎はそのかけあいには応じなかった。彼もかねてから、お小夜に眼をつけていたのだ。

ある夜、虎太郎はお小夜を居間に呼んで手ごめにしようとしたが、お小夜が本当に舌を噛んで死ぬ気配をみせたので、あわてて手をはなしたことがある。

五平が、なみなみならぬ執心で、お小夜にいい寄っていることは、ここに働らく繰り子のみんなが知っている。あの男なら、きっとお小夜のいいなりになる。そこを利用しようというのだった。

# 女体の鉄砲造り

それから十日ばかりたつと、その糸師の五平が、塩尻峠を越えてやってきた。

埃にまみれた手甲脚絆、陽にやけた道中合羽をつけた姿は、きりりとした男前だった。

上諏訪へくると、虎太郎の家に一泊して、商用をすませることが、通例になっていた。夕食を終えて、座繰り場も夜業に入ると、いつものように虎太郎の眼を盗んで、五平はお小夜のそばへ寄ってきた。

ふところから、大阪でもとめた花かんざしをだして、お小夜のひっつめ髪にさしたりする。

「五平さん。今夜、仕事が終ってから、裏庭で逢いたいの」

と、お小夜は、ふるえ声でささやいた。

「へえ、ありがたい。おれの思いつめた気持が、やっとお小夜ちゃんの胸にも通じたか」

などと、五平はよろこんだ。

その夜、裏庭の糸蔵のかげで、お小夜の真剣な頼みをきいた五平は、ぐっと息をのんで眼をまるくした。

しげしげと、しばらくはお小夜の血走った眼をのぞきこんでいたが、やがて、口もとに微笑をうかべた。

「お小夜ちゃん。お前をただの糸繰りッ子じゃないと、かねがね睨んでいたが、まさか、こんな大変なことをしでかそうとする娘とは気がつかなかった。よし、おれもこの糸虎のやり方は、常からひどいと思っていたんだ。ここは一番、お前に力を貸そうじゃないか。いやなに、糸虎がこの騒ぎでうまくつぶれてくれれば、おれはほかの商売敵の生糸問屋から、たいそうなほうびがもらえるんだ。お前と世帯をもつ費用を、それでだしてしまおうじゃないか」

ぬけめのない男である。

「ありがとう、五平さん」

お前と世帯をもつ、などという言葉は気になるが、訴状をひき受けてくれた嬉しさに、

お小夜の胸は熱くなった。

「だが、お小夜ちゃん。その前に、こっちにも頼みがあるんだが……」

五平は、いきなり、お小夜のほそい手首を握りしめた。男くさい息が、お小夜の顔にまつわりついた。

「待って、五平さん。もし、私たちの願いがかなえられたら、かならず、お前さんのいうことはききます。約束します、ね、だから、待って……」

だが、五平は夢中になってお小夜を抱きすくめ、糸蔵の脇にある納屋のなかにひきずりこんだ。

はじめから、命を捨てる覚悟のお小夜は、歯を喰いしばって耐えた。

やがて、五平は、訴状をふところに入れてポンと叩いた。

「たしかに、こいつはおれがひき受けた。まちがいなく、代官所の門のなかに投げこんできてやる。こんなにはっきり宛名が書いてありゃ、いくらお役人だって、まさか風呂の焚きつけにもしないだろう。しっかりと腹を据えて、首尾を待つがいいよ」

「お、お願いします」

乱れた裾もそのままに、お小夜は必死の思

いで、五平の足もとに頭をさげた。
なにやら、ぐったりした心で、寝部屋に戻ってきたお小夜に、仲間の娘たちが寄ってきてとりまいた。
「どうだった、お小夜ちゃん……」
「五平は、承知したかい？」
心配げな顔、期待の顔、うつむきがちのお小夜に、娘たちの眼が重なりあってのぞきこむ。
「だいじょうぶよ、うまくいったわ」
と、お小夜は髪をかきあげて、微笑をつくってみせた。
その翌日、表面はいつもと同じだが、なにか異常な期待のうちに、座繰り場での作業がはじまった。
後方の監視桟席に、朝飯を終えた虎太郎が大きな楊枝で歯をせせりながら姿を見せた。娘たちは、糸枠をまわしながら、互いに、光った眼と眼を見あわせた。
糸をひく低い騒音のなかに、緊張した空気が、つめたく流れる。
と、虎太郎が、押し殺したような静かな声で、お小夜を呼んだ。
「お小夜、ちょっと、こっちへきな」
お小夜は、ドキリとして立ちあがった。繰り子たちの不安な眼が、いっせいにお小夜の背にそそがれた。
無言のまま、虎太郎はお小夜を糸蔵のなかに連れていった。
ふところに手を入れて、彼はゆっくりとふりむいた。
「お小夜、これはいったい、なんの真似だ」
昨夜、五平に手渡したはずの訴状が、虎太郎の手に、ヒラヒラとしていた。
お小夜の顔から、さッと血の気がひいた。ねじりあげた生糸を、五ヵ所縛って梱包する眼の前が、まっくらになった。蔵の外へ逃げだそうとしたが、足がすくんで動けない。
虎太郎の忠実な下男たちが、裸にむいて、がんじがらめに縛りあげろという意味だ。
「あれッ」
思わず悲鳴をあげたが、許しを乞うような真似はしなかった。
眼のくらみそうな羞恥に、胸をかくし、前をおさえる。だが、その手はすぐに背中へねじあげられ、荒縄がからみついた。
虎太郎の竹の鞭が、ころがされたお小夜の咽喉首を突き、乳房を突き、なめらかな腹を突いて吟味する。
「うふふふ。おれが日頃から眼をつけていたあまかったのだ。しょせんは、お小夜も世間知らずの小娘だったのだ。
ピシリッ……
虎太郎の大きな手が、お小夜の頬にはげしく鳴った。彼は憤怒のために、赤鬼のような形相になっている。
下男たちが、お小夜の背後にせまった。
赤銅色のふとい腕がのびて、お小夜は首すじをつかまれ、両手をうしろにねじあげられた。足を蹴られて、床の上にひき倒される。
「憎い女だ。どうしてやろう。そうだ鉄砲造りにしてやれ！」
ねじりあげた生糸を、五ヵ所縛って梱包する鉄砲造り。だから、裸にむいて、がんじがらめに縛りあげろという意味だ。

大きなかたいてのひらで、その生きた絹を愛撫し、ぺたぺたとたたく。

屈辱と恐怖に、お小夜は身をよじり、ちょっとでも虎太郎の手から逃げようとした。縄尻を握った下男が、その身体をひきもどす。いかに主人の命令とはいえ、野卑な男どもであった。

お小夜の胸、腹、腿、足など、五ヵ所を縄でくくり締め、その縄のあいだに、ふとい天秤棒をさしこんだ。その棒の前後を、男どもが肩をいれてかつぐのである。お小夜は、生捕りにされたうさぎのように、天秤棒に縛られてぶらさがった。白い裸体が、みじめな肉のかたまりとなってきしんだ。

虎太郎は、先に立って糸蔵をでた。お小夜をかつぎあげた下男たちが、そのあとからつづいた。

「みろ、むほんの張本人は、こんなざまだ。きさまら、おれをあまくみちゃならねえぞ」

虎太郎は、棒にくくりつけた獲物を、座繰り場の娘たちのあいだに、ゆっくりと見せびらかした。

思いもかけぬ結果に、娘たちは棒立ちになって息をのんだ。ひしと肩を寄せあい、手を握りあっておののいた。むざんな姿のお小夜に、声をかける者もいなかった。

このはげしい恥かしめに、お小夜は舌を噛んで死のうとした。だが、仲間の哀れな娘たちを残して、このまま自分だけが死ぬことはできないと思いかえした。息も絶えだえのあえぎのなかで、お小夜はかたく眼をとじながら、最後まで望みを失なうまいと心に誓った。

## 女性解放悲史・特集

# 夜駈ける狂女

お小夜は、鉄砲造りにされたまま、糸蔵のなかに、ほうりこまれた。

生かさず殺さず、できるだけ長い間苦しめておけば、いかに強情なお小夜でも、しまいには泣いて許しを乞うにきまっている。そうしたら、思うぞんぶんもてあそんで、そのあとでまた繰り子としてこき使ってやろう。

これが、虎太郎の腹だった。

糸蔵の扉に鍵をかけておかなくても、お小夜を助けだしにこようという娘は、一人もいなかった。

助けようとは思っても、結局は虎太郎の眼がおそろしく、自分の身が可愛かった。かえって、前よりも精をだして、糸をひく始末だった。

お小夜は絶望した。二日、三日とたち、肉体の衰弱が加わるにつれて、その絶望は濃くなっていった。

と——三日目の夜である。

生死の境をさまよっていたお小夜の肩を、そっとゆりうごかす者がいた。

「お小夜ちゃん、お小夜ちゃん……」

お小夜が、ぼんやりとまぶたをひらくと、眼の前に、女の顔がみえた。

「あ……」

と、声にならない叫びをあげる。

その女は、気の狂っているお初であった。

「お初ちゃんか……」

と、お小夜はつぶやいて、弱々しく眼をとじた。

きちがいでは、仕方がない。

お初は、縄でしめつけられているお小夜の身体を、しきりに手でさすった。

「お小夜ちゃん。あたしにできることなら、あたし、何でもするわよ」

なんでもいって。

お小夜の顔に口をつきだしながら、ひたむ

きにいうのだ。
「ありがとう。でも、いいの……」
お小夜は、ぐったりとして首を横にうごかした。
「あきらめてはいけないわ。みんなだって、おなかのなかでは心配してるよ。いざとなったら、この家に、火をつけてでも、お小夜ちゃんを助けだすといってるわ」
その語調の、狂っていないことに気がついて、お小夜はぎくりとした。
「お初ちゃん、あんたは……」
お小夜は、眼をあけて、お初を凝視した。
お初は、ニヤリと笑った。
「あたし、いままで、きちがいの真似をしていたのよ。だって、こうしていれば、仕事をしなくてもすむんだもの」
「ああ……」
と、お小夜はおどろいた。
暴虐な主人に対する、十五才の娘のおそるべき知恵であり、反抗であった。あのひっくりかえって股の根をさらした狂態が、偽りであったことは、誰が気がつくだろう。
「あたし、あの鬼虎をやっつけるためならなんでもするわ」
けなげな言葉だった。長いあいだ虐げられた怒りが、この小さな身体に凝り固まっているのだ。
「お初ちゃん……」
お小夜の眼から、熱い涙があふれた。
お初は、お小夜の縄目を解こうとした。
「駄目だ。とても固くて、あたしの力じゃ、この縄は解けない」
「縄はこのままでいいわ。縄が解けても、どうせ私は、この家から逃げられやしない。それよりお初ちゃん、私は訴状を二通つくって、一通は五平にだまされて、旦那においたの。一通があけてしまったけど、あとの一通が私の枕の中に入れてあるの。あんた、それをとりあげられてしまったけど、お代官様のところへ持っていってくだして、お代官様のところへ持っていってくれるかしら……」
「誰だ！」
と、一人の張り番が、鋭い声を発して近づいてきた。
「ヒヒヒ……。あたいだよ」
お初は、歯をむきだして笑った。尻のあたりをポリポリかいた。
「なんだ、きちがいお初か。こんなところをうろついていねえで、早く寝ろよ」
と、吐き捨てるようにいうと、張り番の男は去った。
「ウン……」
調子はずれの返事をして、お初の眼は正常に弱っている。
「お小夜ちゃん、お小夜ちゃん！」
お初は、あわてて、その身体をゆすった。
だがお小夜は、張りつめていた気がゆるんだか、唇をひらいて失神した。
お初は唇を噛んで泣き顔になったが、気をとりなおすと、背をかがめて糸蔵の外へ忍びでた。
むほんの首謀者のお小夜が捕われて、あとの者はひっそりと鳴りをひそめたせいか、下男たちの見張りも、気をゆるめがちだった。
直訴状をしっかりと帯に巻きつけたお初が裏木戸のくぐりに、そっと手をかけたとき、
「誰だ！」
と、お小夜はおどろいた。
あえぎ、あえぎ、お小夜はいった。
「ええ、あたし、やるわよ」
お初は、しっかりとうなずく。
「たいへんなことよ。命がけよ。でも、あんたしかやる人はいないの。この家から脱けだせるのは、あんたなの。あんたなら、見張りの男たちも油断するわ。わかっているわね。いままでどおりの真似をしていくのよ。お願い……みんなのために……」
お小夜の声が、きれぎれになった。身体が

な色になって光った。隙をみて、くぐり戸から、こまねずみのような素早さで外へでた。

それから、夜の甲州街道を、諏訪領郡代官所をめざして、ころぶようにかけだした。

髪がもつれ、裾が乱れても直すゆとりもなく、白い太腿で風を切って走った。

地を蹴たてる一足一足に、暴虐の主人虎太郎への憎悪と復讐がこめられていた。

いかめしい鉄金具のついた代官屋敷の塀が見え、門があった。

文字どおりの馳け込み訴えであった。

「申しあげます。たいへんでございます。たいま、人が一人、殺されかかっていますご門をおあけ下さいまし。お願いでございます！」

お初は、夢中になって声を張りあげた。さなこぶしで必死に門を叩きつづけた。

人が殺されかかっているとあっては、そのまま見捨てておくわけにもいかなかった。通用門があけられ、訴状は下役人から、代官の手にまで渡った。お初はそのまま、お召捕りになった。

取り調べの結果、糸屋虎太郎は家財を没収されて、終身遠島の刑に処せられた。多くの罪状が明白になったが、最大のものは、繰り子のお常をなぶり殺しにした件である。この事実を、奉公人の娘たちは口をそろえて証言をうけ、なんのおとがめもなく、これもまた無事に、故郷の美濃太田在へ帰された。

この事件は、諏訪の狂女直訴と呼ばれ、しばらくのあいだ、信濃近在はおろか、遠く美濃、越中、上野までに噂された。

首謀したお小夜よりも、にせ狂女の馳け込み訴えというのが珍らしく、人々の口にもてはやされたのである。

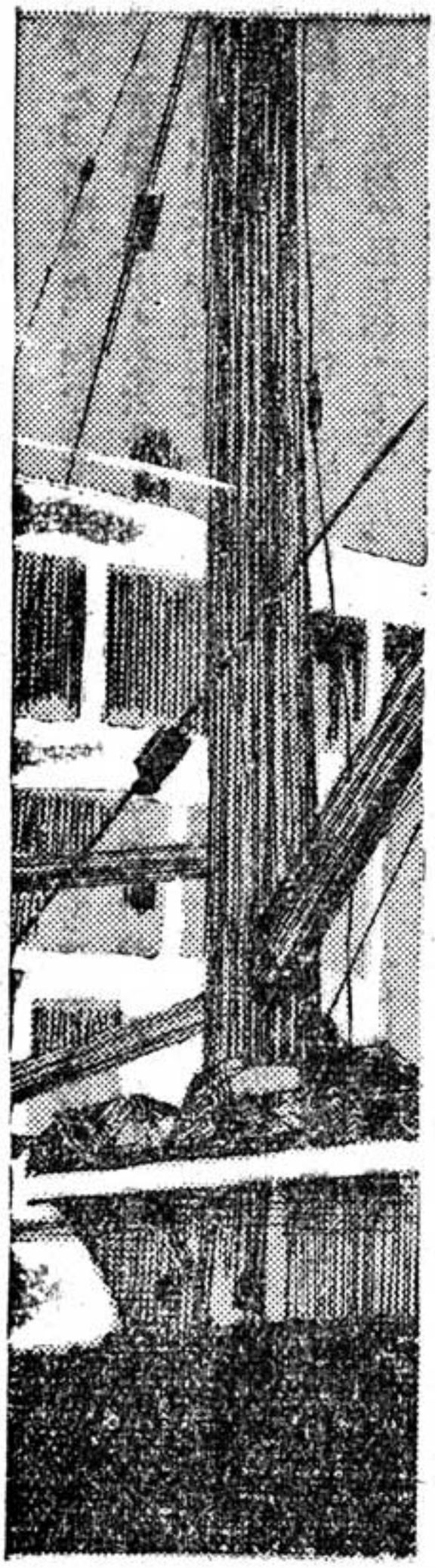
次号予告

# 悲愴美の世界 (一)

## ——白虎隊の切腹——

## 中康弘通

★切腹の研究家として有名な異色作家中康弘通氏が
★ここに書き下ろした白虎隊の切腹！　美義に殉ずる
★美少年達の凄絶な悲愴美の極致を妖しく描く！
★次号掲載、御期待ください！



知らぬ異国というさえ心ひるむのに、刻々母国を遠ざかるこの船が人買い船と気づいた時……

# からゆき悲歌

葉田光夫
江淵晃画・

「ええか、みんな……そないに、お通夜みたいな不景気な顔せんと、若い娘らしゅう、パッと笑顔を見せたらどや……なにも、地獄へ行くちゅうわけやなし……そらな、江戸時代なら、唐天竺いうて、地球の涯やったかもしれへンけど、今は二十日も船に乗ってたら行き来できるとこなんや……それにな、あっちは一年中暖くって寒さ知らず、裸で暮せるちゅうええとこや、へへへへッ」

かからゆき船

象のように肥満した口入屋の古田角平は、桂庵特有の粘ッこい好色な眼で、二十人ばかりの若い女たちを見廻しながら、野卑な笑い声を、船内に響かせた。

五十畳ほどの船底部室である。

明り取りの丸い窓からさし込む光は、夜明け近くの茜色が滲んでいた。

島原手島の小浜港を出帆してからまる三日、女たちは外海の波浪に揺られて、すっかり疲れていた。

船は千トン少しの貨物船海幸丸である。

表向きは、仏印・シンガポール・ジャワその他の南方地区へ、日本の雑貨を積み込んでいたが、秘密裡に、若い女を運ぶ人身売買船、通称からゆき船であった。

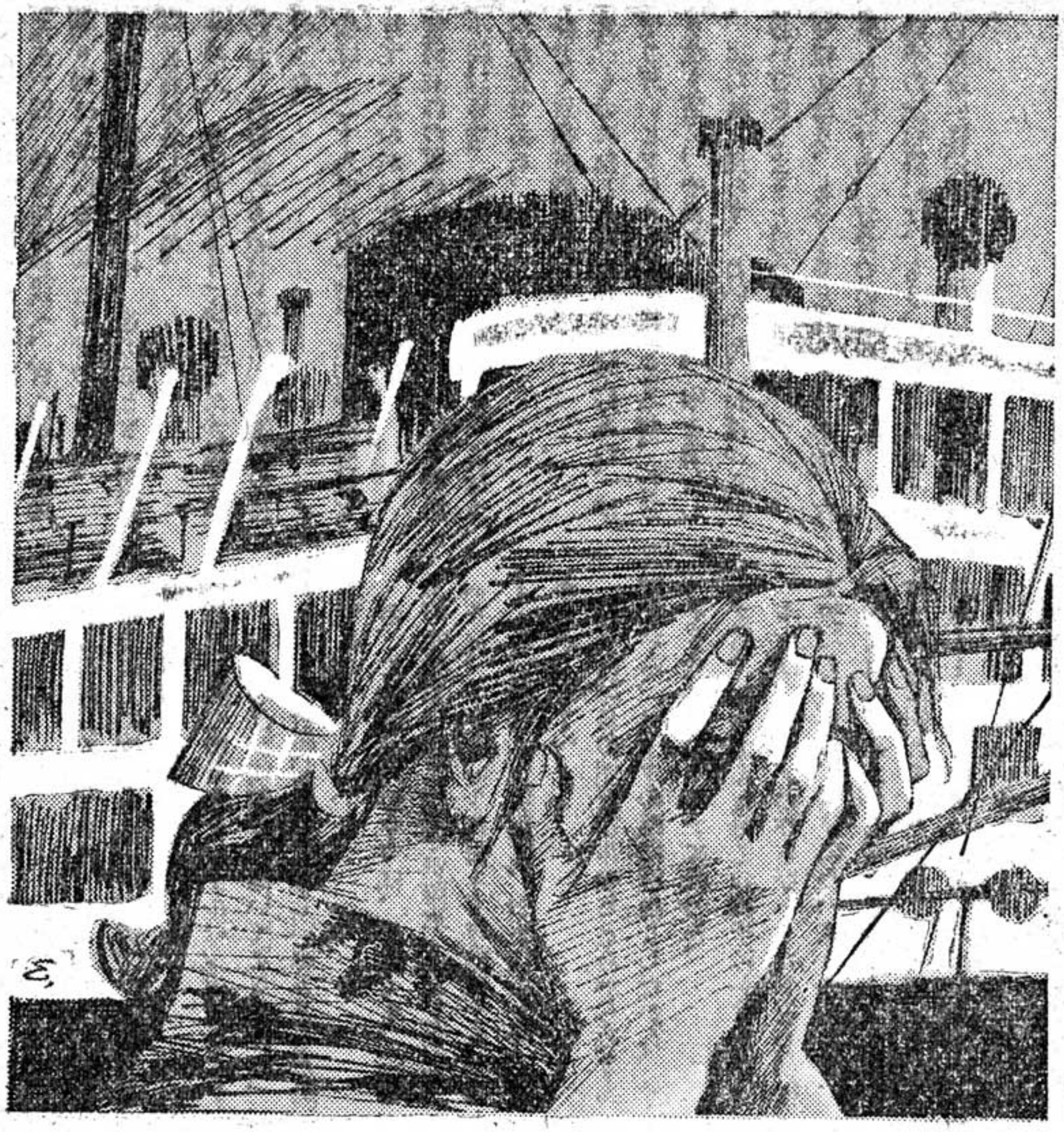
女たちは、欧州大戦後の急激な不景気風に見舞われた貧農や貧乏商人の娘で、仏印・シンガポールなどの淫売屋へ売られてゆくのである。

年期は最高で五年、短かくて、二年。

だが、この期間を無事に勤め上げて、故国に帰ってくる女は数えるほどしかなかった。

昼夜をわかたぬ荒々しい異国人の肉体の餌食となって、無惨に蝕ばまれ、そのほとんどが、若くして病死するのである。

だが、いま、彼女たちは、そんな悲惨な運



命が待っていようとは想像だにしていない。
ただ、なんとなく不安な気持があるだけ。
というのも、古田角平の甘言がこうだったからだ。
「あちらの大きな日本料理屋の女中なんやから、別に、体を売るわけやなし、年期をすませば、二、三万の大金を持って帰って来られるンや、心配はいらん……日本の女郎屋で籠の鳥の暮しをするより、なんぼかええか」
この言葉に釣られて、女の親たちは、契約書に判を押したのである。
女の年齢は平均十九歳。
それに、ほとんどの女が、まだ生娘だった。
一人あたりの平均前借金が百円。
それが、売り渡し値となれば五倍にはね上るのだ。
古田角平の笑いが止まらないのは当然であった。
その彼の笑いの中には、彼にとって道楽である、女の品定め、という楽しみがあった。
むこうへ着くまでに、女たちをとっくり弄ぶわけである。
それは桂庵稼業の役得のような

## 女性解放悲史・特集

ものなのだ。

過去六回、彼は南方地域へ、百人近くの女を売り飛ばしているしたたか者であった。だから、桂庵仲間では、彼のことを「南方屋」とあだ名していた。

その上、その象のように肥満した体軀にふさわしい異常な性力絶倫と変質的な性癖の持主たった。

彼は、二十人の女の中で、最初っから目をつけていたのがいた。

新潟生れの雪のように白く、ぽってりと餅肌の小綺麗さで、里村キンという二十一になる大柄な女である。

ひどく食指が動いていた。

食べものにたとえるなら、角平好みの、ぽってり厚いビフテキといったところだ。むさぼり喰う前に、やたらと眺めて、喉を鳴らして、よだれを垂らす、といった、ねばっこい味わい方をしようと思った。

(今夜あたり、とっくりと楽しもうかな。女を楽しむにゃあ、好都合の凪のようだ)

角平の瞼の奥には、もう、キンのふかふかとした白い裸体が、揺れ動いているのであった。

個室の船室の中である。

必要以上に輝やかしい電燈が、ペンキくさい船室の隅々を照し出している。

部屋の隅に簡単なシングルベッド。テーブル、椅子などが無雑作に置いてあるだけの、いかにも、貨物船の船室らしい寒々とした造りである。

が、この海幸丸の中では、それでも、一番上等な船室で、古田角平が陣取っていたのだ。

「キン、キンというたな……年齢は十九やろ……わいがなんで特別に、おまはんを呼んだかわかるか？」

角平は朝日の畑をゆらゆらと鼻から吹きあげながら、ベッドの端に横坐りしながら、ぼっそり立っているキンに云った。

「まあ、立ってんとそこの椅子にかけえな」

薄ら笑って角平は、扉を叩いているキンの方へ歩み寄った。

キンは、安モノのびらびらしたお召の長袖を気にしながら、椅子に坐ってうつむいた。

「おまはん、ええ体してンなあ……おれなあおまはんに惚れてもたンや……年甲斐ものうわいも楽しめるさかいな、ふふふッ」

角平がキンの腰を後から抱きしめたとき、まはんが可愛いいからなンや……この意味わかるか」

ぱしッ、とキンの掌が、角平の頬で激しい音を立てた。

角平は、じわッと、キンの側へ寄った。

キンが身を硬くするのが、その肩のせばまりようでわかった。

「なあ、キン……わいに体見せてくれへンか……」

粘っこく云った角平の言葉に、キンは、ぎくんとしたように、顔をあげた。蒼白な頬だった。

「ええやないか……ここはおまはんとわいと二人っきりや、どんなことしても、誰にもわからへン……なあ、早よ、帶をほどき」

キンは、しばらく唇の端をわなわな震わせていたが、いきなり椅子から立ち上った。扉の方へ逃げた。

ばたーん、と椅子の倒れる音が、木魂のように室内に響き渡った。

「あかへん……扉は鍵がかかてる……」

薄ら笑って角平は、扉を叩いているキンの方へ歩み寄った。

「さ、早よ、脱ぐんや……ひとりで脱げんのやったら、わいが脱がしたるわ……その方がわいも楽しめるさかいな、ふふふッ」

角平がキンの腰を後から抱きしめたとき、ぱしッ、とキンの掌が、角平の頬で激しい音を立てた。

「えらい生きのええ女子やな……ますます楽しみや」

いっこうにこたえない角平は、強引にキンを抱きかかえると、ベッドの上へ運んだ。

「なにをするンじゃあー」

両手、両足をばたばたさせながら、キンが狂ったように叫んだ。

「なにをするちゅうて……おまはんに、あちらへ着いてからする仕事の予行演習をしたるンや……あちらへ行ったら、毎日、裸稼業やちゅう動物になってまうのや……一匹の女……おまはんは人間並の扱いなんかうけられへンのや……こうまでいうたらなるわけや……こうまでいうたらわかるやろ……おまはんは女郎になるンや」

「だましたンじゃな……料理屋の女中やというて……」

「だまさにゃ、誰が、南の他国へなんか行くいうもんけえ……もういくらわめいても、日本をとうに離れた海の上やさかいな」

キンはベッドに突ッ伏して、しくしく泣きじゃくった。

角平は、泣きじゃくるキンを邪慳に引き起すと、帯に手をかけ、ずるずるッと引ッ張った。

帯は勢いよく、床の上へ流れ落ちた。

キンの抵抗が激しくなればなるほど、角平の形相は、好色なよだれを垂らさんばかりの崩れた顔になった。

着物の襟元を大きく引き開け、そこから、白い毬のように大きくふくらんだ片方の乳房が見えた時、もう、角平の眼は、人間のそれよりも、ケモノのそれに近かった。

角平は、飢えた猛獣が、餌食を待ち切れぬように、着物を引っ剝がし、長襦袢をむしり取った。

あらわになった上半身の丸く実ったキンの白い肌が、電燈の光に、新鮮な雪のように、なめらかに光った。

縫いぐるみ人形のように、ふかふかと肉の厚いからだが、角平の視覚を十分に満足させた。

なだらかな肩。その下へぐっとそり上るように突き出た鉄砲乳。その先のさくらんぼの紅さ。厚い肉に蔽われたキンの体には、少しも骨が浮き出ていなかった。

「ええ体してけつかる……」

こぼれ落ちるよだれを吸いこんだ角平の手が延びて、キンの腰のものをつかんだ。

「あ、あッ……」

キンは前に手を当てて、くくり猿のようになった。

腰のぐッと彎曲したまろやかさから、太腿へ流れる雪の肌に、角平はゴクリと生唾をのんだ。

「こら、ええ上玉や……毛唐好みやし、日本楼の女将もびっくりしょるやろな……どれ」

角平の手先が、まろやかなキンの肌の起伏をはいずりまわりはじめた。

## 地獄の数え歌

翌日、売られてゆく女たちは、古田角平へ、激しい憎悪と反抗を、露骨に現わしはじめた。

角平から犯されたキンの口から、自分たちが、南方の女郎屋に売られてゆくという事実を知ったからである。

「日本料理屋の女中なんて嘘っぱちなンじゃ……うちらは、女郎なんじゃ……だまされた

キンの悲痛な叫びに、女たちの顔は一瞬紅潮し、続いて、蒼ざめた。

「どうしよう……あたしは嫌や……女郎なんて……」

「女郎に売られるンなら、日本の廓の方がまだええ……」

「黒ン坊や毛唐を相手にするぐらいならんだ方がええ……」

「ああ、こわいこっちゃ、どうしよう……」

女たちは、口々に喚き立てた。

こんなとき、古田角平が、のっそりとその肥満した顔を見せて、どなった。

「お前ら、なにをわいわい騒いどるンや……静かにせンかい！」

だが、女たちは、一斉に気色ばんで喚いた。

「この嘘つき！」

「日本へ帰せ！」

「警察へ訴えてやる！」

女たちの思わぬ攻勢に、角平は一瞬どきッとしたような眼をしたが、すぐに不敵な薄ら笑いになった。

「あほんだら！　なにを喚きくさるンじゃ。喚くならせえだい喚いとれ……今に、ぐうの音も出んようにしたるさかいな」

角平の眼に惨忍な血の色が滲んだ。

「キン、お前やな……女らをけしかけたンは……特別に可愛いがって、あっちへいっても、あまり辛うない勤めをさせたろ思うてたが、もう止めた……」

角平は、キンを睨むようにして凄むと、扉の外に出ていった。

ほどなく、角平は、海幸丸の屈強な水夫を五人ばかり連れて引き返して来た。

水夫たちの手には、ロープが握られている。

「ええか、お前ら。喚いた罰に、これから、ええ目にあわしたるで。この船はな、地獄船ちゅう異名を持っとるンや。どんだけ、こわいか見せたるわ……いうとくけど、お前らはわいらに飼われてるメンドリみたいなもんや。気にいらん奴は、首をしめても、どこからも文句は出て来えヘンのや」

一瞬、女たちが声を呑んだ。

「にいちゃんら、ちょっとひねったってンか」

角平の声に、水夫たちが、女たちへ近寄った。

五人の水夫に五人の女が引きずり倒された。

みるみる、女たちは、水夫たちの強力に、雑作なく、身ぐるみ剝がれ、白い裸身をなまめかしく、のたうたせた。

キンをはじめ、他の女たちは、部屋の一隅にかたまって、これから始まる制裁に、血の気を失った顔を寄せ合っていた。

彼女たちは、後手にロープで縛り上げられ船室の天井のパイプに、まるで、ショウウィンドの洋服のように、ぶらんと吊りさげられた。

苦痛に喘ぐ、女たちの腰がくねり、両足が大きく揺れ、胸がそりかえった。

「うーッ」

「あーッ」

「い、痛い……」

女たちは口々に呻いたり、叫んだりした。

「ええか、お前ら、よう見とるンやで……地獄船では序の口の見世物や」

顎をしゃくって、水夫たちへけしかけた。

水夫たちは、一様に、ニタニタッ、と白い歯をムキ出して笑った。

「それッ。一つとせ、ひとのこわがる異国の空で、黒ン坊ばかりを抱いて寝る。ほれッ、抱いて寝るウー」

水夫たちが、合唱した。

淫卑な数え歌だった。

「それッ。二つとせえー。仏印よいとこフランス水夫、手練手管で泣かせます、ほれッ、

泣かせますウー」

水夫たちのヤニ臭い息が、頬にかかる。

まさに、地獄数え歌だった。

数え歌は十まで続くが、そのうちに、女たちはその恥かしめに、ぐったりしてしまった。

## はだか品定め

海幸丸が二十日近くの航海で、碇をおろしたのは、ハノイであった。

キンたちは、検疫が済むと、すぐに埠頭に降り立った。

南国特有の真ッ青な空に、すべてのものを焼きただれさすような太陽が輝き、熱帯樹の繁みが目に泌みた。

街はシナ風と欧州風の混合した、植民地にふさわしい原色的な街並が、彼女たちの眼をそば立たした。

た。

「もう、日本へ戻られへんのじゃろなあー」

……あたしは、どんなことがあっても帰ってやるんじゃ……帰って見せたる……」

キンはほんとうに心からそう思った。

「そないな気弱なことを云うもんじゃあねえ

キンと仲良しの、十八になるミサオが、悲しそうな声でささやくのへ、キンはきっとして云った。

(このまま、畜生みたいな扱いを受けて、死んでしもうてたまるもんか……帰って、世の中のひとに、こんなひどい仕打を受けたことをぶちまけてやる……誰かがいわないと、あの悪者の角平の奴は、次々と嘘をついて、何も知らん女を売り飛ばして大儲けしよるから)

「さあ、みんな、乗った乗った」

角平が大声で女たちに云った。

迎えの洋車が二十台待っていたのである。

「おーい、みんな、せいだいええ目せえよ……今度ここへ来たら、金出して買うたるさかいな……

おもしろいこと仕込んで貰ろとけよオー」

海幸丸の船員や水夫たちが、ゲラゲラ笑いながら、ひやかした。

キンはきっと唇を噛んで、洋車の上から、彼等を睨んだ。

やがて、洋車の列は、埠頭から、街の中へ走り出した。

洋車の停ったところは、フランス風な南部地区の一角だった。

「日本楼」という漢字と英字の看板がぶらさがったシナ風の家であった。

門の両側に、ヤシの木の葉が、大きなうちわのように垂れさがり、門からずっと広い庭の中の道を抜けると、五つほどの棟が並んでいた。

女たちは、ぞろぞろと、角平に先導されて奥まった洋風の家の玄関に入った。

「ああ、古田さん、待ってましたよ……もう首が鶴のように、一尺も延びた気持ですわよ」

玄関のポーチまで迎えに出た日本楼の女将綾部きみが、四十すぎの贅肉のぼった顎を突き出して言った。

「すんまへン……なかなか、玉捜しに手間取りましたもンでな……でも、いつ来ても、ここは暑つおまンなあ……ほたほたに汗かいてしもた」

古田角平は、猪首の汗をハンケチで拭いながら云った。

「で、船旅はどうでした……玉に故障はありませんでしたか？」

「へえ。おかげはんで、それに、今度は生きのええ、ピチピチした若い玉ばっかりで……」

少々、手荒に扱うても大事おまへン……きっと女将はんによろこんで貰えまっしゃろ」

角平は、後で一かたまりになっているキンたちを見て、誇らしげに言った。

「ほんまに……ええ玉ぞろいらしいな……とにかく、商談はあとにして、汗を流して貰いましょうか」

「そうでンな」

角平の眼に、好色な色がうかんだ。

「みんな、暑かったやろ……風呂で汗を流すンや」

キンたちは玄関に上り、女将に連れられて奥まった洋風の浴室にいった。

「二人ずつ入るンや、ええなあ。さあ、脱いで、脱いで……」

キンたちは、脱衣場で着物を脱ぎはじめた。

女将と角平は、その場で、凝然と、女たちを見詰めていた。

最初に裸になった二人の女が、湯殿に入ると、女将と角平も一緒について入った。

湯殿の境の戸が閉ってしばらくすると、

「あッ」とか、「うッ」とか、女の呻き声がきこえて来た。

一体、何が行われているのだろう、女たちは一様に、そう思った。

やがて、二人の女が、虚脱したような顔で出て来た。

「ど、どうしたの？」

と、たずねる女たちへ、二人の女は、わッ、と泣き崩れてしまった。

「次の二人、早よ入っておいでな」

女将がせかした。

キンとミサオが、おどおどしながら、前かがみの裸体を、湯殿の中に入れた。

すぐに、びしゃン、と戸が閉った。

白いタイルの湯槽の中には湯はなかった。

「女将はん、どんなもンだす……上玉でっしゃろ……」

角平はギラつく眼で、キンの肩を掴むと、ぐいと女将の目の前に押し出して云った。

みだらな裸の品定めだった。

湯殿で一汗流すというのは表むきの言葉で

実のところ、苛責のない、女たちの品定めに利用するためだったのである。

## 逃亡の折檻

その夜。

キンたちは、一部屋で、女将の前に並んで坐っていた。

「今晩は、ゆっくりお休み……商売は明日からにしてあげる……わかってるだろうけど、ここでは、あんたらの自儘は一切許しません。年期が明けるまでは、わたしのものなんだから、一切、わたしの云う通りに動くんですよ……客のより好みは許しません……もしあたしの命令にそむいたら、容赦なく折檻しますからね……わかった？　あんたらはわたしが大金かけて買うた体なのよ……だから、損をさせないように、精一杯稼いで貰うわよ」

女将は、フランス煙草をすぱすぱふかしながら、異郷の女郎屋の女主人らしい冷酷な眼で、キンたちに云うのだった。

「キンねえちゃん……あたし、もう辛抱でけへん、死にとうなった……」

床に入ってから、ミサオが、耳元でささやいた。

「あほうなこというんじゃないわ……死ぬなんて……」

「でも、明日からのこと思うと……」

「早よ、寝るんじゃ……もう、ここまで来たら、檻の中の動物と同じじゃ、なるようにしかならん……」

キンは観念していた。

明日から、どのような苦労に身をさいなまれようと、生き続けて、故国の土を踏むのだと決意をしていた。

いつの間にか、船旅の疲れでとろとろまどろんだ。

何時間たったか。

大声でわめき立てる人の声で、キンは故国の夢を破られた。

寝床を並べていた女たちも夢破られて起きていた。

「みんな起きるンだよ、起きるンだ！」

どなっているのは、女将だった。

そして、その側に、二人の安南人らしい女将の使用人の男に、両手をつかまえられてミサオが、蒼ざめた顔で立っていた。

髪はさんばら、寝巻の袖や裾が破れていた。

「この女が逃げようとしたンだ……来るそうそう逃げられてたまるもンかね……もう少し見つけるのが遅かったら、庭の木の枝で首をくくって死ぬところだったんだ……一文も稼がないうちに、死なれてたまるものかね……云っとくけど、逃げたり、死のうとしたりしたら容赦しないよ……見せしめに、お前らに、いいもの見せたげる……みんな来るンだ」

女将の手の鞭が、ビシッ、と不気味に鳴った。

その先が、一人の女の体に当ったらしく、「ひいーッ」という叫び声があがり、女たちは、どさどさ、と立ち上った。

長い廊下を突き当ったところにクラシックな鉄扉の部屋があった。

その戸口にフランス語らしい文字の木札がさがっていた。

それがどういう意味か、もちろん、キンたちにはわかろうはずがなかった。

ぎいッ、と鉄扉が、重く軋んで観音開きに開くと、真ッ白な壁の部屋だった。

こうこうたる電灯が、キンの眼を射た。

そして、キンは、その二十畳あまりの部屋の異様さに、眼をみは

# 女性解放悲史・特集

ったのである。

というのは、仰いだ天井が、全部鏡張りであったし、部屋の隅に、ルイ朝時代にありそうな豪華な紗のかかった四本柱のダブルベッドがあり、壁の一隅に、それがなんのために使用されるのかわからない鉄鎖や針板や鞭や縄や鉄輪や、枷などが置かれてあった。

その上、キンの首をかしげさせる奇妙な型をした椅子と長方型のテーブル様のものがあったのだ。

椅子には、腰を下す台がなく、丸い空洞があき、背をもたせかけるところが、二本の交叉した鉄棒で、そこに、鎖がまといついていた。長方型のテーブルの方には、その中央に、三角型の突き出しがあり、人体の型をしたくぼみがあった。

「さあ、おはじめ」

女将が、形相物凄く、安南人に云った。

ミサオは、引きずられるようにして、その椅子に坐らされ、みるみる、背板の鉄鎖で、喉輪と両手をねじあげるように縛り上げられた。

キンは、ミサオの苦痛に歪んだ姿を見ていることができなかった。

「女将さん、あんまりです……ミサオを許してやってくださいな」

「なんだね、お前、あたしに命令するのかえ」

「た、助けてちょうだい……もう、なんでもいうことをききますから、許してくださいと頼んでるんです」

「口出しは許さないよ……おや、その眼はなんだえ……お前も、椅子が欲しいのかえ」

「……」

キンはやはり黙ってしまった。

涙がとめどなく流れた。

## 鏡に写る白獣

翌晩から、キンたちのいやしい肉体労働があくなき荒くれ男たちによって、強制されたのだ。

客はフランス人、安南人、華僑のシナ人、日本人もありギリシャやトルコもいる。どの男も、ただ、女たちを一匹の飼い馴らした猫のように扱った。

そこには、女たちの羞恥や自尊心や誇りは一かけらも認められなかった。

男たちは、女たちに、露悪的な欲求を充たし、どろどろに疲れさせて、翌朝は、さっさと口笛を吹いて帰っていった。

日本人の客すらそうであった。

彼等のほとんどは、船員で、旅の恥はかき捨てといった、暴君的な欲望を吐き出した。

キンはこんなケモノたちとの交渉に、徐々に、自分の体が腐ってゆくような寂しさを覚えた。

（あたしは人間じゃあない……メスのケモノなんだ……ここにいる間は、メスのケモノになりきらなければ生きてゆけやしない）

彼女はこんなことを考えながら、人間の羞恥を捨てた一匹の女豹のようなそぶりで、男たちを満足させるようになった。

キンは日本楼でピカ一の妓という評判をとったのは、彼女が日本楼に来てから、三月もたっていなかった。

キンは、ハノイ駐在のフランスの高官に取りいった。

ブリユーエルというその五十すぎの男は、フランス植民地の最高長官だったが、異常なサジストだった。

キンは、自分からすんで、彼のサジ的な愛撫を満足させ、もはや、彼にとって、キンはなくてはならぬ存在となっていた。

痩せさらばったブリユーエルの日本楼でのお楽しみは、あの、ミサオが折檻された部屋でのケモノのような愛欲だった。

だから、キンの肌には、一日として、鎖のあとや鞭のあとの絶え間がなかった。

「お前は働きもンだよ。みんなが嫌がるブリユーエルを満足させて……二年の年期を半年短かくしてやってもいいよ……なにしろ、このハノイじゃ、あの男にとり入らないと随分

損をするンだからねえ。せいぜい頼むよ」

女将はキンを拝まんばかりになっていた。

が、キンにとって、ブリユーエルの御機嫌とりは苦痛以外のなにものでもなかった。

あの責め場の苦痛は、誰にも云えないことなのだ。

瞼が鳴り、椅子に坐らせられ、テーブルの三角の尖った先が肌に喰いこみ、のたうち、わめき、くねり、それは、あられもない白い素裸のケモノの歪んだ図だった。

それが天井の鏡に全部写るのだ。

キンは、鏡に写っている胸をそらし、四肢を車輪のようにふり、腰がねじれ折れそうになっているその白いケモノが、自分であることが不思議に思うことがよくあった。

(これがわたしなのか……ほんとうにわたしなのだろうか……)

精一杯のたうち、体の隅々まで、苦痛の汗を吹き出した頃、やっと苛責の鎖をとかれるが、ほっとする間もなく、あのルイ朝時代のベッドの抱擁が連続する。

こんな苦痛に耐えているキンには一つのたくらみがあったのだ。

ブリユーエルに取入って、大勢の女たちを自由にすることであった。

ハノイには、日本楼の他に十軒ばかり、同種の料理屋兼売春宿があった。

その最大のものが日本楼なのだ。この日本楼の女将を失脚させるには、ブリユーエルに取り入るしか方法はないと考えた。

ブリユーエルが、日本楼の営業権をストップさせることは朝飯前なのだ。

その上で、あわよくば、自分が女将のあとに坐る。後は自分ひとりが、ブリユーエルのなぐさみ者にさえなっておれば、女たちの解放も不可能ではない、と考えたのである。

キンは、彼の欲求を満足させながら、着々と、その計画を実行に移すべく、ブリユーエルの異常欲求に耐え続けた。

## 故国のにおい

半年たったある夜だった。

ハノイ特有のむせかえるような熱気が、よけい情欲をそそるのか、日本楼は、種々雑多な異邦人の遊客でごったがえしていた。

ブリユーエルは来ない夜だった。

こんな夜は、キンは他の客を取らされた。

「キンちゃん、久方ぶりに日本の船がついたんだよ……お前さんにはよく働いて貰ってるから、今夜は、お国の男のにおいを充分に嗅ぐがいいよ」

女将が、ニヤニヤしながら云った。

その頃、キンはすでに、ブリユーエルから日本楼の衛生違反を理由に、営業停止をするという確約をとっていた。

彼女の計画は十中八九的中しそうだった。

(何も知らないで……)

キンは腹の中で大きな舌を出しながら、その日本人の客の部屋へいった。

ドアを開けると、男は窓辺で背をむけていた。

キンは、彼の欲求を満足させながら、着々と、その計画を実行に移すべく、ブリユーエルの異常欲求に耐え続けた。

## 故国のにおい

半年たったある夜だった。

ハノイ特有のむせかえるような熱気が、よけい情欲をそそるのか、日本楼は、種々雑多な異邦人の遊客でごったがえしていた。

ブリユーエルは来ない夜だった。

こんな夜は、キンは他の客を取らされた。

「キンちゃん、久方ぶりに日本の船がついたんだよ……お前さんにはよく働いて貰ってるから、今夜は、お国の男のにおいを充分に嗅

「お、おれ、こんなところに来たくなかったんだが……先輩が、一度後学のためにいっとけっていうもンだから……」

恥じらい顔で云った。

彼は三等運転士の制服を着ていた。

「後学のためになるかしら」

「今夜は語り明かそうよ……何もしないで……お、おれは、それだけでいいんだ」

「何もしないで……珍らしいお客ねえ」

キンがこう云ったとき、健吉の眼の色が変って来た。

「き、きみ、キンちゃんじゃあない……新潟の尺村の……お、おれ、倉沢健吉だよ」

「……」

「そうだろ、キンちゃんだろ……間違いない……」

ポロッと健吉の両眼から涙がこぼれた。

なんの涙なのか。

キンがけげんな顔をしていると健吉が上ずった高声で叫ぶように言った。

「お、おれ、ずっとキンちゃんを捜してたんだ……東京の商船学校を出てくにに帰って見ると、一足違いで、口入屋に年期奉公に連れてかれたっていうじゃあないか……どこへと聞いても何も教えてくれない……さんざん聞いた挙句、女中に出したってきいたもんだから、内地のどこかで、女中してるものとばかり思ってた……それが、こんなところで……」

「そんなに思ってくれてたの……」

「今でも思ってるさ……こんなところはいけないよ……前借はオレが払う……一緒に帰ろう……四日後出航だ……」

「だめ……あたし、もうむかしのキンじゃあないの……からだがメチャメチャ……心もメチャメチャ……忘れて……」

「嫌だ！　引っ張っても帰る……」

健吉はいきなりキンの胸を抱いた。

キンは健吉の体から、懐しい男のにおいの他に、故国のにおいを嗅いで、涙が溢れた。

（帰りたい……でも、ミサオや他の女はどうなるの……わたしだけ帰ってどうなるの）

こんな気持が、熱い湯のように、胸の中にあふれ出た。

「うれしいわ……出航までにまだ間があるんだもの……今夜はたのしく……」

「それじゃ帰ってくれるんだね」

「……」

キンはあいまいにこっくりうなずいた。

その場のがれという気持が多分にあった。

（いくら健吉の愛情が深くても、大勢の男にメチャメチャにされたこのからだでどうなるというのだ……それにあのいまわしいブリューエルのオモチャに馴らされたからだで……）

こんな苦しい思いをかみしめているキンの耳に、どこからか、ものさびしい旋律が流れて来た。

## 訣れの出船

倉沢健吉の貨客船が出航の朝、キンは、ブリューエルの毛むくじゃらの胸の中で目ざめた。

骨がきしきし鳴った。

ブリューエルはしんそこから満ちたりたようだった。

そして、日本楼が三日後、一時営業停止されるだろう、と話してくれたのだ。

キンは、体の痛みも忘れ、心の中で快哉を叫んだ。

（これで第一段階は成功した）

キンは、部屋を出て、朝の光のあふれた高楼にのぼった。

海が見える。

青い油絵具のような海に、白い港の二本マストの船が見えた。

それが、健吉の船だった。

「きっと来てくれよな……前借金は後で払っ

てもいいんだから……来れば、なんとか乗れるんだ……船長にも事情は話してあるし、心配はいらないんだ、きっとだぜ」

健吉の熱っぽい言葉が今も耳に残っている。

彼に抱かれた楽しい愛撫の夜の甘い感触がよみがえってくる。

いま、そっと埠頭まで馳け出してゆけば、すべては、幸福という出航に間に合うのだ。

が、彼女は動かなかった。

凝然と彼の船を見詰めていた。

(健吉さん、ごめんね……ごめんね)

心の中で泣きながら叫んだ。

半時間ばかり、彼女はそうして立ってやがて、ぼうーッ、と汽笛が鳴った。

出航の汽笛である。

(健吉さん、さよなら……あなたはあたしを連れて帰らない方がいいのよ……一緒になってもうまく行かないわ……やがて、あたしのきたないからだがいやになるのだから……このまま、別れた方がお互に幸福なのよ……そうなのよ……)

あれほど帰りたかった故国日本だったが、キンは、涙して、諦めた。

船が動き出した。

静かに港外へ進んでゆく。

そんな南国のギラギラする港の風景が、みるみる、キンのあふれ出る涙で、ポタージュ色の霧のように、ぼけていった。

いつしか、キンは、その場に泣き崩れていた。

三日後、日本楼は営業停止になり、一月後再開したとき、女将はキンだった。

そして、偶然にも、フリューエルは本国帰還を命ぜられ、キンは、最初の計画通り、自儘に店の営業方針を変えることができた。

そして、翌大正十一年、日本楼は廃業し、女たちはキンと一緒に、懐かしの故国日本へ帰って来たのであった。

しかし、女たちの悲劇は日本楼一つが消えても、まだ多くのあくなき業者がいたのである。

南方地方への日本娘子部隊の密輸は昭和初年頃まで、依然としてあった。

いま、売春防止法により、この口入屋古田角平のような鬼畜共に、大鉄槌がくだされたのは、隔世の感ありという他はない。

蛇足ながら、古田角平は、キンたちを売ったあとの帰り、船中で熱帯熱のため悶え苦しみながら死んだ事実をつけくわえて置こう。

天罰なのであろう。

(完)




## ハガキをください！

**目録を無料で直送します**

☆春の夜のつれづれをかこつひとときに〝あまとりあ社〟の書籍は如何でしょうか？

☆あまとりあ社では、皆様にじゆうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。

☆出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたの御住所とお名前をハッキリ御記入の上〝裏窓五月号で見た、目録送れ〟とだけお書きになって、スグお申し込み下さい！　無料で目録を送ります

☆また、本誌の御感想など、読者短評としても、まだ多くのあくなき業者がいたのである。裏窓編集部あてお送り下さい。誌上採用のものには、薄謝を呈します。

東京都中野区江古田一の二三〇二

あ　ま　と　り　あ　社

「その阿魔をいたぶってみろ」
「おっと承知のすけ」ビッグ・サムが女の髪をつかんで、女の体がよじれて足もとの椅子が踊るくらい激しくねじり上げた。
彼女はヒイヒイ悲鳴をあげたオペラ歌手のソプラノのようにひびく。
ビッグ・サムはゲラゲラ笑って、こんどは髪を反対側に引っぱって、女をひっぱたいていた。女はそのまま顔半分を髪でかくしている。……
……悲鳴も止んだ。ここでおれは、そこが床も壁もコンクリートで窓一つない穴ぐらなのに気がついた。天井の換気装置がぶんぶん唸り声を立てているので、彼女の悲鳴は人にきかれる心配はないのだ。
「いいぞ」フィデイコはそういって、細い茶色の葉巻をくわえメキシコ人がそれに火をつけてやった。「さあ、6万ドルはどこにあるんだ?」
リヴィタはいろいろなことを口走った。お前みたいな人非人は地獄へ堕ちて、地獄に行ったらどうなるか? といったようなことだったが——あいにく英語じゃないのでフィデイコには分らない。
「この阿魔は何といってるんだい?」メキシコ人が云った。
「口が裂けても云わないといってます」
「なに、いまに口を割るさ」サムは拇指の爪でマッチをすると、はれ上った唇に笑いを浮べた。「やい、阿魔、これはどうだ? 金はどこだ?」
彼女はその顔に唾をはきかけこんどは狙いを外さなかった。
ビッグ・サムはまた椅子が踊るくらい激しく女の顔をひっぱたいた。女の顔はまた横にかしいで、顔の半分が髪でかくれる。
ビッグ・サムはもう一本のマッチをつけた。
「阿魔、頭を上げろ」
サムはマッチの火を女の髪に押しつけた。めらめらと燃え上った。リヴィタが怯えて、ぐっと頭を上げると、サムはその焔を叩き消す。ビッグ・サムはゲラゲラ笑った。
「小火だぜ。お前、丸坊主になっちまうんだぜ」
薄笑いを浮べた口許には、切れた唇から血が一筋スーッとながれていた。
美女リヴィタの運命は? 男たちの毒牙に伏すか? くわしくは四月上旬発売の「マンハント」五月号の〝死神といっしょ〟をどうぞ。

# 死神といっしょ

Prognosis Negative

フロイド・マハナー

マンハント より

名物談物

# 美女蒲鉾

## 私のような醜男が、みめよい女を女房にしたのだよ、秋平の声がふるえた……

古正英生・画

# 明石汐子

籠り居

寛永の頃、京都柳馬場二条に、小金屋という、二けん間口の入口に、あぎとに笹の葉をくわえた鯛の絵の看板を吊るして、かまぼこを商う店があった。

あるじの仁平は六十あまり、腰の低い働き者で、人に愛想よく、町内の世話もマメにやき、使う小僧にも眼をかけ、商売熱心に、商い物の塩加減、火加減、日々勉強おこたりなく励めば『小金屋のかまぼこ』の評判は、洛中にますます高く喧伝されて、京名物の一つにも数えられれば所司代、尊き内にも御用仰せつけられて、身上いよいよ肥り、はた目には何不足なげに見える仁平であったが、ここにただ一つ心配なのは、一人息子の事であった。

息子の秋平は、今年二十八にもなりながらいっこうに家業を覚えようとせぬばかりか、ただの一度、店先きをのぞくでもない。終日離れに閉じ籠って、書物のみ相手に日を暮し食事のほかは父に顔を合わせもしない。それも幼ない時に満面に煮え湯を浴びて、顔の相好のいちじるしく変ったのを、人に見られるを忌み嫌うてのことと知れば、無理とも思わぬが、寄る年波に明け暮れ小僧相手の店の立働き、老いの身にこたえもすれば、また己れの死んだ後、店の成行き、息子の身の行末も案じられる。かと云って、人交わりの嫌いな秋平を、無理に店へ呼びつけ、客に顔さらさせるのも酷。

せめて、しっかり者の嫁でも貰うて、今の秘伝を仕込めば、京名物に数えられた店の名を絶やさずにすもう。息子の身も安心、自分も助かると思案して、親心に眼にふれる町内の娘を、あれか、これかと吟味しながら、折折息子の意中を問うと、

「お父っつあん、よしておくれ」

読みさしの本をパタリと閉じて、

「私は男女の交わりは諦らめているのだから……四つの時にひどい疱瘡で、一面のあばた面になったその上に、炉にころがり落ちて、御丁寧に自在の大薬鑵の湯を存分に浴び、人間らしさの残る方なく蹂躙された私の顔。町内の者も、あれは人三化七ではない、化十だと云っている。子供なぞ、私の顔を見れば、きまってひきつけを起こす騒ぎ。私自身も、朝毎の洗面に水鏡するのが恐ろしいほどの、目茶苦茶な御面相の持主と、添うて見ようと云う物好きがあるものか。嫁に来てくにただ一つ心配なのは、一人息子の事であった。

れる奇特な女子がいるものか。——お父っつぁん、いいから放っておいてくれ。私は一生、ひとり身でいるんだから」

父親のせっかくの世話やきをむしろ腹立なしげに拒むのだった。仁平は眼もうるみ加減

「何を云うのだ、

秋平、容貌で



男の値打がきまりもしまい。のっぺりした顔をしていたって、自分の家もよう持たず人に追い使われている者もある。そこへ行くとお前は、ガンとした家もあり、これだけの老舗の後とりで、学問はお侍より深いのだ。立派なものだ。男は顔より心だよ。なるほど、浮薄な女は男ぶりに惚れもしようが、そんな女はこっちからお断りだ。世間には、顔や姿には惚れぬ、しっかりした女がいる。男の働き男の性根、男の実直さを見込んで、たとえ、めかちんでも跛でもいい、家大事、女房大事に稼いでくれる男に添いたいと云う、賢こい女子がたんといる。だから、何にも云わず、お父っつぁんに任せておくれ。お前が沈んでいると、わが身の不注意から、お前をそんなにしたお父っつぁんは、実にせつなくなる。家に子を見てくれる女がおれば、そんなになりもしなかったろうに、お前を継母にかけまいと思った、わしの心が仇になった……」

と、後は云うても返らぬ繰りごとになるのがきまりであった。

仁平は息子と同じ年頃の若者が、町娘の誰れ彼れのもとへ忍ぶ恋路を通ったり、さては また、物見遊山にかこつけて、遊女との遠出をたのしみ、享楽にふけるさまを見るにつけ

秋平が熱い血のたぎるおのこでありながら、ひとりねするのが不憫でならない。

それにつけても、早く、どこの嫁よりもよい嫁を迎えてやらねばと、結納、支度金には絲目をつけぬと世話人をも督励し、随分遠国へも手を廻して嫁探しに骨を折るのだが、初手は先方から飛びついて来る縁談も、中途まで来ると、春の淡雪のように立消えする。やはり、秋平の顔が難関で、さしさわって、今度こそはと意気込んだ縁談も、次々と不縁に終り、その都度、仁平はわが事のように、失望、落胆を重ね、秋平はかえって自虐の小気味よさを味わいながら、

「だから、云ったろう、馬鹿か盲でもなけりゃ、こんな化物と一緒になりはしないよ」

氷のような声で笑って、ピシャリと離れの障子を立て切り、後は田螺のように、己れの殻の中に固く固くこもってしまうのであった。

## 青眉

このような次第で、秋平がわびしく二十八の男盛りまで、ひとり身で歩いて来た春の一日。秋平、版元まで出向いて、かねて頼んであった書物を受取り、帰ろうとするに、朝から花曇りの重い空あいであったのが、とうとうくずれて細雨となった。

傘を無心して、堀川の通りを三条まで戻って来ると、小橋のたもと、芽吹き始めた若柳の根方に、はなやかな色彩の女がかがみ、小ぬか雨を浴びつつふところ紙をよって、足駄の花緒を立てようと、しきりに骨を折っている。紙が柔らかであるのか、通そうとするとちらつき、女が礼を云い云い足駄に素足をのせる時には、その白いくるぶしを両の手で抱きしめたい衝動で、胴ぶるいが出た。

「もし、どうなさいました」

云いかけて、馬鹿な、見ればわかることでありますから、何んとでもなります……」

「三筋町まではまだ遠い。これをお持ちなさい。いいえ……私はこの先きに知合いの家がありますから、何んとでもなります」

嘘まで云って無理に傘を持たせ、遠ざかり行くあで人を、しばし呆然と見送った秋平は中一日おいて、ただ一人三筋町へ出かけて行った。

己れの容貌に対する強い負目から、一倍、女に逢うをさけたい秋平が——この近くまで参りましたので、ついでに先日の傘を戴いて戻ります——と云う口実まで考えて、女の許へ尋ねて行くには、云いふるされた言葉だが清水の舞台から飛び下りるほどの、決心と思い切りを要した。つまりは、それだけの勇気を出させるほど、彼の女の面影は、秋平の胸

にとどまって忘れかねさせたのである。

さて、三筋町へ入って来ての驚きは、立並ぶ家々のただならぬ、垂木にまで惜し気なく唐木を使い捨てて、眼を見張る豪華なおもむき。行きかう男達の衣裳の伊達に、格子内からさしのぞく女共のキラをかざって、その物云いのみやびかさ。全く別世界へ踏み込んだ観があった。それも道理、秋平は知らずに来たが、ここは名高い傾城町。そして尋ねる相手は花桐と名乗る遊女であったのだ（六条三筋町は、寛永十八年に朱雀野へ移され、島原となる）

生れて一度も女性の媚なぞ知らなかった秋平、花桐のいとねんごろなもてなしに、龍宮城へ来た浦島同然、魂を引き抜かれて、ただ夢に夢見る心地して、それからは店の金を掴み出しては廓通い。流連荒亡、恋慕の渕に惑溺して、今や花桐のほかには何ものもなく、あれほど熱心だった勉学も忘れ果て、朱子も孟子もどこへやら、唐国の聖賢の教えも、日の本の生きたる菩薩の前には権威を失ない、離れにうず高い書物は埃の中で、主人の変心を恨み顔のありさま。

父親の仁平は——どうせ息子にゆずる身代あれが、何にどう使おうが構わぬと云うものの、金が目当てときまった商売女を、秋平が相手にしているのが心配。女に初心な秋平は遊び女の偽りの恋を、真と思い込み、打込みきっておるようじゃが、とどのつまりは振られるのがきまり。その時の落胆を見るのが辛い。その打撃がもとで秋平が、人も世も信ぜぬようになっては困る。今のうちに手を切らせてと、秋平の足止めしておいて、手切金のつもりの金包をふところに、自身、花桐の許へ出向いた仁平は、かえって思いがけぬ女の本名のおつやに返って働く店先きは、終日、客足引きもきらず繁昌して、京童は口々に、真情を見せつけられて、これを根引く結果となった。

「名物小金屋に、また一つ名物がふえた」

といい囃した。

秋平は恋女房を得た喜びに心勇んで、田螺の殻を這い出て店に立ち、

「加茂川の水が、逆さに流れしまへんか」

と小僧の長吉にからかわれつつ、身も軽々と働けば、仁平の満足は云いようもなく、

「よい嫁とった。よい嫁とった」

と云い続けて、翌年春、安心しきって世を去った。

## 情怨

若夫婦力合わせて稼ぎ励む小金屋は、仁平の死後も貧乏ゆるぎもせぬばかりか、家運は真情を、私は泥中から宝を掘り当てた思いで身も心も打ち込み切っておりますものを」

秋平を想う花桐のこの言葉は、いたく仁平を感動させて、手切れの金はその場で身受け金に変っていた。

今まで男ばかりの殺風景であった小金屋はにわかに花が咲いたよう、一時にぱっと明るくなった。みどりの眉あとなめらかに、鉄漿つけた口もとにしたたる愛嬌見せて花桐が、客足引きもきらず繁昌して、京童は口々に、

「名物小金屋に、また一つ名物がふえた」

といい囃した。

秋平は恋女房を得た喜びに心勇んで、田螺の殻を這い出て店に立ち、

「加茂川の水が、逆さに流れしまへんか」

と小僧の長吉にからかわれつつ、身も軽々と働けば、仁平の満足は云いようもなく、

「よい嫁とった。よい嫁とった」

と云い続けて、翌年春、安心しきって世を去った。

## 情怨

若夫婦力合わせて稼ぎ励む小金屋は、仁平の死後も貧乏ゆるぎもせぬばかりか、家運は

ますます隆昌して行った。生来、研究心の旺盛な秋平は、父親ゆずりのかまぼこ製法を踏襲し、その技を研磨するだけではあきたらずさまざま工夫をこらし、腐心して、次々と新奇な型、色、味のかまぼこを造り出して売り広めた。ささやかな業ではあるが、これも一つの創造である。味をつくり出す喜びにひたり、熱中している秋平である。

「世の中は盲千人、眼明き千人と云うが、これは本当だ。同じ二つの眼を持っていても、誰も彼もが物事の真偽を的確に見抜ける訳ではない。本当の事を見抜ける眼。ある程度、見抜ける眼。皆目、わからない眼と、眼の玉にもいろいろあるように、舌にだっていろいろある。鯛も鰯も同じ味しかせぬ者は、舌の盲だ。また、鯛を食べても、それが内海の鯛か、外海の鯛か、または生簀の鯛か、すぐにわかる人は舌の眼明き、食通だ。普通の者にはわからない味を味わえる、しあわせな人だ。私はその食通を、うーんとうならせるほど美味いかまぼこを、拵らえるのが念願だ」

と己れも食通で、人一倍鋭敏な味覚の持主の秋平が、ああでもない、こうでもないと腐心して、はるばる信州まで出向き持帰った胡桃の実を挽き割って、その粉を、遠く長崎から取り寄せた香油でいりつけ、雪のように白い魚肉と共に練り上げ蒸し上げた「宇治の里」と名づけたかまぼこは、寛永三年九月、後水尾天皇が、新入内の女御、徳川和子と共に、二条城にお成りの節、秀忠、家光が御饗応申し上げた膳部の中に加えられ、その宇治の里を用いた羹が、事のほか、帝の御意に召して三度までもお代りをなされたと、所司代板倉重宗から、町人としては破格な、褒彰の鞘巻まで授かり面目をほどこした秋平は、その夜顔を輝やかせておつやに云った。

「私は一生の中で今が一番しあわせだよ。あんまりしあわせ過ぎて罰が当たり、この幸福がこわされやしないか、お前と引き離されやしないかと、それが心配なくらいだ」

「ホホ…そのようなことがあるものですか」

おつやは笑い、

「はたから引き離されるような、そんな浅い二人の仲ではございますまい。それに私は、お前さまと末始終添い遂げられるよう、白峯さまに願をかけてありますもの、そんな心配はいりません」

「ほう、それではお前がよく出かけるのは神参りだったのかい……それはいい、よーく拝んでおいておくれ。このしあわせがいつまでも続きますように」

お前なしの暮らしは考えられないよ」

と秋平、眼にじっとり想いをこめて云い、おつやの手を取り固く握った。おつやの肩はもう、情感の敏感な感度計でもあるかの如く、かすかにふるえ次に来るものを期待していた。

「……お前は不思議な女だ。古い物語りで読んだ異国の七色の花のように、夜毎、趣きが変る」

熱い息して秋平がささやく通り、おつやはある時は遊里にいたとも思えぬ生娘のような可憐さで、たくまずして初々しい羞らいを見せ、ある時は公卿の息女のように品よく、またある時は野性に返り奔放な姿態、悪魔のようなたくましさで秋平を、溺れる事なき悦楽の泉に誘うのだ。ために秋平は、いつも新鮮な期待を抱いて臥所に入り、比叡の峯に宵々毎に立つ雲も、あかつきの鐘と共に雨納まって、ただ、夜の短かさを恨むと云う、真に充実した夜を過す事ができるのである。

「私はお前のほかに女を知らないから、よその女とくらべて、どうの、こうのとは云えないけれど、しかしお前ほど、男の心に食い入り、男を引きつける女は、またといまいと思

う。私は本当にしあわせ者だ」

床に腹這いになって秋平が云うのへ、

「お前さま……」

ちょっと云い淀んでからおつや、怨じ顔して口をきった。

「それほど、私を不足でなく思っていてくださるのに、なぜ月のうち二夜も、他人行儀に部屋をたがえてお休みなさいます」

「それは仕方がないよ。二親の月命日だけは精進をしなければ」

「……仏事は大切ですけれど、でも、祥月命日だけでいいではありませぬかえ」

「いや、これは昔からの家の仕来たりなのだから、そういうわけにもいかないよ。だから、承知をしておくれ。え、おつや、江戸のさまだって、月のうち十日以上も、何んだと云って精進日があんなさるそうだから、私もお前も、二晩くらいは辛棒をしなければ」と将軍家の事まで持出されれば、やはそれ以上抗弁もならず、うなずくよりほか仕方ないが、やはり満たされぬものが残った。

長年遊里に春をひさいだおつや、その習慣が第二の性となり、すっかり身に泌みついてしまっているのだ。一夜といえど男なしに夜を過せぬ情痴を秘めた体になっている。

ゆえ秋平が、父母の命日をいい立てて離れにこもった夜は、いつまでも寝つかれず、腕をのばしても横に触れるもののない空しさに吐息をつき、終夜転々するその物足りぬ淋しさは云いようもないのであるが、さすがに口に出すのは憚かられた。

「そうそう」

と秋平が、急に話題を変えている。

「私はずっと『宇治の里』を所司代へ納める事になったから、また胡桃を買付けに信州まで行って来なければならない。一月ばかり家をあけるが、お前、留守をしていてくれるかい」

「まあ、一月も……。で、いつお立ちです」

「早い方がいい。道中の用心に、この鞘巻をさして、明日の朝にも旅立ちの戴いたいだろうがおつや、辛棒していておくれ」

「お仕事の為なら、仕方ありません」

おつやは意外にあっさりと、そう云った。

## 旅装束

その翌日の夜は、秋も半ばと云う時のような温気をおびた空気がむしつめる、妙になまあたたかな晩であった。

雨気をふくんだ風が、化鳥の羽音のように三千世界庇をばたばた叩くかと思うと、急にとひそまる。空の雲行きばかりあわただしくて、魔の物音が死に絶えたかのように、しんとした神の召しに急ぐ歩卒の足どり思わせて、パッ、パッと飛び行く後に、洗われたような星がピカピカ光る。かと思うと、たちまち黒雲が天界と地界の間に幕を引いてしまうのだ。この不穏な怪しさに人々おびえちから戸を立てきって引きこもり、宵のうち、犬のみ路地に落ちつきなく吠え立てていたが、それも尾をたれてどこかへ隠れた。

後は昼間より広く見える二条の辻に、風が落葉を巻き上げるのみ、洛中ふけても過ぎた。

と——ひたひたひたと地をするような足音が近づき、ぼっと障子の明るい番屋の前へ、影のように旅装束の男が現われる。灯影を恐れるかのよう顔をそむけ急ぎ足に通り過ぎたが、饅頭笠の内からチラとのぞいた魁偉な顔は、確かに小金屋秋平。

はて、信州へは行かなかったのかと思うち、もう角を折れて小金屋の裏手の方へ曲っている。やがて潜りのきしむ微かな響き。続いて小さく、パタンとしまる音がした。

——小僧の長吉に中途まで送らせて、今朝信州へ立ったはずの秋平が、今ごろこんな所を歩いているのは、朝まだき、逢坂山を越えて行手に琵琶湖のひらけるころ、小僧とこんな会話を交したからである。

「長吉、お前、何をぷりぷりしているのだ」

「旦那、私は何も怒っておりまへん」

「隊さなくともいい、話してごらん」

「そうですか。ではいいますが、怒らないでくださいまし。これは私がいうのでなく、町内の者が、そう噂しているのですから……実は、おかみさんのことなんで」

「おつやの……」

「ヘエ、器量よしのおかみさんが、あの化十……じゃない、旦那で満足しているはずがないに自信あってのことではなく、むしろその反対で……しかし事実を確かめるのが恐ろしいために、強いて自分の妻は不義をしていないと、思い込もうとしているのであると長吉に神参りといってよく出かけるが、この間は出逢い茶屋から出るところを、見た者があるそうだ。旦那も薄々知っているのだろうが身のほどを考えて、諦らめ黙っているのだろうって」

「それでお前、腹を立てていたのか。ハハハ……馬鹿だな、何も怒ることはないじゃないか。何も……妬いている、妬いているのだよ。世間の奴ら、化十だ、片輪だって馬鹿にしていた私が、みめよい女を女房にしたので、妬けてやけてならないのだよ。人のしあわせがねたましいのだ。それで何とかケチをつけようとして、そんな事を云うのだ。そうだともきっとそうだ。考えてごらん、お前、あの従順で忠実で、懸命に私につくしてくれるおつやが、私を裏切って、間男するはずがないじゃあないか。そりゃおつやだって用があれば外出もするさ。が、逢引きなんて当てずっぽうの出鱈目だ。おつやが間男をするはずがない、するはずがないとも……」

そうムキになって力むのは、おつやの貞操のために、強いて自分の妻は不義をしていないと、思い込もうとしているのであると長吉に

もわかり、秋平のそのいたいたしい努力は、十六才の小僧をして、美貌の妻を持つこの醜男の主人に、同情を抱かせたほどであった。そして、それはすぐ秋平にも通じたらしいのである。

「長吉、お前は私を、意久地のない奴、男らしくない奴と思うだろうね」

「いいえ……」

「思ったっていいさ。実際、私は女々しい男、意久地のない男なんだ。私はね……私は、祝言の晩からおつやを疑っていた。いや疑うというより恐れていた。おつやは本当は私を好きでなく、好きな様子だけをしているのではなかろうか。いずれは醜い私を捨てて、他の男の許へ走るのではなかろうかと……そしておつやが外出するたび、もうこれぎり戻らぬのではないかと、私は不安で落ちつかなかった。自分の醜さに根ざした根深い劣等感、それから来る不安と疑いと嫉妬。おつやとの倖せな語らいの最中にも、それらは執拗に、まるで地下水のようにひっそりと、意識の底を流れていて、私をおびやかし続けた。が、私はその不安や疑惑の中にふみ込み、対決しようとはしなかった。確かめて、もし本当におつやに情夫があった場合、どうするか。どうにもできないではないか。私にはおつやを離縁する勇気はないのだ。だから私は疑いをただささなかった、のみならず、できるだけ、その不安や疑いを意識にのぼすまいとした。もともと何の根拠もない、嫉妬心がえがいた妄想かも知れぬ。ハハハ……そうだとすればお気の毒だとで、おつやを疑ってかかってはすまぬし、第一、何よりこういうことは考えたくない、忘れていたいことだからだ。それゆえ私は、自分の心の中を人にも隠し、また自分でものぞくまいとして来た。自分の妻は貞節な女であると思い込もうとして来た。ところが……ところが、世間が、おせっかいな世間の奴らが、隠している心の中を嗅ぎ当て、悉皆、引きずり出してくれた。御親切に、御親切になぞ……」

苛立ち、喉にからむ痰を吐き捨てて、

「いくら、意久地なしの私でも、かしましく世間に取沙汰されれば、いやでも真偽を確かめずには、おれぬではないか」

「旦那……」

いうでなかったと半ベソかいている長吉を見返った時、秋平ようやく常になくたかぶっている己れに気づいた。努めてやさしい声をしていった。

「いいんだ、心配しなくとも……火のない所に煙は立たないというけれど、とかく火のない所に煙を立てたがるのが世間だからね。そうだ、これは世間のやきもちやきが、夫婦仲に水をさそうと、云い触らしたことかも知れぬ。ハハハ……そうだとすればお気の毒だとで、おつやを疑ってかかってはすまぬし、私はそんな手に乗りはしないからね。私は判断力を持っている……物事の真偽を見分ける眼を持っている。噂やかげ口を真に受けたりはしない」

というその後から——男の肌にふれずには一夜を明かしかねるおつやが、私が一月も留守にするというのに、格別淋しそうにもせなんだが……ことによると留守を幸い、男を引き込むつもりではあるまいか——

疑惑の黒煙は、はや胸に渦巻いて、嫉妬の炎を吹き上げている。

——まさか、いくら大胆でも、家へまでは引き入れまい。いいやわからぬ。もともと遊里にいた女だ。よしんば、密通が露見しても、ようし追い出しもすまいと、とっくに私の足元を見抜いていよう。そうだとすると許せない。断じて許せない。夫の弱点の上にあぐらをかいて、不義を働こうとする根性が憎い。くそっ！　斬ってやるとも——

もうおつやを、不義者と決めてしまった眼の色だ。学問で磨き磨いた理知の鏡も、色欲の妬心の前には曇ると見える。

大津へ入るやすぐと長吉を京へ帰し、一刻もたたぬうち、秋平自身も前かがみに、急遽後へ引き返し始めた。

## 男　髷

くぐり戸をとざす音の寝静まった四囲に大きく響き、秋平ハッとその場にかがんだ。わが家へ入るのに、夜盗の真似してびくびくせねばならぬ。これもおつやが貞節でないためだと、どこまでもおつやが憎く腹立たしい。

息を殺し、さし交した枝々をかい潜れば、笠に当たる葉ずれ、足下で鳴る枯技の音にもヒヤとする。——気取られてはならぬ。気取ればおつやは男を逃がしてしまおう。いや、破れかぶれで二人して、私を討とうとするやも知れぬ——

そう思うと、もう情夫が自分の帰宅を知って寝刃を研ぎ、待受けていそうでならぬ。立木のそこここ、柴垣の影から今にもぬっと出そうでならぬ。いきなり首筋に冷たい指がからんだ。スワッ、後から首しめに来たかと総毛立ち、夢中で引きちぎって見れば蔦のつる。

肝冷やしたその顔をさっと荒びた風が吹く。頭上の木の葉がいっせいにあざ笑う。嵐の前触れのような雷が、不気味に段々と鳴り出して、あたりは次第に暗く、すごくなった。

秋平心気みだれて吐く息も荒く、動悸は胸へ滝の落ちるよう。汗ばかり流れて地を踏む足裏の触感もさらにおぼえぬ。ようよう這い出る植込みの前、丈長にすっくと突っ立つ人の影——。

時が時、心蔵止まり、唾がかわいた。夢中で鞘巻き抜いてふりかぶったが——妙なことに相手は突っ立ったまま、微動もしない。その筈で、これは父が遺愛の石燈籠であった。

——離れの角を曲る。鍵の手に母屋。縁の雨戸が一枚口をあき、淡い灯色が庭土に流れている。後から思えば、これは今宵の蒸しあつさに、おつやがしめずに寝たのであったにちがいない。何も彼も一瞬の間の事である。後はいっそうに行燈が暗くなり、非常に深い疲労が秋平をおそった。

嫉妬にのぼせた秋平には、ここから男を招き入れたとより映らぬ。

折も折なり、刀の刃先きから先きに縁へ這い上った秋平の鼻の先き、障子の内で甘いおつやのふくみ声。

続いて夜具をはねる音。ひそやかに動く気配に、さてこそと、動悸立つ胸元押さえ、障子の合せ目に擦り寄れば、掛夜具はねて横臥したおつやが、世にもあどけない笑みをたたえるその傍に、明らかに人が臥している。明るそうでいてそのくせ薄ぼんやりと狭霧のかかった燈火の影に、向うむいた顔は見定めかねるが、うす水色の寝絹まとった肩の線、髷の形は確かに男。

姦通の手証見極め病犬のようにふるう秋平思わず、

「不義者！」

と叫んで後は無我夢中、突いた、斬った、雑いだ。障子を、柱を、夜具を、枕を。そして逃げかかる男を床の間に追い詰め、大きく掛声して一息に腰車を斬り放ち、振向きざま姦婦の肩を割り付けた。

悲鳴も立てず女は、快楽の床から畳の上に俯伏せに落ちた。何も彼も一瞬の間の事である。後はいっそうに行燈が暗くなり、非常に深い疲労が秋平をおそった。

「……お前さま……お前さま」

気がつくとか細い声でおつやが呼んでいる。なんで斬ったかと問うている。

「なぜにとは白々しい。不義しておいて何を云うぞい」

「不義……いつ、いつ私が不義を……旦那さま、どこに……どこにその相手がおります」

「そこに、貴様の枕上に……」

斬られて屍になっておるわいと云いかけて

アッとなった。いない……いない。たしかに

一刀両断となったはずの水色の男は、影も形

も。そして不思議は床框の下に、角もてつく

った女人の甄具が、綺麗に二つに切り放たれ

て転がっている。

「どうした事じゃ……これは……これは」

「お前さま……」

懸命に首をもたげておつやが云った。

「私は不義なぞいたしません。お前さまが精進日の夜に、私はそれを用いてさわぐ血をしずめ、物足りぬ想を……まぎらしていたのです。そして今宵も……お前さまと共にいる気で話しかけ、お前さまのつもりで添臥ししていたのです……」

すればさっき見たあの男は、嫉妬に狂った秋平が宙にえがいた幻であったのか。それともおつやが心こめて用いた余り、無心の道具に魂生じ、かかる不思議をあらわしたのか。それは知らず——。判っているは、罪なくして斬られたおつやの玉の緒を、つなぎ止むその術はないと云うこと。

## 忍び見

小金屋の店先きから、看板女房の消えた後も、以前と変らず秋平は、早朝から店開けて魚肉を擂り、骨を叩いて休みなく稼いでいた。

近隣の者が、

「秋平さんは、とうとうかみさんに逃げられたのかな」

「大方、そうだろう。あのお面では仕方あるまい」

「それにしてはあれ程かみさんに首ったけだった秋平さんが、ヤケを起さずに精出してい

るのは、妙だな」
「ああして仕事に打込む事で、気をまぎらしているのだろうよ」
「なるほど、そうかも知れないな」
一しきりしゃべった後で、
「いや、そう云えばこのごろの、小金屋のかまぼこの美味さはどうだ。何を入れているのか、すてき滅法な味だな」
「全くだ。前より一段も二段も、いや三段も五段も味よくなった。あすこのかまぼこを食ったら、他の店のは食えないな」
なぞと、てんでに勝手な噂さ交すのも知らぬふり。平静な顔つきで小マメに体を動かしている。が、平静でいられぬのは、他の店のかまぼこは食えぬとくさされた、その、他のかまぼこ屋達。何商売によらず、同業者間の嫉妬、反目、競争心は火を擦るばかり烈しいがきまり。とりわけ有田屋という若い男は、この世間の評定を歯噛みをして口惜しがり、どうぞして小金屋を追い落とそうとあせるが腕の相違、及ばない。
——いまいましい。いまいましいが小金屋の、あのかまぼこの味だけは、わしには出せない。しこしこと歯当りよく、噛むほどに滲み出る歯にしみつく微妙なうま味。一度食えば忘れられない。いったい、小金屋は、何をまぜているのだろう。それさえわかれば——
と思案して、小金屋の小僧を近くの飯屋へ誘い出したが、
「知りませんよ。だって私は、下廻りの仕事をするだけで、かまぼこづくりの急所の練合せは、旦那が一人でするんですから」
「だけど、よ、お前見ているんだろう、そばで。ええ、何をどれだけまぜているかをよ」
「それがね、全然。なぜって、旦那はこのごろ夜の間に、ええ、夜中に起きてこっそりとやっているんです。全くどういうつもりなんだか……」
「フーン、お前にも見せないようにしているんだな。とするとー——」
よっぽどの秘伝なのだと胸に来た。どうでも見てやりたい。むろん、尋常の手段ではだめである。火のような競争心と、持ち前の仕事熱心さに唆のかされ、その夜小金屋へ忍び込んだ有田屋。棚や臼や大土竈の向うに、黄色くにごった魚油の燈火に不精ひげの頬をぬらしながら、大流しの上にかがみ込み、時々キラリと冷たく鋼の色を光らせつつ、しきりと切れ物を使っている秋平を見た。
——いったい、何を料理しているのだろう
——柱の影から首をのばした時、
「……!!　……!!」
あまりの恐怖とおどろきに、かえって声は出ず、足のつがえが萎えたよう。ペタペタとへたり込んだ。
——二条城二の丸御殿敷台の間に出座した所司代板倉重宗は、縄打って引かせた小金屋秋平を庭前に引据えていった。
「面を上げい、秋平。そちを見るはこれが二度目。すぐる日、余はその方をこれへ呼び出し、君が御感にあずかりしかまぼこ造りの腕いよいよ励み磨いてすぐれた味のかまぼこを造れよとて、鞘巻きを与えた。妻女を殺せよと与えはせぬぞ。ましてその鞘巻もて、あやめた妻女の肉をそぎ、かまぼこに入れよとは申さなんだ筈」
「仕方のない……成行きでございます。はい世の中のことは、みんな成行きなのでございます。お奉行さまが私に、人殺しをさせようとて刀をくださったのでないように、私も家内を殺そうと思ってその刀を腰に差していたのではございません。みんな、そうなってしまったのでございます。はい、世の中のことは、自分でこうしようと思っても、そうならぬこともあるように、また、こうしようと思

わいでも、そうなってしまうこともございます。みんな、その時の、成行きなのでございます」

「控えよ、秋平、成行きなぞといい抜けを申すな。妻女をあやめたは、我を忘れてのことしても、その死肉をかまぼこに混じたは、たしかにそちが、入れようと思って、いたしたのであろうが」

「……私はおつやを、土に埋めるに忍びなかったのでございます。四五日がほどは、夜ごと手に手を取り、顔に顔をさし寄せて、生きていた時と全く同じにたわぶれ明かしておりました。そのうちにだんだん肌の色が変ってまいりましたが、私は暗く冷たい地の底へ、ゴミや泥と一緒におつやを入れて寝かせるのは哀れでできなかったのでございます。それに私は、おつやが可愛くて可愛くて、生きている時から、もう噛みさいて喰ってしまいたいほどでございました。で、土に埋めるよりも、いっそ、暖かな私の腹の中へ入れてやろうと思ったのでございます。ですが、そのままかぶりついて喰らうわけにも参りませんので、考えたあげく、少しずつかまぼこに入れることにいたしました。いいえ、滅相な、死屍を冒瀆しようなぞと……そんな気でいたしたのではございません。私はただ、おつやが可愛かったから、おつやを大切にする考えで、そういたしましたのです。……おつやも、きっと、私の心をくんで喜んでいてくれると思います」

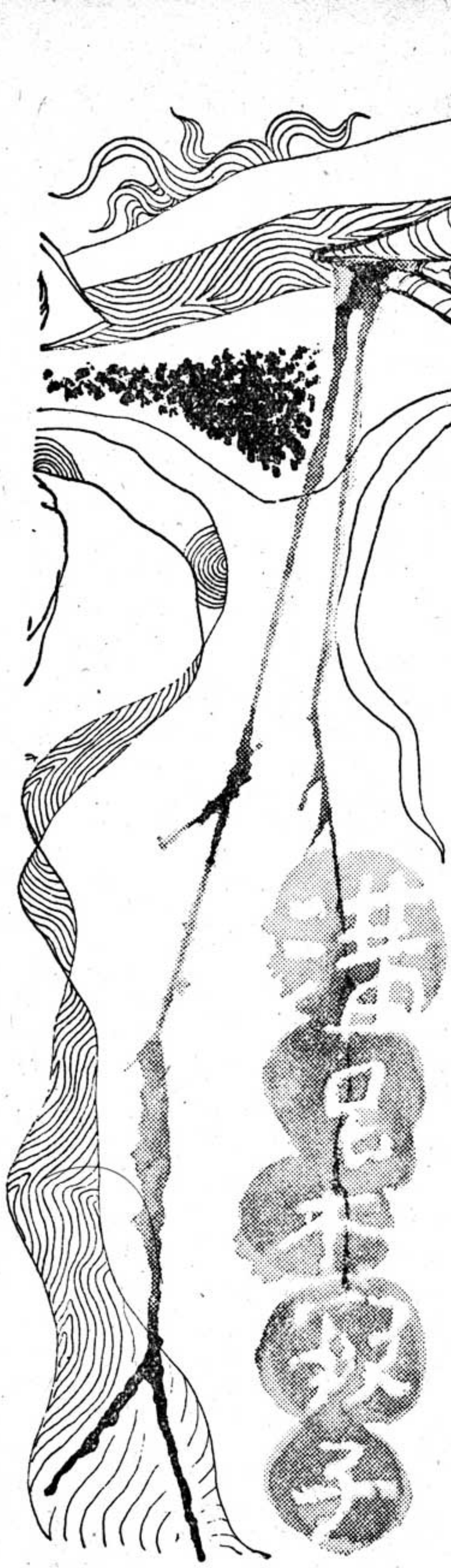
そこで一息入れて、秋平はさらに続けた。

「次の日も、私はおつやの臀部の肉をそいで魚肉と共に練り合わせ、かまぼこにして食べました。三日目に少し多く造りすぎて余ったのを、お客に売りますと、これがついぞない美味さだと大評判になり、伏見、淀の辺からも買いに来るほどでございました。はい、お奉行さま、私は何もかまぼこの味をよくしようと思って、おつやの肉をつきまぜたのではございませんが、結果においては、美味いかまぼこを造り、小金屋の名を広め、そして一時にもせよ、お奉行さまのお言葉に添うことになったのでございます。はい、まことに世の中のことは、予期せぬ成行きばかりで……はい、その評判とったかまぼこの味は、説明申し上げいでも、小金屋は所司代にも御用承っておりますれば、お奉行さまもとっくに御存じかと存じます」

――重宗は激怒と嘔吐の中間でとまどいしたような、世にもしぶい顔をした。

「これやい、兎を放さぬか！」「アレエ！」

左次朗・画




# 白いベッドに印された手型！深夜の手術室に汚血を探し求める人影！

## 義眼

夜の病棟は不気味だった。

留美子はスリッパの音を気にしながらカルテをかかえて病室へ歩いていった。

しんしんと夜はふけ物音ひとつしない静寂さは、廊下を歩く留美子の肩先きに重くのしかかるようである。

たびかさなる奇怪な事件におびやかされたあとだけに、その胸の高鳴りと不安感はおさえきれないものがあった。

しかし、一週間に一度回ってくる交替の宿直は、たとえいかなる理由があっても患者相手の仕事だけに、のがれることはできないのである。

廊下を五分も歩いているうちに留美子の心臓は息苦しく、そして動悸がはげしくなってくるのである。

緊張した上に寒中なのでかじかんだ足さきに疼痛を覚えるし、カルテをささえた指さきにもじんじんした痛さを感じる。

今夜も宿直という冷めたい逃れがたい勤務時間がやってきたのだの人で、あの病棟の検温の時だけ今日の留美子の一日は宿直という恐怖におびえ、クランケの脈をはかるのも、検温するのも、まるでうわのそらであった。

院長の潮田が留美子の看護婦室にやってきて義眼の目を彼女の胸に向けて、

「高尾さん、今夜は僕も宿直しますから、この前の晩みたいなことにはならないと思うから安心したまえ。まだ病院になれない君にあんなめにあわせてすまんが、まったく解決の糸口がなくて困っているんだ。それから、検温の時間までたいくつだろうから、もしよかったら僕の部屋へ来たまえ。患者がおいていった菓子が山ほどあって処置に困っているから……それとも、君は辛党の方かな。何ならウィスキーもあるよ。ま、ともかく、来たまえ……」

「あのう、私、第四病棟に行くのは、いくら決心しても恐くて仕方ないんですが、もしか他の看護婦と院長の潮田がそういってはくれたが、留美子はどうしてもおねがいしますということができなかった。

左眼だけを動しながら淡々としゃべるその表情に、留美子はどうにも親しめないのである。

義眼であることを除けば目といい、耳といい、鼻といい、口といい、何の欠点もない美男なのに、眠ったような右の眼だけが、それら、全部をマイナスにしていた。

留美子が潮田に好感をいだかないのは、容姿よりも、そのみだらなものをふくんだようなものいいと、暗さにあった。

そして、心の中に得体のしれな

いものを持った潮田にけいべつと抵抗とを感じるのである。そんな彼に検温の時、一緒に見廻ってもらうくらいなら、こわいのをがまんして一人でやったほうがいいと思った。

カルテをかかえて検温にでたものの、第四病棟に近づくにつれてスリッパの音は鈍重に、土のあがった廊下のうえを力なくひびく……。

こうなってくると、すべての物音に敏感になり、一歩運んだスリッパの、サラッと板にふれる音にさえギクリとならざるを得なかった。

天井の高い幅のせまい廊下に、低いけれど重くひびくスリッパの音が廊下全体にこだまし、ウォーンというような音をひびかせては幾度も幾度も留美子の足の動きにつれて反響するのである。

その響きの中で、うすい燈だけがポツンとついている廊下を眺めて歩くうちに、錯覚みたいなものに襲われてくる。次第に物質が幻覚的になってきて、よく見るとなんでもないものが、いとも怪奇に見えてくるのである。

こうなるのも理由があった……

## 暗い病院

留美子がこのサナトリウムに来る日は、ひどい吹雪で、視界は荒れ狂う雪の粉で一メートル先も透視ができないくらいの荒れようであったから、一日おくれて行く旨を電話したところ、どうしても手が足りないのでなんとかしてくるようにとのことづけをもらったのである。

留美子はオーバーの上に兄のマントを借りて、村までバスでやっと着いたが、もうたそがれ時で、雪のためあたりは眠っているようなしじまだった。

目ざす建物はバスの停留所からかれこれ十五分も歩いたところにサナトリウムらしく寒々と建っていた。

四方に雪をかぶった山々がそびえ、病院全体がしろじろと包まれながら固く冷たいボリュウムを感じさせた。

あまり大きな病院でなく、そのすぐ前に立つと、雪をうけてない壁が見えた。

留美子の感覚はその壁に、あぶら気のない死人の肌を連想させたもっとも、そんな色合いでもあったのであるが……。

「いやな病院……」

これが留美子の口から自然ともれたことばであった。

留美子はオーバーの上にかぶってきたマントを抱くようにして、冷えきった体を運んで病院の玄関に立った。

と、同時にいやな印象どおり、入ってすぐ白木の寝棺と出会ってしまったのである。

ギーときしむドアのすぐ前に奥へつづく廊下があり、そこから、白木の寝棺が運ばれてきたのである。

今まで真白い雪原を歩いてきただけに白と云う色には敏感になる吹雪のため窓というまどが雪をかぶり、光線をさえぎっているので、かさをかぶった電球数個では病院内はうす暗かった。

留美子の目の前で寝棺の白さがその廊下のなかで不気味にユラユラと二人のはこび屋の腕のなかでゆれた。

そのうしろに、故人と親しかったらしい患者がふたり、血色の悪い顔色をしてついてくるのが、留美子の目につよく映った。

二人の患者の消沈した姿が、あまりにもいたいたしかったので、走るようにして事務室と書いてある部屋へ入っていった。

その留美子に第一回目の宿直がまわってきた。

なにかと気を配ってくれる院長の潮田が、その日の夕方、留美子に、

「高尾さん、はじめての宿直は大変だが、おねがいします。もし、

変ったことが起きたら副院長の大塚君にいいたまえ、今夜は彼が宿直のはずだから……。それから、君、第四病棟の方は重病クランケばかりなので、おねがいしますよ」

「はあ、一生懸命いたします。それから、カルテは一応私の方で預かっててかまいませんの？」

「そうだなあ、大塚君は今、勉強中だから、カルテは君が持っていた方がいいだろう。検温だけは正確にたのみますよ」

「かしこまりました。では、失礼いたします」

「あっ、それから、本当に変ったことがあれば至急知らせなさい。じゃあ……」

というような会話をやりとりしながら、その日の宿直を終えたのである。

何のこともなかった。

潮田は義眼で彼女が何ともないのをまるで不思議がるように患者の状態などの報告をきいていた。

そして、二回目の宿直の夜……

潮田が変ったことと二度も口走った事実が留美子の前にあらわれたのだ。

## 白い女

留美子がカルテをかかえたとたん、パーッと電気がきえた。

三畳の宿直室の机の上にある置時計が、森閑とした闇の中で青白く文字を見せていた。

夜光塗料の塗ってある針が十二時をさしている。

十二時の検温は第四病棟のクランケと、第三病棟のクランケだけである。

しかし、停電なのでいささか困ってしまった留美子は、思案したあげく、責任上、懐中電燈ででも検温しなければと、予備のロウソクをともし、机のひきだしから、懐中電燈をとりだした。

廊下に出ると真っ暗である。

カルテを左脇にかかえ、懐中電燈を持った。

周囲がくらいので、一本の光線はかなり遠くまで照し出した。

停電のためどの病室も真っ暗で無人の病室を感じさせる。

病人の寝ながらする咳が時々、人のいることを感じさせるだけで歩いて行く留美子には、くらい洞窟へでも入った心地がするのである。

渡り廊下のたたきに立つと、雪あかりでほんの少しだけ外が見える。

雪を受けていない窓からは白い樹が死衣をつけた人のように、うすぼんやりと立っていた。

まったく先夜とはくらべられないほど、不気味な妖奇さがあった。

まず第一に停電……。

雪ぼうしの樹……。

なにもかもゾッとしたくなる宿直の夜である。

留美子はおびえるようにカルテをかかえ、第四病棟の廊下に立った。

せまい廊下はまっくらで、手術のためにつかう移動寝台車が、白いぬめぬめした表面をみせているのが、留美子のてらす電燈でくっきり浮き上ってきた。

ビニールを張ってある固いベッドである。

見るともなくベッドばかり凝視していると、そこにくろい汚点があるのに気がついた。

最近、手術もなかったし、ビニールの表面なので汚れることはまずないはずだった。

不思議な気持ちでカルテをかかえ直し、そばへ寄っていった。

懐中電燈をあてたとたんに留美子の口から、

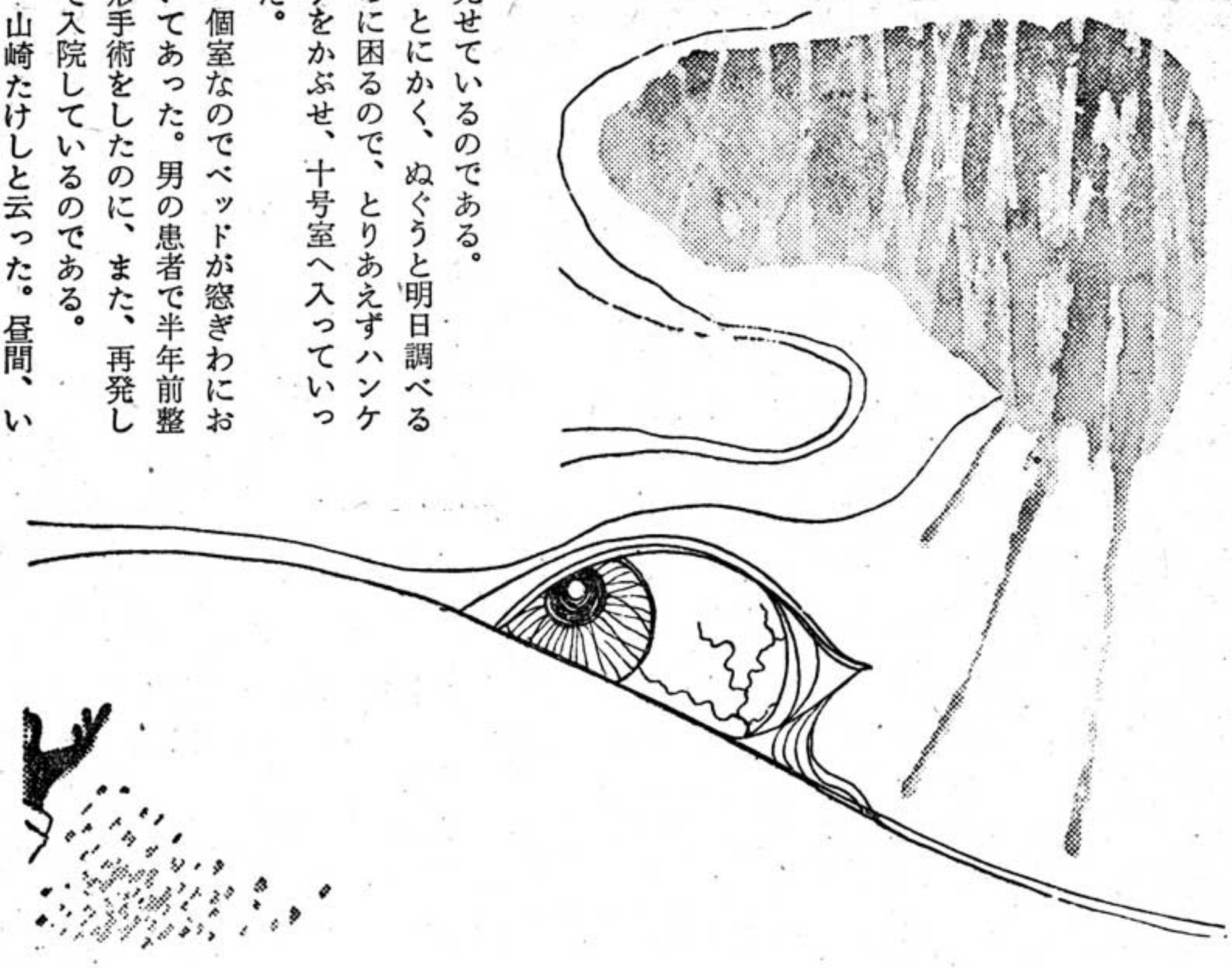
「あっ！」

と恐怖のさけび声が出てしまった。

その黒く見えた汚点は血だった！

それもはっきり右手を血で押したような細い手の型であった。

ビニールの白さの上で、血染めの手型はおどろきふるえている留美子を、あざけるように指紋まで



見せているのである。

とにかく、ぬぐうと明日調べるのに困るので、とりあえずハンケチをかぶせ、十号室へ入っていった。

個室なのでベッドが窓ぎわにおいてあった。男の患者で半年前整形手術をしたのに、また、再発して入院しているのである。

山崎たけしと云った。昼間、いくと結核患者特有のほてったような皮膚の色をしていた。

眠っていたので、そうっと体温計を脇へ持っていき、丸いすにすわって脈をとった。

頭の中を、ベッドの上の血染めの手型が占領していた。

かっ、血にしても不思議な気がする。

患者がもしかっ、血したのだったら、あのベッドの上だけ手型がつくはずがない。

あの長い廊下にしろ、ベッドのわきにしろ、多量の血を見るはずである。

しかし、どこにもそれらしきあとはなく、かといって、ぬぐったようなところもない。

カルテに書きこむうちガクガクとひざがふるえてきて、血染めの手型については、もう考えまいと思った。

そして、あわただしく十一号室十二号室、十三号室と、検温をすませて十五号室へ入っていった。

どの病室の患者も眠っているのに、この部屋だけはどうしたことかローソクがともされて、かなり明るかった。

留美子はたしかこの部屋の患者が絶対安静で、九時以後は就寝の時間だったことを思い出した。

今は十二時である。

ロウソクの下で白い美しいクラシケが顔をみせて寝ていた。しかし、眠ってはいず、入ってきた留美子にむかってかすかに笑った。

肉体はしょうすいしているのにそのセクジュアルな目のひかりは魔女のようである。

化粧のない白い顔にひときわなまなましく唇だけがぬれていた。

「どうしたのですか？　生活表のとおりの規則は守ってくださらないと、病気はよくなりませんよ」

「私、ねむれないの……」

「検温します。ねむれないのだったらあとで薬を持ってきます。この病気は安静と睡眠が必要なのに困りますね」

女は黙ったまま留美子の顔をみていた。

体温計をもっていこうとすると女はクックッとのどで笑いながら布団をぬいでしまった。

ベッドの上には思いもよらない女の白い裸体が横たわっていた。

雪のように白い肌……ローソクの灯のかげがゆらいで、瞬間、女の留美子さえ美しい体だと思ったほどである。

しかし、女のあまりにも常識はなれした動作にがく然としながら「なんてことをするのです。これでは悪化するばかりですよ。早くねまきをつけなさい。明日、熱でも出たらどうしますか?」

といいながら白っぽいねまきを着せ、廊下へ出た。熱はなかった。

女も疲れたとみえて黙ってベッドに横になり、目を閉じたようだった。

けれども、結核患者にしてあの豊満な肉体……解せないものが頭の中に渦をまいた。相変らず停電

である。

暗さの中にいると女のあの白い体を思い出すのである。

あれまで美しいと思った裸体から、いまだになまなましいものを感じるのは血染めの手型のためなのかと思った。

そう思いかえすと白い移動寝台車の上の手型を思い出し、恐怖の戦慄が背中を走っていく……

廊下を走るようにして宿直室へ入っていった。

あと一回の三時の検診をおそれながら……

## 手術室の女

三時に目覚しをかけ、一と眠りしようと、暗い中で服も脱がず布団の中にもぐりこんだ。

寒いのでなかなか寝つかれなくて、やっと眠ったと思うと奇妙な夢ばかりを見た。

留美子は時計のベルに目を覚しまた検温に出かけた。

まだ停電だったので、一応、電気会社へ電話してみようと事務室の方へ行った。

病棟の方は暖房がきいていたが深夜でもあり、人のいないこの室はひんやりと冷たかった。

ダイヤルをまわすと、その音まで外気にふれて、びんびんとひび

く……

しばらくして通じたので停電のことをいうと、

「いつも二週間に一度くらい停電なんですよ。それも簡単な故障でね……夜は行けないから明日早く行きますよ。今から？　とんでもない。この吹雪じゃ足もふめませんや……かんべんしてくださいよ三時ですぜ。……それに、おたくの病院には生き幽霊が出るというわさなのに、いくらなんでも夜の三時にゃあ行けませんよ」

留美子はいささか驚いてしまった。日が浅いし忙しいせいもあって、仲間の看護婦達と雑談もできない有様であったから、病院の事情にはうとかった。

そして、この話をきいて院長の潮田が義眼を開いて、無表情に二度もくりかえした言葉を思い出したのである。

「何か変った事が……何か変ったことが……」

停電にむすびついて、その変ったことに出くわしそうな気がした。

いや、もう出くわしているのではないかと思った。

突然の停電……

移動寝台車の上の血染めの手型……

十五号室の女の白い裸体……

電気会社の男の話……

二回目の検温にいく留美子の足は、もうがくがくとふるえ、スリッパの音にさえ、敏感になっていた。

そして、渡り廊下にたって、ガラス窓から外を見たとたんにびっくりしてしまったのである。手術室に人影があったからだ。

たしか、今日は担当の医師は急用で外出したはずで、手術室へ入れる人間はこの病院には留美子以外にないはずであった。

それなのに、手術室で動く黒い影はたしかに人間である。

頭の中を恐怖と責任が混乱してきそうであった。

留美子はスリッパをそこにぬぎすてソックスだけで暗い廊下を手さぐりで壁伝いに歩いていった。

事務室をすぎて、二つ目の部屋が手術室である。

近づくにつれ、むさぼるように何かを捜している人の気配が手にとるようにわかる。

留美子の胸も自然と圧迫されるような息苦しさに肩で呼吸をした手術室のドアが、人一人入れるほどあいたまま、中でカチャカチャと物音がして、絶えずなまなましい空気が外へ流れてきた。

血なまぐさい……そんなにおいである。

薬を渡す窓口が透明ガラスなのでそこからのぞいてみた。

この窓口から手術室が半分ほど見えた。

まず、留美子の目にふれたものは、白いねまきみたいなものを着た女の後姿であった。

髪の毛が肩に垂れて、一心に手術台の足のそばにある汚物入れをあさっていた。

その中にはたしか血のにじんだ脱脂綿などしか入っていず、いつも底にはどろんとした血が沈滞していた。

その汚物入れを女がのぞいているのは、どういうわけだろう。

にぶい動作からして、たしか口元へ持っていき、それをペチャペチャとなめているような手つきである。

後姿なので誰だか見当もつかなかったが、たしか病院の患者に相違ないと思った。

「何とあさましい、気違いじみた人だろう……汚血をのむなんて……」

そう思った時、ガサッと、両手にかかえてあるカルテが廊下へ滑り落ちてしまった。

女はギクリとしたが、ふりかえらず、風のように入口から走り出して暗闇の中に消えていった。と同時に、一人になったという不安感に、手術室をのぞいた勇気も忘れて、

「キャーッ、棚谷さん、棚谷さん、来てください！　大変です」

と大声で呼んでしまった。

その声に、またかという顔をして、小使いの棚谷がかけてきたが留美子はだらしなく意識をなくしていた。

翌朝、院長の潮田に話すと

「とうとう出くわしましたか…」

と、低くつぶやいたのである。

その理由を知っているといわんばかりに義眼が光っているような気がした。

## 処置

留美子は今夜も宿直である。

二回も出くわした事実を回想しながら歩いていった。

すべての音と物が今はもう留美子の恐怖の対象であった。

かじかんだ足でわたり廊下のたたきを踏むとき、自然と目が手術室の見えるガラス戸の方へ向いてしまう。

今夜も停電……

そして手術室には黒いかげが動いていた。

もう、のぞきにゆく気力もなく唯、汚物入れをあさっている女の影絵のような動作を思いうかべ、ゾッとせずにはいられないのである。

たしか、手術室のそばの部屋に潮田がいるはずである。

彼は気がつかずに眠ってしまったのだろうかと、彼女は一人気がもめた。

そして、急いで宿直室へいき、内線で院長の部屋へ電話をかけたなかなか通じないのにやきもきしながら待っていると、潮田の重い低い声が流れてきた。

「もしもし潮田だが……」

「院長先生ですか？　私、高尾ですわ、実は今検温に行く途中、どうも手術室がおかしいので、のぞきましたら例の女の影がありますの。これで三度目ですわ。それに先生方のお話ですとここ二月くらい、ちょいちょいこんな事件が起きているらしいので、この際、徹底的に、突き止める必要があると思いますの……」

「だから？」

「ですから、先生の部屋から手術室はすぐですので、今なら、まだいるのではないかと思うんです。至急見て来てくださいません？」

「なんだか看護婦の君に命令されているみたいだなあ」

「命令もなにもありませんわ。院長先生が解決の糸口がないとおっしゃっていらしたからお手伝いしているだけです。とにかく、手術室をのぞいてみてください。入口は一つなので多分まだいるはずですし、かりに出たとしても、先生の部屋の前を通ることになりますので、必ずたしかめられると思います」

「どうかな、今まで、そういうこともやってみたが、風のようにいなくなるもんでね……」

「本当にいらしてください。でなくば私がいってみます」

「いやあ、何も君はそんな遠くから来ることはないよ。僕が行って来るから」

「おねがいします。電話は切らずに待っていますから……」

電話口で潮田の出るのを待った一秒……

一分……

十分……

十九分を長針がさした時、受話器から、

「もしもし……もしもし……高尾君。いるかね？　しまったことをしたよ。取り逃がしてしまった。ぼくが部屋を出て手術室の方へいった時は影もかたちもなく、しばらく待っていたのだが、こなかったよ。君の電話に気づいて、逃げたらしい。残念なことをしたよ、まったく」

「えっ、いなかったのですって？　不思議ですわね。そんなはずはないのに……」

「そんな、院長のぼくをうたぐるようないい方はよしたまえ。とに

かく、ぼくは君の命令どおりに眠いのを我慢して手術室へ行ったのだよ。責任は果したが逃げたものは仕方がないじゃないか」

潮田の語尾はいつも温和な彼に似ず荒々しかった。

怒っているというよりも、何かに燃え移ろうとするほのおのように、焦燥的であった。

つまり、留美子の電話を早く切りあげてしまいたい、そのあせりでもあるようである。

でも納得のいかない留美子は、

「先生、私、明日から例の汚物入れを私が処置したいと思いますがよろしいですか？　このままじゃあ、患者に病菌をのませるにひとしいですもの」

「処置？」

「ええ、二月も前から発生しているのに、だれもが汚物をそのままにしておくと云う心理が解せないのです。あれさえなければこんなあさましい事件も起きずに済むはずです」

「しかし、君が何も……」

「あんな汚ないものを仕末せずともいいだろうというのでしょう。でも、やりますわ。根気くらべです。もちろん、先生も院長の立場で賛成してくださいますね」

「そりゃあ――」

「じゃあ明日から実行しますわ。私もたびかさなる事件で恐怖症にはなりたくありませんもの。早く解決して、この病院から暗い印象をなくしたいのです」

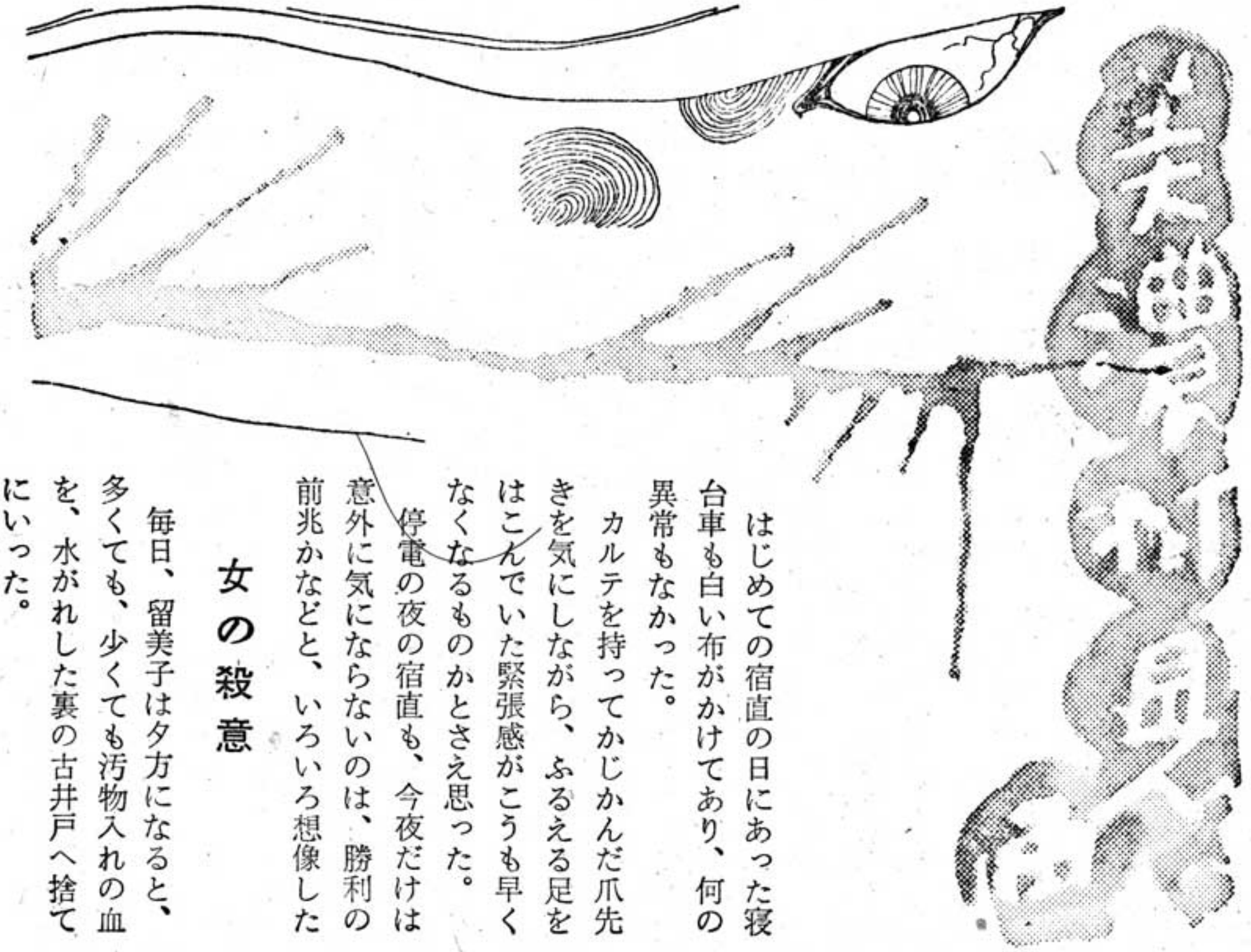
「君のいいようにしたまえ」

潮田の言葉は非常に荒く、低い気味のわるい怒気が、じんじんと留美子の頭にひびいてきた。

彼の態度がまったくわかりかねた。

もっとも、義眼でいつも人をにらんでいるような人柄だったし、さほど気にならなかった。

その夜の宿直は汚物入れを処置する方法ばかりを考えていたのであたりの音にも物質にも、なんの動揺もしなかった。



## 女の殺意

はじめての宿直の日にあった寝台車も白い布がかけてあり、何の異常もなかった。

カルテを持ってかじかんだ爪先きを気にしながら、ふるえる足をはこんでいた緊張感がこうも早くなくなるものかとさえ思った。

停電の夜の宿直も、今夜だけは意外に気にならないのは、勝利の前兆かなどと、いろいろ想像した。

毎日、留美子は夕方になると、多くても、少くても汚物入れの血を、水がれした裏の古井戸へ捨てにいった。

古井戸に捨てるたびに血なまぐ単独行動である。

さい悪臭がつーんと鼻をつく……　たそがれのころになると汚物入

器を水で洗い、血の気は一滴も　れをかかえた留美子の姿が見られ

残さず手術室へ置くようになって　た。

二週間になった。他の看護婦とは　不思議なことに、それ以来、手

あまり親しくしないせいか、全部　術室へあらわれる白い女の姿はな

くなった。

そのかわり、第四病棟の十五号室の女が重体になり、毎日、医師がとまりこむほどの悪化ぶりで、あの夜、つよく印象にのこったセクシュアルな豊満さや妖艶なところはなくなっていた。

留美子は頭の中で、ふと、汚物入れの血をなめる女……と、このベッドによこたわっている女とをむすびつけてみることがあった。

女は一日ごとにやせおとろえていった。

一ばんはじめに留美子が検診にいった時、うねるような白い裸体をみせたのがうそのような衰弱ぶりである。

ぬれたようだった唇も、あのころの美しさはなく、カサカサと赤黒かった。

死期を前にした女はベッドの上で無言であり、いつもうつろな状態であった。

毎晩、三十分おきくらいに検温にいくのだが、女はかすかな声で

「ねむれないから……そう、たびたびこないで……」

というので医師に相談した結果三十分のばして一時間おきに計るようにとの許しがでた。

「一時間おきにきますね。なんだかすごく元気なくなっちゃって……早く丈夫になってくださいよ」

と力づけると、女は自嘲的に首をよこにふって早く出ていくように促すのだ。

今夜は院長の潮田が宿直である一回、九時に宿直室をのぞいたきりで、医師らしくもない背広をきこんで町へ出かけてしまった。

病人を預るものが、これでいいのかと思っていたら、十分もたたないうちに帰ってきたのである。

どういうわけで帰ったのかわからなかった。

潮田の部屋の電気が消えてスタンドの小さな灯がともったようである。留美子の部屋から見ると、かなり暗く感じられる。

もう眠ったのだろう。

いつものとおり三時の検温に出かけた。雪はなかったが、風だけはあらく窓をたたき、樹々のゆれるのがざわざわと海辺のようにきこえる。

死神でもダンスしているような陰気な夜である。

渡り廊下を渡って、第四病棟へいった。狭い廊下をさらにせばめるように移動寝台車がおいてあった。薄暗い中で白いのがあいかわらず目立つ……

留美子は

「おや」

と、つぶやいた。

十五号室のドアが開いたまま、不安定にバタンバタンと音をさせていたからである。

留美子は急ぎ足で十五号室へ入っていった。

何かを予期しながら……

入ってみて驚いてしまった。ねたっきりで動けないはずの女の姿がなかったからである。そして、半分、はぐったままのふとんのうえに小さなノートが置いてあったノートの上に走りがきで、

「高尾留美子さまへ

私がいないので驚きました？きっと、あなたはこのことを知らせに院長のところへいらっしゃる事でしょうね……

でも、そうやっきになってお探しになることはないでしょうよ。私はあなたが毎日いじわるをしたのを怒りはしませんが、最後にもう一回だけ生きかえって、そして死にますから……もう一回、生きかえるということ、それは、私だけの更生です。医師にも看護婦にもできない生きかえり法なのですあなたのびっくりしたような表情がうかんできます。今から、犯人の死ぬ殺人事件がおきるとしたらあなたは気絶してしまいますか？とにかく、厭な病院にきてしまいましたね。

あなたはもうすぐ血の海を見なければならないでしょう……」

あの重病人が書いたものとは思えないほど文面の文字は乱れてなかった。

それだけに妖異なものを感じるのである。留美子はその意味でもぜひ日記帳をよみたかったが、その余裕はない。

「私が血の海を見る……」

ガクガクしながら走って院長の部屋へかけて行った。

日記帳を白衣のポケットにしまいながら、留美子の頭の中で血をなめる女と十五号室の女とが完全に一致するのであった。

潮田の部屋の前に立った。手術室に近いので消毒液のにおいが一段と強い。

その中に混って血なまぐさい臭いのするのはどうしたわけなのだろう……

留美子は走り込むようにして潮田の部屋へ入っていった。

部屋をあけたとたんその場へへなへなと坐りこんでしまった。

六畳の部屋の中に潮田の血に染った姿があったからである。

まだ、体温が感じられるほど、なまなましく畳とふとんを染めていた。

棚谷へ電話した。そして、潮田の脈をとったがまるで死人のそれで、すでに何の反応もないのである。彼は眠っているところを殺されたのだ。

白い顔の十五号室の女の置手紙と照し合わせると、犯人は彼女といいきれる。

しかし、どうして殺してしまったのだろうか？

潮田の腕の静脈に一本の注射針がさしこんであった。注射器の中が血でいっぱいになり、あたりにこぼれている多量の血は、これから流れ出たものらしい。

潮田は何ゆえか無残な殺されようで死んでいった。あのかぼそい女に殺されるほどの彼ではないはずである。抵抗できない男ではないはずである。

義眼だけが生きているように天井をにらんでいた。留美子はポケットから日記帳をとりだし、ページをめくった。

×月△日

潮田とはじめて接吻する。私はTB患者、それだけに接触がこわい……

×月△日

潮田は私の体をもやしてしまった。微熱の体は彼を要求する。彼が私をとりこにしてしまった。しかし、そのたびに、私の体は弱ってくる、レバーや、造血剤をむだんで食すようになった。つきそいの橋本さんに毎日帰りにたのみ、買ってきて貰う、それをなまで食べると、体中に私は強いセクスをかんじるのだ。

×月△日

レバーをやめてから、血なまぐさいものが好きになり、蛇の血、こいの生血などをのむ。夕方散歩のついでに潮田の処へ寄ると、いなかった。手術室をのぞいてもいないので出ようとしたら、ふたのとれた汚物入れの血が目に入った私の異常なまでの血に対する欲望が頭をもたげ、それをなめてしまった。

×月△日

二週間に一回は手術室をのぞく……赤い血、私はそれをもとめて夜の病院を歩く……

×月△日

他の看護婦は怠慢なので簡単だったが、高尾さんにだけはいささか気をつかう。それだけにいつも失敗ばかりしてしまう。しかし、どうしても血をのむことをやめられない。私の体は血なしにはいられないのだ。吸血女かもしれない

×月△日

高尾さんが汚物を仕末しはじめてから私は毎日毎日やせていく……潮田も相手にしてくれなくなった私は死ぬだろう……潮田が好きなだけににくい。

×月△日

私は実行するのだ。潮田をころして私も死ぬことを……

私は彼の血を吸って死ぬのだ。

それで終っていた。

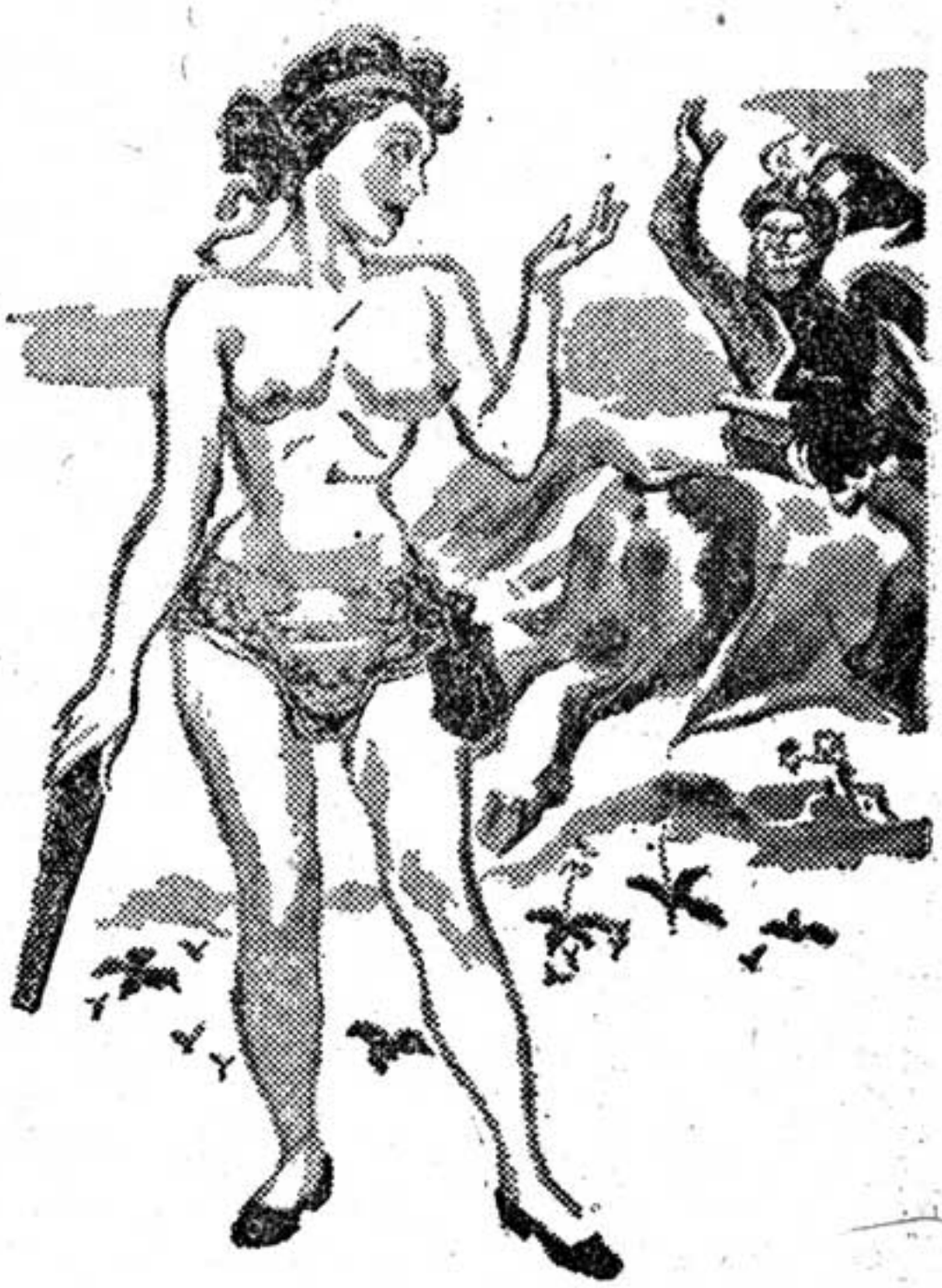
留美子は、義眼を開いて死んでいる潮田をみて、死んでもいい人だと思った。

セクスのために血を求めた女のもだえがわかるような気がした。

# 未発表

## 寄稿作品一覧

33年末～34年現在



芸者哀歌……（横浜）潮　日出三
淫猥……（茨木）佐藤　忠則
待伏せした女学生……（横須賀）潮　日出三
あなぐらの中で……（京都）花園　右京
情欲に狂える男……（茨城）西城　瑞穂
悪魔の勝利を
　夢見る少年……（新潟）秋葉　春秋
ロンドンの霧の中で……（南多摩）林　耕三
背信……（東京）竹谷　十三
シヤム双生児の性生活（東京）大野　滋
三いろの姦……（岡山）在一時美作
動物学者と女子医学生（布施）春日　彦二
愛憎狂言修羅……（群馬）窪村　弘
浅太郎しぐれ……（群馬）三国沢　隆
恐るべき少女……（清水）三条　秀也
痴（ちもう）盲……（東京）内田　爽二
闇の中……（埼玉）中野満寿男
正常という名の異常……（東京）東条　光雄
或る男の告白……（東京）水谷　雪夫
仮面の青春……（群馬）藤川　博
アパートの女達……（東京）豊村　千代
呪殺念珠……（群馬）窪村　弘
娘三四郎……（大阪）大海原朝日出
女体男心……（東京）藤白　欣嗣
刑場における女達……（神奈川）荒森　充助
背徳の文学……（大阪）島田　京
落井坂の鈴振狐……（清水）三条　秀也
ある家出少女の話……（東京）家倉　健
悪魔の病室……（神戸）野村　伸
どん底……（調布）本望　三郎
幻術屋敷綺譚……（布施）南屋　彦六

黒板塀の記……（神奈川）椎乃　実
パントマイム……（大島）鳴山　能平
矢場女お妙……（東京）京極　美岐
双色渦紋……（大島）鳴山　能平
暴君は倒された……（東京）竹谷　十三
美醜な関係……（名古屋）立川　清
続・コレラの正体……（福岡）田井　良栄
流転の怨歌……（浦和）真隅　清多
モデルと女教師……（横須賀）潮　日出三
淫乱虫……（高山）斎藤　貞三
悪いいたずら……（佐世保）三隅千恵子
吸血の魔女……（群馬）高沢　邦司
人肉とも喰物語……（富山）高桑正太郎

お仙地獄……（古河）南川　和子
妻人形……（栃木）川村　一夫
濡れる晴衣……（東京）久保田郁夫
砲弾みがき……（新潟）佐々木　力
無題……（東京）権田原　睦
花と蕾の間の寸劇……（福岡）田井　良栄
自殺……（清水）三条　秀也
凄風桔梗ケ原……（布施）南屋　彦六
夜の感覚……（東京）郷田　靖児
万華秘鏡……（清水）三条　秀也
優しい継母……（東京）竹谷　十三
紅翡翠……（大阪）春日　良介
放浪の記……（京都）伏見　和夫

麻薬盗容疑者……（山口）久保田一
逃げる少年……（東京）静浜高生
梔子は語らず……（東京）竹谷十三
金美光……（東京）岡本敬
処刑の寝室……（東京）横井逍三
五人の婦人外交員……（東京）竹谷十三
女学生殺人事件……（名古屋）近藤夏江
高校生の殺人……（東京）砂原弘
情炎からくりお蓮……（布施）南屋彦六
開化捕物秘帖……（大分）須川義行
去りゆく女……（茨城）高橋猛
香料NO5事件……（大阪）島田京
日本文身考……（神奈川）三津公
泣くな由美……（神奈川）大石和之
花の妖婦伝……（小田原）堀井祐介
残愁の夜……（東京）有明太郎
骨灰……（大阪）春日良介
緋衣遊俠伝……（三鷹）川口映治
勝代のかげ……（東京）多山皓二
乱舞……（東京）谷節子
ある男娼の告白……（大阪）岡部健次
蛇の懸想……（東京）破魔太郎
雪の女……（東京）佐和健
色欲蓮華曼陀羅……（群馬）三国沢隆
妖婦お秀の方……（神奈川）荒森充助
雪女郎夜話……（高岡）滝一平
その夜の客……（東京）藤代寛
こおろぎ魔……（群馬）窪村弘
不思議な救援……（横浜）内山治重
艶説碧巌録……（大阪）彦坂元二
女幻の恋……（東京）高田由郎

押売り……（熊本）松宮潤三
不良者と乙女心……（福島）小野益男
魔の深夜……（横須賀）黒田初太郎
奇妙な女……（熊本）H・よしなが
歌手誕生……（千葉）寺島珠雄
白い幼影……（岡山）川田錦行
漫画……（岡山）三石恵夫
悪魔の娘と名乗った女（東京）飯島提吉
拳銃が法律だ……（群馬）三国沢隆
迷路……（横須賀）黒田初太郎
顔……（東京）木間精一
人肌呪文……（群馬）三国沢隆
貞操の暮色……（大阪）飛鳥迪夫
狂った偽装心中……（東京）荒川北栄
女はもがく……（東京）大江春泥
陰鬼……（群馬）窪村弘
不倫の情事……（広島）大沢清治
大道寺家の報告……（小金井）小和田弘
断崖……（香川）饗庭俊憲
満寿男の夢……（埼玉）中野満寿男
仙人掌泥棒と芸者……（横浜）内山治重
白蠟の秘密……（大阪）彦坂元二
廓行灯……（大阪）春日巷平
復讐の炎……（千葉）京相延志
痴漢の告白……（兵庫）松島文吾
孔雀園の悲劇……（大阪）西崎英信
芸者悲歌……（新潟）左治増造
好きならいいでしょう（佐賀）北島常
探奇の夜……（東京）水沢雪男
理性泥棒……（名古屋）平家蟹之介
海女まつり……（東京）水谷雪夫

美妓と霊媒師……（東京）花村龍太
狼火……（群馬）菊坂薫
女妖の滝……（群馬）窪村弘
スペードの女王……（東京）竹谷十三
女社長の私生活……（東京）曾合修
執念の蛇……（群馬）三国沢隆
女体を食う男……（東京）高浪すみれ
野性……（福井）明山玲子
太陽娘と大和なで
オトコ……（群馬）沢敏康
極道医者……（北海道）太田泰
非道……（名古屋）芳木寛一
肉欲は頽廃にあらず……（東京）永松芳郎
人外境……（横浜）桜井幽人
恐怖の影……（千葉）京相延志
運転手の恋……（長崎）古川洋造
悪女の愉しみ……（広島）板村邦夫
背徳の愛……（浜松）浜松武
犯人は誰だ……（浜松）浜松武
ある十代の友達……（徳島）奥沢美也子
残虐な鞭の愉悦……（東京）永松芳郎
木本氏殺害事件の真相（静岡）杉一生
腕くらべ……（横浜）八田昭二
狂痴絵巻……（水戸）篠鉄夫
失楽園……（福岡）龍見渕
伽羅の鬼……（高岡）滝一平
ダイヤの耳飾……（西崎）英信
狂い大名……（武蔵野）市田春太
貞操無料……（千葉）日向三郎
女体の蔭……（岡山）美作賢
輪血……（香川）尾田光
（布施）春日彦二

ある赤道祭……（東京）野呂　一平
犠牲の踊り……（東京）星野かおる
切支丹呪文……（埼玉）石川　敦
惨酷の復讐……（名古屋）早崎　章
殺される彼奴……（布施）春日　彦二
旅の浮気……（北海道）柳井　乱波
死のドラマ……（尼崎）前田　勇
ある少年の秘密……（東京）竹谷　十三
愛の惑い……（浜松）浜松　武
まんが……（岡山）三石　龍路
お臍考現学……（東京）須藤　律夫
村の色唄……（長崎）古川　洋造
硫酸銃……（愛知）鴨下わたる
真説忠直行状記……（東京）尾関　龍介
煙の中の裸女……（兵庫）藤村　清尚
虫……（京都）鎌田　和孝
情事の現場……（大阪）西崎　寿
山の女……（東京）新田　香三
男に喰われた思い出……（東京）安木　数夫
耽奇の女……（東京）奈良原美奈
花嫁となった男性……（大阪）ジーナ好子
獲物は何か……（東京）葉山　新
唇が悪魔を呼ぶ……（浜松）浜松　武
謎の客……（東京）竹谷　十三
埋葬綺談……（豊川）諏訪　林作
剣君八分桜……（千葉）笹子　久
丸裸の復讐……（長崎）古川　洋造
地獄からの脱走……（長野）白木　卓
愛と倦怠……（東京）八木　基克
雪の夜に彼は……（高山）斎藤　貞三
怨霊牛娘……（布施）春日　彦二

我が聲の検診記……（東京）和田　平助
悪魔の条件……（前橋）河津　俊彦
哀婉紅簪……（布施）春日　彦二
「桜花」発明者は生きている……（東京）花井　常夫
紅四郎犯罪記……（島根）姫崎　由美
悩殺下着と少年……（東京）御門　葉二
下着盗人……（東京）御門　葉二
株と歩く男……（島）野中　愛三
愛怨相馬双紙……（群馬）三国沢　隆
妖……（岐阜）井村　拓
霧の中に佇む男……（東京）葉山　健次
赤い罠……（岡山）中村　博志
土建屋とその女……（長崎）古川　洋造
森繁内務大臣の盗難……（大阪）西村　東門
獅子塚バレー団の悲劇……（東京）竹谷　十三
最後の喜悦……（浜松）浜松　武
二度目にしとめた……（愛知）鴨下わたる
いけにえの花……（尼崎）前田　勇
天保噂の美男録……（東京）徳田　戯二
魔除地蔵尊……（福岡）安村　憲作
愛とはこれだ……（東京）八木　基克
三百六十六日目……（佐賀）北島　常
真昼の獣……（東京）山河　茂
古代ローマの皇后たち……（東京）河井　季重
美しき玩具……（横浜）志田克太郎
桃源の妄想……（島根）原　武夫
都会の淫獣……（東京）京極　美岐
暗礁地帯……（飯塚）野中　愛三
紅双紙……（神戸）京町柳一郎
淫説犯罪論法……（和歌山）中野　幽樹
あぶちっく・かちかち山（新潟）佐々木　力

変態雌……（東京）京極　美岐
男と女……（岡山）佐々木順平
穴……（東京）葉山　健次
ボラ助の災難……（東京）竹谷　十三
第二の毒蜘蛛……（浜松）浜松　武
暴力の住む街……（福岡）能美　積
煩悩の十字架……（福知山）明石　汐子
狙われた欲情……（布施）春日　彦二
温泉女中……（函館）杉世　正鬼
壁……（大阪）木村　勉
鯉恋記……（舞鶴）和田　操
心理誘導……（舞鶴）和田　操
鞭……（東京）峠　信平
奇怪な男（まんが）……（別府）叶　秋一郎
陰肉の塊……（岡山）三石　龍路
赤とんぼ……（東京）峠　信平
悪戯な斑猫……（横浜）松原　美房
梅毒を移せ……（群馬）七千草流蔵
木賊の山路……（大津）瀬川　信太
第二人類……（愛知）稲垣　鑑一
青春の傷あと……（長崎）古川　洋造
滝を浴びる女……（東京）白藤城一郎
狂ったまんじゅう……（新潟）佐々木　力
海底の目撃者……（熊本）井村不知火
泥棒のカケ……（愛知）真帆　語
月とわに落ちぬ……（東京）竹谷　十三
死の道程と条件……（尼崎）吉田　義雄
怒りの天使……（東京）野中　孝
高過ぎた覗き……（東京）千成　一郎
裏窓短歌……（愛知）鴨下わたる
巷説人肌呪縛……（東京）玉木　重信

屈辱の代償……（徳島）中河徹
塀を繕え……（舞鶴）和田操
声の散歩者……（東京）伊能孝
乱情街……（東京）森啓三
夜の教室……（新潟）粟島馨
澄江の半生記……（徳島）中河徹
陽は西に沈むもの……（新潟）粟島馨
死体とドライブする女（東京）千成一郎
ワイフ交換日……（福島）矢田音吉
燃える死化装……（東京）芥川ただし
ジエンの辿った道……（東京）石山かたし
赤いさつ入れ……（群馬）大理晃
放水妖夢話……（東京）小川芳夫
犬の末裔……（大阪）永田映生
奇妙な殺人……（香川）欒庭俊憲
狂った妻の行動……（福岡）長竹美沙子
夜鷹調べ……（福井）神門酔生
悶絶する少女……（石川）山崎靖一
鎖魂窟……（別府）四馬路張
女隷……（別府）美唄千律子
素晴しき殺人……（大阪）羅門三郎
伊太郎しぐれ……（大津）川瀬信
赤毛の女……（川崎）川口雄三
十文字刀の殺人……（岐阜）宮川孝二
欲望街の男……（新潟）粟島馨
死体を盗んだ男……（東京）千成一郎
蓉姫変化……（東京）藤白城一郎
妖婦……（群馬）中原虹一
悪魔の血……（福島）水上彦一
喪服の花嫁……（福島）水上彦一
覗かれた情事……（福島）水上彦一
奴を逃がすな……（大津）大森遥二郎

競艶くれない行燈……（布施）南屋彦六
病めるナルシッサス……（東京）山椒辛氏
桃の実クラブ結成の巻（奈良）出雲良作
乾いた悲劇……（布施）春日彦二
ふし穴……（東京）犬吠銚子夫
ブラック・ホワイト……（東京）辰己昌三郎
通幻和尚誕生記……（大阪）羅門三郎
炎上する肉体……（東京）佐川親二郎
黒い肉の決闘……（三浦）三浦重徳
刑罰実記……（三鷹）樋口逸馬
雪霊……（東京）伊集院光頼
破戒伝道師……（神戸）兵庫圭八
放浪狂騒曲……（大牟田）久保洋
平和と情熱……（大牟田）久保洋
或る演技……（大牟田）久保洋
都井岬……（大牟田）久保洋
強いられた情欲……（大牟田）久保洋
潮騒のはて……（名古屋）叶順一
コンプレックス……（大牟田）久保洋
砂登子抄……（大牟田）久保洋
醜聞を売る男……（大牟田）久保洋
屋われ百姓物語……（群馬）三国沢隆
農首奇譚……（長崎）古川洋造
妖女の碁打ち……（東京）白藤城一郎
読んだら燃して……（岡山）安藤義則
欲望の真珠……（水戸）久保マリ
消えなかった炎……（別府）織田静太郎
神話……（新潟）粟島馨
雪だるま殺人事件……（京都）明石汐子
暴行……（芦屋）立花一郎
落窪幻想……（芦屋）立花一郎
金色の鎖……（東京）喜多庸介
信康最後……（東京）柏太郎
少年……（埼玉）木下千草
白い落書……（埼玉）木下千草
孤島の秘密……（東京）草田一夫
人間冷蔵室……（長野）松山悦一
霊魂分離殺人事件……（群馬）高沢邦司
夏草艸紙……（別府）織田静太郎
女水滸伝……（京都）林音弥
浮世絵の女……（京都）林音弥
飛沫の花火……（東京）須藤よし子
恋のざれ歌……（京都）山城一彦
毒杯に恋を賭けた男……（群馬）三国沢隆
黄色い魔術師……（東京）岡健三郎
挑む花々……（東京）山口浩
悪魔に魅入られた人妻（阜岐）小倉亀一
悲恋念仏返し……（東京）海棠みゆき
達磨は笑う……（徳島）荒川一生
鶏を妻にした男……（長崎）古川洋三
愛の煉獄……（群馬）藤川博
未完の友情……（群馬）藤川博
砕氷機……（三浦）八迷芦駄蛭
心婦仔……（東京）竹谷十三
掏摸の話……（三鷹）樋口逸馬
東京の顔……（別府）織田静太郎
沾む星座……（群馬）高沢邦司
男色物語……（長野）松山悦一
沼の家の男……（東京）草田一夫
神話……（埼玉）木下千草
雪だるま殺人事件……（東京）柏太郎
暴行……（東京）喜多庸介
落窪幻想……（芦屋）立花一郎
金色の鎖……（芦屋）立花一郎
信康最後……（京都）明石汐子
少年……（群馬）藤川博
白い落書……（東京）須藤よし子
孤島の秘密……（京都）林音弥
人間冷蔵室……（東京）須藤よし子
霊魂分離殺人事件……（京都）林音弥
夏草艸紙……（東京）多山皓二

# 第5回

飯田豊吉

山田彬弘繪

# 連載妖異サスペンス

## ◆責め苦に悶える娘霊媒、怒りに狂う剛造は飽くなき奸計で真吾に迫る！美雪の行手は？

心をわがものとした。

愛霊教の教祖は、千鶴の父、篠原仙之助であるが、教団の実権は、軍人あがりの策師、大道寺剛造が握っていた。

教団の大祭日――。真吾は、千鶴に教えられた秘密の地下道から、教団の奥部へ潜入して、剛造の金庫から極秘の重要書類を盗みだした。

剛造は、その報復に〝白夜〟のマダム峯子と、真吾の可愛がっている盲目の少女、美雪を捕えて、拷問にかけた。

右手に拳銃、左手に詩集、あまい抒情詩を口ずさみながら、あらゆる悪事を請負う、冬島真吾とその弟分英二。

ある夜は殺し屋。あるときは婦女誘拐。綿密な計画のもとに、つぎつぎと大胆な行動をおこす二人であった。

〝白夜〟のマダム峯子は、真吾の情婦である。ある夜、そのバーにチンピラ達をひきつれて、千鶴という不思議な娘が飲みにきた。この娘こそ、新興宗教、愛霊教団の娘霊媒〝チズルノミコト〟であった。

真吾は、不敵な野望を秘めて千鶴を誘惑し、その身

だが、剛造の情婦、三津子の裏切りで、二人は愛霊教の牢獄から脱出することができた。三津子はまた、美雪の実の姉であった。

真吾は、英二に命じて、荒川に近い小菅の小さな借家に、峯子と美雪を住まわせて、剛造一派の追究からかくした。

しかし、純真な美雪は、真吾と姉の三津子の不気味な正体を知り、あざむかれた衝撃に家出をしてしまう。

真吾は、千鶴に、愛霊教のっとりの秘密をうちあけ、その陰謀に、彼女の加担を誓わせた。

三津子もまた真吾に心を寄せ、その大仕事に一口のせてくれと、自分から頼みこんだ。

だが剛造もさるもの、いちはやく三津子を捕えて、その口から、千鶴が完全に真吾に寝返っていることを確かめた。

そして、その裏切りをひきとめるために、〝破邪〟と称する奇怪な拷問を、千鶴にまでかけて苦しめるのであるが……。（前号まで）

## 深夜の荒川土堤

月もなく、星かげ一つない夜空——。

黒一色に塗りつぶされた風景には、死の匂いすらただよっている。

美雪は、いつのまにかハダシになっていた。馴れない道を夢中で歩き、いくたびか、つまづいてころんだ。

家をぬけでるときに、つっかけてきた下駄は、ドブに足を踏みこんだために、脱げてなくなった。泥だらけになった素足の指に、ガラスの破片が突きささっていたが、痛みも感じない。

信じていた真吾と、姉の三津子への、思いもよらぬはげしい失望。

（死にたい！……）

美雪はふと、水の流れをきいた。

荒川放水路である。暗くひろがった水の上を渡る風が、美雪の頬につめたく、髪の毛が、無心にさわいでうしろへなびく。

峯子とともに、愛霊教の恐怖から救いだされ、真吾の用意した静かな家に落着いた美雪であった。

だが、その真吾こそ、あのおそろしい暴力団に関係し、自分をまきぞえにして苦しめた張本人だったとは……。

しかも、姉の三津子までが、あの不気味な事件のなかに出没しているのだ……。

（もう、誰も信じられない。私は死ぬ！）

美雪は、土堤の上に這いあがった。途中でころび、四つん這いになってよじのぼった。

それから、ひたひたと流れる、水の音をめざしておりはじめた。

そのとき——。

千住五反野方面から、一台の車が、土堤際の道路を、夜眼にも白く砂塵をまきあげて疾走してきた。

ヘッド・ライトの強烈な光芒が、土堤をおりていく美雪の姿を、一瞬、触手のようにとらえた。

「——おや？　ありゃなんだ？」

運転席の小柄な男が、不審の声をあげた。

「女らしいな」

隣席の大男が、眠そうな声でこたえる。

「女はわかってらい。セーターにスカートをはいて、髪の毛が長かっ

たからな」

十数メートル行き過ぎてから、運転手は急ブレーキをいれた。

「おい、なぜ車をとめるンだい。こんなところでよ」

「大八。あの女は身投げだぜ。おもしれえじゃねえか。つかまえてこいよ。いい眠気ざましになるぜ」

「チェッ。またチビ鉄兄貴のモノ好きがはじまったぜ」

それでも、のそのそと車をおりたのは、どうやら、大八よりはチビ鉄のほうが、いくらか兄貴分になっているらしい。

まもなく、大八はぐったりした美雪の身体を小脇に抱えて、土堤を這いあがってきた。

「どうした？　もう死んじまったのか？」

と、チビ鉄が、車の窓から首をだしてきいた。

「あばれたから、横ッつらをひとつ撫でたら、ひっくりかえって寝ちまやがった」

大八は、美雪の身体を後部の席へ、かるがる運びいれる。気を失なった娘の、白く透きとおった顔をのぞきこんだチビ鉄、

「いいタマじゃねえか。とんだ拾いものだぜ」

「そうかね。おれは眠いや。兄貴、早く越中島へ帰ろうよ」

大八は、大きな身体の割にほそい眼を、ショボショボさせてぼやいた。

車はまた、砂塵を蹴たてて走りだす。

深夜の荒川土堤——。

この寸時の事件を、誰一人、目撃した者はいない。

月も星もない黒い夜の偶然は、一人の不幸な少女の運命を、また少し変えたようだ。

# 街の群狼

美雪の命を救った高級車は、荒川土堤をまっすぐに下り、小松川橋を渡って、やがて深川越中島に到着した。

〝相生興行社〟という板看板のかかっている事務所の前で、その車はピタリととまる。

「——起きろ、大八。帰ってきたぜ」

チビ鉄は、すぐ応接室へ通り、社長へ、今夜の仕事の報告をする。

南埼玉の米軍基地周辺へ、大量の麻薬を売りさばいてきたのだ。

「——そうか。ご苦労だったな……」

満足げにうなずいて、ずっしりした札束を受け取る社長——堂本甚太郎。

「社長——おみやげです」

そこへ、大八が美雪をひっかついで入ってきた。ソファの上に、どさりと投げおろす。美雪は、まだ気絶したままだ。

「なんだ、この娘は？」

「いや、あの、帰ってくる途中の荒川土堤で、身を投げようとしていたのを見つけたンでね、ちょっと、ホトケごころをだして……」

チビ鉄が弁明する。

「よけいなものを拾ってきたな」

堂本甚太郎、にがい顔になった。

「いえ、その——よく見てくださいよ、社長。どうです、いいタマでしょう？　うちのクラブで使えますぜ」

チビ鉄は、美雪の髪をつかんで、顔をぐいと堂本の前にむかせた。

その拍子に、

「う、むむ……」

美雪の小さな唇から、うめきが洩れた。気がついたのだ。

ソファの上に身体をおこし、あわてて首を左右にふった。人の気配を感じて、むきでた白い膝へ、本能的にスカートをひっぱる。

「おや、この娘、ちょっとヘンだぜ？」

チビ鉄が、美雪の顔をのぞいて奇声をあげた。

「うむ。この眼は、つぶれているな」

美雪の顎に手をかけて、堂本がいった。

「だが、若くて馬鹿にきれいな娘じゃねえか」

美雪は、その手を払って、よろよろッと立ちあがった。

「ここはどこなんです！　あなたがたは誰なの？　ああ、私はどうしたのかしら！」

思わず、二、三歩踏みだした美雪は、堂本の胸にぶつかった。

「おお、いい子だ、いい子だ」

堂本は、ニヤリともせず美雪の肩を抱きすくめ、すかさず、指を乳房のあたりに這わせた。

「いや！」

そのみだらな感触におののいて、美雪は堂本を突きはなした。

また狼どもだ。重なる恐怖に、血が凍りそうだった。

「鉄。この娘を連れてくるとき、誰にも見られなかっただろうな？」

「真夜中の川っぷち。あの辺はさびしいところで人間がいたら、あっしらの前にしてね。ほかに人間がいたら、あっしらの前にこの身投げ娘を見つけて、大騒ぎになってるはずでさァ」

「なぜ死ぬ気になったンだ？」

堂本は、妙にやさしい声をだして、美雪にきいた。

「きまってまさァ。男にイタズラされたあげく、捨てられたンでしょうよ。腹でもふくれてるンじゃねえかな」

チビ鉄は、いきなり美雪のセーターを、下からまくりあげた。

「あれッ」と悲鳴をあげて身悶える胴体の、うすい下着をつかみわけると、乱暴に腹をさぐりまわす。

「ハラんじゃいなさそうですね」

チビ鉄の手が、なおもしつっこく調子にのる。

「エへへへ……」

と、そばで見ている大八が、まのぬけた笑い声をたてた。

「あれッ、助けて！　やめてください！」

美雪は、鋭い声をあげて絶叫した。この部屋の窓ガラスに、ビーンとひびいた。

「うるせえ。だまれ！　ここは野なかの一軒家じゃねえんだぞ」

堂本があわてた。

東京の下町、とくにこのあたりは、商店や人家がびっしりと軒を寄せあって密集している。女の金切り声は、すぐ近所にきこえる。

「鉄。こいつの口をふさげ」

「へい」

チビ鉄の姿が、一度この部屋から消え、現われたときには、二本の手拭いをもっている。

「おねえちゃん。アーンをしな」

チビ鉄のふとくて短かい指が、美雪の鼻を乱暴につまんだ。

「ふムゥッ！……」

口をあけたところを、すかさず手拭いを押しこむのだ。まるめたやつを歯のあいだに、ギュウギュウねじこむ。

「むゥッ、ぐッぐぐゥ！」

抵抗する美雪。両手でチビ鉄の顔をめちゃくちゃになぐる。ひっかく。

「わァ、痛てえ。大八、ニヤニヤ見てねえで、このアマの手をおさえろ」

「おいきた」

大八は、美雪の背後にまわって、あばれる両手を左右からひっつかむ。

「よし、そのままおさえていろ」

美雪の口の上に、二本目の手拭いで猿ぐつわを噛ませる。耳のうしろで、ぎりりと縛る。頬の肉に手拭いが喰いこんだ。

「メクラの上に、こんどは唖になったのか。可哀そうに……」

大八がつぶやいて、手をはなした。

美雪は、その手で本能的に猿ぐつわをはずしにかかった。

「バッカ野郎！　手を縛っと

かなけりゃ、なんにもならねえじゃねえか！」

チビ鉄が、壁に掛っている縄を、大八に投げつける。

「可哀そうによ」

いいながら、大八の馬鹿力は、美雪の両腕を苦もなくわしづかみにして、うしろ手に縛りあげるのだ。まるで人形でも扱うように、美雪の四肢を揉みくちゃにして、ぐるぐる巻きに縄をかける。

「あまり手荒にするな。クラブで働らかせる女だぞ」

見かねて、堂本が注意した。

（クラブへだす前に、おれが一度、試食するか……）

そんな腹のなかだ。

クラブとは、堂本の経営する、白バラクラブという男女交際機関ーつまり、白線の売春組織である。美雪の肉体を、そこで切り売りさせようというのだ。

「へい。静かになったよ」

髪をざんばらに乱し、スカートの裾は、大きくふと腿のみえるまでまくれた美雪が、ソファの上に横倒しになった。

もう、どうにも身動きがならない。厳重な猿ぐつわで呼吸が苦しい肩で息をする。

だが、その肩にも胸にも、強い縄がぎっちりと喰いこんでいるのだ。

「——ひとまず、奥座敷の押し入れの中へでも放りこんでおくんだな」

堂本が、チビ鉄と大八に命じた。

（真吾さん！　お姉さん！　助けて！……）

心のなかで叫ぶのは、やはり、真吾と姉の三津子の名でしかない。

閉じたまつ毛のあいだから、美雪はポロポロと涙をこぼした。

## 巧妙な説得

その、冬島真吾は——。

新宿のキャバレー〝ランポン〟で、英二とともに、この一週間の緊張をときほぐしていた。

フロアもテーブルも、いまが酔いどれ男女たちの演ずる痴態の、クライマックスである。もうもうとたちこめたタバコの煙。踊り騒ぐ人間たちの吐き捨てる、いぎたない息。

正気だったらば、ヘドのでそうなほどに、濁りよどんだ空気だ。

疲れたバンド・マンは、ものうげな表情で音を鳴らし、女たちの半裸の肌も、もう荒れをみせてザラザラしている。それでもまだ、キャアキャア、ワァワァと、情性になった嬌声をあげて、男どもの首ッ玉にかじりつくのだ。

だから——

危険な、秘密の相談ごとには、この時刻のこの場所を利用することは、比較的安全である。

「——まずは、兄さん、おめでとう……」

英二が、ビールのジョッキをさしあげた。

「うむ。まだ祝盃というには、ちょっと早いかな」

真吾は、あいかわらず、パイン・ジュースで相手をする。

「兄さん、今夜ぐらい、そのあまいやつはやめたらどうです」

「おれが愛霊教を完全にのっ取ったときに、お前とゆっくり飲みくらべをやろうよ。それまでに、せいぜい酒量をあげておけ。ただし仕事にさしつかえる酒だけは許さないぞ」

「五人の理事たちも、とうとうこっちの思いどおりになったンだ。あと、ひと息ですね」

英二は、そういって、さりげなくホールのなかを見まわした。彼には、落着かない気持があった。真吾と一緒に、このキャバレーに姿を見せたくない理由があった。この店には、まだ鮎子が働らいているのだ。

「あまり安心するな。まだ大道寺剛造という大物が残っている……」

ストローを唇にふくみ、真吾は静かにジュースを吸いあげる。

——この一週間、真吾と英二は、愛霊教の五人の理事を説得するために、これまでにない大きなエネルギーを使った。

肉体の疲労よりも、頭脳と神経の消耗がはげしかったのだ。

五人の理事たちは、それぞれ、教団本部周辺の郊外に住んでいる。教団に通勤するのに便利な土地である。いずれは、大道寺剛造から、あてがわれた家であろう。

植草徳松は、武蔵野市に。

川内圭助は、小金井に。

吉岡政二郎は、調布市に。

新藤利貞は、多摩霊園の近くに。

森辰蔵は、立川フインカムのそばに——。

真吾は、千鶴の口から、この五人の人相、性格まで、こまかくきき出している。

成算を胸に秘めると、英二の運転するオースチンで、彼はつぎつぎに大胆な訪問を敢行したのである。

彼らの家は、すべて真吾の想像よりも、小さく、安普請であった。ひと目みて真吾は、思わず（しめた——）と、つぶやいた。

教団の莫大な利益をひとり占めにしている大道寺剛造が、理事の要職にある彼らには、それほどの恩恵を与えていないことを、眼の前にさとったのである。

堂々と玄関からのりこみ、座敷に通されると、さりげない視線で、家具、調度品の質を値踏みする。

（——まず、三流会社の、課長なみの生活程度だな……）

むろん、自家用車などはない。

真吾は、すべての虚飾はヌキにして、ズバリと腹を割って彼らに対した。

まず第一に、現理事長の、ぼう大な隠し金の証拠、つまり、れいの帳簿、書類を、彼らの眼の前につきつけて説明した。

剛造個人が、かなりの私腹を肥やしていることは、彼らとて気づかぬはずはない。だが、その現実を、このようにハッキリした形で示されると、理事たちも動揺の色を顔にあらわした。

すかさず、真吾の巧みな弁舌が、容赦なく剛造の乱行暴状をあばく。このままにしておいては、教団内部の醜状が、いつか外部へ洩れ、世論が騒ぎだす。教団全体の危機である——。

真吾の話術は緩急自在。相手の表情から変化する心理のうごきを適確につかみ、巧妙に急所をついて、こっちが仕掛けた罠にひきずりこむのだ。

相手が不安の色をみせれば、つぎに〝チズルノミコト〟が、すでにこちらの陣営に加わっていることをうち明ける。

さらに、剛造の情婦、教団内部の経理にくわしい三津子までが、自分の味方になっているといった。

「——彼女ら二人とも、私を信頼して、私の手足のようにうごいてく

れます。嘘だとお思いなら、あなたの指定する場所へ、いつでも彼女らを呼び寄せましょう。そこで、いろいろなことを、おききになって下さい。ははは……。いや、どうも、おどろかせて申しわけありません……」

理事たちは、真吾が教団の内情にあまりにもくわしいことをおどろき、怪しむ。理事すら知らない事実を、この男は知っているのだ。おどろき、怪しむ心が、やがて不安ながらも、この男への信頼にひきずりこまれていく。この男には、相手を魅惑する不思議があった。真吾は、最後に、用意した五百万円の現金を、相手の前に静かにおく。

「――私を、新理事長にご推選下さい。この金は、そのお礼の一部です。もし、私にあの教団をおまかせ願えれば、これからの利潤はあなたがたにも、すべて、平等に……」

彼ら、愛霊教の幹部たちの心をとらえるもの、最後には、欲だ。

すべては、金だ。

それを熟知している真吾の、最後の切り札は、いま五百万の現ナマを握らせ、さらに、将来の分け前を約束することだ。

やがて、真吾の説得に圧倒された五人の理事は、かすかな危惧を残しながらも、承諾の意をあらわすのである。

「大道寺さんと、その周囲にたむろする暴力団は、すべてあとくされのないように、私が始末します……」

という真吾の、不気味にも傲然たる微笑の約束のもとに――。

「よくお考えになられて、もし私のプランに不賛成の場合は、この話大道寺さんのほうには、まだ内密に願います。この五百万円もそのまま口止め料として差しあげましょう。ただし、この話が洩れるようなことがあれば、私はこんな男です。何をするかわかりません……」

真吾の瞳孔が青く光って相手の眼を突き刺した。理事たちは、一瞬身体を硬くして、ゴクリと息をのんだ。

最後に一本、釘をさしておくことを忘れない真吾であった。

## 夜の待伏せ

バンドが、だらけた演奏で〝サヨナラ〟をはじめた。

キャバレーの夜も、さすがにふけて、さっきよりはだいぶ客数が減っている。

「――ラストですよ。もうでませんか、兄さん……」

「うむ……」

真吾と英二は、肩を並べて〝ランポン〟をでた。

冷えた空気が、ほてった頬に心地よい。

灯の消えた街は、深く彫り組んだ影をつくって、ひっそりと眠りはじめた。ケバケバしいネオンが、ついさっきまで狂いまわっていただけに、急に訪れたこの静寂は、墓場に似た不気味さがある。

「――今夜はどこへ？」

と、英二がいった。

「小菅へいこう。峯子と美雪が心配だ」

二人とも、美雪が家出したことを、まだ知らない。

英二の車が、キャバレー横の暗い蔭においてある。二人が、そのオースチンに近づいたときだ。

うしろから、こまかく靴音を鳴らして、誰かが近づいた。とがった声が、二人の背中に突きささった。

「――二人とも、手をあげて」

女の声だ。

真吾と英二は、顔を見あわせ、ゆっくりと両手をあげた。それから二人一緒に、この暗討の相手をふりむいた。

「あッ、お前は鮎子！」

小さく叫んだのは、英二である。

拳銃をかまえた女は、銀座の富豪マダム酒井信乃の娘、そして、いまは英二の情婦になっている鮎子である。

yuma da kite

英二の気づかっていた事態が、帰り間際になって発生したのだ。
「誰だい、このぶっそうなお嬢さんは？」
真吾は、両手をあげたまま、英二にきく。
「あンたたちにめちゃくちゃにされた、酒井鮎子よ！　ずいぶん探したわ。今夜こそ復讐してやる。二人一緒に殺してやる！」
鮎子が、ヒステリックにこたえた。一歩踏みこんで拳銃の先を、真吾の背中にぐいぐいつきつける。
「鮎子？……酒井鮎子？　ああ、思いだしたよ」
真吾は、うなずいた。
（まずいな……）と思った。女の眼が殺気をおびて血走っている。拳銃もどうやらオモチャではなさそうだ。
アタマに血がのぼっているから、ヘタをすれば本当にブッぱなされる。ここで射たれては、愛霊教もヘッタクレもありゃしない。
「鮎子、よせ！　じょうだンはやめろ！」
英二が、蒼白になって低く叫んだ。
「じょうだンじゃないわ。あンたに近づいていいなりになったのも、このボスを見つけたかったからよ」
鮎子は、眼を吊りあげ、拳銃の指に力をこめた。狙うは真吾の背中から心臓である。
――ブスン！……
つぎの瞬間、数メートル横手に、にぶい発射音がして、鮎子の拳銃は横っとびにすっ飛んだ。
「あッ！」
手首をおさえて、鮎子はよろめいた。おさえた指のあいだから、ボタボタと血がしたたる。
ふりかえった真吾と英二の前に、別の黒い影が二つ、拳銃をかまえたまま、ぬっと現われた。
鮎子の手首を横から射ったのは、この二人は真吾の味方ではなかった。
「おッと――冬島真吾さン。手はそのまま、バンザイしてなよ。おろすと射つぜ」
凄みのきいたセリフが、イタについている。
「やれやれ、一難去ってまた一難か、ぼくの名前を知っている、きみは？」
しかたなく、また両手をあげて、真吾はきいた。英二も（くそ！）とつぶやいて手をあげる。
「よけいなことをいわずに、おとなしく理事長のところへ行くンだ。おめえを探して、ずいぶん骨を折ったぜ。さァ、そっちの若僧も一緒だ。車にのれ！」
男が顎をしゃくった方角に、一台の高級車がおいてある。
「わかった。きみらが、音にきく愛霊教破邪組の旦那がただね？　そうだろう？」
真吾の推察どおり、この二人の男は鬼塚に黒林である。
剛造の厳命をうけて、血まなこで真吾を追い求めていた二人だ。
「うるせえ。だまって歩け！」
真吾と英二は、両手をあげたまま、彼らの車にむかって歩きはじめた。途中でチラと眼を見あわせたのは、反撃の相談である。
東に乗りこむときに、お互いの隙がある。そこがチャンスだ。
「ドアをあけてはいれ。二人とも前に坐るンだ」
真吾と英二にハンドルを握らせ、自分はうしろから拳銃をつきつけ

て走らせよう、という寸法だ。
真吾が先に車のドアに手をかけ、勢いよくひいた。同時に、くるりと身体を反転させる。そのドアを楯にして身を沈めると、下から靴の先で鬼塚のむこうずねを、思いきり蹴あげた。
「うわッ」
鬼塚の姿勢がくずれる。黒林があわてて真吾に銃口をむける。その隙に英二の肩が、さッとひるがえる。足がハネあがり、黒林の手から拳銃を蹴り落す。
「野郎！」
それから、猛烈な格闘だ。
鬼塚の顎に、真吾の鉄拳が炸裂した。拳銃をもぎとり、その台尻で鬼塚の後頭部を、ガツン！　と叩きのめす。
「ぐうッ……」
腹を折り、前のめりに昏倒する鬼塚。
かなわぬとみた黒林は、英二を突きはなすと、仲間を見捨てて、自分だけ車にのりこんだ。ハンドルにしがみつき、あわてて走りだす。
「くそ！　待てッ！」
ドアにかじりつく英二。
「追うな、英二！」
真吾は、ぶちのめした鬼塚の衿がみをつかみ、自分の車のほうへ、ズルズルとひきずった。
「いまの女も、その辺に倒れているはずだ。探して連れてこい。早く！」
誰かに見られて、一一〇番にでも電話されたら、コトである。
鮎子は、道路際のポストのかげにうずくまり、手首からのひどい出血に、気を失ないかけていた。
「鮎子、しっかりしろ！」
英二がそれを見つけ、肩をいれてかつぎ、車のなかへ運びいれる。
気絶した鬼塚も押しこんだ。
「とんだ活劇だったな。さァ、帰ろう」
背広の埃を払いながら、真吾が英二の肩をつっこんでいる。
見まわす。人影はない。犬がゴミ箱にうごきだす。
半死の鬼塚と鮎子をのせて、車は静峯子の待っている葛飾の小菅をめざして、何事もなかったようにすべりだすのである。
風がでて、せまい東京の夜空にも、星がキラキラとまたたいていた

## 殺し屋を殺せ！

黒林の報告は、大道寺剛造を激怒させた。
不甲斐ない部下への憤りと、冬島真吾という男が、腕力にかけても思ったより手ごわいことを知った怖れから、さすがの剛造もあせりはじめた。
「――で、鬼塚はどうした？　まだ帰らんのか！」
「へえ。もしかすると、奴らに捕まって、連れていかれたのかも知れません……」
「馬鹿ッ」
剛造は、黒林の顔を思いきり張りとばす。
「す、すいません」
鼻血をダラダラ垂らして黒林は這いつくばった。

「外出する。車のしたくをしろ！」
「へい！」
黒林は、車庫へすっとんだ。
愛霊教を出発した剛造の車は、そのまま、まっすぐに都心を横断し四十分後には、意外にも深川越中島の相生興行社の事務所に着いていた。
「――おや、こいつは珍らしいな。兄貴がわざわざこんなところまで……。どうした風の吹きまわしです？」
堂本甚太郎が、剛造を兄と呼んで迎えるのである。
「今日はお前に、折り入って頼みがあってやってきたんだ……」
せまい応接室に、二人はむかいあって坐った。
「日頃から、ひとかたならねえ世話になっている兄貴の頼みなら、どんなことでもきかねえわけにはいかないな」
この堂本甚太郎は、保守党の代議士、川岸正五郎をボスにもっている。剛造のふところから、多額の現金が堂本の手を経て、川岸正五郎に渡るのだ。
この非公然の献金によって、政界における川岸正五郎の権力は拡張され、新興ヤクザである堂本の経営する相生興行社の縄張りも増大し、さらに、愛霊教の違法的な儲け主義、暴力主義にも、裏から手をまわして、おめこぼしにあずかるという、重宝な仕組みになっている。
「――頼みというのは……実は、人間を一人消してもらいたい」
声を低めて、剛造がいった。
「ほう。たやすい用だが、なんでまた、おれのところに？……兄貴のところにも、だいぶ荒っぽい男が、うようよしてるじゃねえか」
「その男たちが、役にたたねえから、わざわざこうして頼みにきたんだ」
「ふゥむ。兄貴が手こずるところをみると、相手はかなりのクセモノだな……」
「いや、どこの馬の骨だかわからないチンピラだが、妙に悪知恵の働らく奴で、おれも近頃、少々ばかりもてあまし気味なんだ……」
「よし。おれが、いい殺し屋を紹介してやろう。おれもつい三ヵ月ばかり前に、そいつを使ったばかりだが、おッそろしく腕のたつ奴で、金さえやれば安心してまかせられる」
「お前が邪魔にしていた、大河原組の芝鉄を殺した男だな？」
「そうだ――冬島真吾という男なんだがね」
「なに、冬島真吾！――」
剛造の眼が、ギョロリと光った。
「なんだ、知ってるのかい、兄貴――」
「知ってるどころではない。おれの殺してもらいたい男が、実はその冬島真吾なのだ」
「ええッ？」
これには、堂本甚太郎もおどろいた。
「そいつは、どうも、まずいな……」
二人は顔を見あわせて、にが笑いした。
だが、結局、堂本甚太郎は剛造の求めに応じた。堂本の子分のなかから、五人ばかりを選りすぐって、真吾を殺させることを約束した。
「どうせ冬島の奴は、教団のまわりをウロウロしているに違いないのだ。そのうちに、すぐまた姿を現わす。そのときに、おれのところの破邪組と力をあわせて、一気に息の根をとめてやろう……」
腹にすえかねたという口調で、剛造が低くつぶやく。

「なァに、蛇の道はヘビだ。奴のアジトは、だいたい見当がついてるうめえ仕事があるからといってこっちへ呼びだし、森の石松じゃねえが、味方のフリをして、うしろから闇討をくわせる手もあらァ……」

「うむ。それも名案だな」

剛造の眉が、あかるくひらいた。どうやら自信をとり戻してうなずいた剛造の耳に、そのとき、異様な声がきこえた。

「む、む、むゥ……」

という、おしつぶされたような泣き声である。

「なんだ、あれは？」

剛造が、不審の眼を奥にむけた。

「きこえたかい。どうも、しょうがねえな。いくら猿ぐつわを噛ましても、咽喉で泣きやがるからな」

「女だな？」

「うちの子分が、おとといの夜、荒川辺の土堤で拾ってきたンだ。メクラなんだが、人形みてえな可愛いツラをしてやがるンで、奥へしまってあるんだよ」

「なに、メクラ？」

剛造の脳裏に、美雪の面影が白く浮かんだ。逃がした魚は大きい。純真無垢な処女の裸体が、まだ剛造のまぶたに浅っている。

「明日の晩あたりから、うちのクラブへ並べようと思ってるンだが、よかったら兄貴に売るよ。そうだ、あの小娘は兄貴このみかも知れないぜ」

子分のチビ鉄と大八が、奥座敷の押入れのなかから、美雪をひきだしてきた。

芋俵のようにくくりあげられ、猿ぐつわを噛まされたままだ。床の上に投げだされた姿は、くずれた花びらのように痛々しかった。

背中に縛りあわされた手首に、血の色がない。縄がむざんに喰いこんでいる。

（やっぱり、美雪だ……）

剛造は内心、ひどくおどろいた。

美雪が、なぜこんなところに？——という詮索はあとにして、堂本にいった。

「ひどく縛ったものだな。こんな可愛い娘を……。手かげんをしないと、胸を圧迫して死んでしまうぞ」

「兄貴のところと違って、こんなゴミゴミした町なかだからな。声でもたてられたら、それきりだ」

剛造は、身をかがめて手をさしのべ、美雪の手首から一メートルほどのびている縄尻をつかんだ。

それを、ぐいとひく。

釣師が、獲物のかかった釣糸をたぐる手つきに似ている。いや、剛造の心のなかは、いまその釣師と同じである。

大きな魚が、またひっかかった。楽しい獲物だ。

「くくッ……」

縄をたぐられ、苦痛がよみがえったのか、白い咽喉が、きしむように鳴った。うつ伏せになったために、まるく盛りあがった美雪の腰にスリッパをはいた剛造の足が、ムズと踏まえた。

美雪の脚が、海老のように縮み、またのびた。

「生きてるな。——よし、買おう」

「ふふふ。こんなメクラ、買ってどうするんだい？」

「この娘にしかできない役目をやらせるのだ。この神々しいほどに美

しい盲目の顔を利用するのだ。わが愛霊教の新しいシンボルに、この娘を仕立てるのだ……」

剛造はスリッパの足で、美雪の顔を仰向かせた。

まぶたの下の黒いまつ毛が、この屈辱にピリリとふるえる。苦痛にゆがむその白い表情を、陶然とした目つきで、じっとのぞきこむ剛造であった。

## 祭壇のいけにえ

うす暗がりのなかに、髪をふり乱した二個の裸体が、死んだようにうずくまっている。

肩、腕、腹、太腿——の各部分に、紫色のアザが死斑のようにしみつき、腫れあがった皮膚からは血がにじんでいる。

外部から洩れる電燈の光線が、見栄もなく投げだされた裸の四肢をにぶい色で照らしている。

裸女の一人は、大の字ハリツケ刑から解きはなたれた千鶴、すなわち、チズルノミコト——。

そして、もう一人は、木馬責めの浅忍な刑に下半身を痛めつけられた三津子、すなわち剛造の情婦であり、美雪の姉であった。

愛霊教本部、奥神殿の牢座敷の中である。

いずれも剛造を裏切り、真吾にその身心を許したがゆえに、おそるべき報復と改心強要の〝破邪〟をうけたのであった。

むざんに傷つき、疲労した身体を、この牢のなかに横たえているのである。

「——三津子さま。理事長が呼んでるよ」

鋼鉄の牢格子の外から、男の声がした。

戸口の錠が、ピーンとあいて、姿を見せたのは破邪組の黒林である。

俯伏せになっている三津子のそばへ寄ってきて、顔をのぞきこむ。

「あンたに用があるんだってさ。またメクラの娘が捕まってきたぜ」

黒林の言葉に、三津子はギクリと顔をあげた。

「え！　美雪が……」

「あンたの妹だってなァ……。さァ、立ちなよ」

黒林は、三津子の腋の下に手を入れて、よいしょと立たせた。

「痛ッ……」

三津子が、顔をしかめてよろめいた。内腿に、木馬からうけた痛みがある。

「あンたは罪人だから、縄をかけて連れてこいといわれたンだがね……」

「こんな弱った身体で逃げられると思う？　そんなことする必要ないわ」

「理事長の癖は、一番よく心得ている三津子さまじゃねえか。手間をとらせるなよ。手首だけでも縛っていきゃ、それで理事長の気がすむんだ。さァ、手をうしろにまわしなよ。加減してやるからさ」

三津子は、あきらめて左右の腕を背中にまわした。

黒林は、その手首を重ねあわせ、馴れた縄さばきで縛った。三津子は唇を噛んでうなだれた。背をまるめ、痛む足をひきずって、囚人のように歩きだす。

大道寺剛造、鬼のような奴だと思う。ケダモノだ。悪魔だ！……。

だが、三津子とて、いままでその悪魔の情婦だったのだ。金が欲し

かったために……。盲目の妹に、不自由のない生活をさせてやりたかったために……。不浄の金で、食べたり着たりしたむくいが、この苦しみになってあらわれたのか……。

黒林に縄尻をとられ、三津子が曳かれてこられたのは、奥神殿の祭壇であった。

剛造のほかに、鬼塚を除いた破邪組の荒くれ信徒たちが、腕ぐみをして突っ立っている。

「――三津子、これをみろ」

いきなり、剛造が指をさした。

ハッと顔をあげた三津子の眼に、可憐な裸体がうごめいた。

妹の美雪である。祭壇の前に、いけにえのようにひき据えられているのだ。

「み、美雪ちゃん！」

yama
oa 林三

三津子は我を忘れ、前のめりになって叫んだ。
身の危険をおかして助けた妹なのに、どうしてまた捕えられたのか。
「あッ、ねえさん！」
美雪も、姉の声をききわけた。身をのりだし、見えぬ眼を姉にむける。
「あンた、おねがい！　あたしはどうなってもかまわないから、妹だけはいじめないで。その子の縄はほどいて！　おねがい！　ゆるしてやって！」
三津子は床に膝まづき、剛造に哀願する。
「ふふふ。わしも、こんな汚れのない、雪のような肌に、縄の痕はつけたくないンだ。だが、わしの願いをきいてくれないうちは、しかたがないな」
剛造は、小気味よげにせせら笑う。
「美雪を、どうしようっていうの！」
「チズルノミコトの代りだ」
「えッ、なんだって？」
「おれを裏切り、冬島真吾にさんざん汚されたチズルノミコトは、もうこっちからお払い箱だ。そこで今度は、この美雪をあと釜に坐らせるのだ。さしずめ、ミユキノミコトというわけかな。わっはっはっは……。だが、このお嬢さんは、そんなものになるのはいやだといって駄々をこねる……」
「あたりまえよ！　その子に、あんなキチガイみたいなマネが、できるもんか！」
「できるか、できないか、わしが念入りに調教してやる。さァ、美雪、吸をしめつける。
ついに、ぶらりと吊りさがる。
胸に巻きついた縄が、身体の全重量をささえる。乳房がくびれ、呼
離れる。
身体が上にのびて中腰になり、腰がたち、さらに、足の指先が床を
「あぁッ。むッむッむッ……」
荒くれどもが引きはじめたのだ。
にひきあげられる。縄尻が、天井の環にひっかけられてあるのだ。そ
と——美雪の身体が、うしろ手に縛られたまま、ズルズルッと、上
美雪の背後に立つ、荒くれ信徒に命令を発する。
「しかたがない。やれ！」
剛造の赤ら顔に、いっそうの赤みが増した。小娘の罵声とは思いながらも、腹の底からジワジワと怒りがこみあげてくる。
「うむ。ずいぶんとはっきりいったな」
くあばきたてる。
眼は見えなくとも、美雪の鋭どい感受性は、愛霊教の本質を容赦な
力をこめて首を横にふる。
「いやよ！　こんなおそろしいところで働らくのは！　私、そんな、信者をだます霊媒になんかなれないわ！　インチキ宗教よ！　暴力団よ！　私、警察へ訴えてやるわ！」
できるだけおだやかに、さとすように剛造はいった。だが、美雪は
る。
「あンた、おねがい！　あたしはどうなってもかまわないから、妹だけはいじめないで。その子の縄はほどいて！　おねがい！　ゆるしてやって！」
美雪も、姉の声をききわけた。身をのりだし、見えぬ眼を姉にむけ
か。
「あッ、ねえさん！」
身の危険をおかして助けた妹なのに、どうしてまた捕えられたの
三津子は我を忘れ、前のめりになって叫んだ。
美しい着物を着られ、お金もたくさんやるぞ。おまけに、たくさんの信者たちから、美しい司霊姫としてあがめたてまつられるのだ。悪くない仕事だぞ。どうだ！」
「いやよ！　こんなおそろしいところで働らくのは！　私、そんな、
できるだけおだやかに、さとすように剛造はいった。だが、美雪は
力をこめて首を横にふる。
「いやよ！　こんなおそろしいところで働らくのは！　私、そんな、信者をだます霊媒になんかなれないわ！　インチキ宗教よ！　暴力団よ！　私、警察へ訴えてやるわ！」
眼は見えなくとも、美雪の鋭どい感受性は、愛霊教の本質を容赦なくあばきたてる。
「うむ。ずいぶんとはっきりいったな」
剛造の赤ら顔に、いっそうの赤みが増した。小娘の罵声とは思いながらも、腹の底からジワジワと怒りがこみあげてくる。
「しかたがない。やれ！」
美雪の背後に立つ、荒くれ信徒に命令を発する。
と——美雪の身体が、うしろ手に縛られたまま、ズルズルッと、上にひきあげられる。縄尻が、天井の環にひっかけられてあるのだ。それを荒くれどもが引きはじめたのだ。
「あぁッ。むッむッむッ……」
身体が上にのびて中腰になり、腰がたち、さらに、足の指先が床を離れる。
胸に巻きついた縄が、身体の全重量をささえる。乳房がくびれ、呼吸をしめつける。
ついに、ぶらりと吊りさがる。

三津子が、血を吐くような叫びをあげた。
「美雪ちゃん！　かまやしない！　霊媒でもなんでもやるンだよ！　それじゃ死んじまうよ！　美雪！」
吊られた妹を見あげ、身を悶えてわめく。
「いや！　私、死んでもいやよ。殺すつもりなら、殺されてもいいわ。こんな男たちの仲間になるのはいやよ！」
一度は死を決意した美雪だ。思いつめた少女の心はかたい。
「ふン。立派な心掛けだ。ますますお前が気にいったぞ。よし、それでは、こんどは姉のほうだ」
剛造が、にが笑いして命じた。
「ははッ」
黒林が、鍵のついた棒を使って、三津子の縄尻を巧みに天井の環に通した。それを、三人がかりで、力をこめてひく。
「ああッ」
三津子が、咽喉の切り裂けるような悲鳴をあげた。そのはずである。縛られているのは、うしろにまわされた手首だけであった。縄がひかれれば、身体を残して腕だけが、肩のつけねから逆に、上へ持ちあげられることになる。
一定の限度がくれば、腕は肩から、ポキリと音たてて折れるだろう。
「さァ、二人とも仲よく、祭壇のいけにえとなれ！」
縄はひかれ、腕だけが逆吊りになる。
「ううッ、ううッ……」
その恐怖と苦痛に、三津子は獣じみた悲鳴をあげた。
「ねえさん！　どうしたの！　ねえさん！」
美雪が宙吊りのまま、姉を呼んだ。
「アアッ、ひいッ！」
三津子は、この激痛を噛み殺すことはできない。
（姉の身があぶない！）
そうさとったときに、美雪は思わず叫んでいた。
「待って！　なるわ！　霊媒にでも、なんにでも！　だから、ねえさんを助けて！　ねえさんを、それ以上苦しめないで！」
剛造、ついに腹をゆすって哄笑した。
「わっはっはっは……。そうか。手間をとらせたが、それでよろしい。なに、ちょっと面倒だが、その気になってわしのいうことをよくきけば、お前なら、すぐ優秀な霊媒になれる。うまくやれる。よし、よし……」
この若さと神秘性をもった美貌なら、千鶴よりも信者の人気を集めるかも知れない。盲目という条件も、神秘的な魅力にすりかえて演出し、逆に利用できる。これで、チズルノミコトの代りはできた。
弟の堂本甚太郎と力をあわせれば、冬島真吾の命もこっちのものだ。真吾の可愛がっている美雪を、こっちにおさえておくということは、奴の弱みを握っていることだ。
美雪をオトリにしてひき寄せ、今までおれを苦しめたお礼に、思うぞんぶんの料理をしてやろう……。盗まれた帳簿類は、それからゆっくりと取り戻す。かくて愛霊教は、以前にも増して繁栄発展する。
「うふふ、わはは……」
大道寺剛造、成算を胸にはかり、久しぶりに快心の笑みを洩らした。
だが、しかし――。
その冬島真吾も、剛造に最後の決戦をいどむべく、その準備を着々と整えているのである――。（以下次号）

江戸暗黒秘録

# 女体と圧制

★人買い舟にゆられる女、密通のとがで遊女に堕される女、牛馬に異ならぬほどにして気ままをさせる女郎達。圧制にひしがれた女体に解放の日は遠かった！

鈴木和夫
東桂史・画

## 泣く子と地頭には勝てない

「うつ向いて、叱られぶりのいい女房」というクラシックな川柳がある。

封建時代の女の理想像――江戸期の野郎どもが女達に要求したスタイルが、すなわちこれである。女は迫害されても黙っているものときめているみたいで、何とも勝手な話である。

江戸時代の人間の基本的人権というものは、将軍様を除いた大部分が全くお話にならんほどに低いものだった。

歴代将軍と御三家、及びその縁者、ぐらいが、まずはノホホンと暮せる「特定少数」に属する連中なのであり、他は、大名といえども安全の保証はない。将軍家から派遣された隠密が、ある事ない事、重箱の隅をほじくるように探し廻ると、どの大名でも落度の一つや二つは必ずある。それを材料として「お取潰し」という手段に出ることがあったのだから、考えてみれば昔の殿様というものも、あまり楽な商売ではなかったようだ。

上に逆らうことはできないから、彼らは自分より下の者を圧迫して帳尻を合わせようとする。下の者、すなわち領民である。

都合のいいことには徳川さんの初代将軍家康が「難儀にならぬほどにして気ままをさせぬが百姓共への慈悲なり――」（東照宮御実記）などと範を垂れているのだ。

「汝等、これは東照宮様以来のルールなのであるぞ。左様心得ろ」

などと、どんな暴虐でも実行に移せるわけのものだ。

家康の重臣、本多佐渡守正純が書き残した「本佐録」の中にも農民に対する施政方針を「百姓の手許には財の余らぬように、且つ不足なき様に治むべし、云々」と記してある。

要するに「活かさず殺さず」という精神であり、農民の生活に必要な生産物の最低限度

を控除し、他はすべて年貢米として上納せしめるというやり方だ。

さらには「胡麻の油と百姓とは、絞れば絞るほど出るものなりー」（西域物語）だとか、「百姓とは只年貢用金を取立候ためのものとのみ心得居り候――」（新政談）などと書いてあるほどで、百姓は「動物性労働機械」みたいであり、百姓こそいい面の皮であった。

農民達の窮乏は言語に絶するもので、松平定信は「国本論」の中で、

民ひそかに嘆くといへども、之を訴ふれば楚撻（拷問の鞭）背に到り、桎梏（手枷足枷）手足に来たらんことを恐れ声を呑んで涕泣す。年末に至りて、有司、民の長を喚びて、又来年の租を出さしむ。云々。

とあり、「一年にして既に五六年の租を出すに至る――」と痛憤しているのである。

熊沢蕃山の「集義外集」にも、

当時の農民の辛苦が詳細に説かれているが、年貢などというものは、すべて天くだりであり、無理の仕放題というありさまであった。

それでも「泣く子と地頭には勝てない」と諦らめ、彼らは妻や娘を身売りさせたり、生れた赤ん坊を「間引き」と称して殺したりするのだった。

「関東の習ひ、貧民あまた子のあるものは、後に産する子を殺す。これを間引きといひならひて敢て惨むことを知らず、云々」と「近世畸人伝」にある。また「甲子夜話」には、

奥州の民間には、子を産すれば即ち殺して育つることとなし。これ取り揚げ婆の産所に於いて斯くすることとぞ。常州の俗に同じきが、然るに楽翁（白河楽翁、即ち松平定信である）の始め白川へ入部ありてより殊に之を禁じ、国中

に令を発し、民間に姓婦ある時は届けさせ医者一人と産婆一人をつかはし改め、臨産の時も亦つかはして取り揚げさせる。その手当として一口に金一両二分づつを与へしとぞ（下略）

とあるのだが、松平定信みたいな政治家ばかりいたわけではない。定信よりも少し後の人、幕末の国学者佐藤信渕の著書には、

彼の国の（上総の国をいう）百姓十万家ある中にて姓婦の自ら其児を堕胎して殺すこと毎年三四万人づつなり（草木六部耕種法）

或いは一国にては七万に及ぶものも往々これあり、況んや四海の大に於て総算すべけんや（鎔造化育論）

等々とあって、この風習は幕末はおろか明治、大正、昭和——と引続いて行なわれたこととなのである。

要するに、一番弱い者にしわ寄せがくる仕組みである。つまり、庶民の中の女子供が最大の犠牲者となって重圧に喘いでいた訳だ。

## 知らしむべからず

江戸時代の幕府の公文書の中に「百姓は愚かなるものに候らへば——」とか「百姓は分別もなく、あと先の考も無きものに候故——」などという字句がしばしば使われている。

ずいぶんと人を小馬鹿にした云い方だが、これにはもっとタチの悪い事情があるのだ。この時代、農民に限らず一般庶民というものは「つんぼで盲」の生活を押しつけられていたのである。

たとえば、法律だが、この時代の人達は法律を知る権利というものがなかった。

江戸期の法律「御定書百箇条」の最後の所に、こう書いてあるのだ。

右之趣上聞に達し相極め候、奉行中の外、他見有るべからざるもの也。

寛保二壬戌四月　松平左近将監

とあって、同じ意味の文章が二度、少し字句を違えて、くり返し書かれている。

これでは何のことはないだろうが、両岸屋としては種々と家庭の事情もあるだろう。許嫁の河野一太郎などとで「門外不出」を力説しているわけである。

ゆめゆめ疑うなかれ——と書いてないのが不思議なくらいだ。

これでは政治家も裁判官も楽なもので、どんな専横を行なっても、どこからも文句は来ない仕掛けである。

「御仕置」というのは処刑のことであると共に「政治」という意味にも用いられていたこの時代の為政者は、思うがままに暴虐非道を行なうこともできたのである。たとえば、こんな調子である。

「両岸屋信助と申すは其の方か？」

「ハイ、左様にござりまする」

「其の方の娘、お茂と申す者はなかなかにあでやかじゃのう」

「恐れ入りまする」

「若殿においても殊の外の御執心であるぞ。よって本日より殿の側女としてお城へ差出すよう、この儀、しかと申し付けたぞ」

「恐れながら、娘の存念を相糺しまして」

「いや、その儀には及ばぬ、苦しゅうない」

とくると大変である。殿様の方は苦しゅうない、まるで忍術の秘伝書か六韜三略の虎の巻みたいな具合のものである。悲憤のあまり、上野寛永寺の鐘が鳴るのをキッカケにヤケクソの切腹自殺をしようという騒ぎだ。こんな時には河内山宗俊でも飛び出して、

「悪に強きは善にもと、世のたとえにも云う通り、親の歎きが不憫さに、娘の命を助ける

ため、胸にたくみの魂胆を、練塀小路に隠れもねえ、お数寄屋坊主の宗俊が……」

と啖呵の一つも切って助けてくれると都合はいいのだが、河内山先生は楠正行みたいに七度生れ代って来る、というような宣言はし なかったから、いつでも急場に間に合うというわけにはいかない。だが、河内山氏の代りに法律の知識があれば、相手が御家老様だろうが大河内伝次郎だろうが、そんなことはメじゃないのである。

「あの、御家老様に伺いますがねえ、そんな法律はいつ発布になったんですか？　御定書百箇条には、たしかそんなベラボーな規定はなかったはずだと思うんですよ」

「何、法律と申すか。うむ、素町人の分際で武士に向って無礼の一言、手討ちにしてくれる！　それへ直れ！」

「罪人でもない者を斬って捨てるという法がありますか！　それはですねえ、基本的人権の侵害であってですな、違法行為であるから私の方でもしかるべく弁護士を頼んで告訴の手続きを……」

などとやったら、溜飲が一遍に下ってしまっていい気分なのである。

これでは困る。武士が威張れない。殿様はわがままができない。将軍様だって巾が利かなくなる。そこで、いっそ法律を秘密にしちまおう、と着想した結果が、前記の但し書になって表われるのだ。

当時の政治というものは万事がその調子で

「ええ、公儀をおそれぬ不届者め、頭が高い！　真っ直に白状せい！」

などと高飛車に出て、白状などというものは電信柱みたいにマッスグな物と心得ている

連中でも、充分に御奉行様の役がつとまったのである。

このように法律があっても人民には知らせないで、守る義務だけは盛大に与えようというやり方を、「依らしむべし、知らしむべからず」システムというのである。

こういう時代、将軍様から順々に下の方へ「よきにはからえ」だったり「苦しゅうない」だの「不届者め！」であったりする仕組みの最終段階が、

「泣く子と何とかにゃあ勝たれねえだものな あ、仕方がねえ。おめえ、身売りをしてくれろ……」

という愁嘆場になって、ひどい目に遇うのは女であった。

## 人買い華やかなりし頃

泣きの涙で身売りを決意する女達を、妓楼に斡旋する人身売買業者が「女衒」である。「職業に貴賤はない」などと云っても、この連中ばかりは例外である。いずれも残忍酷薄のお歴々で、彼等が人格高潔だったり正義人道の旗手だったりするはずは、もとよりない。

彼等は女を買うばかりでなく、隙があったら誘拐して丸儲けをしようというのであった。

昔々のその昔、という時代を調べてみると彼等は「人買い」とか「人商人」とか呼ばれる押しも押され（？）ぬ商売人であった。

足利時代にできた謡曲の中には「人買い」の出てくる作品が多い。

かやうに候ふ者は、東国方の人商人にて候。我れ此度都に上り、あまた人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候ふが、昨日少しの間、暇を乞ひて候ふほどに、遣りて候ふが未だ帰らず候——。

などと商品の娘に逃げられてボヤクのは、「三井寺自法居士」である。

どういうものか、この頃の人買いは関東の男と相場がきまっていたようだ。そして、買われるのは美しい京女、ということになっている。「東男に京女」というわけでもないだろうと思っていると、「桜川」という謡曲では彼らは遠く九州へまで足をのばしている。

かやうに候ふ者は、東国方の人商人にて候。我久しく京に候ひしが、此度は筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮ほどに幼き人を買ひ取りて候——。

という具合である。日航や国鉄さんを利用した時代ではないから、その商売熟心なことには感心するほかはない。彼らの誘拐罪については山椒太夫の伝説などが有名なもので、対王丸安寿の姫、人商人に誘拐され、三荘太夫が手に渡り、賤が手わざの鎌拐、汐汲桶の重きより、云々（由良港千軒長者）などと、志願もせぬのに哀れ奴隷の境涯に喘ぐのである。誘拐の具体的方法はというと人買人、今日は東寺辺、作道のあたりにて人を買はばやと思ひ候（中略）声を立てては叶ふまじと髪を取って引伏せて、綿襠をむづと鉄め、畜生道に落ち行くかと泣声だにも出でざれば——（隠岐皖）

というやり方で、これも舞台は京都だ。人を捕へて勾引して売るもの、猿襠とて物云はんとすれば舌切るものを含ませしとぞ——（塩尻）

などというのもあって、ただの狼襠ではないらしく、専門家ともなれば残酷なものである。

当時の誘拐は「人買い船」の伝説があることからも知れるように、船を利用したものらしい。犯跡をくらまし、輸送に便利だ、とい

う一石二鳥を狙う方法だったわけである。

拐った娘達を、猿轡をかました上で船底へ括りつけておくのだ。

「人買ふ舟は沖を漕ぐとも売らるる身を、ただ静かに漕げよ船頭殿」（閑吟集）

などという文句も残されている。これが江戸期の寛文頃には「人買い舟が恨めしや、とても売られる身じゃほどに、静かに漕げりゃ船頭どの」という小唄に転化したが、こういう人買いや人拐いに材を取った歌や文章を拾ったら、限りがないほどに多いのである。

いかに彼らが、長い間、各地で毒牙をふるったかがわかるというものだ。

古くは延応二年に「人倫売買停止之事」と「人倫売買停止之事」という法律が出され、江戸時代には元和五年、寛政四年、万治元年等、たびたび婦女誘拐罪に関する法令が出ているのだが、順序として以下、女達の売られ行く先江戸の遊廓の歴史をざっとたどってみよう。

## 大義名分的屁理屈

天正十八年（一五九〇年）徳川家康が関東の領主として江戸に入城すると、それまでの一漁村がにわかに城下町と変貌し、市街が繁昌した。娼婦や、その抱主も各地から移住して来た。「慶長見聞記」によれば、当時、売春宿が二、三軒ずつ各所に出現し、やがてブームの様相を呈するに至ったので、慶長の初め、一度これを箱根以西へ追放したことがある。

だがその粛清も束の間で、淫風再び抬頭した。慶長十年のことである。

この時の出願は採用されなかったが、彼は旧にまさる状態になったので、家康は心境の変て追放の儀を献じたところ、家康の心境などいつまた変化か黙許主義をとったため、沙汰止みとなってしまった。「事跡合考」は、この間の事情を

御入国以来江戸市中所々に、追々遊女宿出来候節、御年寄御停止にも可レ被二仰付一や、諸士の惰弱に罷成候はん儀如何と奉レ伺候ところ、神君（家康のこと）上意に、日本国中の諸武士末々の者に至る迄江戸に来て諸国になき楽みを致さんと存じ勇み寄るこそよけれ。苦しからざる間、その分に永々さし置候へとの御儀にて、未代に至り遊女町御城下に並び置れべしと云ふ。此こと老輩の申置くところなり。

と伝えている。「苦しゅうない、勇み寄れ」の上意で、遊女屋は大繁昌、江戸は売春のメッカと化した。

当時、江戸売春業者中のボスで、小田原の浪人庄司甚右衛門という者がいた。

彼は、京都島原遊廓の向うを張って江戸にも公認の売春マーケットを造ろうと、かねてから企画していた男だったので、タイミングをはずさず遊廓設立の許可を幕府へ申請した。慶長十年のことである。

粘りに粘った。家康の心境などいつまた変化を来たすかわからない、禁絶主義に転じ廃娼命令など出されたら飯の食い上げだ、という腹である。

慶長十七年、彼は再び遊廓設置を請願した。ただし「諸国になき楽しみを満喫させたい」などという理由はつけなかった。いつの時代でも、こういう連中は大義名分めいた屁理屈を並べ立てるものである。

彼が伝奏所（後の評定所）へ呈出した陳情書「三箇条の覚」の全文が現代に伝えられているが、それを現代文でダイジェストしてみる。

一、江戸に一定の傾城町が無く、遊女屋が散在しているのは風紀上不得策であります

す。客は情欲に任せて長居を続け、家を忘れ職を忘れ、果ては遊興費捻出の為、横領などの悪事に走る者も少くないのです。遊廓が官許となれば、遊女屋を一箇所に集めて監督し、一日一泊以上はさせない規則で営業します。

一、婦女誘拐は前々から御禁制であります が今だに誘拐事件は絶え間がなく、江戸府内お膝元でさえ行われております。また、知能犯も現われ、少ない身代金で種々とインチキを致し女を集める不届者も居ります が、遊廓官許ともなれば、この面も監視し不祥事をドシドシ摘発致します。

一、近年ようやく平和が訪れましたが、まだまだ徳川打倒を企てる不逞の浪人などが居ります。また、犯罪者等もそうですが、金さえ払えば幾日でも泊れる現在の遊女屋は、それらの者にとって絶好の隠れ場所となっております。遊廓が公認されれば、組織的にこれらの者を告発する事ができます。

以上、御公儀様の広大な御慈悲を以って何卒御許可下さい。

という内容である。売春防止法でゴタゴタしたころに全性連、すなわち全国性病予防自治会なるものが「公娼は性病の防壁でアル」と称したが、この時の趣意書はもっぱら防犯をテーマとした。ことに第三項などは新興徳川政権の弱点を看破、急所をズバリと衝いている。

もっとも、犯罪者が売春宿へ隠れる公算が大なのは確かに事実で、現代で犯罪捜査上の常識となっている。

## 吉原遊廓の誕生

庄司甚右衛門の陳情書は、町奉行米津勘兵衛の手を経て時の執政に披露され、翌十八年の春、彼は伝奏所に召出されたが、その後、元和三年迄の四年間は何らの指揮も下らなかった。

老中本多佐渡守は願意聴取の上、追って何分の沙汰ある旨を申し渡したが、その後、元和三年迄の四年間は何らの指揮も下らなかった。

この間、大阪冬の陣、夏の陣の戦乱があり徳川幕府としても売春対策どころではなかったのである。

元和元年の夏の陣により豊臣氏が亡んだのを置土産として、翌二年の四月十七日、家康は駿府城で死んだ。七十五才である。家康はいわゆる大御所として駿府に隠居してからも豊臣氏が存在している間はやはり心配だったとみえて、みずから諸事を決裁していたが、大阪滅亡後はようやく安心を得て、政務万事を秀忠に委せた。

嗣子の秀忠はすでに三十八才の壮年であり将軍職を継いでから十二年も経ていて、家康流の施政方針を完全にマスターしていた。

彼は制限主義をもって売春問題に対処した。開廓を許可し、私娼を禁じたのである。

元和三年三月（一六一七年）庄司甚右衛門を再度伝奏所に召喚、本多佐渡守は奉行列座の上、遊廓の設置を許可し、建設用地として日本橋葺屋町附近へ二町四方の土地を指定した。その際、五ケ条の法文を定めたが、以来その法文は「元和の御条目」と称され、江戸三百年を通じての遊廓取締りの根本法規となった。

御条目

一、傾城町之外傾城屋商売不レ可レ致、並に傾城町囲之外、何方より雇来候共、先々へ傾城遣候事向後一切可レ為二停止一候事

一、傾城買遊び候者、一日一夜より長留致間敷事

一、傾城衣類、惣て縫金銀之摺箔等一切着せ申間敷候、何地にても紺屋染を用ひ可申事

一、傾城町家作普請等、美麗に致すべからず、町役等は江戸町之格式之通、急度相勤可申事

一、武士町人躰の者に不限、出所慥ならず不審成るもの致二徘徊一候へば、住所致二吟味一、弥以不審に相見候はゞ奉行所に可二訴出一事

右之通急度相守可申もの也。

要するに、売春の独占権を与えると共に、警察権の一部を附与して私娼検挙に協力せしめ、浮浪人密告の義務を負わせ、公娼の廓外売春を禁じ、娼家の家屋構造、及び遊女の衣服に制限を加え、あわせて市内町家と同様の租税を課することを規定したのである。

この許可に際し、幕府は一石五鳥ほどの狙いを持っていた。

散娼より集娼の方が諸事について便宜である。慶長元和の戦で敗れた浪人、及び殺伐だった当時の人心を緩和させる必要があった。

参観交代のため江戸へ登る諸侯の家来の大半は、道中でも江戸詰の間でも、女性を同伴することが許されなかったので、彼等の性の渇きを合法的に調節する必要があった。発展途上の江戸の都市計画として、遊廓附近を市街として繁昌させる必要があった——というような諸点である。

幕府の指定した葺屋町附近は、現在の日本橋和泉町、高砂町、住吉町、灘波町の辺りだが、当時は一面に葭の生茂る落漠たる沼池だった。

甚右衛門をリーダーとして売春業者達は、この沼を埋め地を固め、元和三年から普請を開始し、大門を東に建て通路を南に開き、翌四年の十一月、二十四軒の妓楼と十八軒の揚屋

を建築し、営業を開始した。
庄司甚右衛門は、幕府から新興傾城町の名主に任ぜられ、名実共に大ボスとして君臨した。もっとも、それまでには反目対立する業者との勢力争いなどもあったが、よく云えば実行力に富み、悪く云えばはなはだずうずうしかった甚右衛門に軍配は上げられたのである。
傾城町の名は、最初葭原と称されたが、間もなく、もっと景気のいい名を、というので吉原の文字に改めた。
かくして吉原は江戸の名物となり、新奇を好む人々が日毎に群集し、数年の間は繁昌をきわめた。

## 湯女抬頭

吉原の人気も、開廓後三四年目に至ってガタ落ちとなった。私娼に押されたのである。
当時、江戸市中に湯女という私娼が発生し移り気な江戸っ子は地の利の悪い吉原を敬遠し出した。
「落穂集」は当時の吉原を――、
昼の中は諸人参り候得共、其道筋左右共に葭原の中にてぶっそうに有之候に付、暮るれば人通り無之故渡世致難き、云々。
と記録している。
人気挽回策として、女歌舞伎、勧進舞、蛛舞、相撲、浄瑠璃等を廓内で興行し、人を招くことに腐心したが、大した効果も上らず依然として「渡世致し難き」のままであった。
そうなると吉原の楼主達は、五ケ条の売春法規などに義理立てしてはいられなかった。
自分達にとって好都合な部分だけを守ったのである。
不運な女達を性の奴隷として酷使し、悪銭を掻き集めて安楽に暮そうという連中のことだから、金にさえなればどんな闇営業でもあえて辞さない精神が、もっぱら旺盛であった。
たとえば、婦女誘拐、出張売春、連日連夜の流連等は依然として絶えなかったのである。
遊廓外へ出張して売春することを「町売り」と称し、神社仏閣への参詣を口実として活撥発掘する。彼らの中には、巡礼、万歳、虚無僧などに変装して諸国を遍歴し、巧みに役人の眼を欺いて女狩りを行う者なども少くなかった。
むろん「あなた買います」という具合の紳士的な手段は少く、「あなた拐います」の方が圧倒的大多数であった。
スカウトのしかたがあまりにも悪どいので幕府は元和五年に人身売買厳禁の布令を発した。

一、人を誘拐し売り候者死罪
一、人を買ひ取り、それより先きに売り候もの、百日の牢舎、その上過銭その分限を越えて可二掛申一候。若し不レ出者は死罪
一、勾引され売られ候者は、その本主へ返すべし
一、人売買の儀久しく仕候者は死罪

という厳重な法令であったが、法網をくぐる人買いは、やはり絶えなかった。
女性専門の人買いのことを、当時「女見」と云ったが、女を衒るのが商売なので「女衒」という名に転じ、さらに転訛して「ぜげん」と呼ばれるようになった。
客の中、金のある者は何日でも泊り込み、挙句の果ては、辻斬り強盗を働いて遊興費を

稼ごうという、白井権八みたいな不良青年や家庭の事情に追い詰められて遊女と心中するような者も現われた。大義名分は完全にケシ飛び、悪影響のみ増大した。

ことに心中は、江戸時代、大阪の遊女の間で大流行の現象を呈し、後に関東にも移入され、一般市民や大名旗本にまで浸透した始末のよくない自殺形式である。

この伝統は現代にも引き継がれ、日本は世界に類の無い心中王国としての名声（？）をほしいままにしているのである。

## 新吉原

寛永から正保、慶安にかけて江戸市中の丹前風呂は全盛をきわめ、グラマー湯女の存在は遊女をして失業をもさせかねないまでになった。吉原のボス達は伝家の宝刀たる陳情をしきりに行ない、それかあらぬか、慶安年間に丹前風呂が禁ぜられ、吉原は息を吹き返した。

その後幕府は「江戸の中心部に遊廓があるのは好ましくない」と考え、吉原遊廓の移転を決定した。明歴二年十月のことである。

一、只今迄昼計商売致候得共、遠方へ被レ遣候代り、昼夜の商売御免の事

一、御町中二百軒余有レ之候風呂屋共、悉御潰し被遊候事

一、遠方へ被レ遣候に付き、山王、神田両所の御祭礼、並出火の節火消等の町役御免の事

一、御引料として御金二万三千両被レ下候（小間一間に付き十四両ならし）

という、ばかに優遇した立退き条件であった。移転先は本所または浅草千束の二ケ所で選択の自由が許された。

翌明歴三年正月の十八日、明歴の大火、いわゆる振袖火事が起り、江戸の大半は焼野原と化した。吉原遊廓も灰となった。

幕府はこれを好機として移転を迫り、遊廓側は浅草を撰んだ。

六月の半ば、吉原二千の遊女が移動を開始した。徒歩で行く女もあり、駄染み客の屋形船に乗って川から行く女もあり、馴染み客を見物にに丹前風呂が禁ぜられ、吉原は息を吹き返した。

その後幕府は「江戸の中心部に遊廓があるのは好ましくない」と考え、吉原遊廓の移転を決定した。明歴二年十月のことである。

一、只今迄は二町四方の場所被二下置一候事

一、只今迄昼計商売致候得共、遠方へ被レ遣候代り、昼夜の商売御免の事

一、御町中二百軒余有レ之候風呂屋共、悉御潰し被遊候事

一、遠方へ被レ遣候に付き、山王、神田両所の御祭礼、並出火の節火消等の町役御免の事

一、御引料として御金二万三千両被レ下候（小間一間に付き十四両ならし）

という、ばかに優遇した立退き条件であった。移転先は本所または浅草千束の二ケ所で選択の自由が許された。

翌明歴三年正月の十八日、明歴の大火、いわゆる振袖火事が起り、江戸の大半は焼野原と化した。吉原遊廓も灰となった。

幕府はこれを好機として移転を迫り、遊廓側は浅草を撰んだ。

六月の半ば、吉原二千の遊女が移動を開始した。徒歩で行く女もあり、駄染み客の屋形船に乗って川から行く女もあり、馴染み客を見物にに集って来た暇な連中も数多かった、と伝えられている。

こうして、浅草田圃の中に新吉原ができたのである。

文字通りの「不夜城」が出現し、紅燈白燈の句が出るほどになった。

大名旗本や豪商等が金にあかして通いつめ万治年間の伊達陸奥守綱村の放蕩など、上流階級のスキャンダルも多かった。

延宝年間に出た「落書百物頭」の中には、「傾城狂いの頭」の項に、そのチャンピオンとして本多出雲守の名も挙げられている。

徳川中期、江戸文化が爛熟の極に達した元禄の頃には、吉原遊廓も最盛期を記録した。

## 半公娼と私娼

江戸も中期を過ぎた頃から、吉原は再び不振となっている。

岡場所と称する私娼街が各所にできたためである。「吉原は七面倒臭え格式だのしきたりだのがありゃあがってもしろくねえや」というのが江戸っ子の気持であり、安直手軽な私娼の方へ人気が集まったわけである。

武家政治の下、階級格式を重んじる武士の客が多かった吉原は、次第に煩わしい遊び場

となってしまったのである。

客よりも遊女の方が教養が高かった、というようなことになってくると「銭を使って恥をかきに行くこたアねえやな」というわけで長屋の八公熊公連中の足は遠ざかる。

武士、豪商、お上りさん等が主な客種となり、一般市民の人気は私娼の方へ集まった。寛政の初め頃には、江戸市中に五十数ケ所もの岡場所が繁昌していた。

他に「宿場女郎」というものもある。東海道の品川宿、中仙道の板橋宿、甲州街道の新宿、日光街道の千住の宿がそれで、以上を四宿と称し、おのおの売春宿があった。一応は「宿場の飯盛女」ということになっていたが、実質的には遊廓の公娼と等しい存在であった。

四宿は江戸の入口にあり、幕府はこれを黙認した。為政者としては、

「市中には吉原を官許し、四宿に飯盛女を黙認する。これを以って私娼の発生を防ごうと存ずる。何と名案ではござらぬか」というようなつもりだったかも知れないが、そうは問屋で御さない。非公認売春業者の方は「そんな片手落ちな話があるかってんだ！」とばかりに「新吉原で逢いましょう」の合言葉を粉砕するべく常に蠢動していたのである。

当時の私娼の有様は川柳などにも種々とよまれている。

天保十二年正月、十一代将軍家斉が死んだ後、老中水野越前守忠邦は天保の改革を行なったが、その時、江戸市内の私娼は「羽織」と称する岡場所だけでも二十三ケ所、それによって生活する者六千九百二十二人、を記録した。ところが、吉原の遊女は四百八十一人しか居なかった。「ずいぶん居るじゃないか」などと考えるのは早計で、当時から約五十年前の天明六年には、吉原の遊女二千二百七十余人（または三千九百人）を数えたのである。

この数字は、公娼が私娼に押されたことを雄弁に物語っている。

その吉原陣営も、出火焼失の後だけは岡場所なみに繁昌した、というからおもしろい。

焼失の後は仮宅営業というのが幕府から許された。

仮宅とは、遊廓再建までの間、吉原の外へ遊女達が一時引っ越しをすることで、主としては当時の岡場所への移転が許可となった。本所深川、両国、山谷等が多くの場合指定された。江戸時代、吉原が出火により仮宅営業を許されたのは実に二十五回の多きにわたっているのだが、この中、明暦の大火、安政の大地震などを除くと、ほとんどが遊廓内からの出火なのである。これがどうも売春業者自身の手による放火くさい。

仮宅営業が繁昌した原因は、岡場所同様の手軽な営業法を採用せざるを得なかったからである。当時、吉原の業者の中には、「遊廓焼失仮宅営業」をひそかに望む者が多かったと伝えられている。自家放火はあり得たのである。

## 徳川幕府の私娼狩り

幕府は、私娼に対する禁令を承応二年の頃から発布しているが、捕縛した私娼を吉原の売春業者へ無償で払い下げる法令が出た。寛文三年には、一年間で二百六十八人ともしたらしい。発令後約二十年を経た頃、喜んだのは吉原の業者達で、盛んに密告なすなわち天和三年には一年間で二百六十八人もの私娼が捕縛されて吉原の遊女になっている。このほか、武家屋敷で不義密通を働いた女を懲らす為、五年乃至は三年の間遊女に落

一、隠売女共、三ケ年の内、新吉原町へ取らせ遣す。

元文五年極

一、踊子共、右同断。

とある。たいして悪質でなく、初犯、または改心を誓う者等には、罪一等を減じ、

享保七年、延享二年極

一、隠売女いたし候もの、身上に応じ過料の上、百日手鎖とて所へ預け、隔日封印致レ候もの右元文五年極

一、踊子を抱へ置き、為レ致二売女一候もの右同断。

という刑を科した。罰金を徴収した上、百日間も手錠を嵌めておく、というのだから念入りなものだ。しかも、一日おきに封印したのだから、実に至れり尽せりである。封印をしないと手錠抜けをする者もあったのである。

他に、連帯刑として、家主、地主、請人、五人組等も処罰した。

特に重いのは、いやがる女房を説き伏せて売春をさせた亭主で、これは死罪となった。

しかし、貧乏で仕方なしに夫婦相談の上女房に売春をさせた場合はお構いなし、と定めすこともあった。業者達はそういう女達を、くじ引で順番を定めて受取った、と記録されている。

召捕られて吉原へ下された私娼は、終身無償で働かされていたのだが、享保八年「三ケ年の年期」と改められた。時の町奉行大岡越前守の温情主義による改正である。

「御定書百箇条」の中の「隠売女御仕置の事」という項には

享保八年極

られた。珍妙である。

当時、私娼を、隠売女、ばいた、綿摘み、切商い等と称した。「切商い」などは傑作で無理に現代訳するならば「不特定多数を相手とするショートタイマー」というようなことになろう。

私娼狩りが最も峻烈をきわめたのは天保の改革の時で、老中水野越前守は厳罰主義をとり、疑わしい女達をビシビシ縛らせた。

芸者、踊子、矢場女、酌婦、夜鷹、等がその対象であり、一時に五十人、三十人、と曳き立てられて行くことは珍らしくなかった。

天保年間に、一日に芸者二百人余、同じく四十六人等が捕えられた記録がある。

幕府は分類別に一斉検挙をしたもので、芸者なら芸者、隠売女なら隠売女と、一挙に狩り立てた。

芸者達の人別も記録されているが、最年長で二十五才、最年少は十五才となっており、大半は十代の女である。

隠売女の方は、四十五才の後家、三十五才の人妻、二十一才の後家、二十才の娘等、種種雑多である。

このころの、江戸伝馬町牢屋敷の記録として「牢獄秘録」は、

一、先年江戸町中の女芸者かり取られ、二百人余りの入牢の時は、女牢に入り切らず依之遠島部屋へ入れ候事也。右女乞食一々之れを改め（入牢の際、捕縛された者を裸体にして身体検査をするのである。女囚の場合は、牢屋敷に働らく女乞食が担当した）名主代りに遠島部屋へは女乞食入居たりしとぞ。（中略）此の時張番の者（牢屋下男）女芸者出牢の上其の宿々へ無心に行候事也。尤も数多の牢入にて、日暮れより夜の八ツ過ぎまで改めにかかりしよし。

と伝えている。夜の八つとは午前二時のことである。伝馬町の女囚は、普通三、四十人ぐらいのものだったが、こういう記録破りのできごともあり、一種壮観の様相を呈したのであった。

同じ天保の頃、浅草の田町、山谷の辺りに十四、五軒の女衒屋があり、相も変らず悪辣な繁昌ぶりを示していた、というのだから妙なものである。

中でも山谷の三八という奴がボス的存在だった。屋号を近江屋と称し、十数人の子分と地方に散在する女衒を配下として盛んに婦女を誘拐した。この男、逃亡を防ぐため夜間は女達を全裸に剝いだ上、縛り上げて就寝させあったに違いない。

中には、女達の処罰に手心を加えようと志した奉行なども居た。青年時代を市井の遊び人として過した、いれずみ判官こと遠山左衛門尉景元がそれで、彼が水野越前守へ送った書簡なども文献として残っている。

「吉原の遊女に下す場合、三年の年期ではかわいそうだから手心を加えても差支えないか？」という内容である。

しかし、私娼狩りは依然として苛烈をきわめ、ついに江戸市中の岡場所は掃蕩された。

也。尤も数多の牢入にて、日暮れより夜の

ために吉原の遊廓は久しぶりに息を吹き返した。この水野越前守の売春対策も、吉原は公認、四宿の宿場女郎は黙認したのだから、不徹底な片手落ちであった。

自分の夜具の下に女達の着物全部を敷いてその上で眠った、というから悪どい。

結局、水野越前守の改革政策は社会の反感を買い、天保十四年九月十三日、老中を免官となって失脚した。

その後、私娼は再びふえ始め、一斉検挙も続いたが、ついに根絶やしとはならず明治維新も間近い文久元年の九月、両国、浅草辺りの私娼が一日に九十余人も縛られ、牢送りとなったりした。

翌文久二年に至って女達の刑が軽くなり、「三年間吉原の遊女に下す」のを「三十日間の手鎖」で済むことになったが、すでに国情は内憂外患、売春対策どころの沙汰ではなくなり、間もなく徳川幕府は瓦解したのである。

## 牛馬きりほどき

明治五年六月五日、ペルーの商船マリア・ルーズ号がマカオから支那人苦力奴隷二百三十一人を乗せて横浜に寄港した。

ある夜、木慶という奴隷が虐待に耐えかね船から脱出して日本官憲に救助を求めた。

神奈川県令大江卓は、人道上の見地から、ただちに同船を捕獲、奴隷を全部解放してしまった。

このため日本とペルーとの紛争となり、わが国最初の国際仲裁裁判が起り、ロシア皇帝アレクサンドル二世の裁決により日本の勝訴となった。

ところが、この事件の審理中、ペール側の弁護士ディケンスは、

「奴隷売買はアメリカを除いて世界各国が認めており、日本では特にはなはだしい奴隷制度が現存しているではないか」

と抗弁し、証拠として

「遊女年期証文の写し」

「横浜病院医治報告書」を提出して公娼制度に言及した。

この時の一言が当局を刺激し、ついに明治五年十月二日、政府は太政官布告第二百九十五号を発布して全国の遊女を一斉に解放した。

すなわち「娼妓解放令」であり、法令の文中に

「娼妓、芸妓は、人身の権利を失う者にて牛馬に異ならず……云々」

とあるところから、世人はこれを「牛馬きりほどき」と云った。

しかし、外交上の行きがかりから何の用意もなしに突然実施したので、女達の多くは再び私娼に逆戻りをしたため、政府は明治八年これらの女達を狩り立て、元の公娼にした。

全くの龍頭蛇尾であった。

しかし、これを契機として廃娼運動の火の手が上るようになり、長い間かかって、やっとそれが実現したわけだが——さて、名にしおう「ザル法案」の事だから、この先、果たしてどうなりますことやら?

要するに、どの時代にも共通して云えるのは

「女達を解放するだけではだめだ」

ということなのだ。

解放したり逮捕したりは、権力さえ持たせれば誰にだってできる。

権力を行使するだけの政治ならば「泣く子と地頭——」

の江戸時代へ逆戻りだ。

結局「よい政治を……」の一語に尽きるのだが、残念ながら現代の日本は、政治家が未曾有の大不作なのである。

Maso 綺談

# 惣太の黒魔術

★あいつにやれることが俺にできないことがあるか！　惣★

★太はギラギラ光る白刃をにらんだ。美しい美佐の横顔！★

## 祭

男は右手を高々とあげた。

親指と人差指につままれて、くっきりと青く晴れた空に細い銀の光が突きささる。

畳針——。

周囲を取巻く群衆の目が、等しくその銀光に集まる。みな息を呑み、瞳を凝らして、次に展開するシーンの、凄惨と驚嘆に早くも期待をかけ、肩を震わして見守った。

プツリ！

低い、あるかなきかの音が、数百人の鼓膜を鋭く衝いた。あ……という低音の嘆声が群衆の輪から、その中心にいる男に向って一斉に吐かれ、男の陽やけした小麦色の半裸体にはね返った。

見よ！　左の上搏部の、栗色の膚を縫って陽光をまぶしく反射する畳針！

不敵な笑いを浮かべた男は、落着いて囲集する人の輪をぐるりと見まわし、また一本の畳針を取りあげた。すっくと虚空に直立したとみるや、ゆるく大きく孤を描き、左の上搏部へ直角に進む。男の頬骨がピクッと引緊って口元が真一文字に結ばれる。

プスリ……。先の針と並んで、隆々たる筋肉を刺し貫く。続いてまた一本——。

群衆は男の一挙手一投足ごとに、あたかも自分たちが畳針の洗礼を受けるがごとく錯覚し、心の中に畳針の痛苦を感じることの快美に酔いしれていた。もうこの輪の中には、神楽の太鼓、打上げ花火、かまびすしい露店商人の売り声、絶えず風に乗って流れる祝詞の声……等々の一切は侵入の余地もない。鎮守様の祭礼とは全くかけ離れた白昼夢の世界だった。

男はまたニヤリと笑った。

今度は畳針より数倍もの太さと長さを持つ千枚通しを取りあげる。針を数本刺しとどめた左手が、高いのど仏を突き出した顎の下の皮をまさぐり、つまみ、ゆっくりと右手を回転させ、千枚通しの先端をのどの皮に触れ、呼吸を整えるために、一旦動作を休止させた。

尖端が二、三回、往復の予備運動を繰返すと、もう群衆はその新たな奇蹟の完成に、体をぞくぞくさせる好奇と戦慄を覚え、男の手

新島純　尾崎芦屋　画

に握られた千枚通しの尖端を見守った。

プスッ！　千枚通しは男の手を離れ、満足そうに笑みを洩らして群衆を見回す男ののど元に、深々と突き立っていた。

惣太もまた、ほかの者とおなじく、男の玄妙な術に酔いしれていたひとりだ。いや、ほかの者より以上に、この男の行う奇蹟の妖しい魅力に感嘆し、引きつけられていたのだ。

――どうしてあんな荒々しい、超人的なことができるのだろう？　俺もああいう術を覚えたいな。――この俺がみごとに首へ針を刺したら、誰でもが驚き、喝采し、俺に尊敬と畏怖の念を持つだろう――

「さて諸君！　吾輩がかように突飛な行いをして見せるのは、投げ銭抛り銭をいただくのが目的ではない。この術は世界的に知られた東洋のブラックマジック、訳して黒魔術というインドから伝わった秘法だが、鍛錬次第で誰にでもできる。かの猿飛佐助をはじめ、数多の忍者が使った術はすなわちこの黒魔術の応用、人知の開けない昔は神秘の術とされていたものだが、文明の世の中、ありがたいことに誰にでもできるように説明された本となって諸君の目にも触れることになった。――この本一冊あれば諸君はすぐに猿飛佐助、霧

隠才蔵となることができる。もっとも、姿を消して人の家へ忍び込んだり、婦女子にけしからぬ振舞いをする者があると困るので、その筋からの申入れでその項は抜いてあるがー。さっき行った簡易護身術、焼火箸手取りの法、これ見られる通りの針刺しの術、はては真剣手取りの秘伝、白刃渡りの奥儀に至るまで、一読即実行可能、親切ていねいな解説総ルビつきで細大洩らさず書き記されている。研究してみたいやって見たいと思われる方に、今日は吾輩の師匠、インドはガンジス河の畔、インド最大の聖都ベナレスに住むユガ行者シーメル長老の入滅の日、すなわち命日だから、定価五百円の貴重な本だが特に斯道普及のため、半値の二百五十円もいただかないタッタの百円、タッタの百円で特別にお分けする。安いもんだ。これ一冊で男性は日本のスーパーマンになり、女性はいやらしい男性を撃退する武器を持ったも同様、――へイ只今、へいそちらも一冊、へい学生さんも……」

数冊の本が瞬く間に売れた。

客が途切れると、男はのどに刺したままになっている千枚通しに、短い麻紐の輪を作ってひっかけ、かたわらの満々と水を充たした大バケツに、紐の一端を結びつけた。のどの皮で満水のバケツを吊りあげようというのだ。

上半身を前こごみに、キッと仰向いた顔が一時に紅潮する。頬、腕、胸、肩……あらゆる筋肉が、グッグッと盛りあがり、彫像のような均斉のとれたみごとなフォーム、力量感に溢れた美しさに群衆は圧倒された。

徐々に体を起こすと、それに伴ってバケツが地面を離れる。

――全くすげえや、俺もやってみたいなー百円か……前から心掛けていた綿ギャバのズボン買うの、もう少し延ばせば……いやいや、もういまはいている作業ズボンだって相当いたんでいる。――でもう一と月くらい我慢できるかな?――

頭の中で黒魔術虎の巻とズボンがどうどうめぐりをしている惣太を、隣からお嬢さんの美佐が小突いた。

「惣太、あれ欲しいんでしょう。買ってあげようか。その代りお前、よく勉強して黒魔術を覚えなければいけないわ」

思いがけないお嬢さんの言葉に、惣太は子供のように一つ大きなコックリをする。急に嬉しさがこみあげてきたからだ。

# 紐

惣太の家は代々長尾屋の「名子」だった。

昔からの農奴のしきたりは、戦後の解放運動で滅びたとはいえ、潜在的にはいまだに大屋(地主)と名子(小作人)の関係は古い因習の殻を温存している。東北の山村では殊にそうした傾向が強く残っていた。惣太の家も一時は解放田地を手に入れ、自作農になった喜びに浸ったが、相続く凶作にその田もまた大屋へ逆戻りの上、多額の借財が残ってしまった。

惣太は借金のカタに、大屋の農奴として働かねばならなかった。しかし彼自身は身売りの境遇をむしろ喜んでいたくらいだった。仕事さえ精出してすれば、家よりもうまい食事が多量に与えられ、下から馬糞のにおいが板の隙間からあがろうと、狭いながらも納屋二階に自分の部屋を当てがわれ、比較的思いやりのある老主人の元でその日、その日を送る。まず不足のない生活だった。

今日は午後から雨、さして忙がしくないときなので、部屋で横になり、お嬢さんに買って貰った『黒魔術大全』を取り出した。

――お嬢さんは親切だな。一粒種のわがまま娘だとの評判だが、案外やさしいし、俺と

同い歳の二十二だっていうが、まるで姉さんのようにいたわりがあるし——俺、お嬢さん好きだな——。

ふだんはあまり近寄ったこともないお嬢さんに一日中付き添っていられた祭の日が、惣太には光栄ある思い出となっていた。いつも暇があるとまッ先に考える習慣となってしまったのは、惣太の胸に、ある憧れがきざし初めたからなのだろう。

「惣太、いる？」

上り口から白い顔がのぞいた。いま思い出していたお嬢さんの美佐だった。反射的に起きあがった惣太は、棟木に頭をぶつけそうになって、あわてて首を縮めた。

「黒魔術勉強した？　なにか一つくらい覚えたでしょう」

男臭い納屋二階に、化粧品の匂いが華やかに流れ漂った。

「へい。縄抜けをやってみたんです」

「まあそう——わたしが縛っても解ける？」

壁にかかっていた細紐で、惣太の前に揃えた双の手首を、美佐はギュッと結んだ。

「ほら、これが脱けられる？」

美佐の言葉より早く、左右の腕は離れ離れになっていた。惣太は得意だった。

「あら、——じゃあもう一度！」

また細紐が巻きつけられる。今度は前より念入りに堅く縛った。しかしそれも惣太は雑作なくはずしてしまった。

「ようし！　それではもう一辺！」

美佐は上気した顔で、三度目の細紐を惣太の手首に巻きつけ、今度こそは、と意気込んで渾身の力を出して強く締めようとした。

「……」

不思議な刺激が、惣太の手首から電流のように体中を素早く回り、快い麻痺を誘って脳の芯へ突き抜けた。

外界の春雨に湿った空気が室内に入り、温かくむれて、美佐の体臭を放散させている。二つの拳は、知らず知らず近寄った美佐のセーターの上から、ふっくらとした双丘の谷間に触れていたのだ。

ハッとした気のゆるみに、思わず手首の力を抜いた。得たりとばかり美佐は、細紐をギュッと締めつけ、堅い結び目をこしらえた。いつの間にか膝と膝が押し合って、どちらもじっとりと汗ばんでいる。それすらも気のつかない美佐は、

「今度はもう脱けないわ」

と勝ち誇った顔で惣太を見つめた。

実際、いままでと違って、なかなか脱けなかった。苦心してあれこれ手首を動かしてもかえって細紐は強く喰い込むばかり、両の手首には紅い痕がつき、ヒリヒリと痛みさえ感じてくるのだった。

「……うーむ……これくらい……」

「おほほほ——。どうやらわたしの勝ちらしいわね。ひとりで解けるまで、苦しむのね」

愉快そうに笑う美佐は、惣太の拳に紅く小さな形のよい唇をちょっと押し当て、すらりと立ちあがった。

上り口からすんなりした足が、緑のスカートが、桃色のセーターが順に沈んで消えて行くまで、惣太は細紐を脱ける作業を止め、じっとそのうしろ姿を見守っていたが、また思い直して腕を動かしてみた。

だが頭の中では、美佐の体臭、ふと触れた胸の柔らかな弾力、膝から膝に伝わった彼女の血管の脈打つ音——それらが混然となって甘酸っぱい悩ましさをかもし出し、切めて知ったやるせない気持が体全体をけだるく取り巻き、縄抜けなぞはどうでもいいと考えるようになった。手首を結ばれたまま、ゴロリと横に寝ると目をつぶった。拳の先の、美佐が唇を触れた個所だけが、まだ温かみを残して

いるような気がする。そっと自分の口にその個所を当てると、口紅の匂いが微かに鼻を衝いた。

——お嬢さん——

低く口ずさんでみた。いままでは主家のお嬢さんとしてしか考えなかった美佐が、ひどく近い存在になった喜びが、身内を熱く駆けめぐり、手首の痛さもそれを祝福する感覚の変形に思えた。

——お嬢さん——

もう一度、呟いてみた。目の大きな、彫りの深い顔が、瞼の裏に迫ってくる。唇は口に当てた両の拳をめがけて、紅い唇が近寄る。唇は拳を越え、惣太の唇に、ぬめらかな湿りを与えるべくクローズアップされた——。

全身が火のように燃え、充実感が体の隅々にまで行渡り、あらゆる関節、筋肉が精一杯に伸張し、思わず「わあッ」と意味のない叫び声をあげてみたい衝動が、瞼の裏を真ッ赤に染め、美佐のおもかげを消していた。

気がつくと、全身汗びっしょりに濡れ、冷たく肌にまつわる下着が、むなしい夢のあとの空々しさと悲哀を物語っている。

# 針

いつの間にか、腕は細紐から脱けていた。

その日から惣太の秘密の喜びが、この世の生き甲斐となった。陽の光も空行く雲も、風のそよぎ、星の瞬き、なにもかもが彼の得たしあわせを祝福しているもののようだった。胸の中にはぐくみ初めた幸福感は、日ごとにふくらみを増す木々の若芽のごとく生命力に溢れていた。

美佐は夜ごとに納屋二階へやってきた。

縄抜けはしばらくふたりの間の興味となっていた。惣太には縄抜けそのものより、縛られるときに美佐の手がわが体の一部に触れ、間近く顔を見つめ、香りを嗅ぐことのできる嬉しさで夜ごとを期待していた。きつく縛られれば縛られるだけ手首の痛さが幸福感に比例して強まる。脱ける時間の永さは美佐の顔を見、声を聞くことの永きなのだ。

このごろでは単に手首を前で縛るだけでは物足らなくなっていた。紐の残りを裸天井の棟木にかけたり、うしろ手に縛ったり、手首と足首を背中へ回して縛ったり、美佐はさまざまな工夫をして惣太を試した。

縛り方が複雑になると、それを脱ける手段も困難になり、永い時間には不自然にたわめられた体に、苦痛が襲いかかってくる。惣太にはその苦痛が、たまらなく快く感ぜられ、いたずらそうに見守る美佐の瞳の下で、もっと永くこの苦痛が続くようにと、しばしばたやすく脱けられる腕を休め、痛みの感覚を楽しく味わうのだった。

ある晩、例の通りやってくると、美佐はそう言った。

「今度はどれを研究する？……そう、あの日見た針刺し、あれがいいわ。ねえ惣太」

「でもお嬢さん、俺、畳針じゃ、少しこわい気がする」

「大丈夫！　初めからあんな太いもので やらないわ。まず縫針くら

いから始めるの」
「だって……痛いな……きっと痛いよ」
「意気地なし。そのくらいで尻込みするようじゃあ、男じゃないわよ。——お前、伝染病の予防注射したことあるだろう。あれとおんなじよ。むしろ、痛みは少いかも知れない。縫針なら、注射針よりずっと細いもの。——いいわ、わたし、すぐ針を持ってくるから」
惣太にはあえてそれを拒む理由はなかった。
美佐が母屋へ針を取りに行っている間、新しい冒険に対する勇猛心が、胸の中に強く湧き起こった。
——あの美しいお嬢さんの、白魚のような手で、俺の腕は針を刺される。痛くなんかあるものか。ほんの少し、ピクッと筋肉が痙攣するだろう。それよりも、お嬢さんの手が俺の腕を持つときの、たまらない感触のほうが数倍も俺を喜ばせる。縫針より、畳針の太いやつがよかったろうか——

美佐が上ってきた。
「縫針持ってきたわよ。本に書いてあるようにやってみるのよ。さあ、腕をお出し」
惣太はシャツを脱いだ。ランニング一枚の茶褐色の上体は、急に夜気を受けて一時鳥肌立ったが、すぐ粟粒のような起伏は消え、若さの持つ弾力感の皮膚に戻った。
「さあ、刺すわよ」
左手で惣太の左上搏を押さえた美佐がいった。心なしか上ずった声だった。惣太の血液が緊張と興奮のために、だんだん速度を増して体中を駆けめぐる。上搏部の裏の、美佐の指が当っているところだけが、温かい感覚を残していてそのほかの神経はひっそりと眠ってしまったようだった。
ヒリッ！　とマッチの燃えさしを当てられる感じが、俺の一個所で起こった。
「ほら、簡単に刺せるじゃないの。痛くなかったでしょ」
美佐の声に、惣太は目を開いた。

いつの間にか目を閉じていたとみえる。

栗色の腕に、細い細い銀の光が一本、中央部を皮膚でおおわれて横になっていた。もはや痛みはさほど感じられなかった。

——ああ、俺もとうとう、縁日の男がやっていた針刺しができたんだ。どんなにむずかしく痛いかと思っていた針刺しができた。そしてそばには、満足そうに笑みをたたえて、お嬢さんが俺の勇気を褒めてくれる——

「できた！　お嬢さん、できたよ！」

胸の底から幸福感がこみあげてきて、惣太はそう叫ぶと「ハハハ……」と自然に大きな声をあげて笑い出した。いかにも満ち足りた明るい笑いだった。

「そらごらんなさい。やってみれば雑作なくできるじゃあないの。惣太は強いものの。——じゃあもう一本——」

惣太も今度は躊躇しなかった。

チクッ！　前よりは弱い痛さで、二本目の針もみごとに皮膚を刺し貫いていた。

「ホホ……ホホホ……」

「ハハハ……ハハハ……」

どちらともなく目を見合わせると、大事業の完成の喜びに哄笑し合った。

「今夜はこのくらいにして置きましょう。抜いてあげるわ。——あら、少し血が出たようね。あたしが血止めしてあげる」

針を抜いたあとに、小さな宝石のような血のにじみができた。美佐は懐紙でその紅い粒を押さえて吸い取らせると、濃いルージュの唇の間からしなやかな舌をそっと出し、惣太の腕に触れた。

ジーンと地の底が浪の底へ沈む快い虚脱感が惣太を襲った。最初の縄抜けのときのような雷撃が全身を走り、美佐が「また明日の晩にね」と立去ったのも、夢うつつだった。

体がカッと火のついたように燃えた。大きく呼吸をすると、窓の闇から菜の花の香りが飛び込んで胸一杯に悩ましさが拡がった。

——親父の借金のカタに年期奉公、昔の農奴のような俺が、豪農のひとり娘であるお嬢さんと、夜ごと会うことができる。幸福だ。俺は幸福だ！　ああ！　もっと危ない苦痛の多い術を、お嬢さんの前でやって見せれば、お嬢さんはますます満足そうな笑顔で、俺をほめるに違いない。——ようし！　明日の晩は、もう縫針なんかでなく、畳針か千枚通しを持ってきて貰おう。痛いことあるもんか。お嬢さんが目を丸くして、俺の強さを賞賛する。針を抜くと、今夜よりずっと多く血が出るだろう。お嬢さんの唇が、舌が、くすぐったく吸いついて、痛さを押さえ、血止めと消毒をしてくれるだろう——

惣太はみずからの空想にみずから酔って、煎餅布団の上を転々とした。胸先から甘い喜びが止めどなく湧き、腹の中までどんどん入り込んで行くと、みるまにそこも充満され、なにか叫び声をあげなければ、体のどこかでそれが爆発するようだった。

## 妬

「惣太あ、お嬢さんがお呼びだで」

作番頭の久助爺いさんが、大きな声で呼んでいた。春の遅い山間部の畠もようやく忙がしくなる頃なので、惣太も朝早く馬鈴薯畑の地ならしをやって、朝食に戻ってきたところだった。久助爺いは家族と一緒に物置の隅に住んでいるので、惣太と美佐の交渉は全然知らない。なんの用で惣太を呼ぶのか、また町へ買物に供をさせるのだろうくらいの解釈が、彼の思考の範囲だった。

美佐は離室を自分の部屋にしていた。植込みを回って建仁寺垣をくぐると、陽当りのいい南の縁側で、籐椅子にもたれていた美佐が

そのままの姿勢で声をかけた。
「惣太、こちらへおいで」
昼間の美佐は、納屋二階での彼女とは全然違った、冷然とした表情だった。
おずおずと惣太は縁にあがった。美佐と向かい合った籐椅子に、ひとりの男がいた。
長尾家の遠い親戚にあたる、盛岡の水島という医者の息子だった。幾度か美佐を目あてに遊びにきたこともあるので、顔は見知っていたが、度の強い近視で色の生ッ白い、服装には一分のすきもない瀟洒な身だしなみが、惣太にはひどくきざっぽく見え、好感の持てない男だった。
「水崎さんも黒魔術に興味がおありなんですって。惣太、お前の覚えた術をお目にかけなさい——。実は、わたしの誕生祝いの日まで誰にも見せないでいて、皆をアッといわせようと思ってお前を訓練したのだけど、水島さんがぜひにとおっしゃるの。やってくれるわね。針刺しだけでいいわ。お見せして！」
机の上に、畳針がうらかな光を吸って横たわっていた。今日はいつものように美佐がそれを手に取ってくれない。仕方なしに惣太は自分で畳針を取りあげ、左手でのどの皮をつまみ、プツッ、と突き刺した。
「ねえ、みことでしょう」
美佐の問いに、水島は、
「うん、うまいね」
と答えたが、さほど感心した顔もせず、惣太は絶大な賛辞を期待していただけに拍子抜けがし、いまいましさがすぐさま畳針を引き抜いてしまった。もちろん美佐の血止めのまじないは得られなかった。
「惣太君——といったね。君はよくその術を覚えた。しかし、理論的に研究すると、なんでもないことなのだよ。人間には、細くて鋭い針なら痛みを感ぜずに刺せる場所が、体中の至るところにある。この無痛覚点を知っていれば、誰でも針を刺せる。正確な場所さえわかればどこへでも刺せる。——僕自身が、この法は出ているはずだ」
と言ったが、惣太にはとっさにこの挑戦に応ずる自信は持てなかった。ガラスの破片は鋭角を上に向け、それぞれ違った方向にさまざまな色で光を反射させ、少しでも触れれば血を吸わずにはおかないように見える。
水島はシャツをかなぐり捨てた。色の白いわりに固肥りの、いい体格をしている。
「いいかい、見てごらん」
ガラスの上へ、水島は横たわった。
「本当なら、ズボンも脱いで、足先までやるしょうか、美佐さん。——惣太君も見物するといい。少し準備があるから、午後に、またここへくるようにするんだね。美佐さん、惣太君に午後の仕事、休ませてもいいでしょう」
そして惣太が午後にまた離室へ行くと、美佐の部屋の一隅にうすべりが敷かれ、その上に荒く砕いたビールやサイダー瓶の破片が隙間なく置かれてあった。
「……？……」
いぶかる惣太に、小馬鹿にしたような微笑を送っていた水島は、
「君はこのガラスの上で、裸のまま寝られるかい？　確か君の持っている黒魔術の本にもこの法は出ているはずだ」
と言ったが、惣太にはとっさにこの挑戦に応ずる自信は持てなかった。ガラスの破片は鋭角を上に向け、それぞれ違った方向にさまざまな色で光を反射させ、少しでも触れれば血を吸わずにはおかないように見える。
水島はシャツをかなぐり捨てた。色の白いわりに固肥りの、いい体格をしている。
「いいかい、見てごらん」
ガラスの上へ、水島は横たわった。
「本当なら、ズボンも脱いで、足先までやるしてお目にかけまし

のだが、背中だけでもわかるだろう。とても楽な気持だよ。新しいスポンジベッドの上にいるような心地よさだ。——美佐さん、ちょっときて、僕の上へ乗ってごらん、どんなに重量がかかっても、僕は平気なんだ」

美佐が水島の胸の上へ、まるでソファにでも腰掛けるように乗った。

惣太の体はワナワナと慄え、冷たいあぶら汗がこめかみを走った。妬ましさと恥辱感がもうこの光景を見てはいられない怒りとなって彼を室外に弾き出した。

——畜生ッ！　あいつめ！　俺より少しばかり術ができ、学があるからって、なにもあんなことを俺の前で見せつけなくても、いいじゃあねえか。俺だってあのくらいのことすぐできるようになる！　負けはしないぞ！

その夜惣太は村の雑貨屋へ行き、空瓶をあるたけ買って帰ると、二階の自室で砕き、美佐を待った。が、美佐は姿を見せなかった。

——あいつがお嬢さんを巧みに誘惑して、俺から引離したんだ。畠生ッ！——

胸の中がめちゃくちゃに嫉妬の炎で焦がされて熱かった。汗臭い布団を頭からひっかぶると、水島と美佐の楽しそうな遊戯——裸の胸に腰をおろした姿がありありと見える。

（どうです美佐さん、惣太より僕のほうが合気術はうわ手でしょう）

（全く、すばらしいわ。水島さんにこんな裏芸があるとは知らなかったわ。ねえ、わたしが上に乗っていて、痛くない？　こう、胸の上で暴れても……。どう？）

（痛くなんかありませんよ。美佐さんが一晩中乗っていても、僕は平気ですよ。上等のベッドに温い掛布団、いい夢を見られそうですよ……あはは……）

（……おほほ……）

水島が腕を伸ばし、美佐の肩を抱いた。ゆるやかに男の胸に倒れた美佐。

——畜生ッ！　あの野郎！　俺のたったひとつの楽しみを横取りしてしまった野郎、殺してしまえッ——

勃然と殺意が、悲しみの底から芽生え、惣太の胸からふたりの痴戯に彩どられた妄想をドス黒く塗り潰して行った。

## 穴

人間ひとりが、四ツん這いになってやっと入れるだけの横穴——。

（お誂え向きだな。もうそろそろあいつがやってくる。一週間の滞在中、まんまとお嬢さんを籠絡してしまった憎いあいつが、得意然としてやってくる。玄関からしばしの別れを惜しみながら表道を、きっとお嬢さんが雑貨屋の橋際まで送ってくるだろう。それからあいつはひとりだ。早瀬川を渡ってバスの停留所へ出るのに、この鬱陰の道が近回りだってことはよく知っていやあいつだ。ここを通りかかるのを待ち構えていて、スコップで一撃！　掘り出した囲い諧と交替に穴ごもりだ。へッ、ざまァ見ろ！　フ

フフフ……）

甘藷を掘る仕事も、惣太は自分の計画を頭の中で組立てることで楽しかった。

鶯が笹啼きを止め、ピイッ、と飛び立つ。

淡緑のコートに共色の帽子、紺のトラベルケースを下げ、ついに水島が姿を現わした。

「ほう、惣太君。今日はここで仕事なの」

なにも知らぬ馬鹿が！　もう一、二分で穴埋めになるというのに、人を軽蔑したような鼻声で、のんきに話しかけてやがる。

「お帰りですか」

「ああ。つい長くお邪魔しちゃってね。美佐さんがもう二、三日というんだが、そうそう遊んでばかりいられないからね。また美佐さんの誕生祝いにはお邪魔するよ。そのときには、余興に黒魔術の秘芸をお目にかける。君もそれまでによく研究しておくのだね」

「へい、じゃお元気で……」

水島は歩き出した。長身のうしろ姿に、若芽の吹き出した木々の影が流れる。

今だッ！

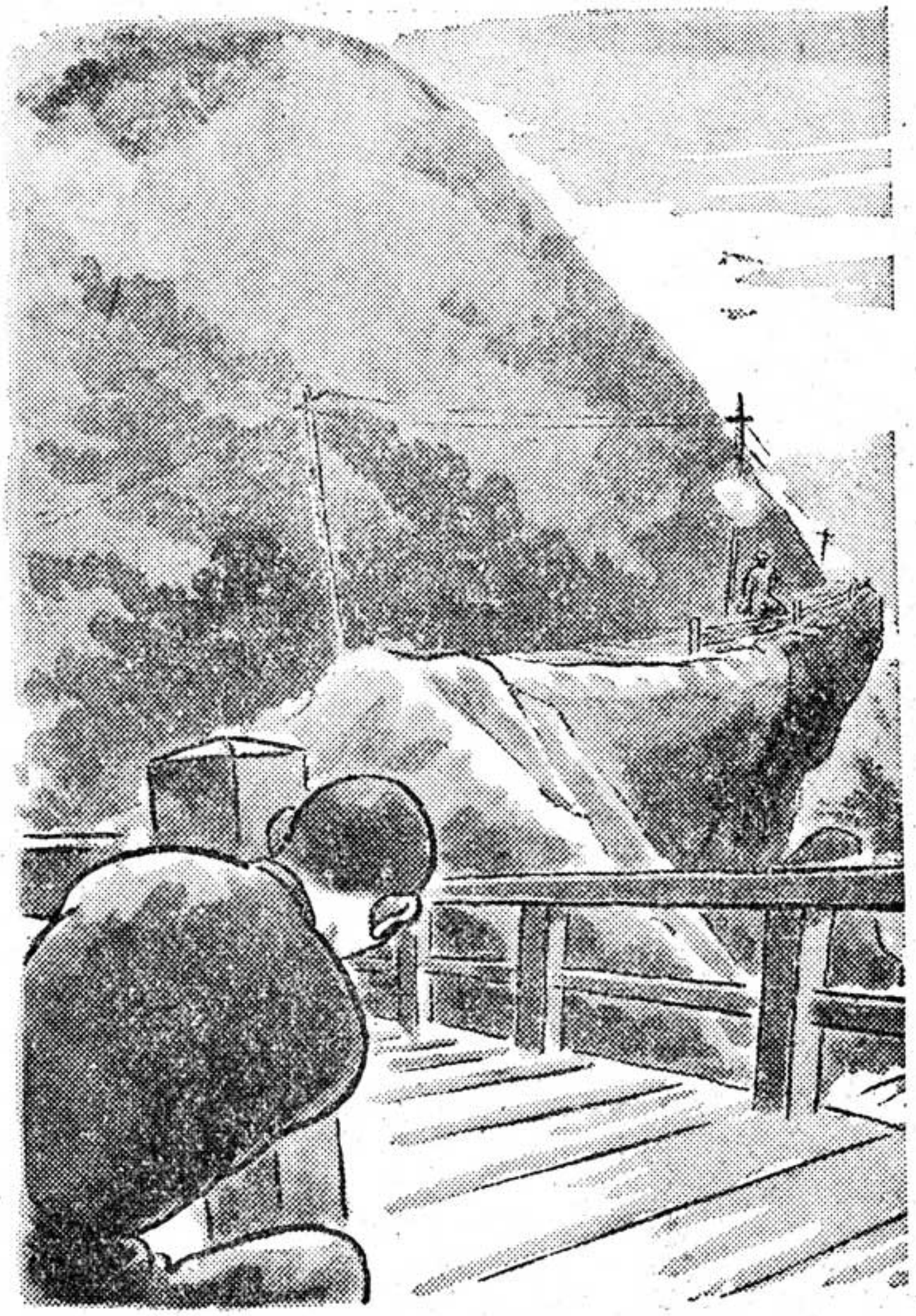
両の腕がスコップを強く握り締める。力まかせに振りあげようとした。

と、水島が立止った。

気づかれた！　動悸が両の肩を大きく波打たせる。毛穴という毛穴から、汗の粒が一斉に吹き出す。春の陽光が、カッ、と一時に赤く火を吹いて目を射た。

水島はズボンのポケットから、なにか小さなものを取り出した。ゆっくり前かがみになると、靴の上に手を伸ばした。

――なあんだ――靴が悪いんだよ。――さ、磨きあがった。では惣太君、美佐さんの誕生祝いまでさよなら」



しっかりしろ惣太！　このチャンスを逃がしたら、お嬢さんは永久にお前のところへ戻ってこないぞ！　自分を叱りつける声が、梢の彼方から聞こえてくる。さりげなく歩き出した水島に、喰い入るような視線で、またスコップを強く握り締め、一足、二足、膝の細かい痙攣を押さえて歩き出した。

「水島さーん。ちょっくら待たっし！」

背後から不意に声がした。久助爺いだ。年のわりに達者な足で、惣太の横を駆け抜けると水島に追いついた。なにか美佐が言伝てでも頼んだのか、歩きながら久助爺いが話している。その声ももはや聞こえない距離となり惣太の狙っていた絶好のチャンスも、ふたりの姿と共に去ってしまった。

## 崖

その日は、ふだんひっそりとしている長尾家もまるで花の咲いたようだった。近在に縁づいている美佐の叔母が三人、これは朝から台所の手伝いにきていたが、午後になると分家の者が四家族、学校時代の友人が八人、美佐の誕生祝いに集まってきた。長尾老夫婦も気嫌よく客をもてなし、邸内のどこからも明るい笑いと話し声が聞こえた。

「あらそうお――。黒魔術って、いったいどんなことをして見せるのかしら？」

「とても物凄いらしいわ。針を体に刺したりガラスの上へ寝たり、水島さんて人、インテリのくせにそんな忍術めいたものも得意なんですって。色白の、ちょっとハンサムよ」

「そこに美佐さん、魅力を感じたわけね。でもまだ当の彼氏、きてないじゃない？」

「盛岡からくるんですもの。駅へ着くのが昼ごろとしても、鳩の湯行のバスは一日に四本つが雑木林の近道から現われるだろう。バスきりでしょう。ちょうど昼の発車を逃したらの客で川のこっちへくる者は少ないはずだ。あとは午後六時半でなきゃあ出ないんだ。川に沿って橋おそらくあいつひとりだろう。――あ、果しの、きっとこの時間にこないとわ」

てやってきた。村道へ出た。夕闇の迫りが早いので定かには見えないが、緑のコート、共色の帽子、たしかにあいつだ。川に沿って橋まで百五十米、途中で断崖の曲り道がある。粗末な柵が墜落除けにある。電柱に裸電球が一個、危険標識を見おろしている。あいつが立ち止まってちょっと自分の足元を見た。案の定、ズボンのポケットからブラシを取り出した。

――さあ、これからだぞ！　近道は三日前の雨でぬかって、まだやわらかい。神経質なあいつが、電灯の下で必ず靴の汚れをあらた

「水島さんて方、早く現われるといいわね」

誰もがすでに見ぬ黒魔術に酔って、多大な興味と期待を抱き、デザート前の話題にしていた。

――現れるもんか。俺があいつの出現を、ぶっ止めてやるんだ。俺自身の黒魔術で――

惣太は邸を抜け出し、橋際の雑貨屋で焼酎をあおり、心の中でせせら笑っていた。

じっと橋を距てた川向うを見る。さっき微かにバスの警笛を聞いたから、間もなくあいつが雑木林の近道から現われるだろう。バスの客で川のこっちへくる者は少ないはずだ。おそらくあいつひとりだろう。――あ、果してやってきた。村道へ出た。夕闇の迫りが早いので定かには見えないが、緑のコート、共色の帽子、たしかにあいつだ。川に沿って橋まで百五十米、途中で断崖の曲り道がある。粗末な柵が墜落除けにある。電柱に裸電球が一個、危険標識を見おろしている。あいつが立ち止まってちょっと自分の足元を見た。案の定、ズボンのポケットからブラシを取り出した。

――さあ、これからだぞ！　近道は三日前の雨でぬかって、まだやわらかい。神経質なあいつが、電灯の下で必ず靴の汚れをあらた

めるだろう。ここまでは俺の予想も正確だ。
これからがイチかバチかの賭だ！　道の真ン中で靴を磨くより、ちょうど頃合いの柵の横木を利用したがるのが人情だ。三本ある横木の中央の奴が光線の具合がいい。俺は昼の間に、こっそり止め釘を抜いて置いた。横木は一見丈夫そうにたて杭に止めてあるようだが足を掛ければポロッと落ちる。下は早瀬川まで十米の断崖だ。岩にぶつかるか川に落ちて流されるか、どちらにしても命はない。そして新聞に〝崖から転落過失死〟と書かれる。
俺は全く局外者の立場だ――。
柵のそばへ歩み寄った。電柱に一番近い横木に足を掛けた。賭ははずれた。――あ、靴を磨く手を止めたぞ。首を捻じて電柱を見た。横木の足を地面に戻した。体を横にずらして隣りの横木の前に……。
足を掛けた。ひらり、小さな影が丸くなって電灯の光に浮かび、そして消えた。
――どうだ俺の黒魔術は！　とうとうあいつはお陀仏だ。もうお嬢さんと俺の楽しみを邪魔する者は誰もいないのだ。今夜の主役は俺に変る。アハハハ――
ついに惣太は誕生祝いの主役の座を得た。
二時間たっても姿を現わさない水島の代りに、美佐は客たちに黒魔術を披露してくれるよう頼みにきた。間近く美佐の顔を見るのは一ヵ月ぶりだった。
「あいつの代りなんていやだな」
なに食わぬ顔で納屋二階に戻っていた惣太は、内心ぞくぞくする喜びを押さえ、少しすねてみせた。
「ね、お願い。水島さんの代りでいやなら、お前自身の黒魔術を見せて！　お礼はなんでもするわ。お前の欲しいものを――たとえばあたしの体でも……。お前があたしを好きだってこと、前から知ってたの」
柔らかい十本の指が、惣太の両頬を軽く押さえ、濡れた唇が目の前に迫った。
久しぶりに取り戻した幸福と感激で、その夜の惣太は大車輪だった。
二十名近い客の賛辞、拍手を浴び、さっきの口づけの甘い名残りに意気軒昂の勢いで、縄抜けから火食いの術、人間針刺し、そしてガラスのベッドと披露を続け、得意の絶頂に達した。
腹の上に、あれほど憧れていた美佐がゆったりと腰掛けている。
――さまあ見ろ！　水島め、いまごろは早瀬川の底で、たっぷり水を呑んで石を枕に果てしのない黒魔術でもしているだろう。貴様が毎晩楽しんだお嬢さんは、今夜から俺が取り戻して、心ゆくまで楽しんでやるんだ――
「ええ次は黒魔術中でも奥儀とされている白刃渡りの秘術を、特に御紹介します」
「あら惣太、危いわよ。それはまだ一度も練習したことないでしょう」
美佐の注意も惣太は自信ある微笑ではね返した。そうだ。自信だ！　今夜の俺はどんなことにも自信がある。やってのけられる。
長尾家の老主人が趣味で集めた五本の刀剣が土蔵から取り出された。急造の台の上に刃を上向きに、等しい間隔に並べられる。
「ハッ！」
鋭い気合と共に、惣太の体が飛びあがる。素足を支えるのは、ドキドキした五本の白刃だ。右足が慎重に、しかも強い自信を持って一歩前に出た。そして左足が……。
客は一斉に固唾を呑み、緊張した空気が室にみなぎった。あの祭の日に惣太が空想した夢が実現したのだ。驚異と賛嘆が、吐息となって投げかけられた。
一同に会釈するだけに落着いて、惣太は自分でも自分の術の成功に酔った。
喝采が一時に湧き起こった。

そのとき、女中が室に入ってくると、美佐に小声でなにか囁き、うしろを振り向いて誰かを招じ入れるしぐさをした。

「あッ！」

入ってきたのは、早瀬川に墜落したはずの水島だった。

いくらか青ざめた顔だが、まぎれもない水島だった。

木柵、断崖、奔流——。

惣太の目にそれらが突如として渦を巻いて突進してきた。

「わあッ！」

「きゃァッ」

叫喚と共に、一同が総立ちになったときには、惣太は五本の刃の上に俯伏し、首から腹部に五条の切り口をパックリあけ、鮮血をしとど畳に流していた。

「かわいそうに！　僕が遅れたばかりに惣太君が犠牲になったんだな。もっとも僕も不注意から、すんでのこと死ぬところだった。早瀬川の崖から落ちてね。二時間ばかり意識不明だったらしい」

低い声で水島が言ったが、惣太にはもはやそれは聞こえなかった。


◆裏窓叢書御待望にこたえ鋭意進行中！◆

原稿を読み進むうちに編集者はドキドキ胸を沸かせた！　各二五〇枚前後の大作は、独特の妖しい筆致で極彩色の雰囲気を描き出すのだ!!

裏窓叢書第一集

狂果地獄絵

飯田豊吉

250枚

裏窓叢書第二集

黒蛇呪縛

黒木忍

260枚

裏窓叢書第三集

続・お小夜嵐

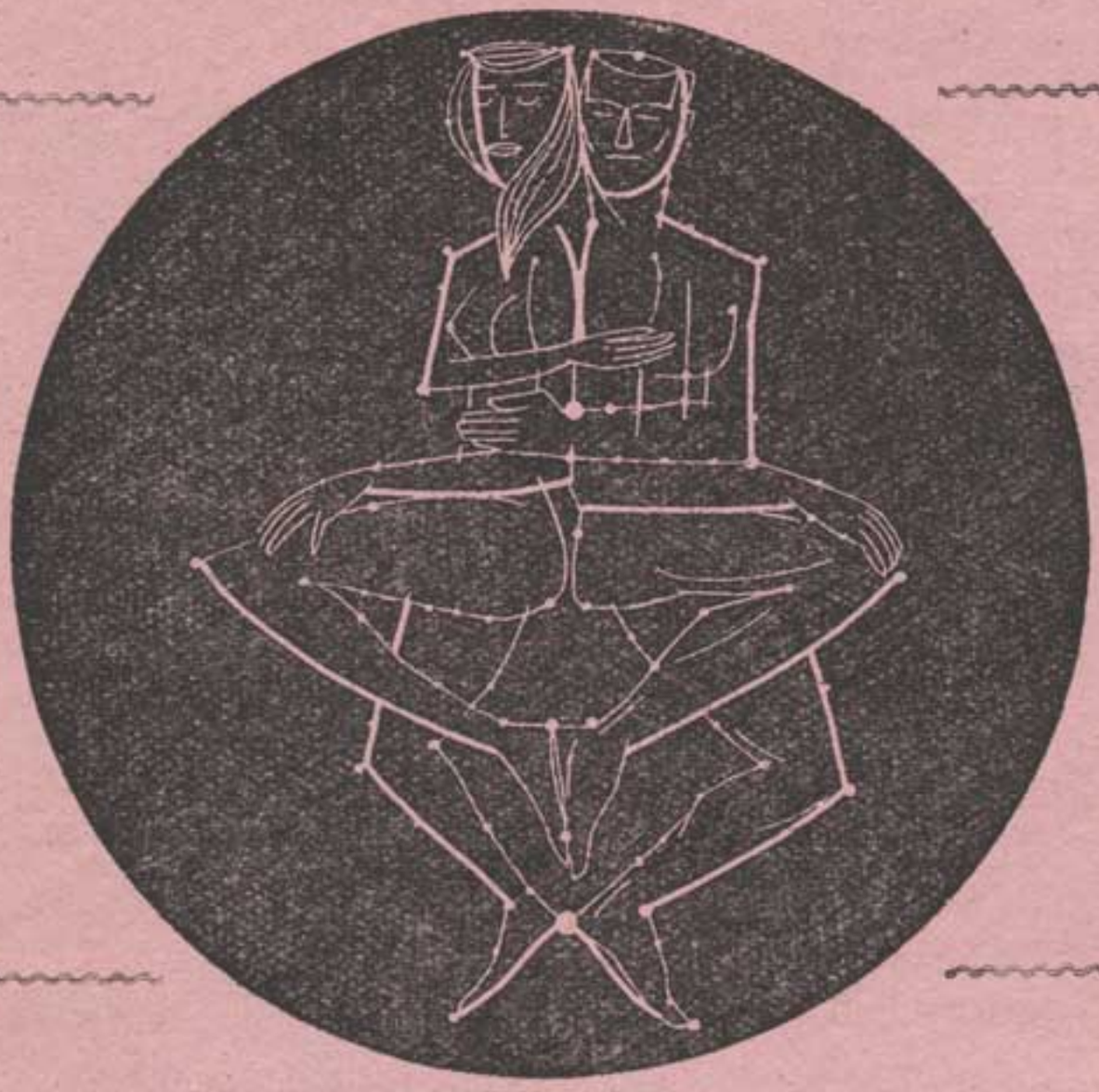
高月大三

230枚

# 未整理棚の中から

## ——（1）——

編集雑記帖



編集雑記帖

偏執子

### ヘンテコなノート

編集部の雑然とした机の上に、一冊のノートがある。それは、或る時は灰皿の横に位置して、こぼれた煙草の灰をかぶり、或る時は届けられた原稿の下になって姿を隠し、またあるときは、出来上ったインクの香も新らしい裏窓の下積みにされて呻吟したりしているのだが、さて、時によってはこいつが姿を見せないと血眼になって皆で大騒ぎして探し廻るようなこともある。

何のヘンテツもないこのノートがどうしていつの場合でもやりっぱなされていながらも、時として必要なのかと云うと、こいつの腹の中の、あのあまり上等でない紙の上に、そのときどきのちょっとしたメモが、やたらに記入してあるからなのだ。

誰かと何処かで逢う時の、喫茶店の電話番号。ヌードモデルのおヒップとバストの数字。誰の住所とも判らない東京都ナントカ区××町……などと云う文字。妙な姿の人物の鉛

筆描き。（これは挿絵の構図を示したものなのだが）何かの題名らしきもの。そして、五六行にわたって書かれたいろいろの文句。（これはキャッチフレーズである）電話番号、そしてまた誰かの住所、特集の題名何かの寸法。そんなものが、各頁に渡ってところ嫌わず、雑然と、そして整然と、ぎっしり書き込まれているのである。

ライターや画家の住所や電話番号そして移転の通知などは、そのときそのときに住所録に記入するし、また原稿を受取った時には、寄稿投稿を問わず、その場で原稿受領簿に書き込まれる。その他の必要と思われる印刷所や喫茶店や酒場や、温泉旅館……オット、そこまではどうかと思うが、まあ大体においてそんなのは、ちゃんと、それぞれの所定のものに記入されていて、ことさらに必要もないのだが、しかし、どうしたものか、それらのうちのどれにも属さない妙なことがらと云うものが編集と云う仕事のプロセスの中にあって、それが、こんなノートを作り出す破目になってしまったのでもあろうか。

山田先生はいつも締切りに間にあわないから、早く原稿を渡すこと！　とか、円城寺どの七千円ＳＯＳで内払い！　とか、裸の挿絵が多すぎるぞ、とか、その他のありとあらゆる真面目なこと、馬鹿なこと、判らないことが、くせの違った文字で書き込まれているこのノートの不思議な性格は、全然門外の人が見ると、何か判じものめいたり、噴飯の種になったり、書いた奴の頭の中をうたがわれたりするようなことばかりなのだが、吾々にはそれが備忘録になり通信文になりするのである。

しかし、私は、いまなにもこんなノートのことを書くヘンテツもない気持はないので、ただその中に書き込まれている投稿原稿に対するちょっとした感想の走り書きにふと目をひかれて、そのことが、未整理棚の中にある多くの原稿をもう一度全部読み返す、と云う甚だ時間のかかる仕事をする端緒となったことを云いたいのだった。

そのためのものとしては、前おきが長くなった感があるので、早速その本質であるべき未整理棚の中からの抜き書きの紹介にうつることにする。未整理と云っても、決して原稿をそのまま投げ込んである訳でなくて、受け取った後にすぐ暇のある者から廻し読みにして、それぞれの読後感のようなものを書き込み、掲載するか否かを決める目安にするのだが、中には、非常に新鮮な内容を持ちながら文章がまとまっていなかったり、面白い書きぶりを見せていながらそのテーマ自体が、どうにも発表できないようなものだったりするものがあって、それらの労作をどうにも捨てきれずに、もう一度検討し直してリライトすべきものはリライトし、駄目なものは返却すると云う段階の、その一歩手前にあるものを入れてある棚を差すのである。

ましてこの頃は、全般的な社会

情勢などの関係から、どうしても微温的な編集にならざるを得ない事情であってみれば、これらの珠玉のような原稿がことさら埋もれてしまって、どちらつかずの作品が読者の目に多く触れることが常なので、そんなイージーになりつつある（決してイージーにやっている訳ではないのだが……）ことのお詫びのつもりも兼ねて、また、原稿を書かれ、お送り下さった方に対しても、これによっていくらかでもおむくいすることのできるように（この文中に取り上げさせて貰った作品には、それぞれ適当に御礼をお送り致します）と考えた結果が、この紹介になった訳である。そして読者も本号の一一四頁より一一七頁に発表した未発表原稿の内容の全部でなくとも、その一部を、たとえ走り読み程度でも知ることができると云う意味で、この頁を迎えて戴ければ幸いである。

## あなぐらの中で

「あなぐらの中で」は京都の花園右京と云う人からの寄稿である。前に述べたノートの中には、その読後感として、（空想の舞台を思うさま拡げたもの。面白い、とても面白いが発表に適するかどうか……）と書かれてあり、その次にまた別の書体で、鉛筆書きで、（描写がきわどい。はじめから書き直しては如何ですか？）と同じく、全部会話体で書かれていて、あの持って廻ったような喋べり方のヌメリの中に、何とも云えぬいやらしさがある。

「天井に気イつけなはれ」（神戸）兵庫圭八

――ほンまに、あンた。ひどい奴ちゃおまへンか。どこやらの会社の社長や云う話やけど、頭はげらかして、いい年してて、あんな若い自分の娘みたいなこを、ほれ、もうむちゃくちゃだすがナ……ぎゅうぎゅう海老みたいに躰を曲げてからに、女もまた女や、いつもアパートの廊下で逢うても、上品そうに、つンとすました顔してて、ウチ何も知らんような虐め方されて、嬉しそうに眼を細にやや似通ったものが、別にもう一箇あったが、それは、あるアパートに住む男が、天井裏から各部屋を覗き廻ると云うテーマで、屋根裏の散歩者を模したものを関西弁に直したもので、尤も、この作品も非常に面白く、そして、「あなぐら……」と同じく、全部会話体で書かれていて、あの持って廻ったような喋べり方のヌメリの中に、何とも云えぬいやらしさがある。

「天井に気イつけなはれ」（神戸）兵庫圭八

――ほンまに、あンた。ひどい奴ちゃおまへンか。どこやらの会社の社長や云う話やけど、頭はげらかして、いい年してて、あんな若い自分の娘みたいなこを、ほれ、もうむちゃくちゃだすがナ……ぎゅうぎゅう海老みたいに躰を曲げてからに、女もまた女や、いつもアパートの廊下で逢うても、上品そうに、つンとすました顔してて、ウチ何も知らんような虐め方されて、嬉しそうに眼を細

めとるがなな……——

天井裏から覗いている眼があると
も知らず、繰り拡げられる奇妙な遊
びを、関西弁の文字は、引きも切ら
ずに描写し、喋べりまくるのだが、
ここに書いたのは、中でも一番まと
もらしいところであって、その他は
おして知るべしだ。しかし、捨てき
れぬ素晴らしい味を持っているが。

さて、「あなぐら……」の方はと
云うと、六十四枚の原稿の中に筋ら
しいものはほとんどなくて、ちょう
ど、「少年」を書いた作者の、あの
頃のような、古ぼけた感じ（あの作
品が古ぼけていると云う意味ではな
い、あの雰囲気が、好もしい意味で
郷愁を呼び起すのでもあろうか？）
と「陰獣」の中に出て来るうす暗い
蔵の、ほこりの匂いのようなものが
おどろおどろと読む者の胸の中に浸
みわたる思いがするのである。

作者の花園氏は、

——衣笠山の片ほとりで、嵯峨野に通じる田舎みち……——

と書いているから、そのあたりをあまりよく知らぬ私にも、何か雰囲気だけは判るような気もする。

その、衣笠山のふもとにある旧家の屋敷内にある「あなぐら」が、この小説の舞台の全部だった。

もちろん、架空のものであろうし嘘らしい事は文中にちらちら出て来るのだが、そんなことはどうでもよい。

文中に出て来る人物は、前に云った「陰獣」の大江春泥のような男とその妾、そして遠い親戚から女中代りに引きとられて来た二十才になる美しい娘、の、たった三人しかいない。大江春泥は、本当は実在しない人物だったが、この主人公は、文中では、誰かにくどくどと喋っている主人公として発場する。

読者に聞かせて喋っているのかと思うと、いつの間にか、それが、金にあかせて連れて来た妾のトリコだったりするし、反転して、女中代りの娘、おゆりだったりする。

トリコと云う妙な名前の女は、いつの場合でも、主人公の話の中にヒョコヒョコと顔を出し、そして、いちゅうのも、みンな、親のせいや。

そら、面と向うて悪口云う奴はいらしまへンわいな。しかしやで、陰でわしのことを、一体、何と云うてるか知ってはりますか。ゴリラやいよるのや。助平猿やてぬかしやがるのや。かまへン、かまへんわいゴリラであろうが、助平猿であろうが、わしはわしの好きなことを、存分にやってこましたるのンや。みてけつかれ、ほンまに……。——

と、こう云う書き出しから始まった「陰獣」の大江春泥のような男とその妾、そして遠い親戚から女中代りに引きとられて来た二十才になる美しい娘、の、たった三人しかいない。大江春泥は、本当は実在しない人物だったが、この主人公は、文中では、誰かにくどくどと喋っている主人公として発場する。

読者に聞かせて喋っているのかと思うと、いつの間にか、それが、金にあかせて連れて来た妾のトリコだったりするし、反転して、女中代りの娘、おゆりだったりする。

トリコと云う妙な名前の女は、いつの場合でも、主人公の話の中にヒョコヒョコと顔を出し、そして、い

ろいろの役目をするのである。

――さあ、トリコ。はよう、おゆりをつかまえンかいな。大きなおけくりはよせんかいな。もう足がもつれてるわ、まだ、運動会は序の口やちゅうのに、あかんでほンまに。

んゆりもおゆりや。いくら動けへかいな。くねくねと転げまわって、せっかくのきれいな膚が、あなぐらの土でまっくろけになってしまうがな……。――

こんな調子で書いてあるところもある。これは、トリコとおゆりが、主人公の、いわゆる運動会と称する遊戯に、必死になってもがいている描写だ。世間に入れられぬこの五十男が、その生涯のたのしみを、屋敷内の「あなぐら」の中に求めて、夜となく昼となく、ここで奇妙な遊びをするのだ。それは、ちょっと考えも、もう決して、此のおぞましい場及ばない程の、サジスチックなもの所から逃げ出そうとしないのは、こいつの場合でも、何かの意味で男の遊びがついて廻ることになる。

文章の表面的なものから受ける変なコミカルな感じが、全体の救いよりをつかまえンかいな。大きなおけうのない気違いじみた雰囲気を、ちゃんと計算した上で助けていると云うことも、この作者の、はじめに意図したものとしては、見事に成果をあげているのだが、ただ残念なことは、いま、こうして抜き書きをしてみても、その中のようとして探してみても、その中にも、活字にして都合の悪どの文中にも、大体のところはお判りになったと思うから、あとはよろしく頭の中で妖しいイメージを描いて下さい。

## 痴（ちもう）盲

勝手にイメージを描いて下さいなぞと、やりっぱなした事を云って、どうも、この編集者はケシカランとのお叱りはごもっともながら、そう仰言られても、また困りもので、皆様のお心持は百も承知、二百も合点なのに、この篇だけを長々と書いてしまう訳にもいかず、まして、もう

一度ゆっくり花園氏に手を入れて貰うか、それとも、ちゃんと割愛すべき箇所は割愛して、読者のお眼に触れるようにするつもりなので、全部を書いて、あとの興をそいでもと云う、深謀遠慮？（ちょっとおかしいかな）もあることなので、先にすすむことにする。

内田爽二氏（東京）の御寄稿下さった「痴盲」と云う小説は、これも、前述のノートの中に、いろいろのことが書いてあったので、もう一度読み返すことになったものだが、まず感じたことは、読み辛いことであった。

大学ノートを千切った紙片に、鉛筆書きの細い小さな文字で、ぎっしり書かれていて、よくもまあ、これほどの根気があったものだと、つくづく感心させられるほど、刻明に書き綴ってある。

ちゃんとした原稿用紙に、きれいな字で書かれているものをさておいて、私がこれを取り上げた理由は、それを読みすすむうちに、これは実

---

感じゃないかな？と思われる程の感度と、それに、いきなり話を中心に持って行かずに、じわりじわりと、真綿で首をしめるような緩漫さで、読むものの心を引きずりながら、最後のところに持って行く手腕であった。

いやそれは、手腕と云うよりも、ねちっこさ、脂っこさ、と云ったものかも知れない。

この「痴盲」と云う表題は、字でのかも知れないが、これを見ると別に何も感じないが、これを口の中でよろしいから、そっと発音してごらんなさい。

そうです、その通り、ちょっと変でしょう。そんな妙な感じが、そのままこの作品の内容にあるのです。

主人公は盲目の青年で、その盲目になった動機と云うのが、幼い頃にとなり同志に住んでいる可愛いい女の子（青年より年上なのだが）と遊んでいるうちに二階の物干台の上から突き落されて、頭蓋底骨折の為に危く生命を失いかけるが、どうにか生命をとりとめたと思うと、そのことが原因で両眼の視力を失ってしまうのである。おまけに、どうした事か顔面の筋肉も、いわゆるデスマスクのように笑うことを忘れて、自分がいくらおかしくても、顔はそのままで、声だけが笑っている……と云うような不具になってしまうのだ。

つき落された原因は、何でもないことで、幼年期によくある、ふざけ過ぎなのだったけれども、失明したまま青年になったこの主人公は、そのときの相手の年上の少女に、復讐する決心をする。

しかし、はじめから、復讐の決意が生れた訳ではなくて、はじめのうちは相手に恋をし、やがて、それが自分が不具の為に入れられないと判ったとき、だんだん女が憎らしくなってきて、やがて、その女を憎むことが、自分の生涯の唯一の生き甲斐だと思うようになってしまうのだ。

そんな過程がクドクドと書き記されてあって、やがて小説は中心に入って来る。

青年は、あらゆる機会を見つけて

は女に近づき、手段をめぐらすのだが、その間にも、何気なく黒眼鏡をかけた「あんま」になったりして、女の肩や腰をもんだりする。

女は、往時のことは忘れ去っているし、舞台も、二人の幼時とは全然違った、東京の山手の、とある屋敷町になっている。

そのときの女の境遇は、若い未亡人なのだ。青年のほのかな恋情を全然感づきもしないで、女は金持ちの男と結婚し、今は未亡人なのであった。文中に刻明に描写してある通りこの女は結婚した相手の精力を数年のうちに吸い取ってしまい、からからに乾いたようになってしまった夫を、やがては死なせてしまうほどの云わば、キングサイズの、素晴らしい軀の持ち主なのである。

――それは、さながらつき立ての餅のような温か味と、そして、空気枕かゴムマリのような、素晴らしい弾力と、そのくせ、何処かの箇所はなまこの酢のものを噛むようなコリコリした、得も云われない硬さを持っていた。

おまけにそいつが、俺があちらこちらを、あんまの手つきに似せてもみほぐすと、さも気持よさそうに身をくねらせて、ため息をつくのだ。いまに見ろ。このたまらない肌を、こんな着物の上からでなく、真っ裸にして身動き出来ぬようにして置いてから、うんと虐めてやるのだ――

青年は、そう思い、見えぬ眼を見開いて、女のからだをにせあんまを云っても当を得ないかも知れないのだが、そう、ふと考えたほどの脂の乗りようだったのは、やはりうまく、実際に内田爽二氏が盲目だったなら、第一こんな細かな字でこまごまとこんな文章も書けない訳だから、実感のいのかも知れない。

字を見て読んだ感じと、口に出してそれを云った感じの違い、それが、まざまざとここに盛り上がっているのであった。

「痴盲」の結末は、もう云うまでもなく、盲目の主人公が、罠にかかった未亡人を、あらゆることで復讐するのであるが、前に述べた「あなぐらの中で」や「天井に気イつけなは」のコミカルな味がないだけに、不気味な程に迫って来るものがあるのをどうしようもなかった。

写が、全部、触感や香り、空気の動きや音、そしてりで構成されていて声。そんなものばかり章を読んで受ける色や形や、そして線や表情や……と云う眼で見たものの事には一切触れていないことだ。

尤も、実際に内田爽二氏が盲目だったなら、第一こんな細かな字でこんな文章も書けない訳だから、実感と云っても当を得ないかも知れないのだが、そう、ふと考えたほどの脂の乗りようだったのは、やはりうまく

## ある家出少女の話

大学ノートのきれっぱしに、①、②と㊷までの番号をつけて書かれた「痴盲盲」は、原稿用紙に直すと、果してどれだけの枚数になるものだろうか？

タメイキが出る程の刻明さである。そして、たとえば、最後のあたりの㉗から㊵くらいまでの間は、どの場所を読んでも、すこしも筋が進展していないのである。秘密の部屋の中に閉じこめられた未亡人が、じりじりと、心理的にも肉体的にも、どうにもならず追いつめられてゆく過程が時間の観念を無視してコマゴマと書かれているのだった。

私は、自分が盲目になったような気がするほどだった。

ゴミでザラする畳の上を、後ずさりながらハッ、ハッと呼吸する、その憎い恋しい未亡人の香り高い吐息が、我知らず自分の耳に聞えてくるのをジカに感じたことであった。

それと対照的なものに「ある家出少女の話」と云うのがある（東京）家倉健氏の作品で、この人は何かの文芸雑誌（おそらく同人誌であろうか）の活字になったものを、原稿と一緒に同封してきて、こんなものもありますが、と添書きがしてあったことから見ると、原稿も書きなれた感じであった。

ペンネームを見ないと、女性ではないか？　と思わせるような、美しい文字の流れである。案外、そうかも知れないのだが、私がそんなことを云うのは、文章が前の作品と対象的で、流れるようなリズムがあり、詩のような調子がある。

それでいてしまって、書いてあることは意外にあからさまで、云わば、マソヒスムの、そして自虐的な、あの大の字になって悶えるようなものがあるのだ。

淡々としたなかにも、来月もこれを続けて、もし読者が未発表の作品を少しでも覗きたいと云うお心持があるのなら、また続けますが、如何ですか？

編集部員に御叱声もともにおたよりを下さると幸いです。

偏執子

## おんな木馬

「う、ふふふ。どうじゃな、楓どの、決心がつかれたかな、ふッふッふ」

厭な奴で、了然は、羞恥に身も世もあらずつっ伏している楓の傍にかがみ込んで、ジロジロと、その美しい姿態を眺め廻しながら、口説き、責め立てているのだった。

楓は、口惜しさと、恐ろしさと、そして、憎しみとの交錯した心の乱れの中で、必死に吾が身と、主命とを、どうして守ろうかと考えている。

しかし、それは、はかないものであった。

たった今の先まで、乗せられていた、気味の悪い木馬の足元に、後手に縛られたまま、身を突っ伏している楓には、軀と心の平衡をとりもどすまでには、まだ時間が足りなかった。

いつが昼間やら夜やら、判断もつかないこの地下蔵の中で、可弱い楓に加えられた地獄の魔の手は、たとえ楓が鉄のような意志と軀とを持っていたとしても、いつまで耐えられるものかどうか。

藤助と了然は、楓を木馬に乗せては責め立て、降ろしては責めたてるのである。

それは、彼女には、いつ果てるとも知れなき無限の暗黒の時間であった。

「ふふふ。若いに似合わず、強情な娘御じゃ。此処は、どのようにあがいても、泣き叫けんでも、助けの来よう筈のない場所じゃ、花恥しい娘の身で、延命院を探りに来られたのは近頃殊勝な心がけだが……それ、一つ違うとこのようなうき目を見る……な、まだまだもっと恐ろしい目に逢わぬうちに、さァ、小森殿に、拙僧が云った通りの手紙を書きなされ！　どうじゃ……」

「……」

「うふふふ。それとも、まだ、木馬の背中に乗り足らぬとでも云うのかな。ふふ、それならば、得心のゆくまで、また、乗せて進ぜるがな」

「……ああッ……」

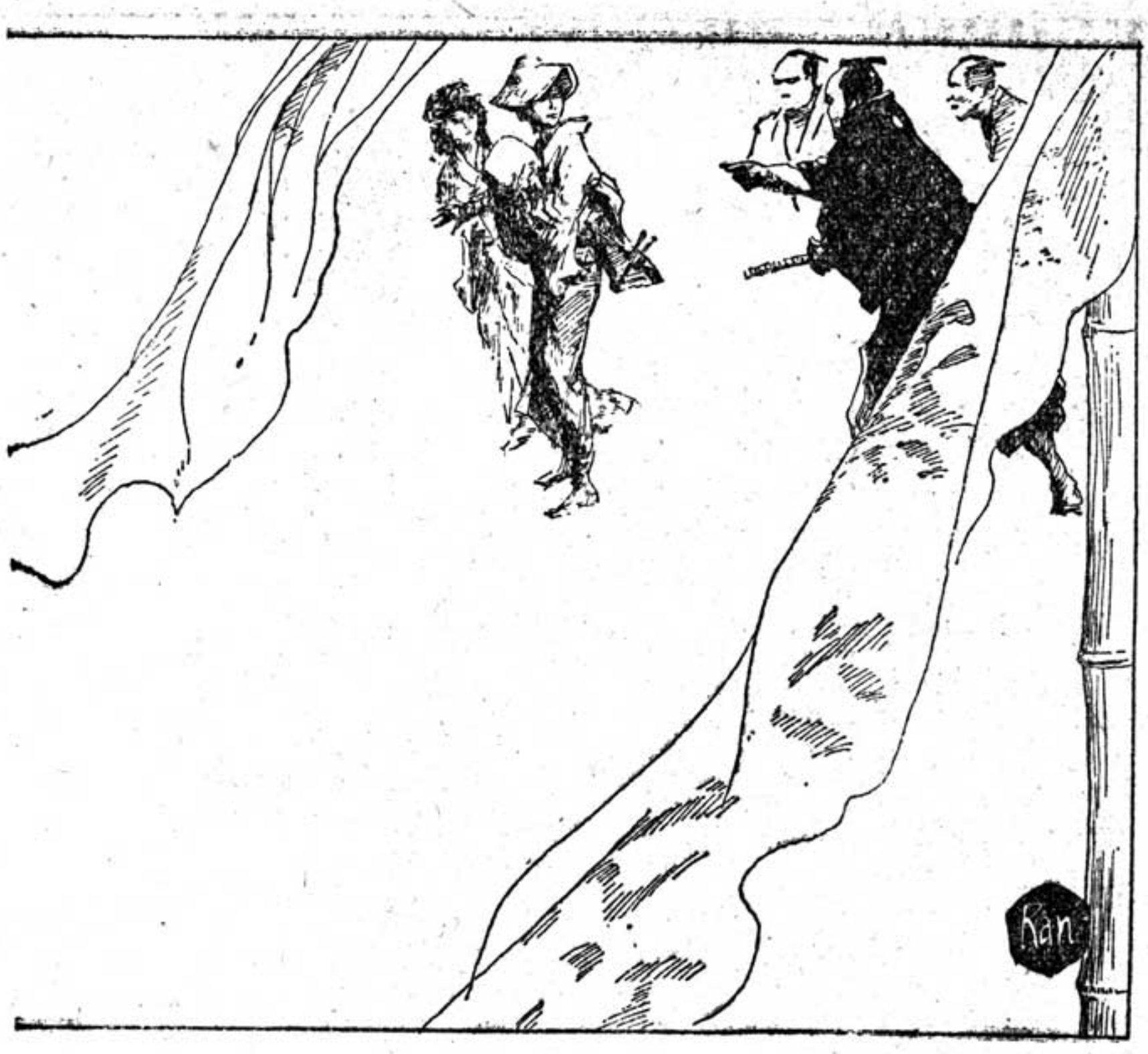
楓は、恐怖におののく顔を上げて、不自由な身を思わずあとずさった。

初めてこの不気味な部屋に入れられてからそのあと、何度同じ事を聞いたであろうか。

そして、了然の云う通りの手紙を書くことを頑強に断りつづける楓は、このおぞましい木馬の背に……。

**高月大三著・喜多玲子装幀「女犯経秘図」**
**があまとりあ社から発行されました！女犯経秘図・お小夜嵐・穴倉菩薩収録。発売中！**
**定価二五〇円・送料四〇円　あまとりあ社**

★不思議な鳥追女は緋縮緬の長襦袢一枚となると、疼くような肌の線をくっきりと描きだした！



# 鳥追女

原作・吉巒鬼

画・秋本春雄

遠くかすかに祭囃子の笛の音が聞える。
ピイヒャラ
ピイヒャラ
その音に誘われるように、ふだんはめったに人通りのない間道を、早朝からいろんな人間が足繁く通っていった。
獅子舞。
講釈師。
辻放下。
砂絵師。
まだまだいる。前編笠に縞木綿の手甲、袖口から絹縮緬の緋の色をチラチラ覗かせた鳥追女、六尺ちかい刀のおばけのようなのを肩に担いだ歯磨売りの浪人者、のぞきからくりの夫婦、大世帯だったのは、

# 緋縮緬伝法

荷車を三台つらねて派手な幟をおっ立てた旅廻りの一座である。

年に一度の祭だ。

間道の向うに小さな森があり、その中に江戸でも知られた千鳥明神の社があった。

「去年は雨でさっぱりだった。ことしは稼がせてもらわにア」

と言ったのは、歯磨売りの浪人であり、

「へへへ……全くの話がね」

と笑って受けたのは、手妻つかいの紅吉である。

「ふん。稼ぎも稼ぎだが、おぬしの方は別の楽しみもあるのだろう」

「へ？」

「とぼけるなっ！」

「へへへへ……」

「いやな奴だ。この千鳥村は、近在でも名の知れた美人村だし、おぬしはそのなまっちろいノッペリ面をふりまわして、村娘のうちの目ぼしいところを一人占めに楽しもうという寸法だろう」

「ご冗談を」

「隠すな。雨の去年ですら、器用なその指先で、身共が眼をつけておいたお咲、お筆の二人娘を、まんまととろかしおって」

「へへへへ」

紅吉の奴は、笑って小鼻のあたりを掻いたが、こういうのを劣笑とでもいうのであろうか、下劣な根性がありありと浮きでている。

嫌な奴だ。

「――そういう旦那だって、結構よろしくおくらわせた女であった。

楽しみだったようで……」

「ふん。ささまなんぞに負けておれるかやァない。

二本差していても、これまたロクな人間じゃ

名を問えば大道寺源馬――もっともらしく聞えても、さて、その素性を探れば、親代々の浪人ぐらしで、香具師だか侍だか見当のつきかねる人間にできている。

「今年は負けんぞ」

人寄せの六尺刀をゆすって源馬が挑戦するように言うと、紅吉も胸を張って、

「なんなら一つ賭けやしょうか？　村一番の小町娘を手に入れるのは、この紅吉か、はたまた旦那か……」

しゃァしゃァ受けとめやァがった。

「ふん」

鼻で笑って、このとき二人のかたわらを通りすぎたのが、この先の宿場で見かけてから何となく気になっていた鳥追女である。

ギョッ

となるような美貌の持主で、ほんとうのことをいうと、手の早い紅吉は、旅籠の一室へ押込んですでに小当りに当っている。結果は手ひどい肘鉄砲……唐手の心得でもあるのか四半刻は動けなかったほどの手荒い肘鉄砲を

大道寺源馬もご同様だ。

こいつは、湯上りのあで姿をかいま見て、つい、むらむらっと妙な気を起したのが運のつき、腕づくで裏庭へ引きずりこもうとしたところを、眉間に激しい手刀をくらって、だらしなくノビてしまった。

そういう因縁つきの鳥追女が、鼻の先で、ふん――と笑って通りすぎたのである。

（ちきしょう。村娘も村娘だが、祭りのあいだに、あの女をどうでも一番……）

こいつら二人は、腹のうちで同じことを考えた。

目的はいやらしく、しかし、このことが後で起死回生の救神の力となったのである。

ピイヒャラ

ピイヒャラ

祭り囃子の笛の音は、もう、すぐ鼻の先になっていた。

## 乱れ娘

「さあてお立合い、手前これにとりいだしたるは伝家の宝刀六尺太刀……」

客寄せをしながら、大道寺源馬の眼が落ちつきなくしきりに動いた。

（――妙だ）

と思う。店開きをして、すぐに、いささか例年と勝手が違うな。――と、まずピインと感じた。

なんとなく不安である。

あまり頭の回転は早いほうでなく、しかし小半刻もすれば誰にだってわかってくる。

女……

それも年頃の女が、年に一度の祭りだというのに、さっぱり姿を現わさないのだ。

（――はあて？）

と紅吉も小首をかしげている。この男の手で起死回生の救神の力となったのがふつうだったし、ひワーッと集って来るのが人気を呼んでいて、例年なら、妻は娘たちの人気を呼んでいて、例年なら、なびた片田舎にしろ、器量よしの多い千鳥村で、中に五、六人は必ず目ぼしいのが見つかるはずであった。

が――

今年はどうだ。あいかわらずの人出ではあっても、集ってきたのは、鼻ったれのジャリや大年増の婆ァが主役で、年頃の女の姿は数え

るのにさほど手間をとらぬくらいである。

（何かわけがあるのだろう）

こいつは源馬と違って、腕っ節のほうはからきし駄目だが、そのかわり頭の回転はかなり鋭くできていた。

手玉の曲受けを見せながら考えてみる。

（――空気だな。そうだ……村の空気というやつが、どうも湿っぽい。例年と違って、どいつもこいつも何やら心配事をかかえこんだような面つきでいやァがる）

そこまではわかったが、さて、それだけのことだ。

「けっ！」

やけくそ半分で、口上をどなる声がむやみに高くなると、まるで呼応するように源馬浪人も一段高くがなりはじめた。

「婆ァや爺いに用はない。とりいだしたる六尺の歯磨き……いや違った。これなる秘伝の歯磨は、年頃の娘が用いてこそ値打のあるもの……しかるにその娘、お立合い。一体村の娘はどこにおる」

これでは歯磨売りの口上やら娘探しやらわかったもんでない。さすがの紅吉も、プッーと吹きだして、曲受けの手玉を受け損じてしまった。

――境内の一隅で騒ぎのはじまったのは、この時である。

「ええい、邪魔立て致すと容赦せんぞ！」

どなる声が祭りの喧騒を撥ねとばすように響いて、その後に聞えたのは、絹を裂くような女の悲鳴であった。

ピシッ

と、肉を打く鞭音が聞えたのは、悲鳴の先であったろうか、それとも後であったろうか……そこまではわからなかった。

変事だ。

どこの土地でも野次馬根性に変りはないので、あたりまえならワーッと人垣の山をきずくはずで、しかし、ここではいささか勝手が違った。

怒声と悲鳴とそして鞭音を耳にすると、境内を埋めていた千鳥村の村人たちは、まるで波の引くようにサーッと逃げはじめたのである。

たちまち境内の一隅がガラあきになった。

侍。

女。

娘。

人波が引いて、大道寺源馬と手妻師紅吉の眼が最初にとらえたのは、この三人であった。侍は江戸者らしく、ひとめでそれと知れる絹物を身につけていたが、右手に馬鞭を持ち肩を怒らせている。その前に立っているのは、源馬や紅吉を子供扱いにしたあの鳥追女であり、この女の背後に隠れるように小さくなっているのが、半裸体のまだうら若い娘であった。

下着一枚だ。

素足が埃にまみれ、髪が乱れ、胸元の大きく割れた姿は、狂女か――そうでなければ、檻禁からの逃亡を思わせる。

右手の樹の下に馬がいた。

「御領主の屋敷から逃亡せし娘、邪魔立てすればその方にも罪が及ぶぞ」

「あたしは江戸者、罪にしたかったら公方様に掛合ってからにしてもらいたいね」

「こやつ」

いきりたって、笠のうちをのぞきこむような形になったが、

「ほう」

と驚いて、一瞬呼吸を呑みこんだ。鳥追女の美貌にギョッとなったのであろう。

一瞬……

二瞬……

睨みあって対峙して、そしてこの時追手の人数が駈けつけて来た。

「こやつら二人、からめ捕れ！」

下知する声が、とほうもなく大きく響いた。

## 密議

千鳥村は、御小普請支配大島丹波守の領地である。直参の旗本で、四千五百石といえばかなりの大身だったし、吹けば飛ぶような小旗本と違って領地もあった。

「その丹波守が、お上へは病気の届けをしてここ半年ばかり千鳥村の屋敷に引きこもっているんだ」

「村に娘っ気のねえのは、そいつのせいだというんでがしょう？」

「その通り。丹波守は大変な好きもので、以前にも領内見廻りのおりには、きまって一人や二人、これぞと目ぼしをつけた娘を引っ捕え、閨女として江戸屋敷へ連れ去ったというが、今度はこの千鳥村に腰を据えたのだからたまったものでない」

「馬鹿にしてやがる。他人の女房も娘も区別がねえ。年頃の綺麗どころは一人余さず狩り集めて、屋敷内に閉込めの、可愛がりの、引っぱたきの……と来やがった。道理で、さっぱり娘たちが集まらねえと思ったよ」

大道寺源馬と紅吉の二人だ。

「あてがはずれたな」

「へっ。お互い様だァね」

「といって、すましこんでもおれまい」

「あた棒だ。村の娘だけならともかく、江戸者のあの鳥追女まで腐れ旗本の自由にされていじゃどうでもなりまさァ」

「ふむ」

と、大道寺源馬は腕を組んだ。鳥追女にはたまるもんか。指をくわえて見てたんじゃ、江戸っ子の名がすたる」

「ふふふ、あの鳥追女は、生弁天そのままのこっぴどくやられたが、腕っ節には自信のある男である。奇を狙い、急を突けば、見込みいい女……他人の自由にされては、お互い寝覚めが悪いのう」

「旦那、いっちょうやらかしやしょうか？」

「何を？」

「大島丹波守をぶっ殺して、女たちを地獄屋敷から解き放つ……へへへ、いい役どころでござんすぜ」

「大きく出たな」

「なあに、十万二十万のお大名ならともかく四千五百石の、五千石のといったって、江戸屋敷ほどの人数はございませんよ。やり方しだいじゃどうでもなりまさァ」

「ふむ」

と、大道寺源馬は腕を組んだ。鳥追女にはたまるもんか。指をくわえて見てたんじゃ、江戸っ子の名がすたる」

「ふふふ、あの鳥追女は、生弁天そのままのこっぴどくやられたが、腕っ節には自信のある男である。奇を狙い、急を突けば、見込みいい女……他人の自由にされては、お互い寝覚めが悪いのう」

「旦那、いっちょうやらかしやしょうか？」

それに、紅吉の弁舌と知恵袋は、腹の立つ

ほど認めていた。

（——ふふふ、うまくやれば、あの鳥追女めがなびくかもしれん。この身に数知れぬ女を知ったが、あれだけの女は金の草鞋で探し歩いても容易には見つけだせまい。——あの女が手に入るなら、命を的に働いても損はないだろう）

胸のうちで勘定ができた。

（——ふっ。どうやら気が動いたようだな。しめしめ……。こいつをうまく利用して、あとはおいらの口先が物をいう。たすけだした女のうち、目ぼしいところの十人ばかりは、へっ、この紅吉さまが頂戴して、たっぷり楽しんだ揚句に売り飛ばすとすれば、まんず千両はかてえところだ……）

同じ勘定でも、紅吉のほうはたちが悪くできている。

源馬は辻斬り追剝ぎの過去があり、紅吉はその弁舌と指先の器用さで、掏摸と女泣かせがその本業といってよいのだろう。

二人は、それぞれの思惑を胸にひめて、ニヤリと汚ない微笑？——を交した。

夜が更けている。

「ところで紅吉」

「へえ」

「丹波屋敷に押込められた女の数は当ってみたのか？」

「ほう！」

「そこに抜かりはございませんぜ。数えてみるてえと、手つかずの生娘が七十六人、人のかかあが四十五人、しめて百二十と一人……どうです。根気のいい話じゃありゃせんか。これだけ集めると、たしかに千鳥村から年頃の女気はなくなりやすねえ」

「違った」

「いささか眉唾めいた話だの。そんなにされて、よく黙っているものだ」

「全くで。しっ腰のねえったらありゃしねえ。——もっとも、年貢の方は寛大で、おかげで村は裕福……殿様の女狂いも一時的なものだろうし、そのうちおさまる——と、まァ考えているらしい。なにしろ百姓はしんぼう強くできておりやすからね」

莚小屋の破れから夜星が見える。

二人は茶碗酒をくみかわして、さて、密談に入っていった。

## 牢屋敷

ひと口に何と表現したらいいのだろう。

視覚からすれば、それは座敷牢屋敷——と呼んでいいのだろう。

嗅覚を頼りにすれば女屋敷——と呼んでもあった。

その絵の中心に、大島丹波守の姿がある。

大島丹波守の千鳥屋敷である。

大広間も、書院も、二の間三の間も、びっしりと木格子をはめこんで、屋敷全体がまるで座敷牢だったし、一歩踏みこめば、女の肌の香気がむんと鼻を襲って、気の弱い者ならくらくらっとなること必定だった。

江戸城の大奥とは規模が違う。

四千五百石の旗本の、しかも滅多に姿を現わすことのない所領地の狭い屋敷に、百人を越える女どもを一度に押しこめたのでは、その髪の匂いと、肌の香気と、吐息とが混然一体となって、みだらがましい、ねっとりとした空気を醸成したし、その眺めは奇観であり、異観であり、そして許しがたい一幅の絵でもあった。

肌の色は、白いというよりも、透きとおるような感じであり、清潔で、そのくせひかたわらに、緋縮緬の長襦袢一枚のしどけない姿にされた鳥追女を引き寄せて、右手の大盃を口元に運んでいた。

牢格子の大広間だ。

領内から狩り集めた女たちを、一人残らず眼前に並べて、さて、これから何をはじめようというのであろう。

「どうじゃ。とくと見るがよい」

大盃を置いて、濁った丹波守の声である。

「色はそれぞれ違うても、下着一枚の女どもは、いずれも領内から狩り集めた者たちじゃ。その横にならんだ屋敷着の女は、わしが江戸屋敷から連れ参った腰元であり、あわせて百二十九人の女がいる。——どうじゃ、わしの言葉に嘘はなかろう。これだけの女が揃うても、おぬしにそう申したわしの言葉に嘘はなかろう」

五尺に足らぬ小男で、猪首で、獅子鼻で、どこから見ても四千五百石の気品など微塵も発見できない丹波守であり、それが酒臭い息を吐きながら、かたわらの鳥追女に、きたない欲望を燃やしているのだろう。

こんな女もいるのだろう。

——というよりも、透きとおるような、清潔で、そのくせひめやかな、しっとりとした媚と色気を備えていたし、名工の彫琢になるようなその美貌はととのい過ぎても冷たい感じはまるでなく、挑発するような、押し包むような、崩れるようなうな……えもいわれぬ情けの露をにじませている。しかも、緋縮緬の長襦袢一枚となれば、疼くような肌の線を、くっきりと描きだす張りと、肉づきを持って、男心を悩乱せずにはおかぬ、妖美な……といってよい女であった。それは、表面的な肉体の美しさのみがもたらす魅力ではないのであろう。その奥にあるもの、隠された不思議なものの存在が、大きな力となっているのに違いなかった。

伝法でなく可憐でなく、清純でなく俠艶で

なく、まるっきり手入らずのおぼこ娘とも見て、悪辣な手段をめぐらした揚句、やっと手に入れかけた寸前に、好色将軍家斎に奪われ、反対に散々男を知りつくしたたか女にも見える……いや、それらをすべて併呑したような女である。

「鳥追いは賤婦のなりわいじゃ。わしの想い者になれば、栄耀栄華思いのまま、眼の前に控えた女達を、顎で使うて毎日を送る身分になれる。——どうじゃ？」

鼻持ちならぬ堕旗本だ。

「殿様」

と、はじめて鳥追女が口を開いた。

「ん？」

「わたくしが御意に従えば、百二十一人の村の女を解き放って下さいますか？」

「ほう……」

丹波守の右の眼が、痙攣するようにかすかにふるえた。

「それが望みか？」

「はい」

「ならぬ！　わしは将軍家への面当てに、ここで、わしのこの知行地で、千鳥屋敷の大奥をつくりあげて見せるのじゃ」

支配下の貧乏旗本、久我兵庫の娘に懸想して、悪辣な手段をめぐらした揚句、やっと手に入れかけた寸前に、好色将軍家斎に奪われた丹波守は、その面当ての女狂いで、領内の女どもではあきたらず、他領にまで手をのばそうと目論んでいる矢先でもあった。

「わたしの望みはかなわないませぬか？」

「言うなっ。腕づくで女を従えるのは愚将軍……わしは違う。おぬしの方から、頭を下げて、わしの懐に飛び込むようにして見せようぞ」

丹波守の眼が妖しく光った。

## 煙り松葉

「お文と申したな、その女を庭先へ引っ立てい」

丹波守の声が、冷酷な鬼の声に一変した。

「はっ」

こたえて立ち上ったのは、千鳥明神の境内で、馬鞭を握っていたあの侍である。

大槻軍十郎。

よくしたもので、名前からして敵役にできている。

「心得ました」

ここでは、すでに幾度もこころみられた折檻であろう。大槻軍十郎は唇のはしを歪めて冷笑すると、女たちの蔭からその一人をえらんで庭先へ引きずりだした。

えらばれた女、お文というのは、いうまでもなく逃亡をはかって鳥追女と一緒に捕えられたあの娘である。

庭先に手頃の松があった。

「吊れっ」

軍十郎の冷酷な、しかし、その中に一種の喜悦めいた響のこもる下知を聞くと、庭先に控えていた小者たちが、バラバラッと駈け寄って来た。

みんな馴れている。

「ひいーっ」

悲鳴をあげて逃げようとするお文を、またたく間に縛りあげて、松の枝から吊り下げたが、一切無言で、まるで手馴れた職人が、手馴れた日常茶飯の仕事をかたずけるような、そんな態度であり動きであった。

広間牢の女たちは、みんな顔の筋をこわばらせ、かたくなっていたし、中には耳をおさえたり眼を閉じたり、気の弱い者は、もうワナワナとふるえはじめている。

しかし、丹波守の横に坐った鳥追女は、キッと口を結んで射るような視線を宙吊りのお文に注いでいた。

「わしの意を撥ねのけて、小ざかしくも女たちを解き放てと申したな。その返礼があれじゃ。とくと見るがよい。わしの意に従うまでは、一人一人……残らず地獄の測に追い込んでくれようぞ」

丹波守の毒々しい声である。

女たちはふるえ上った。百二十一人の眼がヒタと鳥追女の顔を見る。——その眼には感謝の色はかけらもなく、恐怖と怨嗟と怒りの色が、ありありと現われていた。

そのはずだ。

松吊りのお文は、ただそれだけでなく、これは地獄の責苦の第一段にすぎなかった。

小者たちが生の松葉を集めている。——

両腕にかかえて来ては、お文の足もとに積みはじめた。

キリッ

鳥追女が歯ぎしりした。丹波守の意図、お文の運命、この地獄屋敷のおぞましいしきたりを、このときはじめて理解したのであろう。

小者たちが蠟燭に火を点じた。

「た、たすけて——」

お文の悲鳴だ。構わず積み松葉に蠟燭の火を近づけると、湿った松葉は、その火に抵抗するように、もくもくと白煙をたてはじめた。

もくもく……

もくもく……

魔性の者の吐息にも似て、次第にその量をました白煙は、お文の素足を包み、音もなく纏いつき、はいずり廻って、上へ上へとのびていった。

「えへっ……えへっ」

吸い込んでむせると、その反動で、上半身がゆれ、下半身が動き、ギギギーと松の枝が鳴った。

湿った白煙は、柔肌を刺激する。

チクチク

チクチク

刺すような、擽ぐるような、間断のない刺激である。

「えへっ……お、おゆるしを……え、えへっ……」

その苦悶は、想像を越えるものがあるのだろう。

鳥追女の眉尻がキリリと吊りあがった。そして、その紅唇から虹の唆呵である。

「いい加減にしたらどうだい？」

「う？」

突然の変化に、丹波守もギョッとしたらしい。

一瞬……

二瞬……

いきを呑んで、あっけにとられた形であった。

「御先祖ゆずりの四千五百石、それでのほほんとくらすさえ罰当りな癖に、このざまァ何だい！」

長襦袢一枚の姿ですっくと立った。

## 下着忍者

「げっ」

呻いて引っくりかえったのは、大島丹波守である。

鳥追女が、立つと同時に、眼のさめるような緋の色が大きく拡がって、その下の白蠟の太腿が宙に躍ったかに見えたのは、女だてらに丹波守の顎を蹴上げたのであった。

それから後の動きが単のように速かった。

一同の眼には、緋の色がツ、ツツ——と動いたとしか見えなかったろう。

ハッと気づいたときには、広間格子の錠前がピインとはずれて、鳥追女は庭先に飛びだしていたのである。

「こやつ！」

苦悶するお文の姿態を、食い入るように見詰めていた軍十郎が、あわてて刀の柄に手をやった。

腕には自信がある。その眼に走った疑惑と驚愕の色も一瞬で、

「察するに幕府の犬だな」

毒々しく吐きすてた。

「今頃気がついても、あとの祭りさ。証拠を握った上からは、おとなしく立ち帰って、逐一上様に言上するつもりだったけれど、こんな現場を眼にしちゃァ、黙っていられない性

分にできているんだ」

大変な女である。

「ほざいたな。飛んで火に入る夏の虫とは貴様のことだ。からめ捕って、地獄屋敷の味をたっぷり楽しませてくれる」

軍十郎がギラリと抜いた。——鳥追女は、つい今のさき、アッという間に錠をはずした簪仕込みの忍具——さく——を右手に握ってニッコリ笑った。

そして、そのままツツと前へ出たのである。

二十尺……十尺……五尺……

（手裏剣！）

軍十郎は青眼に構えたまま、ピインと感じた。伊賀か甲賀か——いずれにせよ女忍者とすれば忍具の用意があったに違いなく、しかし、その忍具も、お文と一緒にからめ捕ってしまったのだ。

長襦袢一枚に剝いてある今では、心配するに当らない。持物は三味線一棹で、おそらく忍具はこの三味線の中にでも仕込んであったのだろう。

が——

今の女は、右手に握った手裏剣一つ……この一撃さえ避けたら、あとはこっちのものだ——。考えるというのではなく、これは直感であった。

「えいっ！」

案の定、女の動きがとまると同時に、その右手が宙に躍った。

「どっこい」

飛んで来るやつをチーンと払って、思わず心中ニタリとしたが、誤算はここにあった。うとしたその瞬間、小者の中にも気のきいた奴がいたと見えて、手にしていた六尺棒をその股間へ投げたのだ。

はずみ——といってよいのだろう。

「あっ」

叫んで女は、四つ、叩きつけられる蛭のように激しく転落してしまった。

誤算は隙を呼んだ。

その隙を衝いて、間髪を入れず、第二の簪手裏剣が飛んだのは、いうまでもないだろう。

「ぐえっ！」

手首を縫われてよろめくと、女忍者はその手から大刀をもぎとって、枝吊りお文の縄を切った。

小者たちも、残った屋敷侍たちも、茫然と立ったままである。

「追っても無駄だよ。江戸表から御沙汰のあるまで、みんな首を洗って待っているんだね。百二十一人の女のうち、一人でも死なせたら、それこそ一人残らず雁首が危ないよ」

と言った声は、すでにもう塀の上であった。

長襦袢一枚の伝法なその姿は、凄艶といったらいいのか、濃艶といったらよいのか、とまれ胸のすくような仇姿には違いなかった。

しかし——

この女は、いささか芝居気が過ぎたのである。

いいたいことをいって、さて、飛びおりようとしたその瞬間、小者の中にも気のきいた奴がいたと見えて、手にしていた六尺棒をその股間へ投げたのだ。

はずみ——といってよいのだろう。

「あっ」

叫んで女は、四つ、叩きつけられる蛭のように激しく転落してしまった。

## 首の穴

大道寺源馬と紅吉が、妙なかっこうで歩いている。

源馬は毛脛まるだしの尻っぱしょりだった し、紅吉の奴は、豆絞りの手拭いを盗っ人被りにして、こいつも尻っぱしょりだが、そのうえ弥造をきめこんで鼻唄まじり……そんなら、それこそ一人残らず雁首が危ないよ」

二人である。

「旦那、屋敷侍の三人や六人は斬る破目にな

りやすぜ」

「ふっ、妙な勘定だな」

「へへへ、勘定はどうでも、残りの小者なんざ血を見りァ逃げちまいまさァ」

夜空に月がある。

右手の黒い森は、千鳥明神の祭りの森で、ここから出た細い道が、くねくねとのびる先に、大島丹波守の屋敷があった。

小川があり、土橋がある。

その土橋を渡ると、もう眼の先に丹波屋敷の門があり、こいつはピタリと閉じていた。

二人は表門を避けて右へ廻った。

「旦那」

紅吉が足をとめて振りかえる。

「うむ」

大道寺源馬は渋い顔になった。

約束がある。——手頃なところで源馬が馬になり、紅吉がその背に乗って塀の上に首を出し、屋敷のようすをうかがってから、おもむろに忍び込もうというわけだ。

「ばかな、武士たるものが……」

と、はじめは一言のもとにはねつけたが、考えてみると、源馬は二十貫ちかい大兵であり、紅吉は反対に十二貫たらずの優男……目的を一つにして行動するうえは、そんなことにこだわってもいられないと気がついた。

「へへへ、勘定はどうでも、残りの小者なんざ血を見りァ逃げちまいまさァ」

で——

大道寺源馬、約束に従って、しぶしぶではあっても丹波屋敷の塀下で四つん這いの犬になった。

珍妙な姿である。

「旦那、ようがすかい。乗りやすぜ」

盗っ人被りの蔭でニヤリと笑って、それでも一応ことわってから、紅吉の奴が土足のまま源馬の広い、頑丈な背中の上にやんわりと乗った。

塀の上から首を出す。

一瞬……

二瞬……

「おい、どうだようすは？」

源馬が声をかけても、返事がない。

そのはずである。塀の上から首を出して、紅吉のやつが眼にしたもの……蒼白い月光に照らしだされた庭内の光景は、このやつが思わずゾクリとなって固唾を呑まざるをえないでいるのものであった。

まず眼に入ったものは白い裸身だ。

盛り上った豊満な乳房が、妙に歪んで見えるのは、その上に深々と食い込んだ縄のせいで、正座して、これは後手に縛りあげられているのであろう。

その前に穴がある。

ザック

ザック

小者二人が無表情に手を動かせば、そのつど不気味な音を発して、穴は次第に広く、深くなりつつあった。

女が顔をあげた。

「あっ！」

小さく声に出して、紅吉があわてたのは、この時になって初めてそれが鳥追女であることに気づいたからである。

「どうした？」

と、いぶかる源馬を、

「しッ」

と制して、紅吉の眼は妖しく光りはじめた。

女の背後に大槻軍十郎が立っている。はじめて見る顔ではあっても、こいつただ者でない——と、紅吉の直感が教えた。

（腕の立つ奴だな）

と思う。

（さて、大道寺の旦那とどんなも

女性解放悲史・特集

のだろう？　ひょっとすると……）

唇のはしが吊りあがった。

蛇の道はヘビ――というのもおかしいが、自分が一筋縄で行かぬ男だけに、人を見る眼も肥えている。

右手から、ひょこひょこ――そんな感じで豆狸みたいな男が近づいて来た。手に抜身を下げている。

（そうか、首を斬ろうというんだな）

ピインと来た。

「殺すには惜しい女だが、可愛さ余って憎さ百倍、さぞかし綺麗な血が出ることじゃろうの」

豆狸がいった。

ピイヒャラ

ピイヒャラ

祭り囃子の笛の音が、遠くかすかに聞えてくる。

小川一つへだてたこちらでは、同じ祭りでも血の祭り、笛や太鼓の囃子はなく、あるものは首受けの穴と、憎悪のみである。

「気の毒を絵にかいたようなものだ」

大槻軍十郎が、冷たい声でぽつりといった。

（へん、嫌な野郎だ）

紅吉が苦い顔になるのと同時に、鳥追女の虹の啖呵が叩きつけるような調子で飛びだした。

「何をぐずぐずしてるんだい。刀の使い方を知っているなら、まごまごしてないでスパッとやったらいいだろう」

この声は源馬の耳を突き刺すようにして聞えた。

「うっ？」

唸って、一瞬、背中の紅吉を忘れてしまった。そのまま、ぐいと体を起したからたまらない。不意をくらって紅吉はぶざまにドシンと大尻餅である。

「い、い、痛てえ！」

## 火屋敷

（これだけの女を……）

丹波守は、何度も刀を振りあげては、そのたびに躊躇した。

未練がある。

端然と首をさしのべた、そのうなじの白さ匂うような美しさ、縄目のために歪んで見える乳房までが、痙くような情感を誘うのだ。

これは危険な女であった。油断も隙もならぬ忍者であった。おのれの破滅をもたらす幕府の犬であった。

（一刻も早く斬ることだ）

と、思う。そして、その死を確かめるまでは、枕を高くして寝ることもできない。そんな厄介な女でもある。

ふと横を向いた。

大槻軍十郎の冷笑しているような顔がそこにあった。

「斬る！」

叫んで丹波守は大上段にふりかぶった。

「火事だァ！」

とほうもなく大きな声が、屋敷の片隅から聞えたのはこの時である。

「火事？」

大上段にふりかぶったまま、声の方に顔を向けるのと、悪魔の舌のような火焔が、めらめらと吹き上ったのと、それはほとんど同時であったろう。

「火だ」

「火事」

「水っ」

屋敷中たちまち大変な騒ぎになった。

大道寺源馬が、れいの尻からげ姿で飛び出

して来たのはこの時であり、駈け寄りざま、茫然と立っている丹波守に一撃をくれて、目的の鳥追女の縄を解こうとしたとき、火焔の方角へ走りだしていた軍十郎が、あわてて駈け戻って来た。

「くそっ、付け火の張本だな！」

「問答無用」

ぴたりと相青眼で睨みあった。

「助けてーッ」

「助けてーッ」

広間牢の女たちが叫んでいる。火勢は意外に強く、すでに広間牢の一部をなめはじめていたのである。

「ほい来た待ってろ！」

火付けの張本の紅吉が、用意してきた石ころで錠前を叩き破ると、女たちは押しあいへしあい、我がちに飛び出して来た。

「みんなおいらについて来るんだ！」

叫んで紅吉が走りだした。火付けの前に、ちゃんと逃走路を用意しておいたし、屋敷の者も火の手に気をとられて手出しはすまいーと、紅吉流の計算ができていた。

あとは弁舌一つで、これだけの女が自由になるのだ。

まず裏手の藪へ逃げる。女たちを集めて一席ぶつ。つまりこんなぐあいだ。——このまま村へ戻っては、あとのたたりが怖ろしい。とにかくようすの知れるまで身を隠すことが必要で、そいつはおいらが面倒みてやろう……。

（へへっ）

ほくそえんで、しかしこの男、足元に気づかなかった。

「げっ！」

小石につまづいて、拍子というものは怖ろしい、もろに転倒——そして、したたか頭を打ったのであろう。そのままぐたりとノビてしまった。

皮肉なことに、それは大道寺源馬が、大槻軍十郎と相討になって倒れた、その瞬後であった。

鳥追女の姿は消えている。

乳房の形が歪むほどに縛りあげた縄目でも、忍者は手足の関節を自在にはずして、やすやすと抜け出してしまうのだ。

この女の名は、その仕事の性質上、いまだに不明のままであり、しかし、その復命によって、大島家は断絶、千鳥村の女たちは一人残らず解放されたが、ここに哀れをとどめたのは、大道寺源馬と紅吉の二人である。

焼けおちた千鳥屋敷を検分した郡代官、諏訪十左衛門の手記に、

浪人体の者一人
町人風の者一人
いずれも大島家にかかわりなく、火付けの当人なるや、夜盗のたぐいなるや分明ならず……

と書き残されている。

## 愛読者短評募集

◎本誌では、愛読者の皆様方から、読まれたあとの短評を募集しております。シンラツな御意見、御希望等もおりませて、御投稿下さいますようお待ちします。

◎掲載させていただきましたものには、掲載誌一部と謝礼をお送り致します。

◎読者短評送り先は左記の通りです。

東京都中野区江古田一の二三〇二
久保書店内　裏窓編集部

黒髪執着

# 髪燈（二）

志摩不二

芦屋純・画

道草

お志津さんは新一を門口まで送ってくれた。

「じゃまた遊びに来てね、ほんとにに！」

「うん！」本当にそう思って返事して、さよならと大きく云って新一は駈け出した。と、曲り道に立っていた印絆天の男が、

「おいおい」と呼び止めた。鳶久の小父さんだった。止って見上げた新一に、

「新坊、今おめえお志津さんの家から出て来たんだろう？」

「うん！」

「これ居たかい？」鳶久は野球のグローヴのような掌を握り親指を突き立てて見せた。下町育ちの子供は勘がいい。それがあの大沼老人を差していることがすぐわかったので、

「うん！」
とうなずくと、鳶久は大仰に顔をしかめ、
「チェッ！　そうかい」
と吐き捨てるように云い、つづいて小さく、
「久し振りの今夜は駄目か！」と呟やいた。
「えっ？　今夜って？」
「い、いいや、なんでもねえ――」
あわてたように筒袖に両腕つっこんで、くるりとまわって二三歩行きかけたが、またくるり、思い出したように、
「なァ、新坊、これからも小父さんが頼んだらお志津さんの家のこと、俺に教えてくれよな。たのむぜ――」
自分の云いたいことだけ云って、とっとと去っていく鳶久の姿を、新一は睨みつけていた。
腹の底から鳶久が憎らしかった。あの大沼老人とお志津さんなら少しも嫌ではないのに鳶久の小父さんとお志津さんとだと、どうしてこう腹が立つのか、彼は考えてみようとはしなかったが、今までなんとも思っていなかった鳶久の小父さんが、今の事で一ぺんに嫌いになってしまった。
その夜新一はいつまでも寝つかれなかった。
鳶久の小父さんが云った〝今夜〟という言葉がいろいろな妄想を呼ぶのだった。
初めはあのやさしい大沼老人とお志津さんの姿だったが、いつかお志津さんに鳶久がからみつこうとする場面になっていた。お志津さんは鳶久を嫌がって逃げまわる。今日ドウナツ巻きにしていたお志津さんの長い髪が乱れて蛇のうねるように狂い飛んだ。伸ばした鳶久の丸太のような太い腕にその髪が掴まれて、お志津さんの白い体が弾むように宙に舞った。鳶久は大きな鼻の穴を一そう大きくふくらませ、ヒクヒクさせながらお志津さんの黒髪の中に顔をうずめた。
「チキショウ！」叫んで新一は跳ね起きた。
そして机の引出しの奥深く隠してあった高砂座での少女の髪を取り出すと、枕の上に広げ、その髪があたかもお志津さんの髪であるかのように、
「渡すものか、これは僕のだ！」
と呟やきながら顔をうずめ、鼻を、口を、こすりつけるのだった。

## 髪の束

新学期が始まった九月のうちに、新一たちの学年は秋の遠足に行くことになった。その朝早く彼は家を出た。
そして仲の好い同級生を誘うためにお志津さんの家の前を通った時、その窓下に落ちている丸められたチリ紙に気がついた。見廻してもあたりに人かげはない。
いそいで拾ってみると五六十本はあろう長い髪の毛だった。
ドキンとするほどの喜びだった。お志津さんの物に違いない。夕べ髪を梳いて櫛に残ったものを紙に丸めとったのだろう。そっと顔を近づけると、ぷんとあのお志津さんの甘い香りがした。
彼はそのまま家に飛んで帰り、思うさま愛撫してみたかったがそれもできず、紙のままこすりつけるのだった。
一刻も早く家に帰りたいと思い一日が夢中だった。
一本でも欲しいと思っていたお志津さんの物が手に入ると、今度はもっと欲しくなった。

## お志津さんの長い黒髪を 拾い集めるのが 僕のひそかな喜びだった

しかし高砂座で逢った少女に云ったように、お志津さんに髪をねだることは、彼にはできなかった。

彼は毎朝早く起き、隣室に寝ている父母にわからぬように家を抜け出し、お志津さんの家の前までいってみた。髪が捨ててある時もあり、ない時もあった。

髪の数の多い日は嬉しく、一本一本を指で揃え、口で甜めて集めた髪を束にした。一つ二つ、三つと数えながら、白い根のついている方が元であるのを知り、そこを上にして揃える。途中で切れた物でも、元より先の方が太くなっている髪の性質がわかり細い方を上にした。

その仕事は何よりも彼にとって楽しいものになった。一ヵ月足らずのうちに親指の太さほどの束になった。

ある朝、いつものようにそっとお志津さんの家の窓下に近より、落ちている紙屑を拾おうとすると、不意に頭の上の窓がカラリと開いた。

はっと顔を上げると、

「新ちゃん！」

丸い窓からこわい顔をしたお志津さんの顔がのぞいていた。

お志津さんはうす桃色の長襦袢を着ていて襟の縮みの模様が彼の目に激しく焼きついた。そのうしろの部屋の中は薄暗く、時代劇の映画に見るような行燈が、ボーッと夢のようにともっていた。そのむこうに燃えるような赤さで夜具布団が伸べてあり、誰か男の顔がのぞいている。男の眼が大きく新一の顔を暫みつけているようだった。

新一は思わずゴクリと唾を呑みこんで首をすくめ、救いを求めるように、そばのお志津さんの顔を見上げた。が、その顔も彼を睨みつけていて、

「そんなことする、新ちゃんなんて、嫌いよッ！」

叫ぶとピシャリッ！　再び大きな音と共に丸窓の障子が閉められた。

新一はトボトボと去っていった。

（とうとう僕の秘密をお志津さんに見つけられてしまった……）

捨てた髪の毛を毎朝泥棒のように忍んできて拾っている恥かしい自分を、お志津さんに知られてしまった。その羞かしさ——。

それよりも彼は、これからの毎朝、お志津さんの髪を拾うことができない、その楽しみを失ったことの悲しみに途方に暮れる思いだった。

狭い家に起き伏しする親子三人の家族——。

その両親の目を盗んでひそかに女の髪の毛を愛撫する彼は、そこにスリルと云い知れぬ愉悦を楽しんでいた。

学校へいっている間でも、ふとあの髪の毛が、部屋を掃除しにきた母に見つかりはしなかっただろうか？　家に帰ってからそのことで、怖ろしい父に叱られはしないだろうか？と考えて動悸がし、静かにしていられなくなり、大声で叫びたい衝動に馳られる。

居ても立ってもいられない思いで家に帰って、もし無事だったら今日こそ集めた髪の毛を捨ててしまい、あんなことはもうしまい、と心に誓うのだった。

しかし帰宅して何事もないと、ホッと全身の力が抜けたように安堵し、そそくさと自分の部屋に入り机の前に座って勉強しているふうに見せながら、髪の毛の束を取り出し、そっと鼻口に当てて、

（ただいま！　僕さびしかったよ）とつぶやき頬ずりする。

いとしく、したわしく、学校で心に誓ったはずの決心は、とても起きなかった。

お志津さんの家へ髪の毛を拾いに行けなくなると、彼の髪への愛撫と、それによって起きる妄想は一そうはげしいものになっていった。

新一は父の読み捨てたキングだとか講談倶楽部だとかを戸棚の中から持って来て絵を探す。そのなかに女の縛られた場面をみつける。神保朋世の描いた女はとてもお志津さんに似ている。悪侍だとか、雲助だとかが女をいじめる。その女はお志津さんである。

ヒイヒイ悲鳴を挙げて逃げようとするお志津さんを雲助が二三人寄ってたかって縛り上げると、着物がはだけ黒髪が乱れて、お志津さんはうらめしさと羞かしさで（勘忍して……許して……）と哀れみを乞う。（いいや、ならねえ、おめえみたような美しい女は、もっともっといじめてやるんだ）と雲助は云って、縄を木の枝に掛けて、お志津さんの体を吊るす。

いろいろ責めて、責め飽きると、新一は体がグッタリとして、しばらくの間ぼうっとして机にうつ伏してしまう。

（苦しい！　辛い！　だけど、人を愛しようとすることを僕は止めることはできない。愛したいんだ。これからも、僕は人を、女の人を愛していく。たとえ、それがどんなに苦しくても……）

彼は流れ出てくる涙の中に顔をこすりつけて、そう呟きつづけるのだった。

## 姉妹

「黒髪の結ぼうれたる思いには、解けて寝た夜の枕とて、ひとり寝る夜の仇枕、袖は片しく妻じゃと云うて――」

三味の音に混って、すき透るようなきれいな声が聞えてくる。あれから何日、新一はお志津さんの顔を見なかったろう。そのお志津

さんの声をなつかしく、せつなく彼は聞き惚れていた。

午後から家に帰る土曜日だが、級長をしているので当番の者が帰るまで一緒に残ったので、遅くなってしまい、彼はまだランドセルを背負ったままだった。なつかしいまま、ふと曲った露地、さっきからお志津さんの家の前に、そっと立っていたのである。

と、たたきに下駄の音がして誰か家から出てくる様子に、彼は急いでその家の前から離れ、足早に歩き出した。背後で格子の開く音、そして小刻みに響く足音がして、彼を追い抜きざま振り返り、

「あら？」

と黒耀石のような眸が大きく見開かれ、顔をのぞきこんで面映ゆげにニコリと笑った。

「あっ！　君は？」

新一も棒立ちになり、言葉につまった。赤い布片れをつけた真黒な挑割れ髪に裾のつまった黄八丈の和服姿だが、忘れもしないあの高砂座で逢った少女だった。

一回逢ったきりだが、彼はこの少女の髪の毛を通じて、毎日のようにその面影に接していたのだから、忘れるはずがなかった。

「君、今お志津さんの家から出て来たけど、あのおねえさんのお弟子？」

「うん！　お弟子兼、妹よ」

「えっ？　君、お志津さんの妹？」

二人は歩きながら、いろいろ話し合った。姉と親しくしている彼と知ると、妙というその少女は、平河町に母と弟と三人で住んでいることや、一日置き位に姉の家に来ることなどを親しげに話した。

「今晩、あたしお姉さんの家に泊るのよ。小父さん病気で当分来られないから――」

と妙は云った。小父さんと云うのは、薬研堀の大沼さんのことに違いない。

「でもふしぎねえ――。新一さんの家のすぐそばなのに、どうして今までちっとも逢わなかったのかしら？」

妙は水天宮まで買物に行くのだと云って、新一の家の前で別れた。

その夜彼は父に連れられ銭湯にいった。念入りに体をこすられる苦行から解放されて湯舟に飛び込むと、そこに鳶久が入っていた。

「おう新坊！」

ニヤリと笑った鳶久は彼の耳に口をよせると、ささやくように云った。

「おめえ、このごろもお志津さんの家に行っているのけえ？」

「ううん――」と彼は首をふった。

「ふうん！　ほんとけえ？　どうして？」

彼はうるさくて黙っていた。すると鳶久はなおも「どうしてよ」と聞く。あまりしつこいので彼は思わず云った。

「だってさ、薬研堀の小父さん病気で、ずっと来ないンだもの――」

「やァ、親方、今晩は」そこへ新一の父が入って来た。ニヤリと笑っていた鳶久の顔がいそいで改まって「おう紙谷の旦那、今晩は」と応じた。

新一は風呂から帰って寝床に入り、少女とお志津さんの髪を取り出して見くらべてみた。

お志津さんの髪には髪油の匂いが強くするが、少女、妙の髪は幼い甘さがあった。その匂いに同じ甘さでも、その感じが異なっていたが、その二人が姉妹だったと知ると、なるほど美しい髪は同じようなのだと漠然と思っていたのが間違いだったのだ、と思った。髪の性質その物はすっかり同じだったのである。

よくその二人の髪を愛撫しながら、その面影を思い浮べた時、二人の顔がダブったがそれも道理だったのだ。姉妹だったのだもの。

彼はいつものように黒髪を愛撫しながらそう考えていたが、ふと愕然として思い出されたのである。

今まで考えもしなかったことが思い出されたのである。

お志津さんの髪を拾いにいって見つかった時、窓から見えた行燈のむこうに寝ていた男の顔……。

「あっ！　あれは鳶久だったンだ！」

彼は寝床から跳ね起きた。

（大変だッ！　僕、お風呂でとんでもないことをしゃべっちまった！）

薬研堀の小父さんが病気だと云った時、ニヤリと笑った鳶久の顔が大きく目の前にひろがってきた。

（今夜は妙ちゃんが、あの家には居るンだ。大変だッ！）

何がどう大変なのか、彼にははっきり理解できなかったのだが、彼はそのまま寝巻の上に兵古帯をぐるぐる巻きつけ窓から庭に飛び出した。

夜道を走ってお志津さんの家の前まで行った。

と、案の定、と彼は思った。

彼の思った通り大変なことが起きたのだろう。

玄関口に妙がオロオロと立っていた。

彼が近よると、

「あっ！　新ちゃん、大変なのよ。今鳶久の小父さんが来て、あたしを家に帰れとどなって外へ突き出して――」

と泣き声で云うのを

「よォし！」

と叫んで聞き流し、ガラっと格子を開けて飛込んで、一息に座敷へ入った。

いや、襖の所に新一は立ちすくんだ。

「うっ……」

行燈のぼうとともる部屋に一面にひろがった絹夜具の上に、黒髪をふり乱したお志津さんの姿があった。

「いけない」

「いけない。今夜はいけない！」

「……」

さからうお志津さんの体が、鳶久の太い手に帯を掴まれてくるりと廻り、仰向けに倒れた。

（苦しい、辛い。人を愛するということは……。だが、どんなに苦しくても、辛くても、僕は人を愛するということを、やめはしない……）

そしてまた妙の髪の中に顔をうめるのだった。

恐怖と羞恥におののく美女――。

それはさながら神保朋世画伯の描いた活き絵だった。

「……」

新一が幻想に遊び、夢にまで見たお志津さんの姿が、今現実に目の前に展開されているのだった。

「新ちゃん、新ちゃん」

泣き声と共に、妙がしがみついてきた。

彼は妙の頭をかかえて外へ出た。二人は震える体を互に押えようとするかのように、しっかりと抱き合った。

妙の髪の毛に顔をこすりつづけているうちに新一の心は物を考えることができるようになってきた。

（苦しい、辛い。人を愛するということは……。だが、どんなに苦しくても、辛くても、僕は人を愛するということを、やめはしない……）

そしてまた妙の髪の中に顔をうめるのだった。

今から丁度、三十年前。

昭和四年の出来事である。

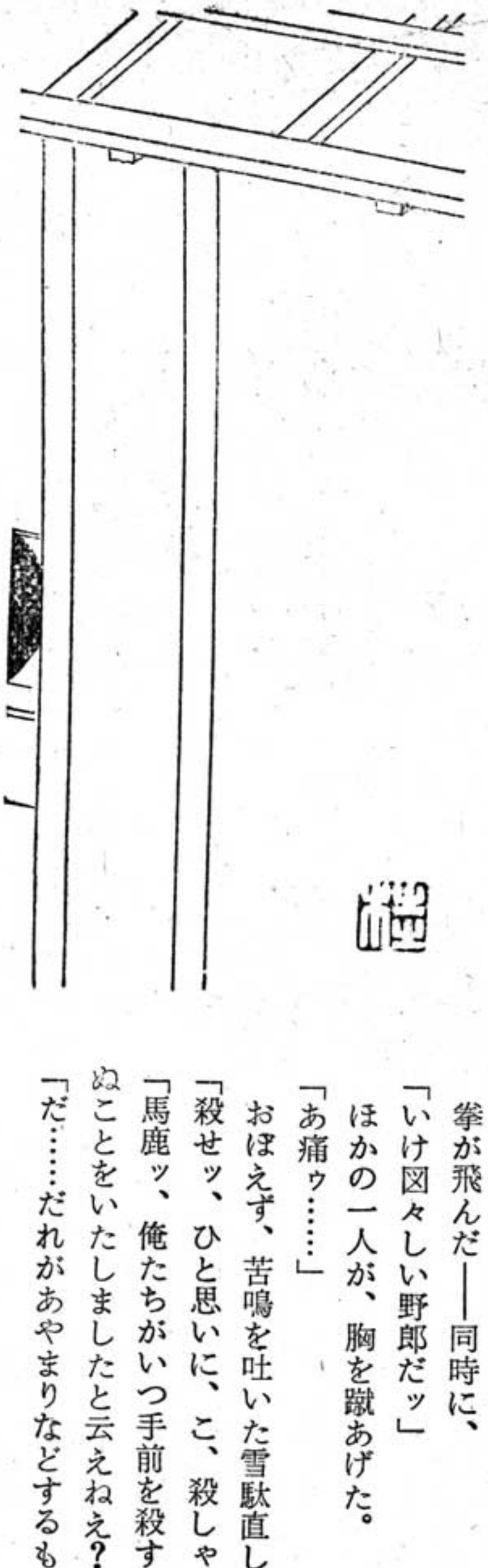
（了）

# 鳥追悲恋

# 紅怨無限

## ★人であって人でない非人の娘鳥追いと若き旗本の恋路にさす陰は……★

橋爪彦七
東桂史・画



小屋者打ちるでいでい屋——雪駄直しだ。

「野郎ッ、まだうたわねえか！」

肩にかけた籠が飛んで、笠がもぎ取られて、それぱかりか頬かぶりばしッ！　と頬が鳴って、男は、横にぶっ倒れた。倒れながら、片の手拭まですッ飛んでしまっているのだ。着ている布子など滅茶々々だった。むき出しになった肌のところどころに、血に惨んだ擦り傷が手つきに身をよじって、じっと相手を睨みあげる顔——見えて、取り囲んでいる四五人の男たちから、かなりひどい目にあっ半面、泥に汚れて、まっ蒼に、眼が血走って、恨みの炎を焚いていたことが、一と目でわかるのだった。

「なんて眼をしやがるンだ、手前これでもまだあやまらねえか！」

拳が飛んだ——同時に、

「いけ図々しい野郎だッ」

ほかの一人が、胸を蹴あげた。

「あ痛ゥ……」

おぼえず、苦鳴を吐いた雪駄直しは、

「殺せッ、ひと思いに、こ、殺しゃがれッ……」

「馬鹿ッ、俺たちがいつ手前を殺すと云ったね？」

ぬことをいたしましたと云えねえ？」

「だ……だれがあやまりなどするものか、なるほど俺ァでいでい屋

だ。でいでい屋だからって神仏にお詣りができねえッて法はねえ」
「こン畜生、ふざけた口をききゃァがって——まだ痛い目にあいてえってのか」
「ああ、どんな目にでもあわせろ、人間一度死にゃ二度たァ死なねえンだ、さァ殺せッ」
「よし、云やがったな！」
「うたうなよッ！」
「うたうなよッ！」
雪駄直しが、ウ、ウ……と地面に突ッ伏した。
所は浅草、今戸河岸につづく橋場、初春の真崎稲荷へ参詣の人なか、あたりは、黒山の人だかりだった。
「ひどい、どうかならないんですかねえ」
人垣のなかで、そういうささやきがおこった。
「さァ、そう思うんですが、あの若い衆たちの絆纏、あれァ新門の身内でしょう？」
「あ、そうだ、こいつァうっかり口出しァできませんねえ」
「そればかりでなくさ、あの男、自分でも云ってるしあの恰好、ね……」
別の一人が、話を引取って、人まじわりのできない」
「でいでい屋だからですよ、鳥居をくぐったのが悪いッていうのですね」
「なるほど、それが、あまでしなくそうなんですよ。だが、

てもねえ、たかが鳥居をくぐったぐらいで……」

と、同情はするが、そうかと云って、このでいでい屋――雪駄直しのために、口をきいてやろうという者はいなかった。ただ、人垣の輪が揺れて、あれあれと見守るばかり――と、いうのには理由があった。

当時、今戸のむこうの部落に住む人たちが、皮類をあつかって雪駄をこしらえたり、革鼻緒をこしらえたり、ずっと技術的な方面になると、武器武具から馬具など、他の細工師にはできない――と云っても、むろん柳営の定めた御具足師たちにまで納めるのだが、そうした職業に従事していたのを弾左衛門の配下の非人とし、雪駄直しは同じ非人でも車善七の配下で、小屋者とも称していた。弾左衛門の配下の方は、親代々の世襲――世襲も変だが、職業として相継いで来た者たちで、善七の配下方だと、善七のほかにも品川の松左衛門や、深川の善三郎、代々木の久兵衛と、三人の非人頭が、めいめい地域別に、非人の世話をしていたもので、ひっくるめた総非人頭が、車善七なのだった。そして、この非人には、心中未遂で日本橋の曝し場に曝された人間が、否応なく非人におとされる――人間が格落ちをして人づきあいができなくなるという掟、そのほか、不心得のため、産を失ったり親類つきあいを断たれたり、よんどころなく落ちた非人、それでも非人となれば非人あつかいを受けて、犬猫同様にされてもじっと我慢をして、普通の社会と自分達の住む社会との間には、越えることのできぬ一線があるものと、考えていたのだった。

その非人――でいでい屋が、普通の町家の人のように、清浄なお稲荷様の鳥居をくぐったというのだから、これは、どんな酷い仕置を受けてもよんどころないと見るのだった。

おりから――黒山になった人の輪が、急にくずれて、ざわめきが起った。

「お、割下水だ、割下水だ――」

「道を開けろ、道をッ」

「気をつけるンだ――例のだから……」

耳から耳へ――人びとの表情がかわってきた。

見れば、割下水なのである。本所割下水の拝領屋敷に住む旗本たち、此村大吉、横井甚兵衛、猪飼、大河内の四人が、麻布三軒屋で内福の旗本座光寺藤三郎を先頭にしてやってくるのだった。

放逸無頼――それが、この人びとの日常にあてはまるので、割下水というと、町家などでは、ほとんど腫れものにさわるようにしていたのである。

「どけ、どけどけ」

いかにも横柄である。群衆――人垣のすべての視線がそれに集るなかを、肩で風を切ってきた一行が、眼前、たった一人のでいでい屋――雪駄直しをぶちのめしている連中に眼をつけて、云い合したように立ちどまった。

## 門附美女

何を思ったか、座光寺藤三郎、つかつかと寄ってゆくと、

「これこれ、乱暴を致すな、相手は一人でないか、多人数で、よさぬか」

「へ？」

と、振りかえった一人が、

「これァお武家様、お言葉じゃございますが、こいつァ小屋者でしてね

え」
「小屋者？」
「へえ、とんでもねえ野郎でござんして、ぬけぬけと、鳥居を潜りゃがったンです。謝れと云ったンですが、こいつあやまらねえ、で——まあ、仕置をしているッてわけなんでござんす」
「いや、ともあれ手荒すぎる。打ちどころでも悪く、万が一彼が死にでも致してみよ、其方どもとて、ただではすまぬぞ」
「へえ……」
新門辰五郎の身内——若い衆も、相手が侍——ことに、割下水の連中を背後に控えての藤三郎には、歯がたたなかった。
「おい、座光寺、座光寺——」
「なんだ？」
振り向く藤三郎へ、此村大吉が、
「身分にさわるぞ、かまうな、かまうな」
「いや、さわるさわらぬはともかく、人間一人、うち捨ておけば一命にもかかわろう。かような場合、見過せぬは拙者の癖だ」
「そんなもの虫けら同様だぞ」
「いいや」
と、藤三郎は首を振って、
「虫けらであろうが、何であろうが、は、は、身分にさわると思われる御仁は、ひとまずお先へおいでをねがおう」
「また、例の病だ」
猪飼が、そばから、大吉に眼くばせして、
「行こう行こう」
「む、では行くぞ——」
と、歩き出した。
大河内が、ちらと見かえって、
「酔狂な」
と、呟いたが、これも横井の苦笑にうながされて連れ立って行く——その後で、新門の連中、あまり藤三郎が本気なので、分が悪い——と悟ると、いつかこそこそと群衆のなかへまぎれこんでしまった。
残ったのは、打ちのめされて、大地に叩きつけられたようになっている雪駄直し——
「あ、これ」
藤三郎は、持ち前の浪漫的な気持で、その場にかがむと、雪駄直しの肩に手をやって、
「立て立て、痛むか、うむ？」
「あ、ありがとうございます。すんでのことに打ち殺されるかと思いましたが、へえ……これァ、どちらの殿様でございますか……」
よろよろと立った雪駄直しが、顔をあげて藤三郎を見ると、
「あッ麻布の殿様！」
同時に藤三郎も、
「おお其方だったか——」
と、一瞬、親しみの表情を流した。
そのときだった。
おそるおそる側に来た二人の女太夫——門附の足を休めた鳥追が、
「まあ長五郎さん、たいへんだったじゃないの？」
「どうしたッての？」
と、笠のうちからのぞいてきた。

「面目ねえ、とんだ痩せひじを張ったてえやつよ」

さし俯向く雪駄直し――長五郎へ、

「でも酷いわ、こんなに……」

「お八重さん、どうか頭には内聞に」

「ばつが悪いのだったら云わないけど、わねえお登志さん?」

と、三味線を逆さに抱いて、しゃがみこんで、連れの年増を笠のうちから見返った顔が、鬢で結んだ笠の紐縮緬が浮きたって、ちらとだが、非人――小屋者の娘とは思えぬほどの美しさだった。

藤五郎、おもわず瞳の色をうごかしたが、すぐ、こころづいて、

「長五郎、知りあいの者とあればちょうどさいわい、早く手当をいたすがよいぞ」

云い流して、ちゃりッと雪駄の音をひびかせて行くのだった。――

その後姿を、長五郎と、そして二人の鳥追とが、ふかい感謝の眼で見送っているのを、気にもかけない鷹揚な態度で……。

## 青春情痴

二三日過ぎた――

その朝。南枝の梅が、清楚な香りを送ってくる広縁で、座光寺藤三郎が、見るともなく庭の面に眼をやっていた。

沓脱の先の飛石――その先の、まだめぐみそめぬ芝生の向うのひょうたん池で、あるとも思えぬ微風に水草の影が揺れて、ぴしッと大きく、鯉が跳ねた。

その音に、はっとなったような藤三郎が、ほーッと溜息をつくと、

「そうか……」

と、誰にともなく呟いた。

むろん四辺に人気はなく、彼一人きり――そしてさっきから視覚の奥へ、あの日のことを映し出していたのである。

あの日のこと――それは、真崎稲荷の社頭の路傍で、垣間見た女性、鳥追姿のお八重の顔が、姿が、世にも艶麗に見えた追憶だった。

(人には、なぜ階級というものがあるのだろう?)

若くて、父祖重代の残した財にめぐまれていて、浪漫主義の耽美者である彼は、いつもそうしたことを考えていた。

武士――町人――小屋者――乞食などと、同じ人間同志が、なぜ尊卑の垣を造りあったり、そして、それが社会構成の重要な拠点であったり、知、情、意をそなえているであろう人間として、なぜそれを墨守しなければならないのか、たとえて云えば、あの鳥追の娘にしてもあれだけの美を備えていて、どうして非人という枠のなかに閉じこもらねばならぬのか? 少くとも、藤三郎の理性では、佗しいかぎりの現実と云えるのだった。

(もしも、あの娘が、全身全霊で情熱の血汐をたぎらせてきたとしたら、世の男性の誰でもが、おそらく、その一瞬の恍惚に酔わずにはいられまい!)

だが、人間の尊卑という階級は、遠い祖先の時代から、どっしりと根をおろしていて、人間的なそうした感情は、没義道に、さえぎってしまうに相違ないのだ――で、今も、彼の口から、そうか……という独語が洩らされたのであった。

「殿様――」

という、渡り仲間の声が、藤三郎の耳に聞こえたのは、それから間もなくだった。

「こちらでございましたか」
と、揉み手をしながら、仲間が庭先にやってきて、
「ただいま、長五郎と申す者が、ぜひ御目通りをねがいたいと云って来ておりますが？」
「なに長五郎？」
突然、虚を衝かれたような藤三郎だったが、すぐ、ゆっくりした表情になって、
「会おう、こちらへ廻せ」
「かしこまりました」
——で、会ってみると、やはり、雪駄直しの長五郎だった。髷も、取りあげて、衣服もちゃんと町家の者の着附け、どうしてこれが、雪駄直しとは受けとれぬ姿——こしらえだった。
「長五郎、どうした？　そのみなりは？」
尋ねると、先日お助けいただいた御礼に上りたく、かように変装して参ったのですという挨拶。
この長五郎、実は、雪駄直しが身についた本職でなく、もとは、一人前の左官職人だった。
美男で、小粋で、その頃はやった新内が得意、まったくふるいつきたいほどの美声が、土蔵の腰羽目を塗っている彼ののどから流れてくると、分銅伊勢屋の御内儀が、側に来て、
「長さん、そこんところをもう一度……」
と、上気した顔——眸で、云うのだった。
「へッへッ……御冗談もんで……」

笑いに紛らそうとすると、

「あれさ、じらさないで、ね、後生！」

真剣に、そしてこれがお囲者のところへ、入り浸っている旦那の留守中、うさばらしに聞く御内儀の胸を、怪しく妙にかきたてるもとともなるとも気づかぬ彼は、

「では――」

と、蘭蝶の一とくさり――

「ねえ、うれしいじゃないの、唄の文句――いいえ、そうした心意気……」

ぼーッとなるような御新造の手が、いつか長五郎の手をにぎりしめてきたとき、見る見る御内儀の目に泪が涌いて、睫毛にあふれた一滴が、つゥ――と薄化粧した頬へ流れるのだった。

それからの一と月あまり、はかない、怖い、それでいて恋しい二人の逢瀬がつづけられた。

爛熟を越えた三十五の御内儀と、一とまわり下の血気さかんな長五郎と、それは、ただれるような邪恋だった。――が、そうした恋は遂げられなかった。

いくばくもなく、両人の仲が明るみに出そうになると、

「長さん死んで――」

と、必死に云う御内儀へ、

「いいとも」

と、情痴に溺れた青春の長五郎、しめし会せた大川端の星月夜、草いきれのする土堤の上で、熟っぽく見てくる女の視線にぶつかると、夢魔が憑いたように御内儀のからだを引き寄せた。

小半刻――。

ざんぶ！

飛びこんだが死ねなかった。因果――といえば因果だが、ふたりとも、夜釣りの船に救われたのである。そして、町方役人の手にかかって、とうとう日本橋の曝し場で、掟どおりの曝し者となり、男女とも別々に非人の手下に加えられたのであった。

それから五年――

藤三郎は、この長五郎が左官職のころ、屋敷のつくろいをさせたことがあって、当時、ちょっと哀愍を催したことがあったのである。

## 修羅愛慾

「どうだ、痛みは癒えたか？」

「へえ、どうやらごらんの通りになりましてございます」

「重畳――だが、顔に傷あとが残っておるぞ」

「へえ、こいつァどうも、拭いて取ったようにッてわけには参りません。いえもう、あのとき殿様にお助けいただきませんでしたら、傷あとどころか、あったら命を棒にふるところ、ほんとうにありがとう存じました。いえ、何を申しますにも、まともじゃ御礼にあがれないからだの手前、それでも、一度だけは、なんとかして御礼を申し上げたいと、かような気持で参りました。身分知らずのほどは、どうかお許しなすってくださいまし」

「なんの、ひとはとにかく、拙者にその会釈には及ばぬ。ともあれ、無事でよかった。――時に長五郎、いまも、ふと想い出していた折か

らだが、あのとき其方を介抱した鳥追、あの娘はいずこの者だ？」

「へえ、あれは、手前どもの小屋頭喜六と申す者の一人娘で、お八重と申しますが、連れの年増は道案内を兼ねました同様身分の女でございます」

「左様か、八重と申すか、父が小屋頭――ふむ……」

藤三郎、妙に言葉が濁るのを、はてな？……と考えた長五郎が、

「殿様……何か？」

と、うかがうような眼を光らせた。その眼をとらえた藤三郎が、左右を見まわして、

「長五郎、もそっと近う」

「へ？」

と、沓脱石に片手をかけて、からだを起す長五郎へ、低声で何か云うのだった。

「殿様、そ、それァどうも――」

「これ」

と、藤三郎、さすがにうしろめたく思ったか、声だけできびしくおさえて、

「其方を見込んで申すのだぞ」

「そ、それァもう、ありがたいともなんとも……百も承知でございますが、何しろどうも、いえ、非人――小屋者風情とは申しましても頭ともなりますと、第一、金には不自由がございませんし、それァどうして、お八重さんには、女の道の一ととおり、茶の湯から活け花、琴、三味線の遊芸まで、まったく、どこへ出しても恥かしくなく仕込んでございます。女太夫に出ますのも、頭ァいけねえッて不承かってないことなのである。藤三郎が、こうまで云って相手に喰い下ることは――

執心――恋着――そんな言葉では云いあらわせぬ思慕の火が、小屋者のお八重を対象に、烈々、千丈の焔をあげているのだ。

「ねえ殿様」

「なんだ、何か望みでも？」

「いえ、滅相もない、でも、この道ばかりは別でございますねえ」

「これ、それを申すでない」

――それからしばらく。

どうやら長五郎も話に実を入れて、ひそひそ語りあうのだった。この日――お八重を取り持てと執拗にせまった藤三郎は、やがて堕ちて行く愛慾地獄の修羅道へ、みずから一歩を踏み入れるものとは気づかなかった。

その日をきっかけに、二三度長五郎の姿が藤三郎の屋敷の通用門を出入りした。そして最後の日に――

「では、おまちがいなく」

と、駄目を押すように云って、長五郎の帰った翌々日である。

向島の、三囲り稲荷のちかくにある出合い茶屋――浮橋の座敷で、

藤三郎の姿が見受けられた。

ほどもなく、その浮橋の敷居をまたいだ長五郎、うしろに、お八重と、いつも彼女と連れ立っているお登志とをつれて——

「こちらに、麻布の殿様が？」

と、たずねた。

長五郎は、一見、町家の手代風、お八重は主人の箱入娘、お登志はお附の女中というこしらえで、筋書どおりの化けかただった。

「もうさいぜんからお待ちかねで……」

と、気のきいた女中の案内で、迎えられる藤三郎の座敷、そこには、笑をふくんだ藤三郎が、床柱を背に、ゆったりと脇息によっていたのである。

「さ、お嬢さん、どうぞこちらへ——お登志さんも」

と、板についた長五郎の手代役。すぐ酒になって、座が解けてきた——と見て取ると、頃あいを見て長五郎が、

「殿様、こちらも悪くございませんが、趣向をかえていかがでしょう、ひとつ、屋形舟で大川を……」

「うむ、其方にまかすぞ」

予定の順序なのだ。藤三郎は、承知していて、長五郎に微笑をくれただけだった。

舟の仕度は、すぐできた。

「ごきげんよう……」

と、浮橋の女将が、舟の舳に手をかけるのが合図、屋形舟は、長五郎とお八重の二人だけ、しずかに水の面を滑りながら、棹が、ぐるッと向きを変えたようだった。

# 花粉に酔う花

お八重は、陽あたりの障子の方を背にして坐っていた。

目鼻立ちのはっきりした、見あきのしないおもざしである。俯向きかげんに、だから睫毛が翳をつくって、笑えばふかく彫れる笑くぼがうっすらと見える。

それよりも、色が抜けるように白く、ずみずしい肌が想像されると、藤三郎はぜいたくな着物の下にあるみ——感情を、おし伏せるのに苦しんだ。胸のなかで燃えている焔を

舟は、船頭の艪で、たゆたゆと揺れてゆく、——その度ごとに、すこしずつ、膝のくずれるのを、お八重は、着物の前身をおさえるようにして、素肌をこぼすまいとした。

こうしたしぐさは、時と、ところによって、眼の前で女が全裸になったより、さらに効果的で、しかも激しい情念の刺戟を与えるものだった。

藤三郎は、思わず、固唾をのんだ。妻の雪江は、聡明な判断力や、秀れた美徳をそなえてはいるが、生活の日常が、すべて武家——旗本の品位を失わぬようとのみ、その心づかいが抜きがたい宿命観となって、若い肢体の活動を封じ、奔放な慾望の表現を、はしたない振舞といやしみおそれるようになってしまっていた。

それと——これと、あまりに懸隔がありすぎる。

藤三郎の胸の火は、もう一つ、幸福感が増してきた。

お八重にすれば、来るときに、いいやその前々から、くどいほど聞かされていたことだし、最初から藤三郎の颯爽とした姿や、やさしさ

など、ちらと見上げた真崎稲荷の社頭の瞬間だけでも、
（立派な殿様――）
と、それが思慕の芽生えとも知らずに感じていたのだし、だから今日の首尾を聞いたときに、
（あのお方が？）
と、嘘のように思えてならぬのだった。
身分ちがい！
それもある。しかし、先様は、それも承知ということなのだ。そして、いまこの舟の――屋形のなかで、夢のようにその殿様と二人きりでいるのである。
舟が、揺れるせいだけではなかった。手も足も、髪の毛も唇も、からだのすべてが瘧のように、わなわなとふるえているのだった。
（この殿様が……）
奇蹟とより思えぬのである。
（本当に、私を愛してくださるのかしら？）
うたぐってはいけない――と、それは幾度も、長五郎からもお登志からも聞いた。
だが！
生娘の、胸が妖しくときめいて、満開の緋牡丹が、自分の花粉に酔っている――そうした呼吸のつまりそうなときだった。
「八重」
不意に、藤三郎の手がお八重のからだに伸びた。
「……」
ちらと眸をあげただけで、お八重は、あわてて顔を俯せた。
血がのぼる！　全身の血が一滴のこらず頭の蕊へ――
（これだ……これなのだ……）
お八重は、自分のからだが舟ぐるみ、大川の水底へ巻きこまれるようなめまいを覚えた。
そのころ――
舟は、長さ七十八間の大川橋をくぐり、駒形から御厩河岸にかかっていた。もう眼の前に首尾の松が見えている。
お八重は、何もかも、うつつだった。藤三郎が、何か云っていることも、船頭が舟をつないで、陸にあがって行ったことも、大浪のように揺れる肩の喘ぎをおさえるだけで必死だった。
そして、ようやく云えたのは、
「あの、私……冥加がいっそおそろしくて……」
「なに？」
「殿さまの、お、おなさけを受けましたことが……」
襟足から耳のつけ根まで真ッ赤にして、これだけが、やっとのことだった。
「八重、この藤三郎がそれほどに、慕わしいと申すのか」
「……」
声はなく、お八重は、文金島田の根のゆるむのもかまいなく、藤三郎の膝に、身を投げかけてゆくのだった。

## 運命の足音

いのちのかぎりの思慕に泣く、女の声はうつくしかった。――否、男のこころを烈しく衝った。
藤三郎が、浅草の出合い茶屋で、お八重を待つ日が、幾日もつづい

た。

今日も——

屋外は煙るような小雨、午下りから待っている藤三郎は、いつになく、姿を見せぬお八重に、身を灼くようないらだたしさを覚えていた。

ふと、廊下に、それでない足音を聞いて、横になっていたからだを起した。すると、障子が勢いよく開けられて、思いがけなく、

「おい座光寺——」

朋友此村大吉だった。

「おお」

答えたが、一瞬、藤三郎の狼狽はかくせなかった。

「自体、どうしたということだ？」

「……」

「おい」

大吉は、むず——と火桶の前に坐った。

「くどくは云わぬ、いいかげんに止さぬか」

「何を止すのだ？」

わざと聞きかえす藤三郎の蒼白んだ顔が、大吉には、この上なく佗しかった。

「なァ座光寺、拙者に口数をきかせてくれるな。月六斎の組頭への挨拶も欠いて、それではおぬし、弱すぎるぞ」

「……」

「色もよい、恋もよい、それも品による」

「此村」

「うむ？」

「拙者に意見か」

「釈迦に説法——説く方がおろかかも知れぬがの」

「……」

「それに、ちらと噂の飛んでいることも耳にしたが。よもやと思うが気にかかる」

「よもやとは？」

「家名——」

「はッ、はッ、家名がなんだ、家柄がなんだ、いま世上で噂の高い旗本五人組、誰が家名など重んじておる？」

「いや、一概には申せぬぞ。放蕩無頼かぎりなく、治世にすねて荒れまわるわれわれだが、女に魂をうばわれはせぬ」

「此村——」

「待て、今朝組頭から呼びつけられ、それとなくの世間ばなし、おぬしに会えとの謎と読めた。でなくてなんで、昼日中、濡れしおたれて、おぬしを捜し歩くものか」

「……」

「座光寺、納得がいったか」

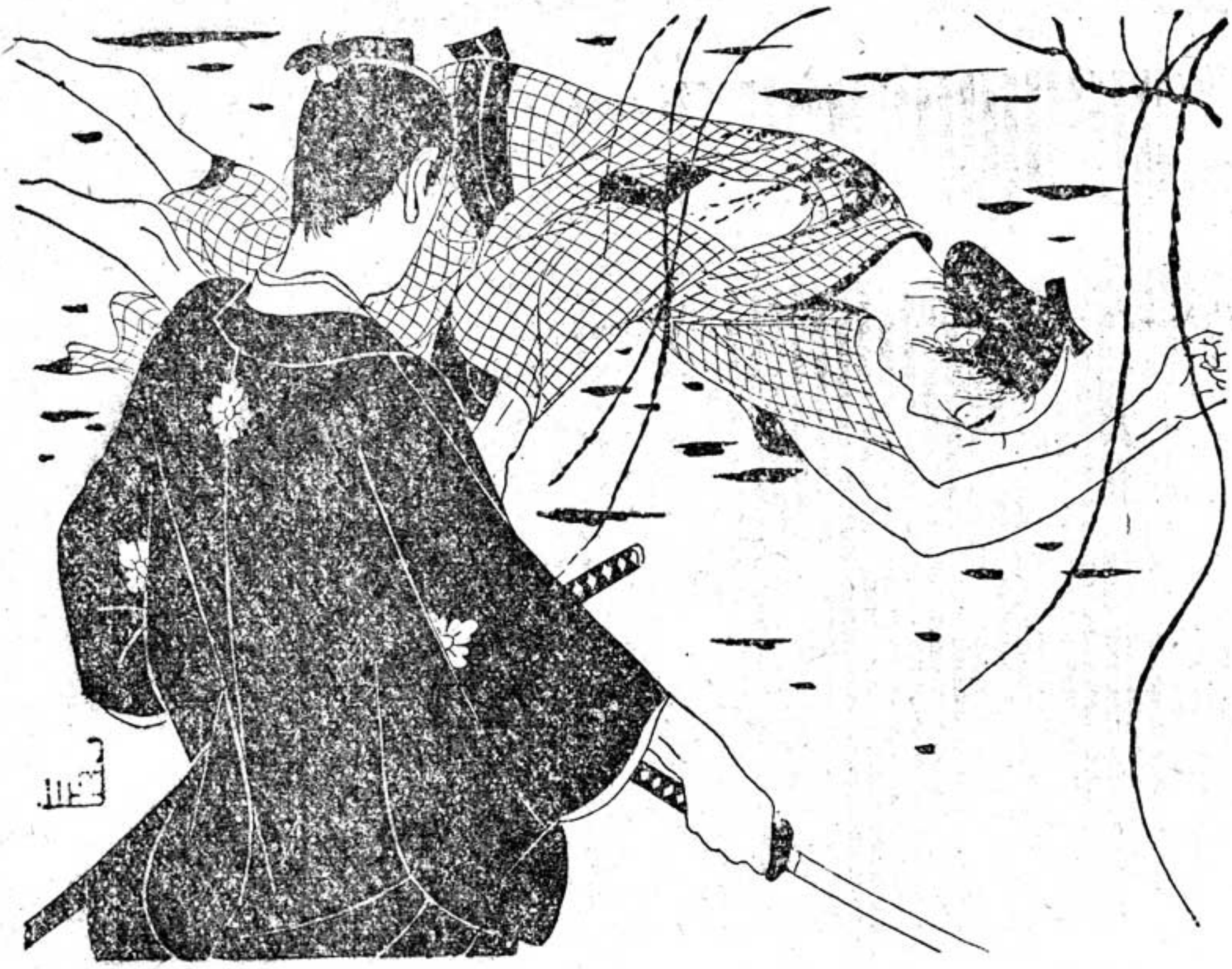
「さァ、一応は好意を謝しておく。しかし此村、拙者には拙者の考えもある。捨てて——おいてくれ」

「なに？」

大吉、かッとなりかけたが、自制すると、藤三郎の態度に気がついた。

いつになく、かおをこわばらして、唇の端にこまかいふるえが見えるのだ。

「そうか……」



と、気持もくじけ、青い息を吐いて、
「はてさて困ったお殿様よの」
軽く云うと、淋しく、それでも微笑を忘れずに、そっと立ち上った。
「自重を……」
云いかけて、なぜか大吉は、次の言葉を呑んでしまった。
——友をおもう！
彼には、座光寺藤三郎の運命の足音が、どこからともなく聞こえていたのではなかろうか。
大吉は去った。そのすぐ後で音もなく、隔ての襖がしずかに開いた。
お八重なのである。
女のからだが、滑るように藤三郎の傍に来た。
「さっきから、私、あちらで……」
「仔細を聞いたか」
「あい」
「つまらぬ話で気が沈んだであろう。家名がどうの、組頭がどう申したのと、しかつめらしいことを申していたが、嘘いつわりのない其方と拙者、恋には上下のへだてなく、心と心の結ばれたものを、鬼神であれ友であれ、離そうと致しても離れるものか。たとえ世間で小屋者とか、非人づれなどと蔑んでも、それは人の世の強者が勝手につくった掟にすぎぬ。いまに其方たちの身の上も、武家、町人どもの身の上も、一視同仁の時が参ろう」
藤三郎は自分で云って、自分の言葉に酔っているかのようだった。
そして、しげしげと、お八重を見て、
「よいか八重、盗み——泥棒をはたらく輩にも三分の理ありと諺にあ

る。まして正直正路の其方たちが、何の恥らい――何の遠慮、小屋者喜六の娘の其方は、天下の旗本座光寺藤三郎のおもい者だと、人にも話せ、おのれもこころにそうきめて、いかなるときでも卑屈になるなよ」

「あ、あい……」

「泣くな、なぜ泣く？　律義真ッ法の三河武士が、いったんこうと誓ったからは、二人の恋は火にも焼かれぬ、水の力にも押し流されぬぞ、は、は、は、は……八重、顔を見せい」

「……」

お八重は、顔をふりあおいだ。男の強い熱情が身にしみて、信頼と狂おしいまでの感激とで、涙が、あとから、あとからとつづくのだった。

## 駒形堂異変

もし……

声のようでもあったが、空耳かとうたがって、藤三郎が、二た足ばかり歩いたとき、

「もし麻布の殿様」

振りむくと、長五郎である。彼――今日もまた、身分をかくす町人態だ。夕暮れどきの浅草、雷門から並木への往来で、藤三郎が、町駕籠をひろおうと視野をひろげたとたんに、厭な奴に呼びとめられたのである。

「長五郎か」

にやっと薄笑いを流して、ぺろッと赤い舌を出しているのだった。

「へえ」

「拙者に用か？」

「へッ、へッ、へッ、殿様、所もちょうど浅草の、出合いの茶屋で好いた同志、しっぽり濡れたふたァりが、嬉しい首尾の雨あがり……へッ、へッ、何にも云わずに殿様、もうこれッきりでございます」

ずい――とからだを寄せてきて、いきなり掌を出す長五郎、相手を、小馬鹿にした動作だった。藤三郎は、下唇を噛んだ。

「長五郎」

「へ？」

「いくたび其方はそう申した？　聞きあきたぞ」

「殿様、どうかまあそうおっしゃらずに……いえね、昨晩ちかくで夜ッぴて打ち、夜の引き明けにァお手あがりてえ始末でござんす。この返しを算段に歩いたンですが、あいにくどこも手詰りとことわられ、思案投げ首の鼻ッ先へ、お見かけ申した殿様の御姿、地獄で仏のおもいでござんす。とんだ御無心でおそれ入りますが、こんどッきりでもう御迷惑ァおかけいたしません。どうか乞食にめぐんだと思召して、ほんの少々、いただかせてやって下さいまし」

「偽りではあるまいの」

「ど、どういたしまして、こんどというこんどは長五郎、間ちがいしたら舌ァ噛んで死んでごらんに入れます」

ところが長五郎、肚の中では、

（何を云やがる。かりにも天下の御直参が、身分ちがいの女を抱いてそれでお武家が聞いちゃいられねえ、ふ、ふ、ふ……大事の金蔓、これからだって、まだまだ無心をしてやるからーー）

「ここは路傍、人目がうるさい。それに、ちと其方に頼みがある、どうだ、駒形の先までつきあわぬか」
「そ、そうこなくっちゃ……ヘッヘッヘッ、御用となればどちらへでも、殿様、これでも長五郎は、愛い奴でござんしょう?」
「そうかも知れぬ、では、ついて参れ」
「かしこまりました」
長五郎、藤三郎の後から歩き出したが、なんとなく変な気持になって、
「殿様」
「……」
「駒形の先ッてえと、どちらでございます?」
「ちと遠い」
「え?」
「近くがよくば、地獄の一丁目でもよい」
「冗、冗談をおっしゃらねえで、実ァ長五郎いささかきたやまなんでござんす。あそこにそら、軍鶏屋が見えましょう」
「うむ」
「お供を、おねがいいたしたいもので……」
「えい!」
みごとだった。藤三郎が、腰をひねった瞬間——目にもとまらぬ得意の居合だった。
「うっ」
呻き声をつめて、顔を歪めて、長五郎、からだを曲げてくると、どうと前のめりに倒れてしまった。
やがて——腰ぐるまを深く斬られたところから、血汐が黒く、虫の這うように、地面を染めてくるのだった。

## その面影

二日ほど過ぎて、その日もまた、藤三郎はお八重をよんで逢っていた。
「のう八重、かねて其方も存じておる猪飼が、一昨日——拙者がここから帰った晩、卒中で死んだ」
「ま、猪飼さまが卒中で?」
一二度この茶屋へ、藤三郎がつれてきたことのある猪飼五太夫——逞しいからだの、まだ定命には間のある年配だった。
「と、いうことになってはいるが、実を申すと不慮の横死だ」
「え?」
「人手にかかって相果てたのだ」
「あの、人手に……」
お八重は、藤三郎の顔をのぞくようにしたが、長い睫毛の眼を俯せて、
「どうして人は死ぬのでしょう? あの長五郎さんも駒形堂で、たっ

た一と太刀で斬られて死んで……もしお殿さま、八重はなんとのう怖ろしゅうてなりませぬ」

「は、は、は、は、気の弱い。長五郎が斬られようと猪飼が死のうと、それはその者の運次第、其方はいつまでもこのように、拙者と二人きりの世界をたのしめばよいのだ」

「あい……」

膝の上で、袂の先をいじっているお八重の指が、白魚を並べたように美しい。藤三郎は、すこし、間を置いてから、

「しかし」と、お八重の指の動きを見ながら、

「老少不定と申しての、其方との逢う瀬を重ねて参った拙者が、明日の日——この世を去るかも知れぬ」

はッとお八重が首をあげて、

「ま、そのような縁起でもない！」

叫んで、からだをふるわせて、ひしと藤三郎にしがみついた。

「いや、いや、いや、いやです八重はッ、お殿さまに死なれるなど」

「はゝゝゝ……よせよせ、其方もまんざら小供でもあるまい。今朝逢うた人も夕には、無常の風の吹くままに、永劫の別離となるやも知れぬ——それが人生、朝置く露のごとしとは至言だ。よいかの八重、たとえ拙者にいかようなことがあろうとも、いたずらに嘆いたり、取り乱したりするでないぞ。万一のときはいつも云う、座光寺藤三郎の女だということを、ゆめ、忘れては相成らぬぞ」

「お、お、お殿さま、どうして今日はそのような不吉なお話ばっかりを……八重は、お殿さまを生命にして、嬉しゅう生きておりますに……」

「うむ、明るく生きるが何よりだ」

「いいえ、お殿さまにもしものことがありましたら、私は生きておりませぬ」

「はッ、はッ、はッ……これはきついむずかりようだの、もののたとえに申したまで、気にかけるな。この藤三郎も其方という、いとしい者を残してなんで、明日が日死に急ぎをしたかろう。生きようぞ、いついつまでも其方と二人で……」

「あい、千年も万年も」

お八重は、藤三郎の胸にすがって、うっとりとしたまなざしを送るのだった。そして藤三郎もいつものように、何のかわった様子もなく——が。その翌る日、藤三郎の使いの小者が、喜六夫婦の住むお八重のもとへ、袱紗包みの品を届けて来た。帰って行ったのだった。

「お八重、殿様からだ」

そう云われて、お八重が、急いでその包みを開くと——形見！

と、しるされた奉書にくるんで、鞘に、八座光寺家の紋をちりばめた短刀——刀身は志津三郎の在銘の一とふりが、贈られてきたのだった。

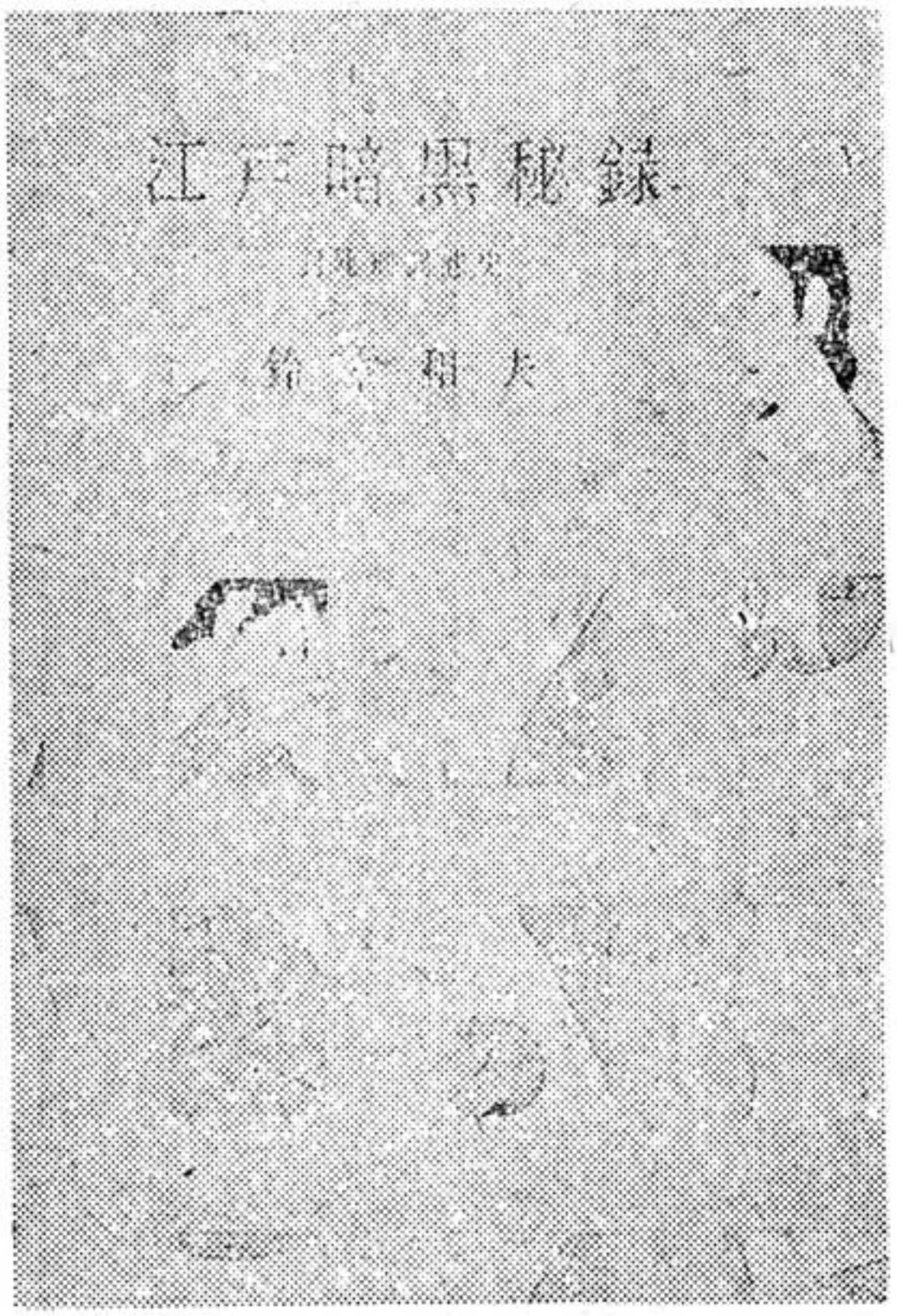
お八重は、はたと、全身の血の動きがとまる思いだった。嘆いたり取り乱したりしてはならぬ！　そうおしえられた昨日の今日——諄々愛の言葉をそそいでくれたその人の形見とは……

「お、お殿さまーッ」

叫びあげて、その面影を追うお八重であった。云うまでもなく、藤三郎はその日、公儀からの咎めの使者の来るのを予知して、それより先に、従容と、屠腹したのだった。

——その後のお八重、一説によれば、藤三郎の形見の志津三郎の刃に伏して、浄らかな生涯を捧げたという。

## 御待望の江戸暗黒秘録新装の単行本が出ました！




# 江戸暗黒秘錄

鈴木和夫著

東桂史・装幀

女囚の中には比丘尼などもいたが仏に仕える義、などという肩書きはもはや通用しない。浅ましくも縛られたまま剃髪されたのである。用心のため縛るのであるから、当然後ろ手に、それもきびしく縛り上げたものと思える。大だらいの水で月代を濡らし、囚人の後ろから髪結いが仕事をした。

いかに純情であった女囚でも、屋暮らしをしていては性格が荒むであろうが女の命といわれる髪を整えるのに縛り上げられたままでするということは、やはり哀しいに違いない鏡もなく、娑婆から来た同性や異性の髪結い達の好奇な視線を受け、髪を弄られる時、女心に血の涙を流す女囚も多かったであろう。

囚人の世話はすべて非人がするのだが、髪結ばかりはそうも行かない。髪結達は汚ながり、嫌々ながら仕事をしたであろう、と考える事もできる。邪慳な仕事ぶりであったかも知れない。女囚達は昔を思い出したことであろう。

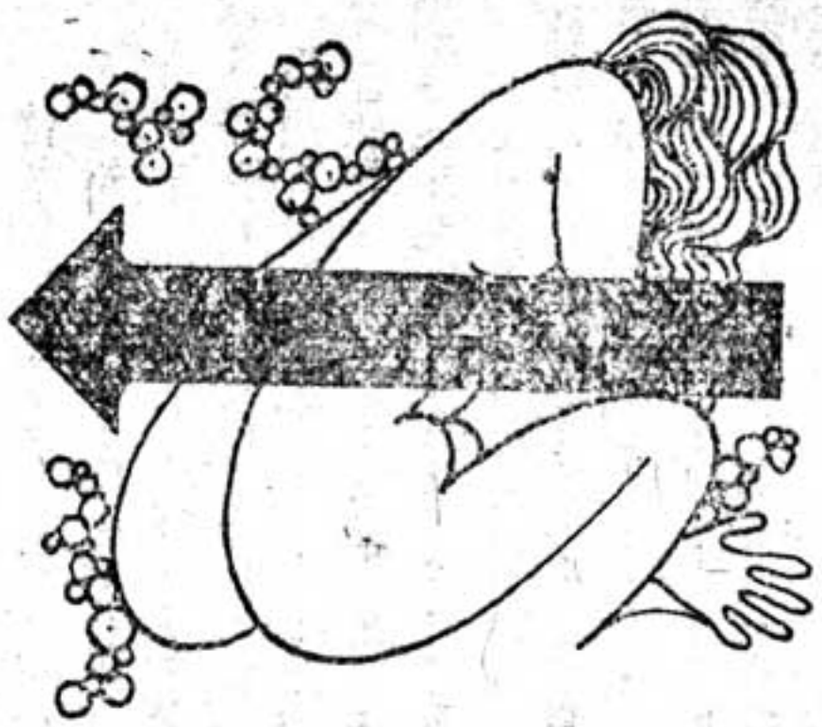
なお、髪結い一人に家主が一人ずつそばにつきそっていた、と記録されている。脂ぎった精力的な感じの狸おやじが、好色な視線をうら若く美貌な女囚に向け、その虐げられて無抵抗な姿を愉しんでいる光景なども容易に想像できるのである。

女囚といっても、荒くれ女や淫蕩な女ばかりがいた訳ではない。例えばほんの些細な失火を放火と見做されて牢へ送られ、火刑の日を待つ娘もいれば、雇い主からいいよられ、ついに身を許し、懐妊した事を…

**封建の闇にひしがれた人間性の暗黒面を貴重な資料によりまざまざと描出した好著！**

定価二二〇円・〒四〇円

東京都中野区江古田一　あまとりあ社



裏　窓

# 既刊号目次

★お買い洩れのないよう月ぎめで御予約ください。

★二カ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方には送料は，当社で負担いたします。

★三冊以上御注文の際も，送料は本社で負担いたします。

★御送金は振替御利用が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302
株式会社　久保書店
振替口座・東京　10756番

**34年（四月号）淫祠邪教特集**

○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
○絵物語・消えた刺青裸女…画・山田彬弘
○〃　・裸形弁天……画と文・中島喜美
嬲り観音……円城寺達
燃える女窟……溝呂木寂子
連載・怪異愛霊教(四)……飯田豊吉
まぼろし侍・壁虎呪文……黒木忍
髪行燈……志摩不二
恩讐地獄ぐるま……中林節三
女神の毒……南村蘭
女体苦患教……瀬谷伴八
腰紐呪法……島本春雄
馬のり仙女……藤見郁
女色金猫教……矢桐重八
八坂の妖巫……橋爪彦七
愛神の生贄……北羽奥男
黒髪呪縛……小田桐爽
彼女のミサ……黒羽新
邪宗淫寺抄……鈴木和夫
あの場面この女優……芝利泰
淫祠邪教秘話……峠浩介

（定価百二十円・送料十二円）

**34年（三月号）凄艶毒婦妖婦特集**

○グラビア・牛の骨と女……藤沢　修
○絵物語・剝製幻想曲……画・古正英生
○絵物語・妖艶娘縛絵……中島喜美
責め絵芸者……矢桐重八
キスで血を拭け……杉本駿
獄門首お銀……小田桐爽
姐妃のお百……橋爪彦七
閻魔のお秀……中林節三
毒蛇のお美津……葉田光
地獄沼の妖女……藤見郁
罪だぜ警部……橘新太郎
女体と蛹……黒羽新
連載・怪異愛霊教(三)……飯田豊吉
まぼろし侍・人肌将棋……黒木忍
開化女囚吟味……鈴木和夫
抱き寝如来……円城寺達
泣き方を教えて……鳴滝三郎
銃口は笑った……東零児
皿を割る女……伊達徹
つばくろ道中……明石汐子
女間諜散華……藤山秀緒

（定価百二十円・送料十二円）

**34年（二月特大号）変幻侠盗義賊特集号**

○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
○絵物語・誘拐に気をつけろ…画・古正英生
○絵物語・絖肌地獄……画と文・中島喜美
○絵物語・蛇夜庵の女……画と文・歌川大雅
魔女の神酒……南村蘭
湯文字盗賊……島本春雄
俺は義賊だ！……小田桐爽
幽霊小判……中林節三
山荘のヘリオトロープ……黒羽新
晴賂裸人形……葉田光
盗っ人傀儡師……橋爪彦七

女に瓶はいらない……橘　新太郎
変化中条流……矢桐　重八
お龍月夜がさ……藤見　郁
讐怨私刑抄(二)……鈴木　和夫
骨に憑かれた女……溝呂木寂子
肌責め稲荷……円城寺　達
信長奇矯録……志摩　不二
連載・怪異愛霊教(二)……飯田　豊吉
まぼろし侍・生首往生……黒木　忍
ガラスの檻……蝦墓家一美
洞窟の蠟人形……川野　京輔
矢部駿河守端書……明石　汐子
烈しい女……京極　美岐
美胡の足……潮　寛二
泰西俠盗伝……峠　浩介
貞女サートリー……北羽　奥男
（二月特大号、定価百五十円・送料十六円）

**34年（新年号）裏窓忠臣蔵特集**

○グラビア・手と足の表情……藤沢　修
○絵物語・紅蜘蛛と殺人鬼……山田彬弘・画
○絵物語・悩乱犬小町……中島　喜美
肌絵図悲願……中林　節三
魔俎侍始末記……藤見　郁
引き廻し小町……小田桐　爽
妄執美女どもえ……夏本圭之助
糊紅地獄……松井　籟子
陰陽元禄侍……島本　春雄
義央をめぐる人々……橋爪　彦七
狂異忠臣蔵……宇治川　龍
輪廻ごよみ……杉本　駿
お軽と三平……葉田　光
遥泉院切腹……蝦墓家一美
覗き見平内……矢桐　重八
連載・怪異愛霊教(一)……鈴木　和夫
まぼろし侍・蛇神異変……溝呂木寂子
黒い唇……円城寺　達
海底のハレム……志摩　不二
肌責め稲荷……飯田　豊吉
復讐陣……黒木　忍
男装十文字腹……蝦墓家一美
押入れの中のひとりごと……京極　美岐
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（十二月号）奴隷と圧制特集号**

○グラビア・若いヌード……藤沢　修
○絵物語・裸女島綺談……（文・夏本圭之助　画・山田彬弘）
○緋縮緬草紙……画と文・中島　喜美
煩悩奴隷宮……小田桐　爽
売春奴隷街……飯田　豊吉
靡(じょう)雨……衿垢　残
象牙の王座……橘　新太郎
虜囚美人伝……葉田　光
奴隷船事件……檀　達二
女奴隷の宝石……藤見　郁
奈落の檻……志摩　不二
その箱をあけるな……佐々木　力
悲願八丁堀……橋爪　彦七
伽羅肌ごよみ……岩堀　光
白い炎(二)……河野　春雄
外国雑誌に現われた女奴隷……峠　浩介
処女の代償……蝦墓家一美
隠密覚書・髑髏提灯……島本　春雄
穴倉菩薩……円城寺　達
黄色い毒蛾……溝呂木寂子
壷地獄……川口　直樹
泡(あわ)……松井　籟子
化身歓喜女仏……梅田　楠雄
奇妙な自殺者達……神戸　裕一
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（十一月号）陰謀叛乱秘録特集号**

○絵物語・廃坑は知っていた……秋吉　巒
○〃・ドクトル魔美の唇……歌川　大雅
○グラビア・みのりの夜……藤沢　修
無頼征韓党……葉田　光
張孔堂秘策……橋爪　彦七
妄執薬子絵巻……岩堀　光
烏羽玉侍……高木　龍二
泣き叫ぶ人工衛星……海部　陽三
おせいさまと隠亡……加山　和雄
讐怨私刑抄……鈴木　和夫
ナチス秘密諜報部の魔女……樋口　逸馬
淫らな釣師……京極　美岐
紅蓮の女……志摩　不二
白い炎……河野　春雄
隠密覚書・般若狂女……島本　春雄
女漁り旅……野田　淳
ゲヘナの火……麻布　義朗
夜の秘潮……松井　籟子
穴倉菩薩……円城寺　達
臀の下の男の小指……藤見　郁

ザルドの帝王……竹谷　十三
裏窓のぞき(読者評論)……天野　謙
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（十月号）怪異復讐譚特集**

○絵物語・女水芸師……〜文・櫛笥重三郎
　〜画・古正　英生
○絵物語・地獄舟……画と文・中島　喜美
○絵物語・鬼火河岸……画と文・歌川　大雅
○グラビア・光と肌と……撮影・藤沢　修
○絵物語・蝙蝠座の秘密……〜文・夏本圭之助
　〜画・山田　彬弘
連載完結篇・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・死棺小町……島本　春雄
旗本閻房譜……橋爪　彦七
絞肌呪文……高木　龍二
ストック・ホテルの怪……竹谷　十三
お島仇討旅……矢桐　重八
屠塚美女因果……葉田　光
変化若衆……三国沢　隆
妖異死神旗本……小田桐　爽
もうじき命日……宇治川　龍
倣れる女達……股野　元
足にひそむ悪魔……溝呂木寂子
毒蝶の宿……松井　籟子
妖気を誘う家……猿若　屯平
死を売り歩く男……尾島　新
怪異変幻抄……鈴木　和夫
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（九月号）敗戦落城秘史特集号**

○絵物語・夢魔の殺人……画・山田　彬弘
○〃　雪姫受難……画と文・歌川　大雅
○〃　女夜叉……画と文・東　桂史
グラビア・夜のえくぼ……撮影・藤沢　修
落城悲愴譜……宇治川　龍
餓鬼供養……伊能　孝
関ケ原悲歌……橋爪　彦七
父恋い娘旅……矢桐　重八
怒りの焔……麻布　義朗
落城洞窟地獄……高木　龍二
疾風馬賊黒鷹団……南村　蘭
琴姫散華……葉田　光
戦国女房……小山龍太郎
アポロの少年……砧　真砂男
切支丹殉教史(下)……鈴木　和夫
変性の破戒尼……梅田　楠雄
髪地獄……志摩　不二
邪宗門小町……小田桐　爽
隠密覚書・妖雲小倉城……島本　春雄
おつや櫛……鷲尾　素人
連載妖異・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（八月号）一揆殉難秘史特集号**

○口絵・泥人形……画と文・歌川　大雅
グラビア・渇きの夜……カメラ・藤沢　修
天保血笑録……小田桐　爽
美作一揆秘譚……葉田　光
独立黒月党……南村　蘭
一揆に咲く花……曲　二十八
四郎時貞の復活……宇治川　龍
美女門一揆……高木　龍二
黒旋風一揆……小山龍太郎
人魚と短剣……画・沖　渉二
切支丹殉教史……鈴木　和夫
宗吾秘命……橋爪　彦七
お綱草紙……画と文・東　桂史
天正あじさい若衆……大門　正人
黒い陽炎……浜松　武
隠密覚書・幽霊奉行……島本　春雄
佐渡夫人の魅惑……尾嶋　新
蜥(とかげ)蜴……伊能　孝
秘密のよろめき……三国沢　隆
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（七月号）憂窓妖異譚特集号**

○口絵・花髑髏……画・古正　英生
蒼白い手……〜文・高須信次郎
　〜画・秋吉　櫛
黒猫小町……画と文・歌川　大雅
あおみどろの座……宇治川　龍
七化け死霊……矢桐　重八
怨霊狂い化粧……橋爪　彦七
変化屋敷……高木　龍二
妄(もうきょう)鏡……酒井　皓介
寄生人の恐怖……前田　勇
かっぱ沼の魅惑……伊能　孝
近松門左衛門の血……平林　啓子
天使をいじめるな……佐々木　力
苛責厳刑譚……鈴木　和夫
黒い陽炎……浜松　武
いざりが夜にやってくる……否笠　一郎
ハラハラ場面オンパレード……高円寺一郎

K君の女装系図……滋賀　雄二
隠密覚書・裸女小判……島本　春雄
お町の罪……小田桐　爽
危険な曲り角……竹谷　十三
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（六月号）女忍者女間諜特集号**

○口絵・女城鶴巻地獄……（文・岩堀　光／画・柴谷宰二郎）
○グラビア・夜の砂時計…構成・喜多　玲子
蛇林洞秘文……南条　慎一
間諜暁に消ゆ……黒羽　新
伝奇怨霊沼……曲　二十八
血染曼陀羅……橋爪　彦七
間諜散華……藤見　郁
雪肌密書……葉田　光
紅紐呪縛……小田桐　爽
傾城忍者……高木　龍二
慶安女忍道……円城寺　達
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・妖異呪文鏡……島本　春雄
極刑秘抄……鈴木　和夫
女館南蛮船……画と文・歌川　大雅
卵の花くだし……大門　正人
蛇使いの王女……藤　琴也
死者は蘇える……矢桐　重八
悪魔は見ていた……神行　京一
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（五月号）裏窓妖異捕物特集号**

○絵物語・血まみれマリー…画・秋吉　櫻
グラビア・別離の詩……撮影・藤沢　修
新連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
愛憎血潮傘……松井　籟子
大名屋敷の怪……橋爪　彦七
獄門首供養……宇治川　龍
髷香肌小町……高木　龍二
妖異お告げ狸……矢桐　重八
吸血艶魔伝……青木　憲一
アマゾン流刑奇譚……大町　三郎
女刺青師……歌川　大雅
戦国刑譚……真野　麗
黄色い帯をしめた少女……竹谷　十三
海賊貴族……川野　京輔
拷問と処刑……鈴木　和夫
マダム僕をどうぞ……青葉　繁
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
隠密覚書・美女秘巻……島本　春雄
服地がほしい……岬　洋之助
波に笑う女……柳生　亘
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（四月号）裏窓妖婦伝特集号**

○口絵・お百化粧草紙……画・東　啓三郎
○口絵・白獣の市場……橋爪　彦七
裏窓巷談・島の喜三郎……青木　憲一
東西映画・名場面を探る……高木　龍二
野鶏復讐奇譚……伊能　孝
魔の二十分間……宇治川　龍
手提金庫の鍵……飯田　豊吉
肌絵を覗める男……小山龍太郎
桃色の替え玉……岬　洋之助
白い顔の悪魔……大河内常平
冷酷な雌獣……京極　美岐
鼻から上だけを見た……宇治川　龍
情炎千姫絵巻……橋爪　彦七
禍夜草紙……黒木　忍
隠密覚書・闇若衆伝奇……島本　春雄
十寸髪執念……大門　正人
仁俠恋まんじ……槇　剣吾
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
美代吉捕物暦……飯田　豊吉
伝馬町牢屋敷……鈴木　和夫
蛇女郎呪文……滝　一平
連載伝奇・お小夜嵐……高月　犬三
（定価百二十円・送料十二円）

**33年（三月号）裏窓妖婦伝特集号**

○口絵・お百化粧草紙……画・東　啓三郎
十六夜お新……橋爪　彦七
白狐呪伝……青木　憲一
奴の小せん……松井　籟子
刺青百万石……高木　龍二
まぼろしお徳……伊能　孝
松風吟味……宇治川　龍
からす猫お紋……飯田　豊吉
らしゃめん駕籠……小山龍太郎
紅筆ざんげ……岬　洋之助
黒い王座……ワトスン・独田
地獄部隊……大宮敬一郎
隠密覚書・幽鬼大名……島本　春雄
仮面の青春……藤川　博
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
白い顔の悪魔……矢桐　重八

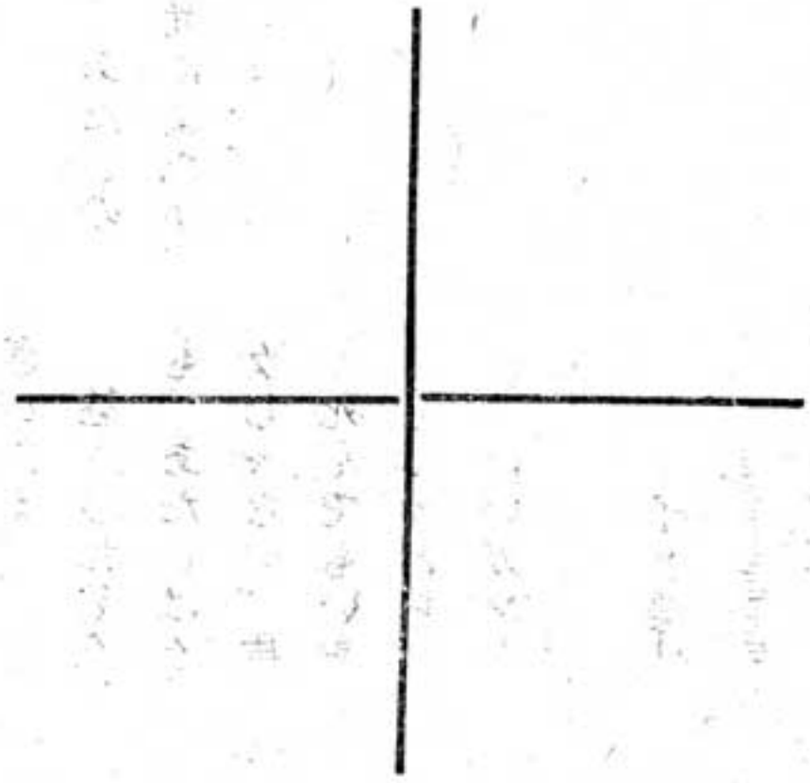
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）
**33年（二月号）裏窓遊俠伝特集号**
○口絵・柔肌偶奇……槇剣吾作・古正英緒画
英五郎笠松土産……橋爪　彦七
情怨姫買宿……葉田　光
疾風飯岡街道……飯田　豊吉
やわ肌仁義……中村　嶽
ちょぼ一お松……宇治川　龍
遊俠剣法……高木　龍二
愛憎メキシコ無宿……大門　正人
人工怪物……ワトスン・独田
仮面の青春……藤川　博
リュカ大王の宝庫……藤　琴也
隠密覚書・どくろ遊女……島本　春雄
白いくちなわ……三国沢　隆
狐（きつねび）灯……松井　籟子
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
鏡の中に男がいる……岬　洋之助
死体を運ぶ男……潮井　拓
地獄の指輪……神行　京一
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）
**33年（新年特大号）あぶちっく忠臣蔵特集**
○口絵・妖説女忠臣蔵……画・中島　喜美
阿撫的赤穂囃子……法界寺　嘉
美しき奴隷ジェリスナア……海部　陽三
闇に生きる義士……島本　春雄
元禄二筋道……橋爪　彦七
黄泉路の影……宇治川　龍
投龕燈秘聞……松井　籟子
妖説絵図まんじ……窪村　弘
元禄閨妄暦……真野　麗
雪嵐お美代ざんげ……伊能　孝
血まみれ観音像……飯田　豊吉
元禄乱れ小袖……黒木　忍
二人の内蔵助……小山龍太郎
あしのうら源内……岬　洋之助
こんばんわァ……岩堀　光
墓屋敷……大町　三郎
狐（きつねび）灯……窪村　弘
白い芋虫……伊能　孝
SS秘密クラブ……飯田　豊吉
隠密覚書・逢魔娘……黒木　忍
連載伝奇・刺青弁天……小山龍太郎
リュカ大王の宝庫……岬　洋之助
放浪の記……岩堀　光
（新年特大号、定価百五十円・送料十二円）
**32年（十二月号）あぶちっくすりらあ特集**
○色頁・倒錯のよろめき……高月　大三
○口絵・女を探せ……秋吉　巒
○グラビア・罠に陥ちた暴漢……編集部・編
隠密覚書・怪異蠟人形……島本　春雄
鱗肌異聞……南屋　彦六
地獄島……美作　賢
雌花のいたずら……京極　美岐
死人駕籠……黒木　忍
盗賊煙丸の最後……藤　琴也
妄（もうしゅう）執……大河内常平
輪（りんね）廻……三谷　春樹
殺（さつい）意……松井　籟子
夢（むえん）魘……窪村　弘
死体工場……真野　麗
妖夢呪薬譚……伊能　孝
青い顔の男……飯田　豊吉
歪んだ眼……黒木　忍
狐（きつねび）灯……小山龍太郎
死を弄ぶ女……岬　洋之助
紅燈夢……岩堀　光
血の蜜月旅行……大町　三郎
刺青弁天……窪村　弘
（定価百二十円・送料十二円）
**32年（十一月号）あぶちっくみすてりい特集**
○口絵・廃屋の妖精……伊能　孝
人差指の妬み……飯田　豊吉
闇（やみ）……黒木　忍
悪魔の祈禱師……真野　麗
闖入者……松井　籟子
地獄から殺しに来る男……花町　右門
金曜日の戦慄……横山　正克
殺意の黒白……陶山　密
窓（まど）……中林　節三
傷痕だらけの人魚……朝山　蜻一
なめくじ幻想曲……秋吉　巒
宝石呪縛……大河内常平
連載伝奇・刺青弁天……神行　京一
隠密覚書・鬼姫変化……三宅　一郎
恋人形……真野　麗
罠にあえぐ女……鳥羽　暎子
手裏剣……宇治川　龍

死体買います……柳生 亘
妖　虫……京極 美岐
女炎脂地獄……岩堀 光
コレラの死体……田井 良栄
黒いマニキュアの女……木原 康夫
偶奇談義……川口 映治
放浪の記……伏見 和夫
（十一月号、定価百二十円・送料十二円）
**32年（十月特大号）時代伝奇小説特集号**
○口絵・妖異羽子板呪法……秋吉 巒
海外グラマア写真集……編集部・編
書き下し長編・猿鐫伝奇……島本 春雄
悲曲梟雄伝……岩堀 光
女犯経秘図……円城寺 達
笄 呪 文……松井 簪子
隠密覚書・地獄大名……島本 春雄
播摩灘の裸女……稲垣 史生
紅毛卍秘筐……鳴山 能平
絖肌邪宗門……杉 良平
甲斐の舞面乱……宇治川 龍麗
耽奇亭秘舌……真野 彦七
人肌菩薩……橋爪 竜
放浪の記……伏見 和夫
悪魔の情婦……杏笠 一郎
女妖の檻……京極 美岐
（十月特大号、定価百二十円・送料十二円）
**32年（九月号）耽美小説特集号**
○口絵・日光浴
○〃・殺された七人の裸女
悪のホザナ……絵口 浩
女足の賦……真野 麗
女犯経秘図……円城寺 達
毛……夢野 蓉古
黄金の処女帯……柳生 亘
チーズ臭い三人の女……花町 右門
ヒー・イズ・マイ・ギャッグ・マン……鳴山 能平
虹 の 雫……早川小夜子
マヒトの告白……岬 洋之助
花吹雪天保女地獄……須崎 龍平
悪魔に呪われた三人の男……神行 京一
放浪の記……伏見 和夫
扉をたたく女……広尾麻津夫
隠密覚書・十人小町……島本 春雄
ウェストニッパーの枷……竹谷 十三
殺された七人の裸女……北小路一郎
偶奇坊主……岩堀 光
鐘ケ渕因果絵巻……稲垣 史生
（定価百円・送料八円）
**32年（八月号）異色読物特集号**
○口絵・裏窓裸天国……松井 簪子
贄の花……村岡 良平
狂恋懲罰監房……竹谷 十三
貞女お道……麻布 義朗
いぬ……伏見 和夫
放浪の記……鳴山 能平
夜の緋縮緬……佐々木 力
蝦蟇物語・肉ごたつの群……島本 春雄
隠密覚書・首吊り中藤……竹谷 十三
最大の逃亡者……陶山 密
日本ムスメを売買した男……ワトスン・独田
黒髪ざんげ……真野 麗
仇情お浜船……加藤 晋三
道化地獄図絵……夢野 蓉古
山西の黒い嵐……大町 三郎
単男と猫女……神行 京一
あ(虻)ぶ……三宅 一郎
女形地獄……稲垣 史生
生人形の夢……阿部 佐治
吹雪とお花……佐木 勉
胡蝶秘文……岩堀 光
（定価百円・送料八円）
**32年（七月号）倒錯の手記特集号**
○口絵・映画緊縛場面集……佐々木 力
蝦蟇物語・むしだんご……新津 勉
あべじの足……西条恵美子
金色に魅せられる女……鳴山 能平
草雙紙の世界……伏見 和夫
放浪の記……三宅 一朗
あ(虻)ぶ……岩堀 光
悦虐濡れ肌地獄……神行 京一
乳房を蒐める男……花町 右門
死に誘う天使……柳生 亘
ノーマン氏の不思議な実験……稲垣 史生
情炎白肌双紙……雪俊 遥
弄(ろうじゅう)獣……杉山 清詩
青(あおせん)線……梅崎 登志
魔(まくつ)窟……松井 簪子
妬(とけい)刑……大町 三郎
脱(だつごく)獄……島本 春雄
隠密覚書・女人駕籠……竹谷 十三
耽美小説・紫夫人……真野 麗
（定価百円・送料八円）
**○以下売り切れ**

# 黒ベレーと女たち

## 狂夢

（きょうむ）



## 宝石の眼

京極美岐 画
江淵晃夫・

急にトイレに行きたくなった。何しろさっきから水物をたっぷり腹に入れちまったんだものね。あのチンピラさんたらやたらとハイボールばっかり飲ましてくれるんだもの、ゲプゲプお腹が鳴ってる。

「トイレ行こ」

あたしはいつでもトイレに一人で行ったことがない。

決って三人一緒に行く。だからおおかたその店のトイレはあたし達で占領されてしまう

★ちょっといかす黒ベレーの男だったが、大切なチーコがそいつに見惚れたので、カッと頭へきた！

その占領があたしは大好きだ。

どやどやと席を立ってトイレを占領に行こうとした時、あたしはデキシー特有のつんざくようなトランペット・ソロの中にカチンとあたしは立止ってしまった。

目。煙草の煙に煙った暗い店の端の棕櫚の葉の影にいる目だった。

キラッと、まるで宝石の光だ。

あたしは吸われてしまいそうにらえた。

目は、黒ベレーのような帽子からたっぷり毛の出ている白い顔のところにいた。じーっと見て、あたしを離さない。

あたしはぐいと睨めつけた。と、あたしの烈しさにギョッとしたのか、目の光はよたよたして急に物欲しげな、どの男でも女に対して見せるでれでれしたものに変ってしまった。そしてどんなゼスチャーでもいいから好意的なものをあたしから欲しがっている。

（ちぇ、なあんだ。ちょっといかすと思ってやったのに。引っかけてくれっていうんなら

お断りだよ）

席に戻ってガヤガヤ喋り始めてからも、あたしは妙にあの目が気になりだした。なんとなく目先をちらちらするからだ。そう思うからかどうか、あたしを欲しい目には違いないけど、その辺にごろごろしてるのとどこか違う気になってしまっている。

男達の目なんて、てんでいやらしくって、汚い色をして、あたし達の肌や肉のかっこうを見透かそうと舌なめずりしているんだけどこの目にはそんな下品さ以外に、じーんと浸みて来るような——そんなんじゃないわ、アミーバの歩くようなベットリした粘りと強烈さがある。

魅入られそうであたしは目をそらせた。でも、あたしはそれっぱなしで黙って引っ込む女じゃない。男に見られて下を向いてるなんて死んでもいやだ。

「ちょっとちょっと。あの棕櫚の向うにいる奴、いいガンをつけてるよ。じろじろ見てる」

チー子と美代の目が、さっとそっちへ走っ

た。と、その目はあわてて視線を変えて、急にベレーがそわそわ動いた。
「うぶなの。見られたんで逃げるよ」
あたしは鼻先きで笑ってやった。
チー子も美代も、口々に強気な男を囃して笑う。男は、真赤な頬で床につっかかりながら店を出て行った。
急にあたしは、いたずら心が沸いて来た。
「からかってやろうよ、今日の遊びじまいにもって来いの鴨じゃないか……」
荒っぽくいうと、あたしはもう、そのベレーの後を追っていた。
あたしはなんでも思ったことをその時すぐにしてしまわないと気が済まない主義だからいつもぱっぱっとものをやっちまう。
店を出たつい先の角で、あたしは男の背から生意気に呼び止めた。
「そんなそわそわして逃げなくたっていいじゃないの」
男は立止るとくるっとこっちを向いた。
冷たい目！
あたしは、人違いでもしたかと一瞬躊躇した。あの目から想像していた男はニヤケたでれでれ男だったのに、黒い眉が白い顔にくっきりして、下ぶくれの頬や、艶っぽい唇が、横のショーウインドウにすてきな美しさを浮ばせた。
江戸時代の役者のような気がする。上流のお坊ちゃまなのに、その中には鋭い媚があるなまめかしさを持っている。
チー子達が走り寄って来るまでのごくちょっとの間だったけど、あたしは見惚れてしまって、からかうことなんか忘れそうだった。
美代の笑い声でわれに帰って、あたしはすぐ元の悪い女になり、
「何だかじろじろ見てたけど、用事じゃなかったの？」
突っかかるいい方をしてやったら、目をおどおどとさせて、
「用事なんか……」
口の中でもぞもぞいうのがあたしをいらいらさせる。
「用もないのに人の顔じろじろ見る人ないじゃないの」
「あなたの黒子に見惚れてしまっていじっと見てしまって……」
とたんにあたしは幻滅だった。今感じた男の美しさからはほど遠いせりふや声音だったし、第一女臭いいっぷりは鼻もちならない。
あたしは嫌になった。男と名のつく人間なら女にハッタリをかけられて、この野郎女のくせにデカい面しやがって、と睨むか、ちょっと歯切れのいい娘じゃねえか、と口説くチャンスを待つ目をするもんなのに。てんでそんなことがないんだ。
「ほんとに迷惑をおかけして申し訳ありません。すみませんでした」
ほんとに頭を下げて謝って、そのまま逃げて行っちまう。毒気を抜かれたあたしは、ぼかんとした。
「何よ、あれ……」
あたしはゲラゲラ笑いだしたわ。
けど、急にからかってやる計画を裏切られたのに気づいてペッと唾を吐きながら、くやしさを静めて、チー子の方を見た。ところがチー子は、ぼやーっとした目でつっ立っている。
あたしはピインと感じた。
「チー子」
あたしはむっとして云った。
「何さ、そのでれっとした目は。そんなことで遊びはできないよ」
とたんにあたしを見上げ、びチー子はひやっとしてくびくしながらごまかし笑いをしてる。
そりゃあ、今の男は近ごろでは最高だった

し、チー子の好みにぴったりだったかも知れないけど、それにしても今の目の色は、あたしが頭に来てもいいほど輝いていたんだ。

全く、チー子は惚れっぽい。そのくせ、あたしに怒られると甘えて来る。あたしの罰がこわいからだ。チー子が、でれっとしたのを見つけた時、あたしは絶対にいじめてしまう。チー子はあたしがいじめると、すぐまいってしまう。ちょっとの時間なら嬉しがるのに、長くやってると息を詰らせて泣き出してしまい、よしてえ！　とわめく。

あたしはチー子の耳を、ぎゅっとつねってやった。チー子だけにわかる罰のサインだからだ。おびえた目でチー子はあたしを見上げた。

「帰ろう」

こんな時のあたしは一秒でも早くチー子をいじめないと気が済まない。流しのタクシーを止めて、美代を家に送って、車をあたしの室へ廻した。

「ねえ、あっちゃん……ごめん。もうあんな目しないから……」

「だめ。あたしに全部くれたはずなのに、あんな奴をぼんやり見て。許せないよ」

## 裏切り者！

学期末の二週間休暇でチー子は、家から催促されて渋々大阪の生家に行ってしまって、それから三、四日した夕方だった。お姉さん夫婦と鎌倉の親類へ行った美代から、突然電話が来た。

「すぐ駅まで来てよ、電話じゃだめなのよ」

いつにないあわてた美代の声に、あたしはよっぽどのことだと感じてすっ飛び出た。

駅の改札で、美代は赤味を帯びた目で顔を合すなり、

「驚かないでよ。チー子が東京駅にいたのよ。それも、あの男と一緒に」

「ええ？　東京駅に？　チー子が？　あの男って誰さ？」

面喰らってどもるのへ、

「この前、からかいそこねた男よ。チー子がてんでぼーっとした男。黒いベレーのさあ」

あたしはピインと感じた。

例の女みたいな男のいやったらしい声を耳に思い出した。

「湘南電車の伊東行きに乗るところ、あたしちゃんと、この目で見たのよ。ベルが鳴って発車寸前の時、階段を走り上って来て乗ってったわ。赤いコートだって靴だって長い毛だってチー子に間違いないの。ドアに走り込んだ男がドアーのしまるのを押えてチー子と引っ込んじゃったのよ」

「まさか！」

チー子があの男となんて、まさか！

あたしは信じられないよ。

「あの子にそんなことできるかしら？」

あたしの知っているチー子は、あたしを離れて自分勝手に、男を手玉に取れる大人じゃない。

それに男に引っかけられて絞られるような下手な事はあたしが教えてあるんだからしないだろう。

第一いじめられているとはいえ、チー子はあたしがなけりゃ生きていけない子になっている。苦しがるくせに、あれがなければ一日でもじっとしていられないのが、今のチー子だ。どんなすてきな男が出てきても、二日や三日じゃチー子にあれの味を忘れさせることは無理だ。

そんなことより何より、なぜ、いつ、どうやって、あんな男と、しかも伊東行きに乗ることができたんだろう。

チー子は三日前に大阪に行かなかったなんて考えられない。あの子は、そんな巧妙に嘘を云ってあたしをごまかして、その上男と遊び廻る腕なんてないはずだ。

「嘘じゃないわ」

あたしの顔から心を読んで美代はかみつかんばかりにいった。

あたしがどう思っても、美代がこれまでにいうんだから、それ相当の確実さがある。

美代がチー子のことで嘘をいうことは、チー子が東京にいるということより信じられない。美代は正直だ。

あたしは、そくっと背中が寒くなった。

「どうしてチー子がそんなことをするんだろう？」

ぐうっと不安と怒りが吹き出して、胸に苦い水が溜った。

（チー子の奴！）

「大阪へ電話しよう！」

美代のいうことを半分信じないままで、チー子の大阪の家へ直通電話を掛けて確実に知ろうとした。電話に走って、やたらにあわてながらチー子の家を呼んだ。

「塚田智子さんいらっしゃるでしょうか？」

明らかに戸惑った答えが、あたしの耳へ流れて来た。

「智子ですかあ？　あの子は……今、東京の方へ勉強に出していて、こっちにはいません　ですよ。なんでしたら東京の方の住所を…」

といいかけるのを、ガチンと切った。

（いない）

あたしは頭がじいーんとして、かあっとしそうな受話機をゴトンと置いていた。今の電話の声はチー子がまるで家に帰ることなんかないのを明らかに示している。いくらなんでも大

阪まで三日もかかることはない。
美代が見た伊東行きの女がチー子だろうがなかろうが、そんなことはどうでもいい。二日前には絶対戻っているはずの大阪に、実は帰ることすらいっていないことの方が重大だ。
チー子の生きている時間は、どの時間でもチー子自身よりあたしの方がよく知っているとあたしは信じているくらいなのに、チー子は全くあたしの知らない時間を、あたしの知らない所で過している！
（裏切られたんだ！）
大阪へ帰る前の夜、チー子は、
「四日も五日も逢えないんだから、好きなようにいじめて」
なんて自分からあたしにせびった。
一晩中しくしく泣いて暴れてたのに。
あたしだってチー子がいなけりゃ淋しくてたまんないのが本音なんだ。美代のように、チー子があたし達をごまかして男と遊んでいることを怒るのと、あたしの頭に来るのとでは、くやしさの度合が違う。
癪だけど、チー子にだまされたみじめさやつまらなさに涙が出てきた。
「バカ！」
通りに飛び出して目の前の電柱を殴りながら叫んだ。
美代が胆を潰して通行人の目からあたしを庇うように抱いてくれていたけど、その重ったるささえ頭に来ているあたしには癪になる。くやしいんだもの。
（畜生、チー子の奴！）
「美代おいでよ」
気違いじみて、あたしはTの洋酒部へ車を飛ばした。頭に来た時、そこで強いウイスキーを買って飲むところがあったから、あたしは同じことをしたかった。
イギリスの六千円近いウイスキーをまたタクシーの中で、まごまごしている美代をまたえて、室に戻るなりコップに注に引っぱり込んで、いでひと息に飲んでやった。
大きくはないコップだったけど八分目は入っていたから、美代はいつも荒っぽいあたしだったけど、気違いじみた凄さに悲鳴をあげて、ウイスキーのビンとコップを引ったくり上げた。もしあたしに持たせておいたら一びん飲み干してしまったかも知れない。
同時に喉がじりじり焼けて咳き込んでしまった。お腹が空いているところに凄く強いウイスキーが入って来たんだから、たちまちかあっと全身に廻ってくらくらっとした。
「あっちゃん！」
美代が倒れるあたしに抱きついて来るのがうっすらとわかった。

## 忘れてた女

目を覚ました時ひどく暗くて、頭の中がじりじりしていた。本能的にあたしは、スタンドのスイッチへ手を伸しかけ、はっと身をちぢめた。あたしの体は柔かくてこりこりした肉にぎゅっとつかまれているのだ。同時にぷーんと特徴のある体臭が鼻をついた。
（美代ちゃんがいる）
小さな声で呼んだらもそもそと蠢めいて生温い肌が、すーるるるっとあたしの背中へ這いずって来た。
「抱いてえ……」
ぞっくりお腹をくすぐるみたいな甘え声が耳元でした。全身の血がかあっとした。無性に美代が可愛くなって抱き締めちゃった。
しばらくしてから「苦しい」なんていうから、ちょっと力を抜いてやった。
肩が冷える気がしてよく毛布を引いてやって、しっかり抱き合ってじっとなった。
ふと、あたしは、なんでチー子みたいな裏

切者を可愛がってやって、美代を忘れていたのかと惜しくなる。

忘れてた訳じゃない。考えて見ると、チー子があたしと妙な関係になって、美代とは遊ぶだけなのは、そう重大な原因も思い出せないけど、美代は、あたしやチー子みたいに、全然赤の他人の商売下宿にいるのと違って、お姉さん夫婦の離れにやっかいになってるから、時々は夜遊びできないこともあったし、むろん泊り歩きはだめだった。

そんな関係で三回に一回は遊びの途中で家に戻ったりすることがあったし、だいたい美代の家は代々木で、あたしとチー子の室は下北沢にあったことも、美代が、わりにあたしと二人きりでいるチャンスを失う原因だったかも知れない。

外泊の自由なチー子は、その上あたしの室と、百メートルと離れていないところに室があったから、遊びの帰りなど、たいてい途中で美代はあたし達と別れて代々木に帰り、チー子とあたしは二人でいることになる。

性格も、美代にはわりにしっかりしたとこがあって、美代はチー子はまやかなチー子を可愛くなってしまった。つまり、美代はチー子より、あたしと深入りした関係になる条件が少なかった訳だ。

だから、あたしがチー子だけと秘密な関係を結んだのは、故意ではないとも考えられるんだけど、でも、あたしは三人仲間の間に、チー子とあたしだけの世界を作っていたことはとても美代に悪い気だった。

（あたしは美代を仲間はずれにしてたんだ）

急にすまなくなった。

それに、チー子がいい時は、チー子、チー子で可愛がっといて、チー子が裏切ったとなると、その場で美代と乗り替えている。あたしってなんていや味な女なんだろう。

急に、かあっと感情が狂った。

「美代。ね、美代、あたし悪かったわ。ごめんね、美代！」

美代は、急に何を云い出すの？　という目でびっくりしてあたしを見るのへ、

「あたしほんとはチー子と――」

いいかけるところを、美代はいきなりあたしの口へ掌を当て、

「そんなことというのいや！　チー子はまやかしなんだから、あっちゃんだまされてたんじゃないの。チー子はだめ。これからは美代だけよ。美代だけ好きになるのよ」

あたしは頭がかっかして来て美代の腕にギリギリ噛みついた。

「好き……」

あたしは美代に抱かれた。それからすべてを賭けて美代を愛した。

美代は、やがてあたしの胸でぐったり睡りだした。チー子なんかと全然違う大人の体をしていた。

チー子なんかちょっと長く可愛がるとすぐ苦しがるのに、美代はじーっとあたしの云うなりに喜んでいた。それにキスをすればちゃんとキスを返す。それもすてきなキスを。

知れば知るほど美代は凄い。チー子なんかみたいな小娘と違うと、また思った。あたしは完全にまいった。どうにも美代なしでいられない。男を引っかけて弄んで翻りものにしたのなんか暇潰しに思える。

ということは、チー子があたしを完全にまいらせていなかったから、チー子の時はあんな遊び廻っていたという結論になるから、あたしは、ほんとにチー子を愛してなかったといえる。こう考えると少しは美代に対して過去のあたしの不実さを許してもらえる気持だ。

美代は、あたしが昔どんなことをしたかについては一言も文句をいわない。だからよけ

いにつらくなってしまう。その上美代は全精力をあたしに注いでくる。チー子が全部あげるなんていうのと質が違う。

あたしと美代は、ただのSゴッコなんぞとは違う。歴然とした恋をしてるんだ。睦まじさは誰より凄いという自信がある。

でも恋には決って邪魔なものが持ち上って来る。でもそれが恋の火をもっと強く燃すんだろうけど、美代はお姉さんのやっている美容院で休暇中は働いていた。

だからあたし達は逢う時間が夜しかない。

それが、美代はこの間あたしの所に、あたしの酔いの介抱で一泊したことで、お姉さんに叱られているから、夜遊びも大きくできない。夜そっとあたしが美代の室に忍び込んでほんの二三時間抱きあう以外は、今のところ逢う間もないありさまだ。

「学校が始まれば、何とかなるからね」

と二人で慰めあう以外はない。

## 黒いベレー

そんなベタベタとねばりっこい味のするある夜——たしか美代と愛を誓って七日目だったけど、あたしは、店を抜けて来た美代と時間を過して次の逢引を約束して、室にタクシーを走らせていた。

あたしはニヤニヤしていた。美代の太腿に何個あざをつけたか考えたり、自分の胸のキスマークを思い出している時、ふとあたしの気になるものが目についた。

ぼやっとしてたんですぐそれが何か思い出せずにいたけど、一瞬何かを感じて、はっとした。大きい薔薇模様のカーテン。

「止めて。降りるわ」

あたしは考える間を作らずに車を捨てた。

肌にしみる春風に白皮ジャンパーのポケットへ手をねじ込んだ。

（帰って来てるんだ）

あたしはペッと唾を吐いて、チー子の灯の点った窓を見ていた。

かっと頭に来るような怒りはなかった。これがあのウイスキーを飲んだ日なら、血を見るのも平気だと思うくらいな頭になったろうけど、あたしは、自分でも不思議なくらい、冷静だった。その冷静さがよけいあたしを狡猾にして行く。（よし、精神的にいじめてやろう。ノイローゼにして、気ちがいみたいにさせてやる）

むらむらと沢山の責道具や台詞が沸き上って来る。これから起ろうとする遊戯にあたしは、わなわな戦慄した。

躊躇なくあたしは下宿者用の裏玄関に入って戸を閉めた。

目の前の急な階段を昇っていくとその頂上のドアーが、チー子のいるところなのだ。あたしは、絶対に許さない誓いを立てた。死んで謝っても許してやらない。それにもしもの時は、殴っても引っ掻いてもいいと決心した。

派手な騒ぎの大好きなあたしが、この数日美代と、ひっそりと静かな遊びに夢中だったから、その押えられている派手騒ぎへの欲望が、ここでわあっと沸いたんだ。あたしは血が逆流するくらい興奮しだした。美代のことは、あまり頭に浮ばない。

階段をきしませずにドアーの前に行って、あたしは、ドアーに寄り添った。しーんとして人気がない。

（いないのかな？）

もしかしたら、あたしの室に行ったのかも知れない。そうなら、あたしは洋ダンスの中に入ってチー子を待つのも面白い責め方だと考えたりした。

ドアーのノッブに手をかけて、静かに廻した。カチンという金属の音と一緒に、ドアーはスーっと開いた。

むっとコーヒーの匂いがして、右手にカーテンを吊ったベッドがある。誰も見えない。素早く室に身を入れてドアーを背で閉めた。洋間式の小広い室の中は、きちんと整理されている。

と、瞬間ギョッとした。

あたしはそのままドアーへへばりついて、全身の血をぎちっと凍らせた。

男！　男だ！

それもベッドの中にいる。

チー子と抱き合ってねているのかも知れない。ともかくベッドの横の小机に乱雑な置き方で、男物のスプリングと背広がある。それに黒の！　あのベレーも！

しかしチー子の服は見えない。鋭い目で室内を見廻しても、チー子のものは見えない。おみやげ物らしい包みが一つとブルーのトランクが小机の下にあるだけだ。

（チー子はいないのかな？）

突然、シューっとガスコンロの湯が煮立ち始めて、あたしは胆を潰しかけ、湯の沸く音だと感じてほっとした。が、次にカーテンが揺れて黒い物がぬっと現れたから、思わずあたしは、ドアーの板を爪で掻いてしまった。

男は、はっとこっちを見た。

目の合った瞬間、男は持っていたピースの箱とライターを、ドサンと床に落した。血の気の失せた男の顔に、あたしは、すっと心が安定した。男はあたしを恐れている。手がピクピクして、ズボンが揺れている。

あたしは固めていた肉をゆるめてから、ふんと鼻先を歪めてやった。それから、素早い目で室を見廻し、横手の日傘をつかんで、いきなりさっとカーテンをまくった。チー子がいるかどうか見たんだけど中はからだった。

男は、あたしの凄みのある仕方に目を灰色にして震えていた。あたしは、それにますますすつけ上って、さらに冷静になった。

ゆっくりタバコをポケットから出し、ライターで火をつけ、わざとふうーっと煙を吐いてやった。この男の心臓をもっと弱らせるには、こんなハッタリが効果的だ。

「チー子が、お世話になってるっていうのはあんたなの……」

上目づかいにニヤニヤして、不良らしく口を切った。男は震える体を柱に押しつけてこらえてる。

あたしはガスコンロの湯沸かしが気になって、ガスを切りに行ってやった。シューンとお湯の音が消えて、急にしーんと四囲が静まった。静かすぎるのはおもしろくない。ラジオを見つけてスイッチを入れると、同時にビシビシっと肉を打つ音や、ワァーっと歓声が室の中に飛び出して来た。

(拳闘の中継とは、てんでお誂えじゃないの)

「チー子はどこに行ったのよ?」

一服吸って煙を吐きながら、あたしは男を睨めつけると、こわばった顔を歪めて何かいおうとした。

ふと、あたしは男に妙なことを感じた。

ばかに太身のズボンを穿いて、見たところお腹も太く見えてたけど、よくよく見てると変にお腹は細くて下腹が出てる。それにYシャツの裾が、男のそれと全然違うんだ。

(女じゃないの?)

「お前、女だろう!」Yシャツの裾をつかんで、ベリベリっと布を破った。

かっと目に入ったのは上気した桃色の乳房と、点々とキス・マークの跡が紫色に印されている女の体だった。

どういうものか、相手が女だと知って、あたしはもっと狂暴さが心に沸いて来る。

(畜生、お前みたいな変態女に、チー子を取られてたまるかい!)

拳で相手の顔を殴りつけて、もつれて床に倒れた。

(殺せ! 殺していいよ!)

誰かの声が耳にがんがんして来るほど、あたしは狂っている。女に馬乗りになって、数回ひっぱたいてグロッキーになりかけている女の体から、シャツをむしり取り、ズボンに手をかけた。布バンドがバシンと切れた。

女の毛をつかんで、床をひきずりころがして、俯向きになる喉を起して、ひと突きしようとした瞬間、女は、ぱっちり目を開いた。

苦しさと恥かしさにみじめな光を淀ませているその目が突然、愛撫の責めから救われたいときのチー子のする独特な媚の色を、あたしに投げつけて来た。

それは「もう止して」というよりも「もっと愛して欲しいけど、苦しいわ」というあの目なんだ。なんだか、ぞっとした。

あたしは女を放した。女は苦しく蠢めいて低く云った。

「こわい人……」

キラキラ光る女の瞳に、さらにあたしを誘う生気が加わって来る。あたしは、このままでは女の意志に縛られてしまいそうだ。

あたしは、女から逃げて壁へへばりついた。女は、もそもそと這い動き、あたしへ物欲しげな体つきまでして、手を伸す。

「ちょうだい……もっとして!」

あたしは目をぎゅっと閉じた。

(チー子があたしを忘れたのはこれなんだ! 気違いじみてる!)

目を開くと女の魔力のある体に魅せられて、飛びだして、階段をほとんど飛び降りて外の通りに倒れながら走った。

# 鉄砲伝来 海の魔王と女たち

小田桐 秋吉 爽 鬼・画

★見たこともない魔法で殺される！
★娘はしなやかな裸身を悶えさせ逃げ惑ったが銃声は鋭かった！★
★囚人達は恐怖に泣き狂った★

## 新兵器

その日、松浦肥前守興信は精一杯の親愛感を表現して、一人の賓客を迎えた。

悠然と椅子に腰をおろしたまま、軽い会釈を返した容貌魁偉の男――明国人の大海賊王直である。

王直の笑顔を見た者は、まだ誰もいない。

驚に似た鋭い眼は、常に怒りの光りを放っているかのようであり、その瞳は不気味な金色だった。顔を厚くおおっている剛毛の髯は、鍾馗を思わせる凄絶さである。

その髯の間の分厚い唇から、抑揚に乏しい日本語が、不意に飛び出した。

「興信どの、珍らしい物、土産に持って来た」

「王直殿、久しいのう……」

「おう、土産と云われるか。それはそれは。ぜひ、見たいものじゃ」

王直が珍らしい献納品を持ってくるのは予期せぬ事ではなかったが、興信は好奇心をおさえきれずに、思わず身を乗り出した。

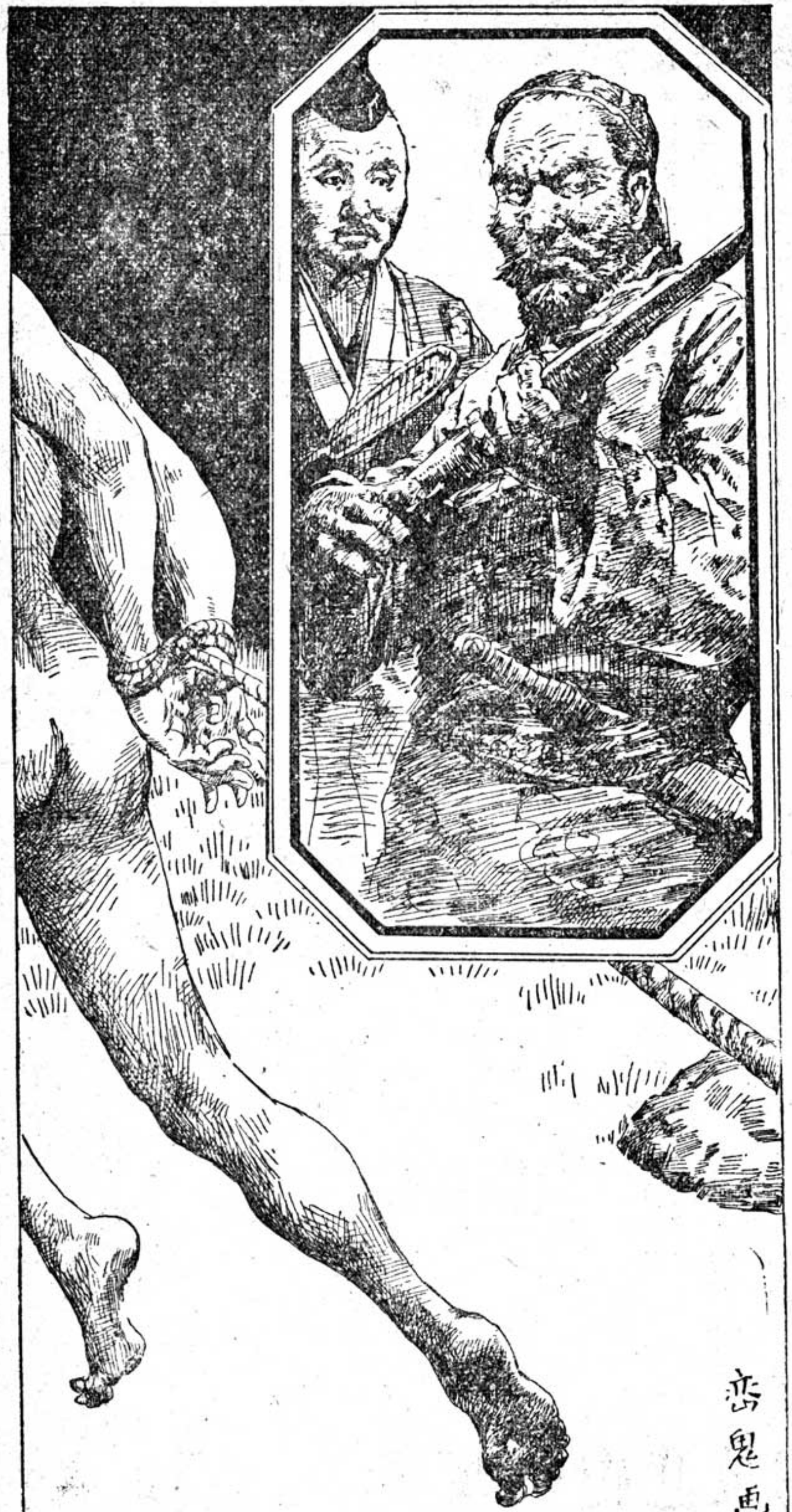
嵯峨源氏の流れをくむ肥前国平戸の領主、松浦党の宗家第二十四世の松浦興信が、豪族の威厳も忘れて、少年のような好奇心を示すのだ。――しかし、それも無理はなかった。

王直が南海から持って帰る物は、いつも驚嘆に価いする品ばかりだったからである。

「その土産とは、珍獣か？　宝ものか？　それとも、美しい音色を生む楽器か？」

「いやいや。そのような物ではない。興信どの、武器、持って来たのだ」

**女性解放悲史・特集**




「ほほう、武器とな……」

傍に控えていた王直の部下の一人が、細長い箱を興信の前に置き、蓋を開けた。

箱の中には錦の袋に包まれた細長い物が入っていた。王直は袋の紐を解き、無雑作に中の物を取出してみせた。

「……これが武器か？　刃が無いようだがどういう使い方をする？」

「興信どの、刃はない。これ飛道具。刃はいらない」

王直はその細長い飛道具に、何か物を詰めるようであった。

そして、武器の中程にある細い縄の先に火をつける——。

興信には王直の意図がわからない。ただ、不審そうに王直の動作を

眺めているばかりだった。

「……興信どの、見よ。この筒、火を吐く。敵を倒す」

王直は立ち上って、廊下へ出た。

武器を肩に構え、庭の泉水に狙いをつけた——。

轟然！　その武器は火の線を筒先から吐き同時に、無心に泳いでいた池の水鳥が一羽、短い断末魔の羽ばたきを残して横転した。

血が白い羽根を朱く染め、水に溶けて流れ始めた時、興信がようやく口をきいた。

「不思議な武器だ！　恐るべき威力だ！　これで人間を倒す事ができるならば、もはや天下に敵はなくなろうが……」

「興信どの、人間、殺せる。武器は人間殺すものだ。試すがよい」

「おう、人間も殺せるのか！　ならばぜひとも試してみたいものじゃ……」

## 十人の死刑囚

早速に、城下の町人牢から十人の囚人が選ばれた。いずれも断罪が下って、斬首の日を待つばかりの囚人であった。

「君命により、城内にて処刑をとり行なう。神妙に致し、未練の振舞など見せてはならぬ」

という異例の申渡しがあって、彼等は縄を掛けられた。

男囚六人、女囚四人。いずれも若い死罪人であった。彼等は、若いという事を条件に選び出されたのである。

それが厳重な数珠つなぎに括られて、刑吏の鞭で追い立てられる——。

「ええ、ぐずぐずするな！　早々に引っ立てい！　殿がお待ちかねだ、急げ！」

城から急使として派遣された侍大将の高津又兵衛は、馬上で指揮をとりながら、しきりと大声で叱咤し、督励した。

その有様には、何かただならぬ興奮の色がうかがわれ、刑吏達を一そう緊張させた。

「歩め！　えい、歩まぬか！」

無抵抗の囚人達の背に鞭が高鳴り、怒号と悲鳴と哀願が入り乱れた。

異様な一団を見物する群衆は、往来の両側で黒山のような人垣を造っていた。

「何事が起ったのだろう？」

「お城の中でお仕置をされるそうだが……」

「お城と云えば、福江島の王直殿が今朝方お城へ入ったのう」

「大きな声では云えぬが、あの明人が海から帰ってくる時は、いつもロクな事は起らんわい。何にしても、哀れな事じゃ……」

「あの女子。若い身空で、しかもあの美しさで、何の罪をきたものか……むごい身の定めだな」

「桑原々々。悪い事はせぬものよ」

民衆の取沙汰は、臆測や噂の域を出なかったが、それでも、この出来事を明人王直の入城と結びつけて考える直感を持ってはいた。

やがて——十人の囚人は平戸の城へ到着した。

鞭でさいなまれ、縄に引きずられて急速な行進を強いられた彼等は、気息奄々、髪は乱れ獄衣ははだけて、見るも無残な有様だった。

「高津又兵衛、只今到着——」

報告が城主興信にとどくと、すぐさま下命があった。

「ただちに処刑の支度せい」

侍達があわただしく走り廻り、準備が整えられる。

「罪人共を庭前へ曳き立てよとの仰せだ！」

「獄衣は無用。裸にして縛れ、との由」

「女囚とても斟酌はいらぬぞ」

「おのれ等、大事のお役に立てる身を果報と心得い。ええ、神妙にせえ！」

女囚達の間で、哀れな悲鳴が上った。
刑吏達は愉しむように、泣訴哀願する女達の囚衣を剝ぎ取り、白い肌へ縄を掛け直した。
「あ、お許しを！」
「お慈悲を……」
「じたばたするな！」
主命をかさにきた男達の間で、猥雑な笑い声が起った。
「待たっしゃい！　この有様は何事だ！」
鋭く咎める声がして、その場へ現われた若い武士があった。剛弓の武勇をもって知られる秋月十郎太――若殿源三郎隆信の側近で硬骨な正義漢だった。
「これは、秋月殿か……」
「いかに罪人とはいえ、無法な狼藉ではないか。おのおのがた、ちと慎まれたがよかろう」
「何と云われる。狼藉呼ばわりは心外千万」
「左様々々。大殿の仰せに従ったまでのこと。いらざる差し出口。貴殿こそ慎しまれい！」
「大殿の仰せ……と云うのか？」
「いかにも、故あっての事だ。秋月殿には随分ごゆるりと見物なされるがよかろう」
「弓の巧者が、腰を抜かさぬようにな……」
衆をたのむ侍達は、いわくありげに声を合わせて笑うのだった。
「……それ、引っ立てい！」

## 乳房と血汐

陽が西にかたむいた頃、処刑が開始された。
もとより尋常の処刑ではない。要するに鉄炮（鉄砲）の試射だが、その有様は城中の者達にとって、奇妙な事の連続だった。
まず、十本の木の幹へ、裸の罪人達がつながれた。それは、動けぬようにつながれたのではない。縄尻をことさらに長くのばしてつなぎ、足は縛らなかった。
彼等は、不安におびえ、恐怖にふるえ、羞恥に悶え、屈辱に喘いで、いずれも最初のうちは顔を伏せて地へうずくまっていた。
最初のうちは――そうであった。
だが、轟然たる銃声と共に、一人の男囚が胸を射抜かれて跳ね上るような奇怪な死に方をしてからは、名状しがたい混乱が起った。
見た事も聞いた事もない恐ろしい魔法で殺される――と知って、ある者は泣き叫び、ある者は額を土にこすりつけて命乞いをし、ある者は縄尻の限度の内で狂ったように暴れ廻ったのである。
さらに彼等は、この怪奇な処刑の執行人が明国の怪人王直である事を認めて、一そう激しい恐怖に襲われた。
だが、罪人達の混乱は、処刑の計画者達にとっては思う壺だった。
王直は動きの激しい罪人から順次に白羽の矢を立てて行った。
まれにみる名手であろうか――。
彼の射撃は、動き廻る的を一度もはずさずに射抜いた。一人仕止めるたびに、顔色も変えず次の準備に移る王直は、地獄の使者のように冷酷で、死の商人のように狡猾だった。
達者だが多少滑稽な日本語で短い説明をはさみながら、彼は完全に興信の心を捉えてしまったのである。
「次、あの娘の左の乳。よいか……」
予告をしておいて狙いを定めるのだ。
火縄の焦げる匂いが流れる。
娘は十九歳の放火犯で、非常な美貌であった。自分の番と知って、凍りついたように眸を見開いたまま、動こうともしない。
恐怖のあまり動けなくなっているのだ。

「娘、動かない。鞭で走らせるとよい」

王直の着想はただちに実行に移される。

娘の白い背へ皮鞭が唸りを生じて飛び、硬直の状態が破られた。

娘は悲鳴を上げ、繩尻の範囲内ではかなくも逃げまどう。しなやかな若い裸身がしきりと悶えるうち、銃声が冷たい空気を震わせて轟き、犠牲は倒れた。

繩目の下の豊満な左の胸の隆起が鮮血に染まって、世にもむごたらしい華麗さをみせていた——。

「父上！　この上の殺生は、もはや無益でしょう。鉄砲の威力は相知れましたゆえ、もうお止めください！」

興信の嫡男、源三郎隆信は耐えかねたように父を諫めるのだった。

「いや、続けるのだ。一挺で何人まで殺傷できるものか、見届けねばならぬ」

「と申して、この有様はあまりに無慈悲！」

「何を申す！　彼等は死罪人、吾等は戦国乱世に生をうけた武将じゃ。新らしい武器を試す事がなぜ無慈悲か。何ゆえに無益と云うか。見苦しいぞ、源三郎」

興信は武将としての野心に燃えた表情で、源三郎の若さをたしなめた。

（驚くべき威力を持った武器、鉄砲。これを大量に所有すれば天下を松浦家が把握し得る事は疑いもない……）

興信の脳裡は、その想念で渦を巻いていたのである。

王直は、松浦父子のやりとりを尻目に、次の装塡を始めた。

居並んだ家臣達の中に、秋月十郎太の憤ったような顔があった——。

## 大海賊王直

その日、天文九年秋。十月の八日——。

日本に初めて鉄砲が伝来したのであった。

鉄砲伝来は、天文十二年に大隅国種子島に漂着したポルトガル人が、島主の種子島時堯に二挺の銃を売った事から始まる——と多くの史書は伝えているが、実は、これは正確でない。

種子島に先立つ事約三年前に、鉄砲はこうして王直により平戸の松浦家へ伝わっていたのである。

松浦氏は「海東諸国記」に「肥前州有二上下松浦一海賊所レ拠、云々——」と書かれているように、肥前松浦党の宗家で、北肥前から五島方面にかけての領土を有し、この地方を根城にしていた海賊群を庇護し、彼等から多分の献納品を取っていた。

室町時代の初めから、日本の海賊は東洋各地を猛威をふるっていた。

朝鮮や明国の沿海から、遠く安南、シャム、ルソン、マラッカまでも荒し廻る彼等は「倭寇」と呼ばれ、非常に恐怖された海賊であった。

彼等の多くは貿易と掠奪の両天秤をかけていて、上陸して商行為が肯かれない場合には、たちまち両肌を脱ぎ、勇猛絶倫、命知らずに暴れ廻る。長刀を振って男を斬り、女を掠い、財宝を奪って町に火を放つ。

明書には「その過ぐる所の都府、忽ちにして廃墟と化し、寂として鶏犬の声を絶つに至る、

云々」とあり、「国家の患、倭寇にあり」とまで恐怖している。

西洋の史書で倭寇の事を書いたものにも「十六世紀の始めにフィリッピンを襲った日本の海賊は、六十二の船に、水夫二千人、兵砲卒二千人、女千五百人、他に多数の工匠を乗せていた、云々」とある。

松浦氏は、こういう海賊達を領内の海域に保護して、数数の利益を得ていたのである。

イギリスでも「貿易の濫觴は海賊なり」と云われているように、初期資本主義時代には海賊と海外交易とは不離の関係にあった。

この時代、海賊と手を結んで利益を計った豪族は、もとより、ひとり松浦家だけではなかったのだが——松浦家の場合は明の大海賊王直の存在がはなはだ異色であった。

王直は明国の徽州に生れ、

元の名を王五峰と云った。長じて海賊の群れに投じ、忽ち頭角を現わし、やがて、海賊仲間でも押しも押されぬ大海賊にのし上った男である。

彼の根拠地は明らかではなく、日本の肥前五島の福江島であった。

松浦興信から重臣の待遇を受けていた彼は福江島の鬼ケ岳に近い港に明風の宏壮な館を持ちこの港を根拠として東洋各地を荒し廻っていたのである。

この王直を「日本経済史」は次のように書いている。

「安徽の人、汪直なるものあり。(王直、又は汪直、とも伝えられているのだ) 海禁を破り、日本、暹羅と貿易して、且つ四方に周遊して日本の形勢に熟して倭寇と親交あり。其党之を五峰船主と呼ぶ。(中略) 方一百二十歩の巨船を作り、二千人を容れ、木を以て城と楼とを船上に立て、舟上、馬を走らせ、海

上の一大勢力たり。肥前平戸の豪族松浦氏之を迎えて平戸に居らしめて、待つに貴賓の礼を以てす。之より汪直、自から徽王と称す。明人が松浦の三十六島、皆な其命を奉ずと云ふもの是なり。(下略)」

所有する船は二百隻余、部下は日本人を含めて三千人余り——と伝えられ、その頭目として睨みを利かせていた大物なのである。

## 死人に口なし

王直が土産に持って来た鉄砲は一挺だけであった。それに弾丸数十発と火薬をそえて献納したのである。

それは、王直の投げた餌だ。果たせるかな興信はとびついてきた。

「王直どの、鉄砲という物は、購なえば手に入るのであろうな……」

「左様、値のつけ方によっては」

「求めたい。欲しいのだ！　次の航海には鉄砲をぜひとも買うて来てくれ。他の物はいらぬ。鉄砲だけ、何十、何百でも構わぬ」

「次の船出、来年の春。南の島で南蛮人と会う。鉄砲、買う……」

「うむ、頼んだぞ」

「値段、その時にわかる。今、わからない」

王直は眼を細めて、顎髯を撫でた。かけひきの巧い海賊であった。

だが、興信とてももとより、手をこまねいてでもない。彼は早速に鍛冶職の腕のよい者達を城へ呼び寄せて、鉄砲の研究させ、すべて輸入銃のみを待つほど、目先の利かぬ武将さらに、弾薬の調合法も抜かりなく手は打ったのだが——結果は、暗中模索のくりかえしがいつまでも続くだけだった。

興信の激励は、いつしかいらだちに変り、やがて怒りに転じて行った。

「ええい！　腑甲斐なき奴ばらよ！　これしきの物を造る事も叶わぬとは申すのか！　そち達は家へ帰りとうはないのか？　褒美の金子も欲しゅうはないと見えるな？　いつまでかかる！　何をしておるのだ！」

男達は蒼ざめて土間へひれ伏したまま、答えようもない有様だった。

(とんだ仕事を仰せつかったものだ)

と誰もが後悔していた。

試射を目撃しただけで、早くも恐れをいだいた者さえあったのだ。

できる限りの分解もしてみた、鳩首して意見も出し合った。合議を重ね、試作も回を重ねたが——得たものは無惨な失敗ばかりであった。

予想外の爆発が起り、銃身が破裂したために命を失った者や、重傷を負う者さえ出る始末である。

所詮、彼等の前には打ち破ることのできない厚い壁があったのだ。

従来の幼稚な知識と、全く新しい物との間に厳然として立ちふさがる壁であった。

仕事に絶望すると共に、不安が迫ってきた。

彼等は城へ来て以来、家へ帰ることを許されなかった。昼も夜も監視の侍が眼を光らせていた。

製作を急ぐための泊り込み——と思っていては甘い考えなのであろう。秘密の洩れるのを防ぐための軟禁なのだ。

とすれば、銃が完成しても、また、失敗に終っても、いつかは「口封じ」の措置が必要となってくるはずだ。その手段は、昔からこの種の事柄に共通の「死人に口なし」とすることではあるまいか？「仕事中、不測の事故

でいずれも落命」というような口実さえつきやすい状況なのだ——。

彼等は落ちつきを失ない、周囲の様子に神経を尖らせるようになった。もはや仕事などは手につかない。

年が変って、天文十年の正月——。

新年の祝い酒で侍達が酔った夜、城を脱け出そうとした若い鍛冶工があった。

その男は今一歩の所で取押えられ、城内の古井戸に斬り捨てられた。

この事件はすぐ王直の耳へ届いた。彼へ情報を売る者が城の内には幾人も居たのである。

王直が遠洋航海に出る旨を興信へ報告しに来たのはその直後であった。

金に糸目はつけぬ、という意味の言葉を、王直は予定通りに興信の口から聞くことができたのである——。

## ハラカン

王直は、血の匂いと黒煙と阿鼻叫喚の渦の中に仁王立ちとなっていた——。

激しい抵抗であった。一時は苦戦の状態に追い詰められた。

兵器の相違で戦闘力の差にいちじるしい開きがある戦いだった。

彼の船団が、マラッカ海峡で二隻のポルトガル船を発見したのが朝のことだ。追跡してみごとに追いつき、各船で相手の船を包囲した。用い慣れた戦術であった。弱気な相手なら王直に狙われたと知って戦わずに降伏することさえある。

だが、今日の敵は違った。いきなり耳を聾するばかりの轟音が起って、王直の乗っている船の横腹に大穴があき、火災となったのである。

相手が使った兵器はハラカン（大砲）であった。船首へ据えつけてある大砲が巧みな擬装で隠されていたのだ。

王直は怒り、手負い獅子のように怒号した。勇気を示さぬ部下は容赦なく斬って捨てた。

捨て身な舵のとり方で、決死の体当りを敢行したのが勝敗の岐路となった。

凄惨な斬り込み——。

肉弾戦では、どんな勇将でも王直の敵ではない。戦闘員の数も比較にならなかった。

勇者の大半が斬り殺されて、ついにポルトガル船は抵抗をやめ、降伏した。

しかし、降伏とはこの場合、一方的な殺戮の開始を意味することに他ならない。

「女を殺すな。手の空いた者は女達を捕えろ」

王直の命令を待つまでもなく、血に堪能した部下達は女へ襲いかかっていた。

男の最後の一人が斬られようとした瞬間、

「待てい！　一人だけ残しておくのだ。平戸へ帰ってから役に立つ」

と王直が云った。

するばかりの轟音が起って、王直の乗っている船の横腹に大穴があき、火災となったのである。

相手が使った兵器はハラカン（大砲）であった。船首へ据えつけてある大砲が巧みな擬装で隠されていたのだ。

王直は怒り、手負い獅子のように怒号した。勇気を示さぬ部下は容赦なく斬って捨てた。

捨て身な舵のとり方で、決死の体当りを敢行したのが勝敗の岐路となった。

凄惨な斬り込み——。

肉弾戦では、どんな勇将でも王直の敵ではない。戦闘員の数も比較にならなかった。

勇者の大半が斬り殺されて、ついにポルトガル船は抵抗をやめ、降伏した。

しかし、降伏とはこの場合、一方的な殺戮の開始を意味することに他ならない。

「女を殺すな。手の空いた者は女達を捕えろ」

王直の命令を待つまでもなく、血に堪能した部下達は女へ襲いかかっていた。

男の最後の一人が斬られようとした瞬間、

「待てい！　一人だけ残しておくのだ。平戸へ帰ってから役に立つ」

と王直が云った。

その時、先刻から大きく傾いていた王直の船が、ついに横倒しとなり、波の上で船腹をぶざまに見せた。

一瞬、王直の顔は沈痛の色に包まれたが、何を思ったか、彼は大股に船首へ歩み寄り、ハラカンに手をかけた。

部下の一人に砲丸をこめさせ、満身創痍と化したさっきまでの自分の船へ狙いをつけたのである——。

## 鞭と屈伏

掠奪品の中には、大量の鉄砲と火薬があった。誂えたように好都合なことだったのである。

女達は手下の海賊共の絶好な慰みものとされた末に、マカオの奴隷商人に売り飛ばされる悲運をたどった。

その中に一人だけ例外があった。

最も美しい女、オポルトの貴族の娘ベアトリスである。

金色の柔らかな髪、碧い眼、純白な肌、しなやかな肢体——紅い唇から洩れる哀しげな嗚咽まで、この娘はたとえようもないほどに美しく、神秘的ですらあった。

王直の女として選び出されたのは無論当然な結果であったろう。

ベアトリスは王直により残酷な手段で女にされ、涙の乾く暇もなく、春も盛りの頃、福江島の土を踏んだのである。

王直が南蛮船に乗って福江島へ還ったという噂は、その日のうちに平戸へ流れ、興信の耳にも届いた。

興信は苦々しげに呟いたが、そのころ、福江島の館で王直は、あることの決断がつきかねるままに日を送っていたのである。

（掠奪した鉄砲を全部売渡すべきか？　それとも小出しにして値を吊り上げようか？　ハラカンはまだ見せぬ方がいいだろうか？）

ベアトリスの金髪をまさぐりながら、王直は快い考慮にふける——。

（急ぐ必要はいささかもないのだ。興信を待たせ、じらせる事は取引の上に効果的な事だ。素直に売ってはやらぬわ……）

王直は満足そうに云って、鞭を投げ捨てると、ベアトリスのくびれた腰を抱き寄せようとした。

ベアトリスは、おぞましそうに眉を寄せ、逃がれようとした。

（この女は、まだ儂のものになりきってはいないのか。小癪な！）

王直は鞭をつかんで立ち上った。

女は豊かな胸の辺りをひしとおさえて、恐怖に表情を凍らせる。

王直が何事か自国語で呟いた。そして、鞭を振り上げた。

鞭は続けざまに飛び、次第に烈しさを増した。王直の金色の眼が爛々と輝やく——。

「アッ、アア！　許シテ！　貴方ノ女ニ、成リマス！　許シテ！」

ついにベアトリスが、そう叫んだ。

王直は女の態度で、その言葉の意味を理解した。ベアトリスは震える指で自身の服を解き、白い乳房をさらして、観念の眼を閉じると、服従の意思を表明するかのように鞭の下でひざまづいたのである。

「おう、それでよし。王直は海の王者だ。やがては世界の海を征服する男だ。お前の国の貴族にいささかも劣る者ではないぞ……」

王直は満足そうに云って、鞭を投げ捨てると、ベアトリスの金髪を鷲づかみにするのであった。

（明日は城へ伺候しよう……。この女を伴ってだ）

と彼は決意した。

## 言葉は要らない

翌日の暁、王直の船は福江の港を出た。

樺島、中通島を左舷に見て北上を続け平島と江ノ島の間を抜けると、あとは一直線——平戸島の南端、志々伎崎を過ぎて平戸港へ着くまでの海上三十里の船路は、王直にとって爽快なものであった。

昨夜、何の抵抗もみせずに自分の意のままに

になったベアトリスの白い肢態が、妖しいまでに艶麗なものであった事を、王直はしきりと思い返していた。

（女は、一日のうちに、こうも変れるものか）

と今さらながら舌を巻くのだ。

汐風に長い金髪をなびかせたベアトリスは王直に魅惑的な微笑を送る。

（私は、あなたの女。あなたは、私の男。言葉はいらないわ、もう……）

と碧い眸が語るようだった——。

やがて、船が平戸に着いた。城内へ入ってからの王直の商談は、まことに巧みなものであった。

上首尾のうちに取引が終り、巨利を得た。

と云っても——売渡した鉄砲の数は、十七挺だけであった。それに弾薬を三十貫余りもつけた。弾薬は多いに越したことはないが、これはいささか妙な割合いだった。つりあいがとれぬ、という感じがした。

興信は、もとより満足しない。

「王直どの、十七挺とは、あまりに少ないではないか……」

「心配ない。次の航海で、たくさん、手に入れる。手筈、もう済んでいる」

王直は、そう前置きして、一人の白人を興信に紹介したのである。

ベアトリスと一緒に捕虜とした、背の高いポルトガル人なのだ。

「この人、ポルトガルの国の人。リスボンの貿易商、フェルナオ・メンデズ・ピントウという名前。鉄砲、たくさん売ってくれる」

ポルトガル人は愛想のよい笑いを浮かべて握手を求めた。貿易商としての演技を示さなければ命を絶たれるからだが、興信は信用した。白人を見るのは初めてである。

紅毛、碧眼、驚くべき長身、そして天狗のような鼻。便利そうな衣服——いずれも興信の見聞にはなかった新奇な印象で、平戸の城内で観桜の宴が盛大に催されたのである。

## 観桜の宴

その翌日、平戸の城内で観桜の宴が盛大にひらかれた。

主賓は王直だが、南蛮人の美女ベアトリスや貿易商ピントウをもてなす意味もあった。

「なるほど……。これが南蛮人かの、桜は外国にもあるものか？」

「王直どの、鉄砲購入について、話し申したいこと、ある。ピントウ氏の意向、王直から伝える。それは、特別の条件……」

「ない」

「何と？　特別な条件、と云われたか？」

「そうであろう。桜は日本の花、武士の花だ」

「左様。特別の条件、むずかしくない約束、一つ、ある。よろしいか？」

ベアトリスと一緒に捕虜とした、背の高いポルトガル人なのだ。

「ふむ。お云いなされ。余にでき得る事柄ならば、何なりとも。約定交わせし暁には、かまえて違背はせぬが」

「興信どの、人払いを……。秘密の約束。聞く人、多い、困る」

何を云わんとするのか、王直は、この国の豪族の習慣の中にある「人払い」を要求したのである。

ベアトリスは感嘆の声をしきりと発しながら

ら、花吹雪に見とれていた。

革命的な武器を持って来た男達、そして美貌の白人女性のために、花おどりが催おされた。

撰り抜きの美女ばかりが五十人、領内の各所から召し出されて花の下に舞い踊ったのである。華麗な群舞であった。

宴は、いつまでも続けられた。夜に入ると大きなカガリ火がたかれて、なおも続けられた。女達は、次第に踊り疲れた。

愉しげに踊る女は次第に減り、やがて一人もいなくなった。

この際限もない踊りは、一体何であろう？　舞う女達の手足は、不安のためからも乱れがちとなった。

気がつくと、居並ぶ者達の様子が妙だった。家臣の多くは、いつの間にか席から姿を消していた。

それに代って、侍大将の高津又兵衛が庭の一隅に、鞭を手にした恐ろしい姿で立っており、数多くの役人達が踊りの輪を遠巻きにして取り囲んでいるのだ。

踊りは、華やかな拷問にも似たものとなっていた——。

一人の娘が、卒倒し、花びらの中で動かなくなったのを契機として、女達の動揺は急激に表面化した。

「ええ、踊れ、踊らぬか！　誰がやめよと申したか！　踊り続けるのだ！」

高津又兵衛が鞭の素振りをみせて叱咤した。

だが、もう踊る女はなかった。前年の秋に城へ召し出された鍛冶工達が一人も帰って来ないことを、女達は知っている——。

「おのれ！　不埒な！　貴賓の客をもてなす宴に、この有様は何事なるぞ！　それ、不逞な女どもを召捕れい！」

興信が命じた。

主命である。口実もある。だが、言語道断の理不尽には違いなかった。

翌日の午後。城を出た王直の一行は、街並みの中を通って船へ戻った。

途中、物珍らしがられた南蛮人の男女は、興の上からしきりと群衆へ愛嬌を振りまいたが——彼等が拝領した数々の品物の中に混って、二十五個の白木の木箱があった事を不審と思う者は、誰一人としていなかった。

## 黒頭巾の男

福江島の王直の館——その奥深くに頑丈な牢があった。

数日前まではベアトリスがつながれていた牢である。その牢格子の中に、いまは、半裸の美女が五十人も押しこめられていた。

二人一組、背中合せで一本の棒のように縛られ、木箱に詰められて城から運び出された罪咎もない女達である。観桜の宴の踊手として召し出されたのだから、当然、いずれも若い娘ばかりだ。

武家娘、町娘、漁師の娘、色とりどりのあでやかさと云ってよいはずだったが——今はそんな言葉もむなしい。

不安に震え、恐怖におびえ、生きた空もなく身を寄せ合っている。

だが、中に気丈な娘もいた。

松浦家の家臣、左文字周作という武士の妹で朱実という、気品のある顔立ちの美女だった。兄の周作は若年であり軽輩の者だったが歴とした家臣には違いないため——と思い、無念さに紅い唇をかむ朱実であった。

その妹の私までが——取乱さず、時機を待つのです。力を合わせて逃げなければ、海賊の餌食にされてしまうのですよ！」

「悲しむことはありませぬ。

励まし、慰め、勇気を与えようと、必死と

なったが、牢の壁は厚く、格子は厳重、見張りの海賊にも油断はなかった。

何の策もない。天運を待つのみでは強い自信とはならず、朱実の心もやはりおののくのを防ぎ得ないのだ——。

それに、この男は唖であった。他の海賊と夕刻に交代があり、夜の見張り番として牢へ来た海賊は、不気味な男であった。

の対話に言葉を一言も使わず、身ぶり手真似で応えることから、それと利断し得た事があるのを、ようていたのは二つの眼の部分だけなのである。

朱実は、以前、兄から黒頭巾の海賊の話を聞いた覚えがあるのだが——。

つけている不思議な男があるようよく思い出した。二た眼とは見られぬ大な。何でも、一火傷が顔にあるのを恥じての事だというが、海賊が顔の美醜を気にするとはおかしいではないか」

と周作は笑っていたのだった。

「その黒頭巾とは、世捨て人のような者ではないでしょうか？」

さして根拠もなく、朱実はそんな受け答えをした覚えがあるのだが——それは乙女心の不思議な感傷がよんだ一種の美化作用であったろう。

牢格子の外に居る現実の黒頭巾は不気味な沈黙を守る冷酷な迫害者に過ぎない。

今しも、黒頭巾は仲間の一人が何事か伝達に来たのを聞くと、大きく

うなずいて懐中から鍵を取り出し、壁にかかっている一束の麻縄を手に取ったのである。

（おかしい？　啞は耳が聞こえぬはずだ。それなのに、この男は？……）

朱実がそんな疑念を抱いた時、黒頭巾は牢の錠を開け、牢内の誰かを物色するような様子をみせた。

娘達は恐怖に顔をそむけ、後ずさりする。

――と、黒頭巾の指が迷わずに朱実をさした。続いてその指が（出ろ！）と云う。

さすがに朱実も、頬を凍らせた。

だが、次の瞬間、この気丈な娘は恐怖を克服したのである。

（命まで取られはしないはず。館の中の様子を少しでも見ておく事は、脱出に役立つかも知れない……）

朱実は覚悟をきめて、身づくろいを済ますと、悪びれず牢の外へ出たのである。

（歩け！）と肩を突かれて、思わずうなだれてしまった朱実の悄然とした姿は、心の中にひそめているはずの勇気にそむくものであった。

## 救出者

同じころ――。

女達のいる牢の近くへ、影のように音もなく忍び寄った二人の黒装束があった。

まず気づいたのは牢内の女達である。明らかにそれが救出者であることを知って、女達は歓喜した。

だが、牢内のざわめきは、敵の出現を黒頭巾の海賊に悟らせる結果となった。黒頭巾は素早く刀を取り、身構えた。

「うぬ！」

気合を殺して、二人は黒頭巾に襲いかかる。

沈黙の闘いとなった。

刃の交わる音と、荒い息だけが聞こえる斬り合いだ。幸い、黒頭巾の海賊が啞なので、仲間を喚ぶ事ができない状況なのだが、二人を相手に斬り結ぶ黒頭巾の剣は、意外に鋭いものであった。

救出者の一人が、油断なく白刃を構えながら、低声で突然、こう云った。

「……その剣、見覚えがあるぞ。明国の剣法とは思えぬ。お主、誰なのだ？　ただの海賊ではあるまい！」

黒頭巾は、一瞬、かすかな動揺を見せたようだったが、すぐさま、心の乱れを撥ね返すような気魄で、烈しく斬りつけた。

間一髪――危うく尖先をかわした。

と見る間に、いま一人の黒装束が、必殺の一撃を叩きつける！

「あ！」

声を発した者は、黒頭巾の海賊だった。

頭巾が縦に裂かれて飛び、灯影に素顔がさらけ出されたのであった。

その容貌は、虚無的に蒼白いが、一種の美男である。

「お！　土屋、貴様は土屋彦四郎ではないか？」

黒頭巾――いや、土屋とよばれた日本人は戦意を失ったのか、刀を下げて、

「そういう声は、秋月だな……」

と静かな口調で答えた。

「いかにも、秋月十郎太だ」

「いま一人は、左文字か……」

「左様、左文字周作……」

「お主の妹御が捕われているぞ」

「されば、吾等が救いに参ったのだ」

「土屋、なぜ邪魔をする？　殿への忠義立てをするつもりでは、よもやあるまいが！」

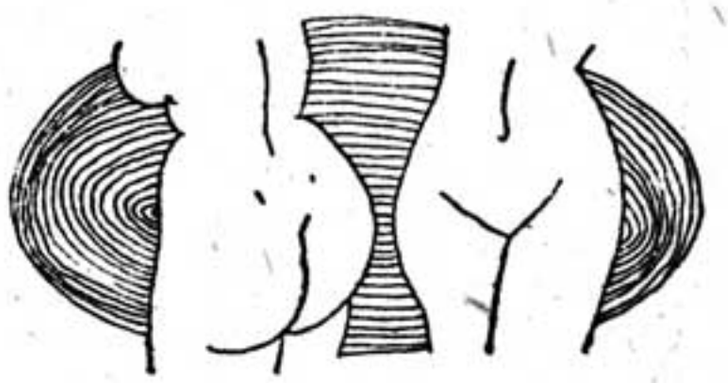
「この俺がか……」

土屋彦四郎は、かすれたような笑いをみせた。この男が些細な事から興信の勘気をこうむり、謹慎を仰せつかったのが去年の夏の事

であった。彦四郎は逐電し、興信は激怒した。
「発見次第、斬って棄てよ」という厳命が出されているのだが——。
「この娘達は、鉄砲を買い入れる為に南蛮人への貢ぎ物とされるのだぞ！」
「罪咎もない女達なのだ。殿は鉄砲のため人の心を失われたも同然の有様だ。土屋、お主がこの非道に加担するのか！」
「加担はせぬ……」
「ならば何故！」
「まあ待て。俺の事より、お主たちはどうなのだ？　殿を裏切る事になりはせぬか？　不君の仰せなのだ」
「いや、私情私憤からではない。若殿源三郎敵だな」
「罪なき者達に苦難を与えてまで鉄砲を購わんとするならば、国の恥となろう……と、若殿は云われた」
「そうか……あっぱれ、御名君だ。教えてやろう。この娘達はな、実は鉄砲とはかかわりなく王直の手に落ちたのだぞ」
「何と！」「しっ！　声が高い！」
その頃——別室では、ベアトリスに鞭打たれて、遂に失神した朱実が、漸く梁から降ろされていたのである。

三人の武士達の談合が、どういう結果を生むのか、牢内の娘達はその夜知る事ができなかった。
彦四郎は再び黒頭巾の海賊に戻り、周作と十郎太は女達へ励ましの言葉をかけることもなく館から抜け出た。
五十人の女達はその後、半月近くもの間、牢内で呻吟し続けた。ベアトリスは昼となく夜となく、次々と女を曳き出させては、嗜虐の鞭を振った。さすがに彦四郎が再び来る事はなかったが、どの海賊もおもしろがってベアトリスに協力した。
自害をはかろうとする女も少くはなかったが朱実が必死の制止をしたのだが、彦四郎の手引きによって血を流す事もなく、解放に成功した。
その年の夏も終りの頃、王直の船が南海から救出が遅れているのだ。
と、すがるような思いで朱実は若殿源るのを信じ続けたのであった。
三人の武士は、秘密の洩れることを惧れてまず味方から欺いたのであった。
王直の船が南海へ向って出帆しようという日の前夜に、漸く機会が訪れた。
五十人の娘達は、その夜、積荷として扱われ、船へ運ばれた。平戸の城から運び出された時と全く同じ方法で——。
福江島は五島列島最大の島だ。王直とても

この島全体を支配している訳ではむろんない。だから、五十人もの女達を公然と船へ追い込む事はできなかった訳である。
二十五個の木箱が船へ積み込まれた後も、王直は女達を箱から出そうとはしなかった。
出帆の前夜、女達はひそかに救い出され、鬼ケ岳の山中へ身をかくした。
三日後——ルソン島に近い辺りの海上で木箱を開らいた海賊達は、内がもぬけのからとなっている事を知って愕然としたが、もはや後の祭りであった。
十郎太や周作は、最悪の場合、決死の夜襲さえ覚悟をしていたのだが、彦四郎の手引きなく、解放に成功した。
その年の夏も終りの頃、王直の船が南海から還った。
約束の数量通りの鉄砲を、興信に引渡す時王直は（鮮やかにやられましたな。王直の負けでござるよ……）という意味の言葉をほのめかしたが、興信には何の事かわからなかった。かすかな笑いを頬に浮かべたのは若殿源三郎であった。
同じ年の十月、興信が急逝し、源三郎隆信は松浦宗家第二十五世を継いだ。彼は後に道可と号し、賢明な主君となった。



# 読者短評

◎私が裏窓を読み始めてから早くも四年の年月が流れました。裏窓を見てからは、ほかの本は全部つまらなく思えます。号から号へ裏窓を待つ私の心は、底知れぬ快感に身も心も引きずり込まれて行くのです。四年の年月の内に毎号買った裏窓を大切に保存して居ります。

さて、気まま勝手を書かせて貰いますと、貴誌の挿絵の先生はまず一番先に上げられるのは中嶋喜美氏、喜多玲子英生氏です。裏窓には氏、古正氏、この三氏が一番ピッタリしているようです。四月号の中嶋氏の「裸形弁天」は心から楽しく読ませていただきました。それから、円城寺氏の「撰り観音」は喜多さんとコンビでしたから、私には嬉しかったです。飯田氏の「怪異愛霊教」の千鶴のみことの運命も気になります。毎号ハラハラぞくぞくしながら愛読しているので、作者に頑張って貰うようにお願いします。

藤沢氏のグラビアを、単なるヌードではなく、もう少しひねってみるともっと面白いと思うのですが如何でしょうか？

終りに編集部の方々の御健闘を祈ります。（宮城県・良夫）

◎貴社益々御繁栄の事とお慶び申し上げます。さて、貴社出版の「裏窓」を昨年の二月号を書店で見かけてより、毎月二十三日が来るのが唯一の楽しみとなったがここ一年間続いて愛読していると、何んとなく始め頃の物珍らしさがなくなった故か、読んでいても最初のような興味を覚えなくなって来た。一層の工夫研究を望むものです。先月四月号でいうならば、一番興味を覚えたのはなンと云っても怪異愛霊教である。また「女体苦患教」もなかなか趣があった。あまりにも期待しすぎたせいか「壁虎呪文」は三月号の「人肌将棋」が迫力があり他を圧していたのに比べて期待はずれであったのは、誠に残念であった。次号を期待する。およそ一ヵ年間で、今日まで忘却する事が出来ないくらい興味をそそられたのは一番に「お小夜嵐」である。

今でも何回となく読みふけっている。次に「刺青弁天」「地獄の乳房」のような連載物である。最近載らないが、松井籟子女史の作品もぜひお願いしたいものである。以上のようなものを、より多く載せて頂けたらと希うものです。また、近々出版の運びにあると云う限定版の裏窓叢書にも大いに参考にして下さい。今から首を長くして期待しております。ヌード傑作選には「ある美容体操」を取り入れて工夫されれば、さらにさらに愛読者は狂喜することでしょう次号の御健闘を祈ります。

（新潟県・T、I）

◎四月号、グラビア写真のヌード傑作選は、その名の通り傑作であった。関連性を持たせて何かを連想させ深さを表現していたようだ。絵物語「消えた刺青裸女」は小気味よい最後で、予想もしなかった結果を面白いと思った。「女体苦患教」「怪異愛霊教」「裸形弁天」の三編は素晴らしかった。特に愛霊教は連載でありながら各号ますます新しい感覚で読者を夢幻の境に誘っているし、今号はとくにそのスリルを味わう事が出来た。

期待作中嶋氏の絵物語はまたまたその図の明細さと美しさに我々を楽しませてくれる。他にも淫祠邪教特集にふさわしい大作があったけれど、細かいことまで書ききれないような気がする。まだまだこんな淫祠邪教のようなものの中に読者を魅了する材料が多くあるのではないでしょうか。これからも同じような種類の特集号を企画して下さるようにお願い致します。

（武蔵野市・堀野）

◎雑誌マニアの私は、大ていの雑誌は一晩で読んでしまいます。

ところが、裏窓だけは読了するのが惜しまれて、いつも二十日間たっぷり楽しませてもらうのです。四月号も発売を待ち兼ねて早速購入、ザッと通読しました。

「女神の壺」は私には素晴らしいもので、厚く御礼を申し上げます。この作者の二月号の「魔女の神酒」もショッキングで私には貴重なもので繰返し読みましたが、「壺」はそれ以上の内容です。裏窓はSの作品が多くて淋しい思いをしてきましたがこれを機会にMの方も大いに力を入れて頂きたいものです。

但し、女神の壺は舞台が南米なので感興がうすいのです。場所は東京、時は現代。そしてこのようなテーマがあったら吾々は堪能することでしょう。

この頃の裏窓のバックナンバーが古本店で凄く上りつつあります。二年前のもので定価通り場所によってはそれ以上で売られていることを編集者はご存知でしょうか？

私たちの生活を明るくする雑誌。私たちに人生を教えてくれる雑誌。人間の欲望を美しく燃焼させてくれる雑誌。それがわが裏窓です。御発展を祈ります。

（東京・Mを楽しむ男）

◎「裏窓」一月号の「男装十文字腹」及び三月号の「間諜散華」は殊の他傑作でした。特に激痛に耐えて深く切り裂く状態、その苦悶の叫びと、のたうち廻る様子、さらにそれを自分の声で電波にのせて報告するあたりは凄愴を通り越えて美しい限りでした。私が美しいと表現するのは、その苦痛をもあえて克服して誠心を示す気力と責任観念に対してです。

だが甚だ惜しいことに挿絵がない。見事十文字に切り終えて四辺に鮮血を散らしつつ、片手に内臓をつかみ出し、七転八倒する様が描かれていたなら、またどんなにか迫力を増したでしょう。たとえその国粋主義思想が現代のものの考え方から見てどうあろうとも、これ程忠実に主義に殉じて散る花の、殊にそれが女性だけに、ひとしお哀れが増して来ます。「切腹」が他のあらゆる自殺にまして悲愴な美しさがあるのは、それが日本人特有の勇気と誇りの象徴だからです。この場合切腹は自虐ではなくむしろ心の満足です。

これからも、切腹に関していろいろ掲載して下さるようお願いします。絵や写真が入ればなお結構です。慾の出しついでに極彩色ならなおさら良いと思います。

（下関市・TM生）

◎私は映画館勤務の一青年ですが、以前から貴誌の愛読者です私の最も好きな小説は、飯田豊吉先生の「怪異愛霊教」です。

非常に現代的な文章で無駄というものが少しもなく、読者の心をぐいぐいと惹きつけ、スリル、セックス、スピードの三つが混然一体となって読者をすこしも飽かせません。この連載は長く続けて下さい。こういう小説がこのままそっくり映画になったらどんなにか素晴らしいかと思いますが、それははかない夢でしょうか。せめて私の胸の中で映画化するより仕方がありません。三月号、四月号の表紙は、グッときました。手垢をつけるのが惜しい位の現代的な美人画。この画家を表紙に選んだ編集者のセンスの良さ。私は永久に裏窓を愛するだろう。

（埼玉・窓木血貝）

◎四月号を書店から買ってきてザッと目を通しました。またあとでゆっくり楽しむつもりですが、その前に私ながらの短評をのべさせてもらいます。

「探り観音」円城寺氏。相変らずのタッチで、徐々に魔手の中に追い込まれてゆく娘の、ぞくぞくするような心理的なおびえと、浩庵のあくことのないくすぐり責めのいやらしさ！　欲を云えば、もう少しその場面の描写が長かったら……と思うのは私だけではない筈ですが。「壁虎呪文」は前作にくらべてあまり面白くなかったような気がする。「恩讐地獄ぐるま」中林節三氏。これは面白かった、盲人が相手に出て来るので、ちょっと江戸川乱歩の盲獣を思い出させるような興味があった。触感からくる妙なおぞましさは、触れる方にも触れられる方にも、耐えられない感じを呼び起すもので、それが文中にはなかったものの、まざまざと想像された。「裸形弁天」中嶋喜美氏。「消えた刺青裸女」山田彬弘氏。この二つはいつもながら旨いもので楽しめた。（東京杉並・新井）

◎掲載しました方には裏窓六月号をお送り申し上げます。この欄への御投稿は、誌上匿名は御自由ですが、末尾に住所御芳名を明記して下さい。（短評係）

# 潮井　拓　山田彬弘・画

## って男について行くにはきっと何かがあったのだ！

### 夜景

私の方が帰り仕度が早いなどということは本当に珍らしいことだった。いつもなら私がお化粧を直し、ドレスを着換えて出て来るとあの子は必ず、今私が立っている場所で待っていてくれるのだ。それが、どういうものか今夜に限っては私の方が早かった。

宵のうち降っていた雨の為に、道路は美しく濡れていた。午前一時の盛り場は、ほんの三十分程、宵の口以上に人が出る。そしてその殆どは美しく着飾った女達ばかりだった。十指どころか百指にも余るキャバレーやバーが、同時にハネる為なのだ。

彼女達の嬌声は、いったんは終夜営業のレストランの中へ入る。そして、遅い夜食を済ませた後にそれぞれの住家へ帰って行くのだった。

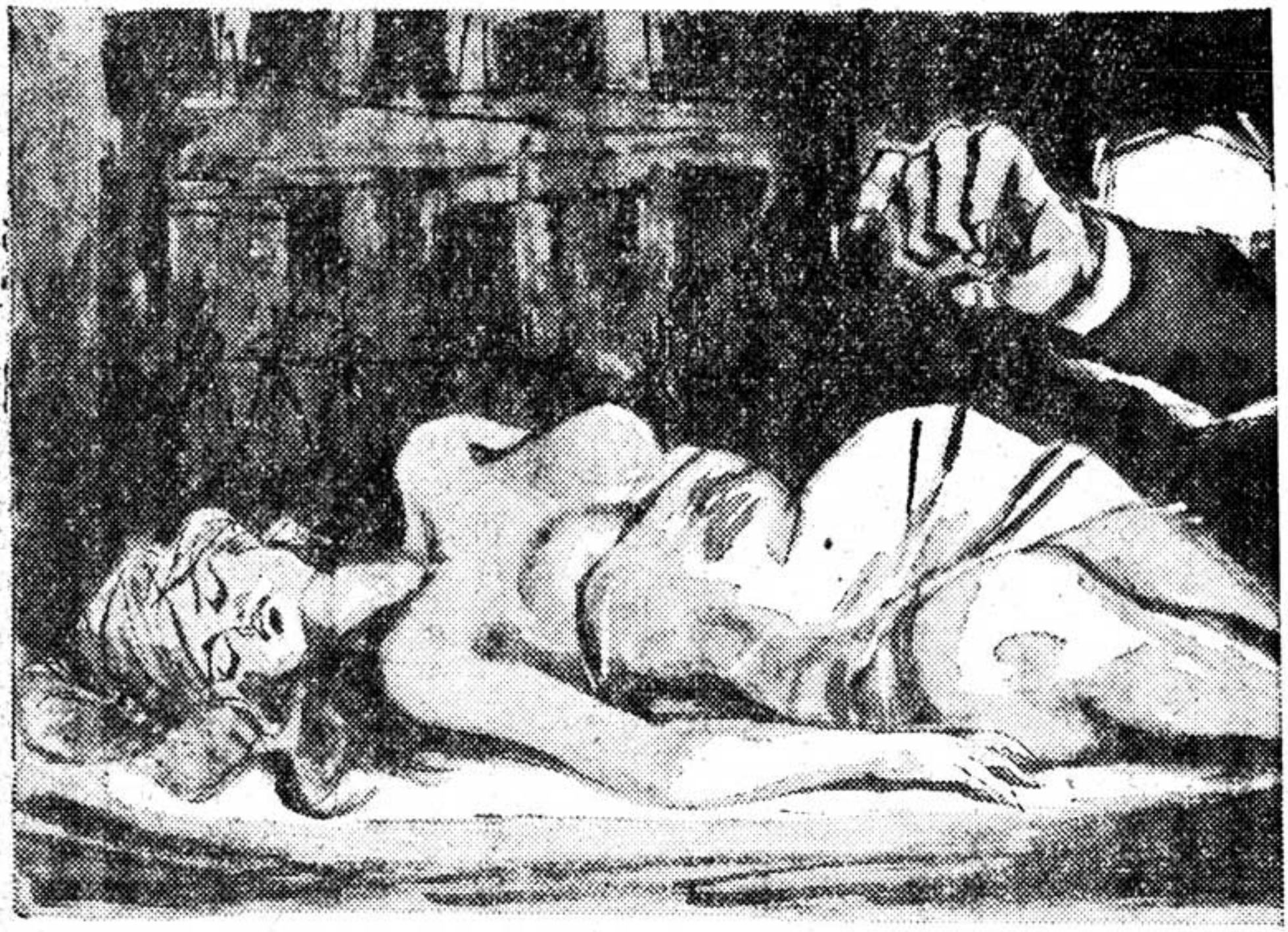
「おやすみ！　あんた、彼氏を待っているのかい？」

「冗談じゃないわ。もっと趣味は高尚だわよだ」

私は、帰って行く同僚達とそんな言葉を交し合いながら、ぼんやりと佇んでいた。

すぐ向いの赤いネオンが、急に消えた。

# 闇の誘い



## 洋子はただの“キャバレーの女の子”じゃない！ 黙

やがて、すぐ頭の上で微かな音を立てていた、青いネオンも消えてしまった。足もとが暗くなると、私は急にたまらない淋しさを覚えた。何しろここ数ケ月来、彼女と共同生活を始めてからというものは、ただの一度だって別々に帰ったことなどなかったのだ。

洋子は、こんな職業に似合わない固い性分の女の子だった。それればかりではなくて、どんな些細な事だって私に無断でするようなことは唯の一度もなかった。もし用事ができて先に帰るとか、あるいは恋人とのデイトがあるのなら、必ず私に連絡を取ってくれるはずだった。それなのに、どうして今夜は顔を見せないのだろう？

不意に、眼の前の従業員専用の扉が開いた。私は、思わず歩み寄った。だが、それは洋子ではなかった。その人は背が低くて、もっとずっと年をとっていた。掃除婦のおばさんだった。私はがっかりして言った。

「なんだ、小母さんだったの」

「おや？　由紀ちゃんかい。今頃まで何をしてるのさ。彼氏かい？」

「ううん。——あのネ、小母さん。洋子ちゃん知らない？」

「洋ちゃんを待っているのかね。洋ちゃんな

ら、もうとっくに帰ったんじゃないかね。今あたしゃずっと掃き出して来たんだけど、中にゃもう女の子は一人だって残っていやしなかったよ」

あたしは強く首を振った。

「いいえ！　そんなはずはないわ。だって、もし先に外へ出たら、あの子はいつだって私を待っていてくれるもの。あたしが外へ出てからは、ここでずっと立ってたんだけど、絶対あの子は出て来やしなかったわ！」

掃除婦は、けげんそうに言った。

「へーえ、そうかねえ。でも、何しろ中にゃ誰もいない事は確かなんだよ。もっとも小使さんと、バンドの人が二人ばかりまだ残っているにゃいるがね」

あたしは、いたたまれない気持に駆られて扉を開けて中へ駈け込んで行った。言い知れない不安が、急に襲い掛って来たのだ。

探すといったって、こんな狭いキャバレーの中ではたかが知れていた。私は、不安に息をはずませながら大声で彼女の名を呼んでみた。

「洋ちゃん！……洋子ちゃぁん！」

その声が、がらんどうの内部に大きく反響した。いれば聞えているはずなのだが、答えはなかった。

奥の事務所にいた人達が、驚いて飛び出して来た。バンドの村山と事務員の白坂と、小使の三人だった。村山が言った。

「なんだ、由紀ちゃんか。どうしたんだい、真夜中に金切声なんか張り上げて」

「彼女がいなくなっちゃったのよ。どうしたのかしら、いつだって、一度だってすっぽかしを喰わせたことなんかないのよ」

すると村山は、ふと口もとに卑しい微笑を漂わせて言った。

「洋子ちゃんは幾つだい？」

「あたしと同い年よ。二十二だわ」

「二十二歳にもなるキャバレー勤めの女の子が、まともに帰らないからって不思議がる事はないだろう？」

あたしはカッとした。

「ひっぱたかれるわよ。あの子は、そんなふしだらな女とは訳が違うのよ。あんまり冒瀆しないでちょうだい！」

「まあまあ」と白坂が言った。

「なあ由紀ちゃん、そうムキになったって仕様がない。洋ちゃんはね、きっと先に帰ったのさ。何か急用でもあったんだろうよ。さあもう遅いから早く帰って寝なさい」

あたしはやがて悄然として外へ出た。すぐ向いの、毎日夜食を取りに寄ることにしている終夜営業の安食堂へも、一人ぼっちでは寄る気にもなれなかった。ほとんど明りが消えて、街燈だけがもの淋しく残っている街並をあたしは自分のアパートの方へ力ない足どりで歩いた。人っ子一人通らないコンクリートの道の上に、あたしの靴の音だけがコツコツと遠くの方まで響いて行った。

あの子は絶対に先に帰ってはいない。もしそうだったらどうしよう？　警察へ行こうか。だが届け出てみたところで、お巡りはきっとさっきの村山のようなことを言って相手にしてくれないに決っているのだ。それにしてもあの子は一体どこへ行ってしまったのだろう？

## 失踪

独りぼっちで真ん中に坐ると、住み慣れた自分の部屋なのに、なぜか妙にさむざむと物淋しかった。

洋子がいったんここへ戻って来た形跡は全くない。とすると、お店から直接どこかへ行ってしまったのだ。

そう思ったとたん、私はあることに気がつ

いた。いつもならあの紫煙と酒の香と嬌声の渦巻く薄暗いキャバレーの中でも、あたし達は幾度となく顔を合わせることができた。

フロアの上でどこの誰とも判らぬ酔客と、抱え込まれるような姿勢で出鱈目なダンスを踊りながら、チラリと視線を交すごとに、口にこそ出さないが（あと二時間の辛棒よ。がんばるのよ。……ほら、もうあと一時間で終りだわ）そんな風にお互いに慰め合って働いていたのだ。

それが、今夜はどうだったろう？

最後に会ったのは、確か十二時前だった。あたしが註文の伝票を持って階下へ降りて行った時、一階の広間の入口あたりで、背の高い四十男と踊っていたのだ。それが彼女を見た最後だった。

いくら人数が多いからといったって狭い店の中のことだ。一時間もの間に一度も見かけなかったというのは一体どういう訳だろう？

だから、あることというのは、さっきあたしがお店の中で洋子を探した時に、更衣室で彼女の衣服やハンドバッグの有無を調べなかったうかつさだった。

むろんお店から借りたドレスで一時的な外出をすることは、お店の規則としては認められないが、便宜上少しなら許されている。だがその代り、午前一時五分前までには必ずお店へ帰っていなければならないのだ。それを破ることは、ほとんど確定的な馘首を意味していた。

そして、洋子がもしそれを破ったとしたらそうせざるを得ない、容易ならない理由があったに違いないのだ。

私は気もそぞろに立ち上って、いったん脱いだ靴を突っかけて穿いた。そして、今度は小走りに近い足どりでお店へと急いだ。時刻はもう午前二時に近かった。文字通り人っ子一人いない。

まるで墓場のような静けさだった。

慣れているとはいえ、それはとても女一人で歩けた道ではなかったが、それよりも洋子に対する妙な胸騒ぎの方がずっと強かったのだ。

私は、小さな拳骨の先が擦りむけてしまうほど、小使さんが扉を開けてくれるまで無我夢中で扉を叩き続けた。

「はいはい。はい、はい、——おい、わかったってば！」

爺さんは、寝入りばなを叩き起こされて渋い眼をしきりにこすりながら、

「なんだね、いったい。お前さんは晩まで用はないはずじゃないか」

「ところが大ありなのよ。ねえ小父さん、洋子は、まだ帰って来ていないわ。お願いだからもう一遍だけ中を調べさせて！」

私は強引に中へ入れて貰った。暗い廊下で手探りに更衣室のスイッチを探り当てると、電灯をつけ、ドアを開けて一直線に彼女のロッカーの前へ進んだ。

ロッカーには、錠が下りていた。

中を調べるには、合鍵を借りなければならない。だが、小使に頼んで合鍵を借りて、もし私物の衣類ばかりが出て来たら、彼女が借り物のドレスで外出してしまったことがすぐに知れてしまう。そこで私は入口へ戻って、待っている小使に言った。

「小父さん。あたし、あんまりあわてて引っ返して来たので、ロッカーの鍵を忘れちゃったの。事務所の鍵を貸してちょうだい。一つ出したい物を思い出したのよ。いえ、いいのあたしが一人で行って来るわ」

洋子のナンバーは十三番だった。外国流にいえば、死の番号札だ。日本ではそんな習慣がないのであの子も気にしなかったのだけれど、あたしは前々からそれに気がついていた

こんな事態が起ると、よけい何か不吉な胸騒ぎがして来るのだ。

鍵は、事務室の壁に整理して掛けてあった十三番浅野洋子と名札がつけてある。あたしはそれをはずして、十八番武藤由紀子と書いた名札の上にある鍵を取って彼女の鍵のあった場所へ掛けておいた。ひょっとして小使に見られた時、不審を抱かれないようにするためだった。

更衣室へ取って返すと、小使はまだその入口でふらりふらりと居眠りをするような恰好をしていた。それは、私にとって、好都合と言わねばならなかった。

彼女のロッカーを手早く開くと、中にある物を一と眼見ただけでそれが洋子自身の物であることがわかった。見覚えのあるツーピースとハンドバッグが、きちんと整頓されたまま、中に納まっていたのだ。それを見たとたん、私はくらくらとめまいに似たものを感じた。耳の奥がじんと鳴った。

洋子は、やはりお店のドレスを着てどこかへ出て行ったままいまだに帰って来てはいないのだ！

あたしは、事態をどう処理していいか一瞬戸惑った。だが、人はどういおうとも事態は明白だった。洋子は、好きな男の子などというそんな生やさしいことで失踪したのではないのだ。

もしそんなことならば、彼女は必ず着換えをしてから出掛けるだろう。いや、それよりもハンドバッグを持って行くはずなのだ。あの子の性分として、自分が一文なしで男の後について行けるほどに無恥ではないのだ。彼女は、何かやむを得ない事情で、しかもそれだけでしかわからなかったが、それでもそれだけのことはあたしにはっきりとわかった。

そうだ、警察に協力を求めよう。こんな時の為に私達は税金を払っているのだから。私はそう考えた。私は鍵を元の位置に戻し、急いで表へ出た。

## 手がかり

赤い電球のともった駐在所は、お店から約三丁程離れた場所にあった。交替制になっているらしく、まだ三十歳前の若い巡査がたった一人、部屋の真ん中に置かれた粗末な机の前で、道路の方に向って椅子に腰を下し、雑誌を読んでいた。私があわただしく中へ入って行くと、彼はきまり悪げにその本を閉じて机の引出へ入れた。

「お巡りさん、私の友達がいなくなったのです。すぐに探して貰えないでしょうか?!」

入って行くなり、私は息を弾ませてそう言った。

彼は少し驚いたようなまなざしで私をじっと見ていった。

「ほう!——いや、ちょっと待ってくれよ。そう藪から棒に友達を探せと言われたってどうにもならん。いったいそりゃどういうことなのかね?」

彼の、素朴な地方訛りのある言葉づかいに私は何となく好感が持てた。浅黒い顔に、白い歯並が美しい逞しい感じのする青年だった。

わたしは実の姉妹以上に仲よく暮して来た私と洋子との今日までの生活から、今夜の出来事のあらましを手短かに早口に物語った。

「御承知でしょうけど、お店で貸してくれるドレスは決してそのまま街の中を着て歩けるようなしろものじゃないんですの。胸や腰の線をやけに強張した、まるで半分裸も同然の物なのですわ。だからあの子は、もしいるとしたら、まるで監禁同然の場所だろうと思うんです。もっと悪くすると……。いえ、そんなことは絶対にないでしょうけれど……」

彼は、眼を机の上に落して少しの間考えていたが、

「そうか。いや、わかった。だが、事はわかったが、しかしそれだけでは手掛りが全くないな」

聴き終ってからその巡査は、少し当惑そう

に言った。

「これが昼間なら、手配をするのは簡単だ。だが、これは君の友達に対してはやや失礼ないい分かも知れないが、もしホテルなどにいるのだったら、この節ではちょっと探しようがないのでね。いや、きみのいい分もわかるよ。彼女の人柄に関するね。だが、そうなると手掛りはただ君と洋子さんとの精神的なつながりから割り出すより仕方がないということになるのだ。むろんわれわれも協力はするだから、君がこれから探してみて、もし手に余るような事態が発生したら早速ここへ電話をして貰おうか。ここは②の六〇〇一番、非常に覚えやすい番号のはずだから」

私はしょんぼりとして駐在所を出た。時刻はもう午前二時半に近かった。今では、どうしようという手だても考えつかなかった。今夜は、帰って寝るより仕方がないのだ。

だが、どう考えても合点が行かないのは、なぜ、あれほど親しくしている姉妹同然のあたしに一言の言伝てもせずにあの子が行方をくらましたかということだった。そして、そこにまた、私の胸騒ぎの原因もあるのだ。彼女は私に、それをする余裕が全くなかったのではなかろうかと。

とぼとぼと歩きながら、私の足はいつの間にか、またお店の前に近づいていた。行手の安食堂の赤い提灯の色が眼にしみた。私はそれを見て、ふと空腹を思い出した。そうだわ今夜はまだ、帰りのお食事をすませてなかったんだっけ。だが、そのとたんにハッとした。もしや洋子は、どうしても私に連絡を取る方法がなくて、あの食堂の親爺に何かいい置いて行ったのではなかろうか？

私の足は急に早くなった。寝不足のためか足が腫れていて、ハイヒールのつま先に耐らないほどの痛みを覚え始めていたが、そうと気づくと足は現金にそれを忘れた。お店の中へ入って行ったコツと靴を鳴らして、お店の中へ入って行った。

「今晩は、小父さん」

禿親爺が驚いたような顔を上げた。

「おや、由紀ちゃんじゃないか。今夜はまた馬鹿に遅いんだね、お楽しみかい？」

「まあ、小父さんったら。あたしには、まだまだそんな幸運はやって来そうもないわ。ーラーメン作ってちょうだい。物凄くお腹が空いちゃった」とさりげなくいってから、祈りたいような気持で、

「ねえ小父さん、洋ちゃんから何かことづけなかった？」

すると親爺は、額の上の方まで禿げ上った赤ら顔をこっちへ向けていった。

「うん、儂や今、あんたに洋子ちゃんの事を聞こうと思っていたところなんだよ。いつもどんな時でも一緒なのに、今夜に限ってどうしたんだってね。いや、儂は実は宵の口に、といったって雨が上ってからだったから十二時はとっくに過ぎていたんだが、ちらりと洋ちゃんを見かけたような気がしたんだ。ここの前を右手の方へ行ったようだったよ。背の高い四十歳位の男と一緒だった。うん、ドレスのままだったような気がするがね。何だか酒に酔ってでもいるような足どりだったよ。まるで、引きずられて行くようだった。不思議なことがあればあるものだと思ってねえ」

私は、その時食べたラーメンの味を全く覚えていない。いや、喉を通ったという記憶さえも全くないのだ。私はすぐにその店を飛び出すと、三たびお店の前に立った。

何かが起ったのだ。突然に、彼女を私の許から奪い去ってしまうような怖ろしい何かがあたしは、理由もなくあわただしく前後左右を眺め廻した。午前二時半を廻って、薄暗い残置灯だけがともっている盛り場には、今

にも何ものかが飛び出して来そうな鬼気のようなものが漂っていた。私は、洋子が連れられて行ったという方向の道路をじっと見すかした。

薄ぼんやりとした光の向う側に、はてしない都会の夜の闇が待ち構えている。あたしはその気配に押されたように視線を地面の上に落した。すると、ふと踏み叩かれて泥に塗れた白い紙片が、ぺったりとぬれたアスファルトの上に張りついているのが眼に入ったのだった。

その紙片には、緑と茶の縦横の線が入っていた。他の人間ならばまず気がつかなかったことだろう。だが、あたし達にはそれが何であるかすぐにわかった。それは、うちの店で使っているお客の註文票の端切れだった。これによって、やがて水揚げの歩合が計算される。これは、あたし達にとっては紙幣も同然の物だったのだ。

さもしい根性があったわけではない。だがその時あたしは、まるで憑かれたようにその註文票の端っ切れに飛びついた。このカードは、ハネた後で全部会計係に差出してしまうのだ。一つ、ハネる前に外出した時だけなのだ。その相関関係が、潜在的に頭の中にあったものに違いない。

あたしはそれをつまみ上げた。そして殆んど反射的に表を返して左の片隅に打ってあるナンバーを見た。

おお！　そこにははっきりと洋子の番号があったのだ。

黒々と、十三番という数字が、まるであの子の名前のようにハッキリと打ち込んであったのだ！

## 暗い庭

それは本当に奇跡に近いことだった。もしお天気の日で風があったなら、そのカードはとうにどこかへ吹き飛ばされてしまっていたに違いない。

雨が降ったお蔭でそのカードは、水溜りの泥にまみれて、ぺったりとアスファルトにへばりついていたのだ。第二の手掛り。しかもそれは、まさに確定的な手掛りだった。総明な彼女は、何かのっぴきならぬ事情に迫られながら、あたしが探し出してくれることを祈りつつこのカードをわざと捨てて行ったものに違いない。

これを捨てるということは、彼女の今夜の収入を放棄するということなのだ。だからこの道しるべは、そんなことにかかわらない、もっともっと重大な意味を含んでいるに違いなかった。

あたしはそれを血眼になって探した。この次のカードを。

ずっと先の、ぬれたアスファルトの上をあたしの眼は夢中で這い廻った。そして、とうとう見つけた。二十メートルほど先の四つ角に、私の探し求める第二の道しるべが、同じように雨水にぬれ、泥にまみれて落ちているのを発見したのだった。

その紙切れは、一定の間隔を置いて見失わない程度に一枚ずつ落されてあった。私はその跡を夢中でたどった。いつの間にか盛り場を出て、その道しるべは暗い官庁街の方へ向っていた。カードの枚数に不安を感じたためだろうか、間隔は非常に遠くまばらになってゆくようだったが、一本道であるから見失うおそれはかえって少くなっていた。

私は不安と期待に弾む胸の鼓動を抑えながら、行手の闇に吸い寄せられるように、その洋子の道しるべを頼りに進んで行った。

すると、それまでは必ず残置灯の光の届く場所にあった紙切れが、とんでもない暗い脇道にそれるところにぽつんと一枚落ちていた

それに気づいたのがそもそも奇跡的だったが、とにかく私は、この暗い地面に落ちているカードらしい物を、ほとんど本能的に感知したのだ。

私は、それをここで曲ったのだという意思表示と受け取った。

やがて行手に、黒々と一つの四角い建物が見えていた。それを見て私は、はっとした。ここがどこであるかを、すぐさま思い出すことができたのだ。それは沢村という、爆撃で壊された病院の残骸に違いなかった。ほとんどの焼けビルはすっかり跡方も残さずに復興してしまったのに、この三階建てのコンクリートビルだけは無用の長物然としてまだ全然手がつけられていなかったのだ。彼女の道しるべは、今やその方向に進んでいる。私の胸は息苦しいほどの不安に高鳴った。

雑草の生い茂る、錆び朽ちた鉄柵の入った門の前に落ち散っている数枚のカードを発見した時、私の心臓はほとんど停止しかけた。もう、前へ進むことも後へ引っ返すこともできないような、心理状態に陥ってしまった。

洋子はこの中へ入ったのだ。

いや、何者かに引っ張り込まれたのだ。何のために？　そして、それからどうなってしまったのだろう？

門の中は、まるで墨壺のような闇だった。そして、それよりもさらにまだ濃い建物の入口の闇が私の行手に立ちふさがっていた。

私は、じっと目を凝らし、耳をすませた。だが中からは何の物音も聞えては来なかった。遠くの方で、自動車の鳴らすクラクションの音が断続して聞えてくるだけだった。

私はその時に、すぐに引っ返してあの若い警官を呼びに行くべきだったのだ。私も、たしかにその時はそう思った。だが、思うことはいつでも取出せるように、ポケットの中へ入れた。

それは、臆病な私にはとうてい建物の中に入るなど思いもよらぬことだったが、ほんの少しだけ違う事をしてしまった。

初夏の、夜明け間近の微風が雑草の頭を鳴らして吹き過ぎる。緊張しきっている私の神経は、そんな小さな物音にもびくっとして足を止め、必死に耳を澄ませた。どっきん、どっきんという胸の鼓動や荒い息づかいが、今やはっきりとわかった。

洋子の、必死の気持を汲んでせっかくここまでやって来たのに、このままここから引っ返しては、という気持が手伝っていたのかも知れない。とにかく、私は内心怖ろしさに両膝をガクガクさせながら、草ぼうぼうの門内へ、靴音を忍ばせて一歩一歩踏み込んで行ったのだ。

その報いは、建物の戸口の十メートルほどの荒れ放題の焼けビルの中庭は手探り同然にして進んで行かねばならなかった。

草の根につまづいて、脱げ落ちた片一方の靴が見つからないために、私はハンドバッグからマッチを取り出して恐る恐る擦ってみた。

パッと一瞬だけ周囲が明るくなった。崩れた古いセメントの塊の向う側に落ちている靴を拾うと、またすぐにそれを消した。せっかく暗さに慣れて来た眼を、光に慣れさせないためだった。それに懲りた私は、そのマッチをいつでも取出せるように、ポケットの中へ入れた。

手前でついにやって来た。

草につまづいて、再び私は前のめりに物の見事に転倒してしまったのだ。大きな音がした、いやというほど膝をつき、痛みを覚えたが、それよりも私は、そのとたんどこかすぐ近くで、何かゴソッという異様な物音を聞いたような気がして、はっと息をつめ、懸命に耳を澄ませたのだった。

時間は午前三時位だったろう。しばらくの間私は、前のめりに倒れたその姿勢のままで身じろぎもしないでいた。

だが、変な物音はそれっきり聞えなかった。鼻の先に草いきれが感じられ、微風が耳もとを通り過ぎた。よかったわ、気のせいだったと私はそう思い、大きく息を吐いて、やっとの思いで立ち上った。

だが立ち上ってみると、今度は今まで手首に掛けて提げていたハンドバッグが紛失していたのだった。

私のハンドバッグは、グレイのごく地味な物だった。闇の中では、そうすぐには見つかりそうもない。仕方なく、私は再びマッチを擦ることにした。マッチをポケットに移し替えておいたことを、思わず私は何かに感謝したい気持で一杯になった。

転んだ位置から、あたしはまだ幾歩も動いてはいなかったので、その場で一本つけて先の方にかざした。だが、その光の届く範囲内にはそれらしい物は全く見当らなかった。

私はもう一本擦った。それでもまだ見当らない。私は、泣き出したいような気持で今度は二本一緒にして擦った。夜風が忽ち意地悪く吹き消してしまおうとする。私はそれを避けながら、出来るだけ手早く左右を照して見た、そして前方も。

シンクロで撮ったように、一瞬だけ左右と前方の闇がマッチの小さな焔の下に緑色に浮かび上った。その緑色は夏草だった。それはほんの一瞬間の明るさだったが、その間に私は、自分の左側にある真っ黒な四角い部分を見て取ることができた。

それはちょうどたたみ一畳ほどの大きさでそこだけが真っ暗になっていた。

防空壕！　私はそう覚った。十幾年か前に掘られた防空壕の入口に間違いなかった。私は、自分のハンドバッグを左の手首に掛けていたのだった。

これだけ探して見当らないとすると、さっき突んのめったとたんに、この中へバッグを落し込んでしまったに相違ない。私はそう思った。指先でマッチ箱の中をまさぐると、中にはもう幾本も残っていなかった。これから先どんな事態が起るかもわからない。それを思うと、私はこの残り少いマッチ棒を最大限に活用しなければならないと考えた。そこで今度は慎重に一本のマッチ棒を擦り、つくやいなやサッと壕の上に突き出した。

折悪く一陣の風が吹いた。マッチは、硝薬だけが燃えて、たちまち消えてしまった。だが私はそのごく短い間に、四角張った白っぽい物体を真っ暗な穴の中に認めたように思ったのだ。

その穴は、さして狭いようには思えなかった。ハンドバッグらしい物体があった場所はおよその見当がついていた。この上マッチをする必要もないだろうと考えて私は、穴の縁までにじり寄って地面に膝をつき、それと覚しいあたりに手を伸した。だが、穴は思ったより深く、指先はなかなか底に届かなかった。そこで、私はとうとう腹這いになり、思い切って手を伸した。その右手の指先が、突然何かに触れたのだ。私は当然穴の底の地面だと考えて、それに添ってもう少し奥の方へ移動させようとした。

そして初めて気がついた。それは地面より

もっと柔かい！
もっとなめらかで、もっとずっと薄気味の悪い何かなのだ！
私は夢中でマッチを擦ろうとした。手がぶるぶるとふるえて、何度も軸が折れた。二本も三本も失敗した後に、三本かためて擦ったマッチが異常な程の明るさで、ギョッとするほどの音を立てて不意に点火した。その私の鼻っ先に、眼をカッと見開き、首にストッキングを巻きつけて歯を喰いしばった浅野洋子の紫ばんだ顔が浮かび上ったのだ！

## 殺意

どこをどう走ったのか、私は全く覚えていない。ただ無我夢中で、靴下はだしで逃げ出したらしい。気がついた時、私は公衆電話のボックスの中でせい一杯の声で叫んでいた。
「お願いよ！交換手さん、つないで下さい。十円玉がないのです！」
——十円お入れい
ただかないと、おつなぎすることはできませんよ。
「違うのよ！　あたしが呼んでいる相手は交番よ。一一〇番と同じなの。でも、そこでなければわけを知ったお巡りさんがいないのよ！」
——では用件をおっしゃってください。あたくしがお取次ぎします。御用件は？
あたしは、地団太を踏みたいほどのじれったさを感じた。送話器に向って、ヒステリックなせい一杯の声で叫んでしまった。
「殺人なのよ！　浅野洋子は殺されて——」
——お待ちください、では、おつなぎしますから。
……お出になりましたからお話しください。
私は受話器を握り直した。手の中は汗でぬるぬるだった。口をぐっと送話器に寄せて言った。
「モシモシ！」
——ああ！　もしもし。青木巡査ですが？
「ああ！　あたし、武藤由紀子です。さっき一時間ほど前にお邪魔した……ええ、洋子を見つけました。洋子は殺されていたの。場所は——」
ぐいと、突然誰かが、後から私の口を大きな掌で抑えた。強い力だった。振り放そうと相手の手の甲に爪を立てて必死にもがいたが無駄だった。その手はびくともしなかった。
鼻を半分抑え込まれているために、息がつまってひどく苦しかった。対手の胸板に挟みつけられて、頭を動かすことさえもできないので。だらりと下って揺れている受話器からモシモシ、モシモシ、モシモーシ！　という巡査の焦立たしげな激しい声が洩れている。
あたしの身体は、巣から引きずり出されるミノ虫のようにずる

一瞬、私は幸いにも手に触れることのできた扉を引っつかんで、脚で力一杯蹴放したのだ。

扉は激しい音を立ててボックスに突当り、窓ガラスが割れてガラガラと内部に落ち散った。

その容易ならぬ物音は、きっと彼の耳に、何事かが起ったことを知らせたに違いない。これから先、私の上に何が起ろうとしているかは、いうまでもないことなのだ。

お巡りさん、早く！　あたしはすぐに殺される！　だが、あたしはすぐに気がついた。なるほど私はあの、可哀そうな洋子の道しるべをたよりにここまでやって来た。だが、彼にこの道しるべはおそらく見つからないだろう。

そうすれば事件がどこで起っているのか、彼にはわからないに違いない！　そして発見されたころには、とうにすべてが終って、あたしは洋子と並んであの壕の中に横たわっているのだ。

不意に、口を抑えていた手がはずされた。

ずると電話ボックスから引っ張り出されました。

何とかして、この事態をあの巡査に知らせなければならない！

その考えが私の頭に閃いた

私は音を立てて幾度か荒い呼吸をした。だがその自由は、たちまちまた奪われてしまった。相手は、片手で腰のベルトをつかみ、反対側の手でコルセットの締め口を探し当てて、ぐいと締め上げたのだ、梁にぶら下って後から二人掛りでコルセットを締めた時のように、私の呼吸はまた下から押し上げるような具合につまってしまった。

私にそんな姿勢を取らせたわけはじきにわかった。道の反対側を、一台のパトロール・カーが明りを消してゆっくりと走り過ぎて行ったからだった。私は、夢中で叫び止めようとした。が、それはできなかった。肺の中の空気が、ほとんど押し出されてしまっているためにどうにもならないのだった。

私は、千載一遇のチャンスを逸したと思った。諦め果てて、ぐったりとなった。まるで酔っ払いのように、男の引くがままに動いて行くより仕方がないのだ。

（――ひどく酔っているようなあんばいだったがね）そう言った安食堂の親爺の言葉が思い出された。

洋子は、こうやってあそこまで連れ出されたのだ。おお、可哀そうな洋子！　そして、私も今や同じような恰好で同じ道を歩かせられて行くのだ！

あたりに人影のないのを確かめてから、男は道を反対側に渡った。沢村病院の焼け跡、死神の住んでいる場所はここから入るのだ。暗がりにかかる。私は、せめてこいつの顔だけでも見ておこうと思った。

街燈のある位置からかなり離れているのでよくはわからなかったが、この男はかなり長身だった。頭髪は、まるで監獄から出て来たばかりのように丸刈りで、凸凹の多い顔かたちだった。その顔色は夜眼にもはっきりと不健康きわまるふくれた黄色っぽい色をしていた。

私がじろじろ見ているのを感じたのか、男は口の中で、ふふ、といった。そして、ふと足をとめて私の耳もとに口を寄せて来た。その仁丹臭い息づかいに思わず吐気を覚えて反対側に顔を背けると、今度は低い、しわがれた変てこな声でささやくように言った。

それには、なぜか親しげな、聞きようによってはいたわるような調子をさえ含んでいたのだ。

「ねえ、おまえ。……お前はあそこを覚えているね？」

私は、息苦しさに必死に耐えながら叫んだ。

「知っているわ！　でも、何のためにあたし達をこんな眼にあわせるのよ！　離してっ。離してってば！」

「何のため？　お前はいつでもそうなんだね。でも、もう大丈夫だ。もう誰も追って来やしない。いいかね？　忘れてしまったのならもう一遍話して上げる。さっき話したばかりなのに。お前はね、子宮癌で、この沢村病院で手術したのだ。敵の爆撃機が頭の上にいる最中に爆弾が落ちて来て、途中で手術ができなくなってしまったんだったね。そのうちに麻酔が解けて、お前はひどく苦しがった。殺してくれと喚いた。隣の部屋で聞いていて、俺は今にも気が違いそうだったよ。そのうちに、ふとお前の声がしなくなった。俺が変に思って扉を開けてみると、驚いたことに看護婦二人と医者が爆風で死んでいて、ベッドの上のお前の姿が見えなかった。そこで俺が外へ飛び出してみると、こともあろうにお前は、燃えている中庭の真ん中で転げ廻って苦しんでいた。俺は夢中でお前を横抱きに抱えて近くの防空壕の中に飛び込んだ。血はどんどん出てしまう。お前は

殺してくださいと嘆願する。俺にはそれをやるしか方法がなかった。俺は、とうとうお前の首をあり合せの紐で締めた……」

おお、神様！　この人は気違いだったのだ！

「ち、違うわ！　あたしは、あんたの奥さんじゃないの！　だから放してちょうだい！　ね、お願いよ！」

「――さあ、お前、そんなことをいわないで一緒に歩こう。もう少しだよ。疲れたのならおぶって上げようか？」

「いいえ、大丈夫よ」

あたしは素直にそういって二三歩あるいてその刹那に力一杯身をひねったのだ。ところが、思いがけない事に彼は手にほとんど力を入れていなかった。はずみで、私の身体はもののみごとに暗い路上に横転してしまった。

しまった！　私は、飛び起きるなり走り出した。

一瞬きょとんとしていた彼は、逃げ出したと知って猛然と追って来た。

肩口に、太い指が万力のように喰い込んだと思うと、もう片一方の手が、素早く前から私の喉元をつかんだ。

「いいかね！　ほんの少しの間の辛棒だよ。今度こそは、絶対にね！」

少し息を喘がせながら彼はそういうと、指先にぐいと力をこめた。私は手足をバタつかせてみた。が、無駄だった。

痛い！　あたしは起き直った。頭の芯がきりきりと痛み、耳のあたりでずっきん、ずっきんと脈を打つのがよくわかった。ひどくガソリン臭いので、ここが自動車の中だということがわかった。そばで、浅野洋子が昏々と眠っていた。彼女は、防空壕の中で仮死状態になっているところを、パトカーの人々に救い出されたのだった。

「わかるかね？」

その声に聞き覚えがあった。暗がりの中で白い歯が見えた。さっきの、若い警官だった。私は彼によって救い出されたのだ。もういよいよという最後の一分間のところで。

「よくわかりましたわね、この場所が」

「君こそ、どうやってこの場所を突き止めることができたんだね。じつに大したことだが、というのはね、この春から、こんな事件が幾つも持ち上っていたんだが、こいつの仕業だということがどうしても突き止められなかったんだ。それは、つまり被害者と犯人との間に全く関係がないために、手掛りがなかったからなんだがね」

「それは洋子の手柄なんですの。この子は」

私は、例のカードの事を彼に話した。

「そうか、何にしても大したことだよ。なにせ僕の方は簡単なんだ。どえらい音がして電話が中断されたろう？　あれを交換手が盗聴していて、すぐにあの公衆電話の位置を通報してくれたからなのさ。僕等は、二分もたたぬうちに現場へやって来た。すると、犯人に引きずられて行く君の姿を認めたが、すぐに飛び掛って君に怪我があってはいけないと思って、充分に手筈を整えてからやったんだ。あれが君らだということはすぐにわかったよ。何しろ君ははだしだったからね」

私は、両手錠を掛けられ、足首を縛られて丸太棒のように転がされているいが栗頭の男を見た。彼は、比較的のんびりとした眼を上げて、きょろきょろと車内を見廻していた。この上なく怖ろしい出来事だったけれど、私は不思議に、この男に対する憎しみの念は沸いてこなかった。

（そう、あなたは、とても可哀そうな人なのね）私は、誰にも聞えない声で、そっと彼にそういってやった。

# 肉（にくかい）塊

憂愁の影ある美しい人妻のかたわらに，無気味に歪んだ肉塊がうごめきまつわっていた！

## 白い顔

ぼくは、今夜もその道をまっすぐに歩いて帰った。夕刻の七時頃だ。冬のそれに比べてたしかに日がながくなっているのが感じられたが、それでも七時といえばもう暗い。

ぼくの家はいたって不便なところにあって、出るにも帰るにもどうしたってその道を通らねばならないのだ。両方が一帯の繁みで、子供達にとっての絶好の遊び場所であるが、日没時ともなるともう人通りはなくなる。ぼくは毎晩、勤めの帰りを、半ばのスリルと奇妙な興奮との、両方混りあった説明しがたいような気持を抱いて通るのである。

道は七、八丁ほどでとぎれ、またチラホラ人家のたっているあたりに出るのだが、ちょうどその中間あたり、三ツ又に交叉しているところがある。一本ニョッキリ栃の大木が左手に立っていて、その下をやはり左手に、細い畦道同然の小道がわかれるのだが、ぼくはその小道の折れ曲った先のことについて何も知らない。いつもその三ツ又を、無意識のうちに通り過ぎてしまう。

ところが今夜に限って道の途中で急に小便がしたくなった。立止って気づいたのだが、ちょうどそこが三ツ又の地点だった。ぼくは委細かまわず、栃の木の根方に用を足した。足しながらふと顔を上げて小道の方を見た。道は細々と続き、行手の木立のかげに消えていた。

用を足しおわり、さて歩き出そうとしたその瞬間だった。不意にぼくは正直のところ、これほどびっくりしたことはない。場所が場所だし、第一あまりにも不意である。体がサッと冷えこむほどぼくはびっくりし、おびえていた。

立っていたのは三十年配の女性の声がぼくを呼び止めた。ぼくして後をふりかえった

# ★耽奇の女★

奈良原哲夫

藤原　隆・画

である。暗いのでよくはわからない。しかし、顔の白さだけが、きわだってぼくの目をひいた。今どき怪談でもあるまいに。ぼくは落着きを取り戻して、さて逆に問いかえした。

「何かご用ですか」

女はしばらく躊躇するようにだまっていたが、やがて決心したと見え、何かに追っかけられでもしているというより哀願の調子であった。

「わたしを怪しまないでください、かまうものかどこかへ連れてってください。訳は後ではなします。決して御迷惑にはしませんから、どうぞ、とにかくお願いします」

ぼくもいささか興奮していた。なんの余裕もなく瞬時に女の手をとった。後をふりかえるのがこわいような気もした。それで歩調を速めたが、女はだまってついてくるようだった。

ぼくの家には妻の咲子と二人の子供がいる。工合が悪いなと瞬間思ったが、ええい、かまうものか

と、女を後に連れたまま帰宅した。

果して妻はいともけげんな面持ちでぼくを迎えた。委細かまわずぼくは女を玄関よりの応接間に招じいれた。客の手前、幸いにも咲子はよけいな詮索をしようとはしなかった。

## 期待

都築さかえ、と名乗るその女を送り出した後、ぼくは応接間に一人っきりでとじこもり何ともまとまりのつかぬ思いに耽っていた。

さかえの白い美しい顔が、今現に目の前にあるような、奇妙な幻覚をさえ感じた。灰皿のピースの吸いさしがまだいぶっていた。無意識にそれを指先でまさぐる。紅のついていたであろうあたりも、すっかり灰になっていた。ぼくは両手を頭の後に組み、大きく体をそらし、伸びをするようにしながら呟いた。

「なんてえ晩だ――」

さかえの話には、それほどの珍奇さはなかった。夫がわたしを虐待する。わたしは殺されるかもしれない。彼女の訴えは以上に尽きる。よくある話だ。それでいったいぼくにどうしてくれというのだね（全くの愚問だ）

愚問には答えようがない。それで彼女は返事をしなかったんだなその代りぼくは約束させられた。明後日の夜、さかえの家を訪問することを。何のために？　その問の答えは明後日の夜にならなければわからない。

それにしても、何という物好きな男なんだ。ぼくはぼく自身にあいそづかしをしながら、しかもいうにいわれぬ期待を、明後日の夜にかけたのだから、何をかいわんやである。

ぼくほど平凡な男はない。ぼくの生活ほど平凡な生活はない。ぼくら夫婦ほどありきたりの夫婦はない。よし、そうだ。そこで女があらわれた。平凡でない、ありきたりでないとんでもない事態に立ちいたるんだ。ぼくは長年の間、そのことを待っていたんだ。人生にはスリルがなくっちゃ。ぼくの胸は期待と興奮でわくわくした。

実をいえば、ぼくは重大な誤解をしていたことにまだそのとき、気がつかずにいた。ぼくが色男面してそのとき考えたような、そんな、なまやさしい事態ではなかったのである。もっと異常な、もっと怪奇な、もっと意義深い、そんな事態にたちいたろうとは、ぼくの平凡な頭では、とても予測することができなかったのである。

人生は、しかく、不可解なものである。

「あなた」

咲子が扉をあけて顔を出した。夕食の催促だ。そう、そう。まだ飯も食わないんだな。ぼくは椅子から立上ったが、その瞬間、ある考えに思い到り、慄然として身がすくんだ。

あの女は、気が狂ってるのだ。そうだ。そうにちがいない。そんなあたりまえなことがわからずにいたなんて……

ぼくは歪んだ笑い方をした。

## 彼女の家

ぼくは一昨日の夜、立止って小便をした三つ又の地点の栃の大木を見上げてある感興をもよおした名状しがたい恐怖心がしからしめ

たのか、とにかく栃の木は生々しく星空に背丈一杯の枝々を拡げて立っていた。

ぼくは、はじめてその道に踏み入った。三つ又の地点を左に折れる小経である。しばらくすすむと両方が雑木の林になった。一層夜気が身に迫った。

都築さかえが、夫の浩太郎と共に住んでいる家は、その林の奥にあった。今夜は仕事の関係上、浩太郎は不在のはずであった。ぼくは、夫の不在を狙って、女盛りの人妻をこっそり訪問するぼく自身の行動に、言い知れぬ満足を感じながら、しかしそのことをうしろめたく思っていもしたのである。

とにかくぼくは約束をしてしまったのだ。

約束は守らねばならぬ。

さかえは待ちかねたようにいそいそとぼくを迎えた。ぼくは彼女の顔を見ると急に弱気になって、

「家で待ってるので、なるべく早く帰りたいのですが……」

と言った。さかえはなんにもきこえないといった様子で、ぼくを奥へ導くのである。一切が無言のうちに運ばれてゆく、ぼくは彼女の後から、長い廊下をついていった。

古くて広い家である。シンとしずまった夜気が、家全体を押し包むように、ぼくはそれら一切の圧迫感を胸に感じ、息苦しくさえなった。

さかえの部屋とおぼしき、その三坪ばかりのこぢんまりとした洋風の部屋には、さほどの変った様子は見られなかった。大きな張り出し窓が庭に面してあり、厚ぼったい、しかし派手やかな感じの色彩のカーテンがしまっていた。その正面に飾り棚があり、みやびやかな博多人形が並べてある中に、五十センチほどの大きなこけしが立てられてあるのが目立つくらいまだ少女趣味が抜けきらぬ部屋の住人のおさなさがうかがわれるだけであった。しかし、それでいながらぼくは、ゾッとするほどにひやかな一種の凄惨な気配を背筋に感じ、ハッとして身を退いたくらい、その時の印象の奇怪さをどう説明したらよいであろう。

青味がかった螢光スタンドの光を両横に受けながら、さてぼくがその夜彼女から訴えられた事の顛末を、次に要約して述べることにするが、もしぼくも、その夜彼女からそのように直接訴えられたのでなかったとしたら、さかえのその話を信じるわけにはいかなかったろう。でも、ぼくは、そのときのひたむきな彼女の目の色を信じ

たのだ。それで次に述べる彼女達夫妻の、幻妖な行為とその恐怖をぼくは心の底から首肯せざるを得ない。

## 二人妻

さかえが女子大で東洋歴史を専攻していたころ、浩太郎は講師として教鞭をとっていた。元来、スポーツを愛好するさかえの濶達な性格にひきかえ、浴太郎はどちらかといえば無口で内攻的な性格であった。

さかえが浩太郎になぜ惹かれたか、それを彼女自身に説明させることは酷である。ともかく、内面に何らかの秘密を抱いているような、浩太郎の曰くありげな、しかも思慮分別にたけたかのような一挙手一投足が、不思議な牽引力となってさかえを惹きつけたことはたしかだといえよう。

浩太郎は教壇に立つや、ニコリともしないで学生達を一にらみしさて講義にかかる。

「……北魏との軍事に失敗した栄の文帝は、ついにその長子、劉濬の凶刃に倒れ、悲業の最期をとげるのでありますが、この劉濬という人物こそ、まことに注目すべき人物でありました。沈約の『宋書』に、彼と、次弟の劉濬とを二凶となし、列伝最後にのせて、蕃夷よりも待遇を下げられているくらいの人物です。彼は幼時より形貌異常と申しましょうか、すでにして父を惨殺し、国を滅ぼす怪奇の相を有していました……」

浩太郎の語調には熱がこもっていた。その熱がどのような性質のもので、どうしてそのように感得されたのか、さかえにはわからない。彼女は彼の講義を熱心に聞いた。じっと彼の顔を見つめる。そのうち、その異常な熱の雰囲気のなかに巻きこまれ、ズルズルとそのなかにのめりこむ、自分自身の姿勢をたてなおすことはついにできずにおわったのだ。

さかえが浩太郎と結ばれたときは、同じ屋根の下に、先妻とその子供と、一緒の生活をよぎなくされたわけだ。それはいとも珍奇で、しかも真剣な苦しい生活であった。

## 石の部屋

さかえの訴える浩太郎との奇怪な関係はいよいよこうして開始された。驚いたり、腹をたてたりの余裕はなく、アッというまに彼女は彼の強引なペースに巻きこまれてしまっていた。さかえはまさか浩太郎の妻の座というものが、こういうかたちで提供されようとは夢にも思ってはいなかった。その裏切られた事実への怒りより、しかしおかしなことにはそうした不可思議さへの興味と異常な関心とがさかえの動きを従順にした。

浩太郎は一日おきに彼女の部屋へ現われ一夜をそのまますごす。

「いったいどちらが本妻なの」

「どちらも本妻さ」

「そんなことってあるかしら」

周囲の人達は皆一様におどろいた先にものべたようにさかえは人見知りしない社交的な明るい女性である。浩太郎の方はと言えば、気味悪い先生で通っている陰湿の性がある。この二人の結びつきは、たしかに一つの異変といえるものであったかもしれない。しかし、当のさかえにとってみれば、まことにもって大まじめであったわけだ。

ところが、結婚してみてさかえが驚いたことには、浩太郎にはれっきとした妻があり、男の子さえいたのである。彼はしかし、平然として言ってのけた。君、歴史を何の為に勉強したんだ。一どきに二人の妻がいるなぞということは歴史の中にはザラにあることだ。二人はおろか、何百人、何千人の妻を同じ屋根の下に住まわせるはまず男としては尋常だし、むしろこれは誇り得ることでさえあったわけだ。それを今さら驚くにも当らないじゃないか。

浩太郎はさかえの頭の後にまわしかけた腕をふりほどきながら、いらだたしく吐き出す。

「どうしてそんな常識的な考え方に固執するんだ」

さかえは夫の強い視線の前で、だまってしまう以外ない弱い女でしかなかった。

ある日、廊下の隅に男の子がたってこちらを凝視していた。あの女の生んだ子だ。さかえは負けたくないと思った。なんだってそんな風にわたしの顔をみるのさ！と口でこそ言わなかったが、一種の切迫した気慨のもとでじりじりと彼の方に迫っていった。男の子はその気配を感じたか、つと身をひるがえし扉の蔭に身を入れた。入れちがいにその部屋から浩太郎が首を出し、さかえの姿をすぐ前に認めると、矢庭に飛出してきてさかえの手首を強い力で捕えた。

「なにをしようとしたんだ。えッとにかくお前のこのごろはどうもただごとじゃない。今日ばかりは日頃とすこし勝手がちがうんだ」

彼は全く人が変ったみたいに恐しい形相をしていた。握られた手首があまりに痛いので、反射的にそれをふりほどこうとしたさかえを彼は容赦しなかった。一層強い力で握り直しながら、奥の方へズンズン彼女を引っ張っていった。彼女は自分の家ながら、そんな奥の方にはまだ行ってみたことがなかった。まして、それほどまでに恐しい地下の暗室があるなぞということを、ついぞ知らずにいたわけだ。

五坪もあったろうか、四角い部屋の壁面は、すべて荒削りの岩でできていた。何の装飾もない部屋の中央にただ一つ、これも石造りの、高さ二尺ばかりの寝台状の台が一つ据えられ、置かれたランプがそこにボンヤリした光を周囲にただよわせていた。

「今日からお前はもう本妻ではなくなった。それはむしろお前がそう望んだがためだ。歴史の中にもしかした腕をふりほどきながら、いらだたしく吐き出す。

「どうしてそんな常識的な考え方に固執するんだ」

さかえは夫の強い視線の前で、だまってしまう以外ない弱い女でしかなかった。

ある日、廊下の隅に男の子がたってこちらを凝視していた。あの女の生んだ子だ。さかえは負けたくないと思った。なんだってそんな風にわたしの顔をみるのさ！と口でこそ言わなかったが、一種の切迫した気慨のもとでじりじりと彼の方に迫っていった。男の子はその気配を感じたか、つと身をひるがえし扉の蔭に身を入れた。入れちがいにその部屋から浩太郎が首を出し、さかえの姿をすぐ前に認めると、矢庭に飛出してきてさかえの手首を強い力で捕えた。

「なにをしようとしたんだ。えッとにかくお前のこのごろはどうもただごとじゃない。今日ばかりは日頃とすこし勝手がちがうんだ」

彼は全く人が変ったみたいに恐しい形相をしていた。握られた手首があまりに痛いので、反射的にそれをふりほどこうとしたさかえを彼は容赦しなかった。一層強い力で握り直しながら、奥の方へズンズン彼女を引っ張っていった。彼女は自分の家ながら、そんな奥の方にはまだ行ってみたことがなかった。まして、それほどまでに恐しい地下の暗室があるなぞということを、ついぞ知らずにいたわけだ。

五坪もあったろうか、四角い部屋の壁面は、すべて荒削りの岩でできていた。何の装飾もない部屋の中央にただ一つ、これも石造りの、高さ二尺ばかりの寝台状の台が一つ据えられ、置かれたランプがそこにボンヤリした光を周囲にただよわせていた。

「今日からお前はもう本妻ではなくなった。それはむしろお前がそう望んだがためだ。歴史の中にもチャンとそう記されている。わたしは歴史をそのまま実践してみたいだけだ。お前は今後奴隷の地位に落ちるのだ。いいか、ここで今わたしはお前を奴隷にする儀式をとりおこなう」

抵抗したとてなんの意味があったろう。さかえは裸にされ、台にあなたこそはと、お選び申したつもりだったのですが、それを誰でもよかったんですか、とは、すこしばかりひどいお言葉だと存じます」

「いやあ、どうも……とはいえ、これは大変な人権問題ですね。警察にでも訴えて……」

「止めてください。わたしはそれ以上に恥を知る女です。もともと周囲の反対を押し切ってまで浩太郎と結婚したわたし、それを今さら……」

「そうですか、わかりました。じゃ、なんですね、浩太郎さんはしばらくお帰りにならないので、そのの間になんとか、とおっしゃるんですね」

## 生きた肉塊

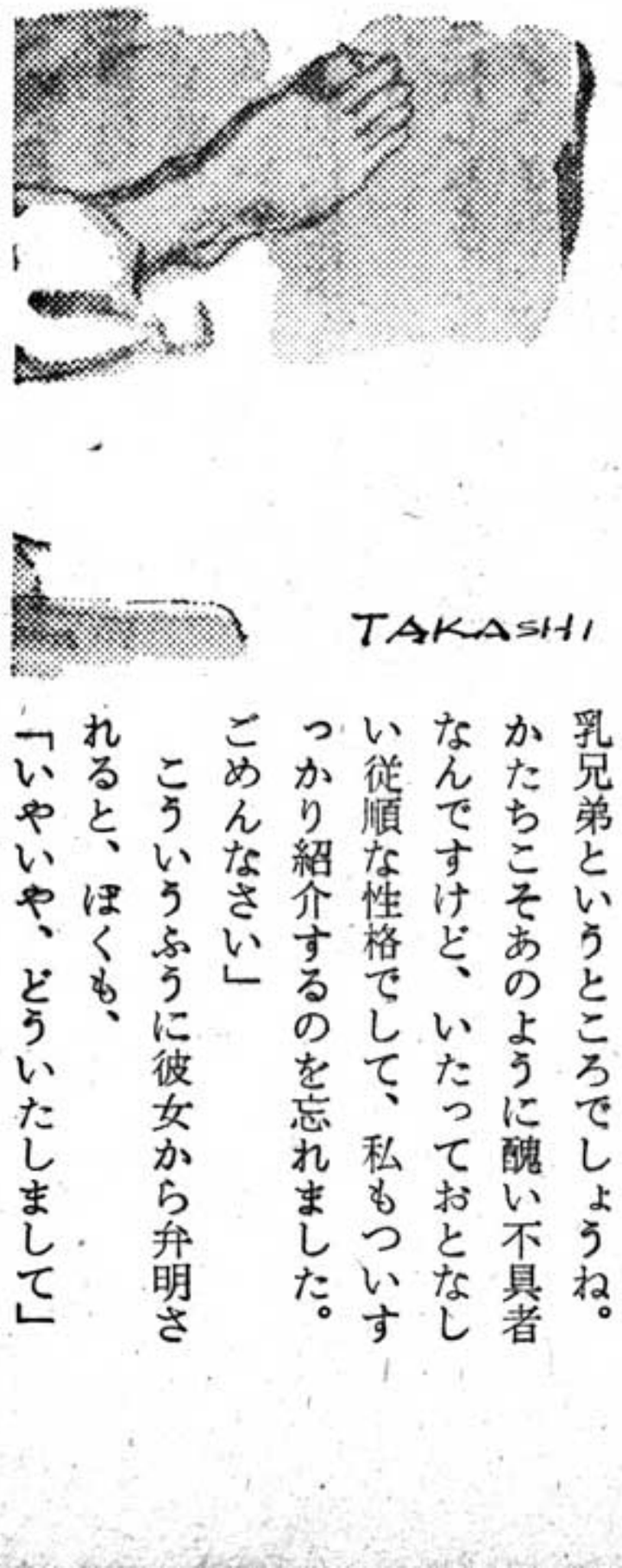
「……このままでいたならば、わたしは死んでしまうにちがいありません。所詮弱い女でしかないわたしは、逃げ出そうにも一人ではどうにもできないのです」

「だからといって、なぜぼくを選んだんです。それとも、あの木の下の道を通る男だったら、誰でも

「そうです。もう半月ほどは戻ってこないはずです」
「しかしぼくにだって今急にどうしようというような名案は……」
「半月の余裕があります。わたしと一緒に考えてください。お願いします」
ぼくは有無を言わさずたたみこんでくるさかえの攻勢を防ぎ得ず思わず唸り声をあげてだまりこんでしまった。螢光スタンドの青い光だけが、その間の静寂をひとりみたしているばかりだった。
そのときだった。ドアの外で何やら人の気配がするのをぼくは感じ、思わず中腰になるところへ、さかえの方がいちはやくその空気を察知したのか、ツト立上るが早いか、ドアのそばへ体を寄せるようにして腕を伸ばし、パッとそれを内へひいた。
と、同時に、部屋の中へ転げこんだのは一つの奇怪な肉塊だった。
どういってそれを表現したらよいものか、とにかくその肉塊は生き物であることはたしかなのだ。もっとわかりやすく言うなれば、一人の人間、それも男性であるらしいことが推察されるだけで、それ以上の言い方がどうしてできよう。
身の丈三尺そこそこ、足が極端に短かく、腕だけは普通並に長い。まず外形の様子がそれだけだったとしたらぼくは驚かない。彼の様子がいちじるしいのはその面貌においてである。彼が子供であるのか、それとも老人であるのかの詮索は別としても、あの顔の中央部の、何かで押しこんだような凹みは何なのか。丸っこく凹んだその底に長く横にひかれた唇の線が認められたその面貌の妖奇珍妙さはまさに絶後のものであったのだ。

## 選ばれし者

ぼくは何が何やら見当もつかなかった。それにもまして、おかしかったのはさかえのそのときの狼狽ぶりだった。
「駄目じゃありませんか。お客様がいらっしゃるというのに、こんなところへ出て来て！　早くすっこんでなさい」
きわめておとなしやかに、押さえつけたような低い音声ではあったが、彼女の言葉には強く激しい怒りがこめられていた。
その男の彼女に応じた態度こそまた実に滑稽でもあり、みじめでもあった。男の表情にはまず恐怖の色が見られた。彼は床に這いつくばるようにして彼女に頭を下げそれからそのままの格好で室を出ていった。




「ごめんなさい。こんなはしたないところをごらんにいれて」
さかえはまた前のようなあの沈んだ面持ちしずかな雰囲気にかえっていた。私はすっかりあっけにとられていたので言うべき言葉も知らぬ状態だった。しばらくしてやっとこれだけを問うことができた。
「あの人、どなたですか……。いえ、べつにお伺いすることもないんでしょうけど、しかし、一応知っておいた方が……」
「いいえ、別にかくしだてすることもありませんから……。あれは浩太郎の乳母の子でして、つまり乳兄弟というところでしょうね。かたちこそあのように醜い不具者なんですけど、いたっておとなしい従順な性格でして、私もついすっかり紹介するのを忘れました。ごめんなさい」
こういうふうに彼女から弁明されると、ぼくも、
「いやいや、どういたしまして」

と、軽く応ずるほかはなかった。

話題はまた前に戻り、いかにして浩太郎の毒牙からさかえの身を安全に守るか、厄介にして困難な問題に立帰るのであった。ぼくはさかえの幾分うれいありげな眉根のあたりに不思議な魅力を感じたしだい第一、特に選ばれて、かほどまでの信頼を受けることともなれば、やわか中途で引きさがるわけにもゆくまいと思うのである。ぼくは心中ひそかに、もし必要とあらばさかえともども、どこか遠くへ、浩太郎の手の届かぬところへ逃げて行こうかとさえ思ったのである

浩太郎の存在にそれほどのおそれを感じたわけではなかったが、日ごろ平凡でありすぎたぼくの心は、こういう千載一遇の冒険に対してまるで子供のようにはずんでくる気持を押さえ得なかったのだそれにさかえはたしかに美しい女であった。

## 穴

奇怪なのはぼくの頭の方だ。さかえがあらわれてからのぼくは、全く性格が一変した。あれほどなごやかだったぼくの家庭は、まるで様子が変り、とげとげしい雰囲気が屋内を領するようになった。妻はぼくの最近における行跡が尋常でないことに気がついた。それで毎日のようにぼくを攻めたてる子供までが母親の側について、何か詮索じみた目つきでぼくの顔をみつめる。ぼくは追い詰められた者の怒りで体をふるわせながらがなりたてる。

ぼくは考える。こんな調子でこれからすすめば、大変なことになる。そこでどうすればよいのだ。まことに不甲斐ない話だが、ぼくはさっぱり何の見当もつけかねているのだ。どうもすっかり彼女、さかえのとりこになってしまったことだけはたしかだった。

ある日、ぼくは家路を急いでい

た。ぐずぐずしてはいられなかった。浩太郎がもうじき帰る。その前にことを運ばねばならなかった。

懐に五十万円の金だけは準備していた。それとなく妻や子供に別れを告げ、当分の生活費に二十万円だけを渡しておけば、三十万円の金は残る。すこぶる心細い話だったが、とにかくしゅんじゅんする場合ではないのだ。さかえと一緒に逃げよう。ぼくの心は決っていた。

ハの時だった。前方に人影がする。何気なしにうかがってそッとした。あたりはすでに暗く、人影も見定めがたかった。

しかし、ぼくにはハッキリとそれがわかった。彼だ。浩太郎と乳兄弟だというあのあわれな男だった。瞬間ツト身をかくし、ぼくは彼のあとをこっそりとつけた。何のためだかわからぬが、とっさの反射作用にすぎない。三ツ又の地点を左に曲り、彼女の家に戻るところらしかった。

ぼくは先まわりをして窓の下にたたずんだ。何ものともしれぬ予感に心臓がドクドク音をたてるのがはっきりわかる。ちようどそれはさかえの寝室の窓だったのだ。内側からカーテンがしめられていたが、かすかにそのあわせ目のあたりに隙間があった。ぼくはこわごわそこから室の内部をのぞき見たのだった。そしてその瞬間、ぼくは息が詰るほどに驚いたのだ。

ガッシリとした堅固な寝台であったが、それが室の中央に動かしてあった。寝台のあった部分の床にポッカリと大きな穴があり、さかえが今しもそこから這い出るところだった。もっとはっきりいおう、這い出てきたのはさかえだけではない。ほかに見知らぬ男が一人、見動きもせずに穴から出てくるのだ。

ぼくはとっさにあることを連想し、顔から血の気がひくのを感じた。そうだ、そうにちがいない。その死体の男こそ浩太郎氏その人であるにちがいない。

## 怒り

変質者としての死体愛好癖、ぼくはそれを思ってゾッとした。とはいえ、その場を離れることはなおさらにできず、ジッと事の成行きを見守る以外にはなかった。

その場のさかえは、ぼくの前にいるときのあのいつものさかえではなかった。すっかり人が変ったようなし猛々しい気力じみたものをみなぎらし、冷厳な振舞でことを運んでいるのだった。彼女は中央の寝台に腰を下し、ホッと大きく肩で息をした。足元の床には、見知らぬ男の死体が横たえてある。

ぼくはとっさにあることを連想し、顔から血の気がひくのを感じた。そうだ、そうにちがいない。その死体の男こそ浩太郎氏その人であるにちがいない。

顔色はまるで死蠟のように蒼かった。そうだ。男は生きてはいなかった。それは明らかに死体であった。さかえは男の死体をしっかりと胸に抱きとめるようにしながらも、彼女はしばらくの間たたずんだ。何ものともしれぬ予感に心臓がドクドク音をたてるのがはっきりわかる。ちようどそれはさかえの寝室の窓だったのだ。内側からカーテンがしめられていたが、かすかにそのあわせ目のあたりに隙間があった。ぼくはこわごわそこから室の内部をのぞき見たのだった。そしてその瞬間、ぼくは息が詰るほどに驚いたのだ。

ガッシリとした堅固な寝台であったが、それが室の中央に動かしてあった。寝台のあった部分の床にポッカリと大きな穴があり、さかえが今しもそこから這い出るところだった。もっとはっきりいおう、這い出てきたのはさかえだけではない。ほかに見知らぬ男が一人、見動きもせずに穴から出てくるのだ

に小男のその額を蹴り上げた。
ヒイッという悲鳴、小男は仰向けにひっくり返り、もがこうとするその顔の上に、さかえははずみを着けて腰を下した。なにかでこしらえたような男の顔の中央部の凹みが、ちょうどさかえの腰の曲線にピッタリと合うが如くに見てとれた。
ぼくは恐怖を忘れた。と同時にそれと、とって代るが如く、ボッゼンと怒りがこみ上げてくるのを感じた。時も場所も、わきまえることができなかった。手近な足元の石ころを探り当てるが早いか、窓ガラスを夢中でたたき割った。
さかえはビックリして立上りながらこちらを振り向いた。ぼくは敢然と彼女の前に立ちはだかったのだ。
「このざまは何だ！　ぼくをだまして！　よくもだましたな」
何をいってるのやら、もう支離滅裂な言葉を投げつけた。とっさには、返す言葉もなかったようだが、やがて、
「こんなところを見られてしまった以上、もう仕方ございませんわね」と悪びれもせずにいうのだ。
「わたしの血の中には、わたし自身どうにもできない異常な血が混っているのですわ」
まるで一人ごとみたいな調子だった。
「その血が浩太郎氏を殺したというのか」
ぼくは凝然と腕を組み、床の上の死体を見下した。ぼくのこの一言が彼女の死命を制する重要な急所であることを確信しながら…。しかし、事態は意外な方向へと転回した。今この瞬間、ぼくがすっかりその存在を忘れ去ってしまっていたあの小男がすすみ出てこう言ったのである。
「浩太郎はぼくです。ぼくはこの通り生きています」
さかえは目で彼を制した。
「とにかくみんな話をしてさし上げることにいたしますわ」
彼女は室の隅の戸棚から、ウイスキーの瓶を持出し、グラスに二杯、そして一つをぼくに差出し
「この劇の終止符をうつための乾杯、ね、およろしいでしょう」
と誘うようにすすめたが、ぼくはそれをハねつけた。さかえは所在なさそうに笑いながら、その二杯を、たてつづけに飲みほした。
幾分幾秒かの沈黙があった。
彼女の口元の笑いが、フッと消えた。と、同時にさかえの体は膝から床に崩折れた。
「さかえさんはかわいそうな人です」
浩太郎はまるで予期していたようにさしてあわてずこういった。
「さかえさんの異常な血が、あなたを第二番目の犠牲者に選んだからといって、それは彼女の罪じゃありません。血が悪いんです。彼女の血が……」
「何をいってるんだ。ぼくは、ぼくはかりにもあなたを救って上げたんですぞ、あなたはそれが迷惑だったとでもおっしゃりたいんですか」
「何を滅相な。そんなことはありません。わたしは充分にあなたに感謝します」
小男は鈍いまなざしを投げながらすすみよった。そして握手を求めるかのように、一方の手を差しのばした。
それに気を許したのがいけなかった。突然、背中に衝撃を感じ、ぼくはその場に昏倒した。小男の別の手に握りしめられたジャックナイフの先から鮮血がしたたっていた。小男はぼくの耳もとに、こうささやきかけたのである。
「許してください。でも仕方がない、ぼくの、ぼくの大切な女神をもちろんぼくはマゾヒストです。ぼくの気持って、あなたには理解できないでしょうが」
その声が、だんだん遠くなってついにはきこえなくなった。

# 伝奇秘宝録・特集 です！

秘宝をめぐり、正邪入り乱れて★
活劇決定版!!　御期待下さい!!★

グラビア
藤沢修

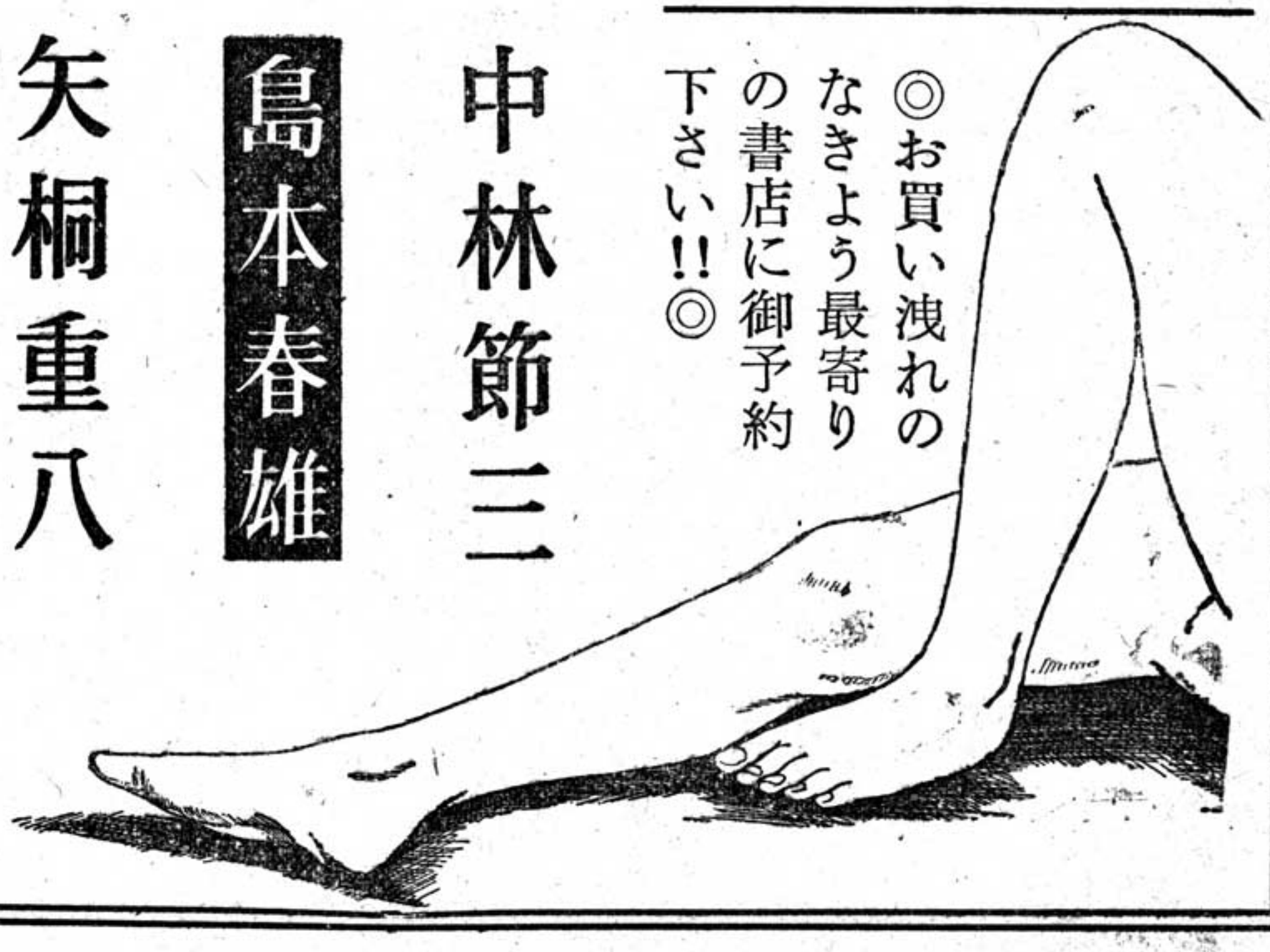
## 阿修羅秘帖
中林節三

## 魔童子秘文
島本春雄

## 伝奇紅蓮党
矢桐重八


妖艶絵物語
画と文・中嶋喜美

◎お買い洩れのなきよう最寄りの書店に御予約下さい!!◎



# 裏窓六月特大号は★★★

★秘匿された埋藏金や
★まんじ巴と争う時代

## 肌絵双紙

連載完結篇

## 夜叉姫絵図

藤見郁

## 絵図面地獄

小田桐爽

## 高月大三

怪異愛霊教……飯田豊吉
まぼろし侍破魔ごよみ
黄金女仏……黒木忍
二色オフセットロ絵
悦虐絵物語……山田彬弘

推理絵物語
秋吉巒

## 妖異女宝嶋

葉田光

悲愴美の世界①
中康弘通

★白虎隊★
★の最后★

号を追って充実する裏窓（六月号に限り定価五十円）発売四月二十三日!!

# 今度はお前だ！

## 金髪の女はオレが刑事でなくてがっかりした。彼女は何を狙ってるんだ？

ホンキイ・トンク
黒羽新・訳
画・古正英生

### 必死の手段

地下鉄サムってのは小説で読んだけど、地下鉄ドームにお目にかかったのは初めてだった、つとめ人が帰りを急いでるんで、地下鉄はこんでいた。

こっちは、別に急ぐ用があったわけじゃなかったんだが、一台やりすごそうかと考えているうちに、いつの間にかうしろの奴におされて、否応なしに満員電車に詰めこまれてしまった。

中年のかみさんが傘を斜めにかかえていたその傘の柄が、オレの鳩尾を一ゆれするたびにゴリゴリ掻きやがって痛くてたまらないんで、一寸ばかり体をひねった。

とたんに、プーンといい香水の匂いがオレの鼻腔をくすぐった。

そして三十秒もたつかたたないうちだったんだ。

はっきり白い指先が二本、オレの上衣の内ポケットにすべりこんできた。オレもその真似するみたいに左手を内ポケットの方へすべりこませると、その指先の手首をつかんでしめあげた。

首だけはひねって横をみると、その手の持ちぬしは、びっくりするほど若くて、おまけに目の大きい金髪娘だった。

丁度、車が「中央公園駅」へすべりこんでいるところだったから、オレは、唇をひんまげ、小さい声で娘に囁いた。

「ここでおりようぜ」

相手の娘は神妙だった。オレが娘の手首を無理に引っぱるまでもなく、自分から進んでオレのあとへつきながら車をおりた。

ところが駅を出たとたん、娘が妙なことを呟きやがった。

「ああ、よかった……」

オレは思わず娘の顔をみた。娘はオレの顔をみあげて、ニッコリ笑った。掏摸の現行をとっつかまって、一ついつの間にかうしろの奴におされて、否応なしに満員電車に詰めこまれてしまった。

中年のかみさんが傘を斜めにかかえていたその傘の柄が、オレの鳩尾を一ゆれするたびにゴリゴリ掻きやがって痛くてたまらないんで、一寸ばかり体をひねった。

とたんに、プーンといい香水の匂いがオレの鼻腔をくすぐった。

そして三十秒もたつかたたないうちだったんだ。

はっきり白い指先が二本、オレの上衣の内ポケットにすべりこんできた。オレもその真似するみたいに左手を内ポケットの方へすべりこませると、その指先の手首をつかんでしめあげた。

首だけはひねって横をみると、その手の持ちぬしは、びっくりするほど若くて、おまけに目の大きい金髪娘だった。

丁度、車が「中央公園駅」へすべりこんでいるところだったから、オレは、唇をひんまげ、小さい声で娘に囁いた。

「ここでおりようぜ」

相手の娘は神妙だった。オレが娘の手首を無理に引っぱるまでもなく、自分から進んでオレのあとへつきながら車をおりた。

ところが駅を出たとたん、娘が妙なことを呟きやがった。

「ああ、よかった……」

オレは思わず娘の顔をみた。娘はオレの顔をみあげて、ニッコリ笑った。掏摸の現行をとっつかまって、一つ公園に入って行った。

するとと娘が口をとんがらかしていったもんだ。

「あら、見当がちがうわ」

「見当？　何だ？」

結論を先にいってしまうと、オレも、そし

て娘も勘ちがいしてたんだ。
ベンチに腰を下してから娘は、がっかりしたように肩をおとした。
「そう、あんた刑事じゃなかったのね」
オレは苦笑いした。それから、もう一度、その娘の頭のてっぺんから爪先まで見下した年はきかなかったが、十九か二十だろう。着ているものだって上物だし、指輪も本物らしいのを指にはめている。
「どうしてオレのポケットを狙ったんだ」
掏摸に盗みの理由をきいてどうなるわけじゃないことくらい承知していたが、何となくオレはこう聞きたかったんだ。
「あんたが刑事だと思ったからよ」
ますます分らねえ。本物の刑事だったら、すぐ手錠をはめちまったろう。掏摸にしちゃア、まるで駈けだしみたいな手つきだった。
「だけど、刑事じゃなさそうね。あたしの眼の狂いだったんだわ」
ここでオレは、はっと気づいた。外へ出たとたん、娘が、よかったといった意味がおぼろ気に分りかけたからだ。
「じゃァお前は、わざと捕まるつもりだったんだな？」
娘は首を縦にふった。

「どうして？」
「あんたにいえないわ」
「何故だ？」
「だって、刑事じゃないでしょう」
「ということは、つまり、わざと捕まって、警察で保護してもらおうって肚だったんだな」
娘は一寸ばかり驚いたって顔をした。それまでは、一種のお面みたいだった表情が、生地の顔むきだしに変った。
「あんた、本当に刑事じゃないの？」
オレは身分証明書を出してみせた。娘はそれをみると、又、表情をかえた。
「やっぱりよかったわ。ねえ、警察とは連絡つくんでしょう、あんた、おねがい。一つ頼まれてよ。私、命がおしいんだもの」
命？
改めてオレは娘を見直した。なるほど、まだ命はおしい年ごろだろうし、オレにいわせたって、こんなヴォリュームのある娘を、みすみす死なせたくはない……。

## 話を聞いてから——

生来、オレはどうも女に弱い。
話だけとにかく聞いてくれって、オレの両手をつかんではなさないんで、その根に負けて、オレはローラのアパートまで行った。
一寸した二間つづきの部屋で、この程度なら週七～八十ドル間代をとられるだろう。
一杯のむかといったから、のませてくれるのなら一杯じゃいやだと答えた。
ローラが酒の支度をしている間に、オレは壁に貼ってある写真をたっぷり拝見させてもらった。
どれもこれも、ローラの写真ばかりだ。それも、殆んどがセミか、オール・ヌードばかり。
公園で観察したときは風袋こみだったんでこんなくらいと想像していたんだが、どうしてどうして、写真で拝見すると大したもンだ多分、整形手術をしたにちがいないと思うがそれにしても、上向きの乳房の曲線。等身大の奴は、みごとな腰のくびれを、これみよがしに誇示している。
「みんなそれ、二年前の写真よ」
酒を運んできたローラが、まるで他人ごとみたいにそういった。
オレは一杯口をつけてから、
「二年前にこれなら、今はもっと発達しちまってるだろうな？」
からかい半分にこういってやった。すると、オレはローラのアパートまで行った。
「発達したのを見たいんでしょう？」
オレだって照れることはある。みせろといって、はずかしがって、それからみせた女はいるが、みせてあげてもいいよと、ズバリといってのけたのはローラが始めてだった。
「冗談はそのくらいにして、話を聞かせてもらうぜ」
そういうよりオレの答は出なかった。
ローラはオレの前に腰をおろすと、まるでオレの肚をよんでるみたいに、じーっと黙ってオレの顔をみていた。
「二年前まで私、ごらんの通りのモデルをしてたのよ。でも、今はちがうの。やっぱり、ある意味では、裸で商売してるみたいだけどそれは御想像にまかせるわ」
これで、はは——んと分った。
コール・ガールにちがいない。壁に自分のヌード写真を貼っているのは、もしかすると客にみせる「商品見本」って訳か——まさかは？」
「それは分った。で、死にたくないってのは？」
「狙われてんの」
「誰に？」
「それが分れば、掏摸の真似なンかしないわ。

相手が分らないから、てっきりあんたを刑事とカンちがいして――」

「どうせオレは刑事づらをしているよ」

勝手にオレは酒を注いでのんでいた。

「本気になって聞いてはくれないの？」

「だってあンたが、一枚幕をはってしゃべっているからな。想像じゃァつかみたくったってつかみようがない」

ローラは唇をかんで暫く考えていたが、仕方がないわと呟くと、やっと本当らしいことをしゃべりだした。

断っておくが、オレはローラのはなしを、そのとき、決して額面通りにうけとらなかった。由来、女のはなしは、半分うそなんだ。女は男とちがって、いけしゃァしゃァと嘘をつきやがる。いや、そうじゃない。嘘と思っていないから、眉一つ動かさずに「おはなし」を聞かせるんだ。だから、聞いてる方は、どこが本当で、どこが創作だということを、聞き乍ら判断する必要がある。こういうことにはオレは馴れていたから、適当にローラの話を、オレなりにカットしながら聞き流して行った。

かいつまんでいえば、これが最も本当らしい部分だった。

ローラは、ある組合に属しているコール・ガールだ。料金は泊りで三百～五百ドル。その二割を組合に献納しなければいけないという義務を負わされている。収入は、それで月平均三千～五千ドルだそうだ。そのくらいにはなってもおかしくない。それに引きくらべて、大の男のオレの――いや、そいつをいったところで泣言だけだ。

ところが、例の「マイアミ事件」がおこってしまった。

「マイアミ事件」というのは、その組合がマイアミのある邸を借りて、新顔のコールガールばかりのせり市をやったとき、どこでどうもれたか、一斉検挙を食って、組合の幹部二人と、コールガールの卵が八人もってかれてしまった。客も参考人として連れて行かれたが、この連中は裏から手をまわして、すぐ釈放されてしまった。

誰かが裏切ったのでなければ、こんなことがおきるはずはない。

組合の幹部は激怒して、その裏切りものを探ぐりにかかった。当然の結果として、そのときの会合を事前に知っていた人間が疑われた。ローラもその容疑者の一人に擬せられた、というのは、その席で捕えられたコールガールのかけ出しが、ローラの紹介者だったからだった。スーザンというその娘は、マイアミへ行く前の晩、ローラのアパートに泊り、そのとき、何気なくマイアミの邸で「披露宴」があるということを、彼女に洩らしたからだった。

「あンたじゃないんだろう、警察へ垂れ込んだのは？」

「当り前よ。そんなことすりゃァ、どんな風にされるか、私だって知ってるわ」

「じゃァ、そうだといってやりゃァいいじゃないか？」

「そう簡単にすめば問題はないわ。でも、ボスは容赦しないのよ。もう今までに、二人も殺されたわ、（殺し屋）の手で――」

二人ともコールガールで、やっぱりローラみたいに疑われていた女たちだった。一人は溺死体になって桟橋の近くに浮いていたし、もう一人は、自動車にはねられて死んだと、ローラはいった。

「今度は私の番なんだね？　今度はお前の番だってきたんで出てみると、聞いたこともない男の声で、ローラだ。昨日の朝、電話がかかそっていって、それっきり。だから私、地下鉄の中でふと思いついて、あんたをみたもンだから――」

なるほど、たしかにこの辺、話のつじつまはあっている。

「話はそれでしまいだな」

「一寸、待ってよ、あンた、まさか話だけ聞いて帰るつもりじゃないでしょう」

オレはグラスをおいた。

「帰るといったらどうする？」

ローラはにっこり笑った。

「帰しっこないから――」

もう上衣は着ていなかった。スカートのジッパーが腿のあたりまで下がると、スカートが床へおちた。ブラウスがソファの上にとんだ。スリップは薄紫色で、ブラジャーは共色だった。そして、パンティだけは、すきとおって、真白だった……。

## 女らしいチップ

あとで時間を追ってみて分ったんだが、オレがシャワーを浴びてたのは、大体八時半ごろだった。

思いきり水を出して、冷たいほとばしりを頭にうけると、身も心も軽くなった。人がみたら、きっと変な奴だと思ったろう。オレは思わずニヤリと笑っていたからだ。

写真はどうとっても、結局は平面でしかない。その点、現物はちがう。

帰さないといったのとみえる。もっとも、それがいわば商売なんだから、夢中とみせかけたって、どこまでが本気だと、はっきり断定はできないけど、オレはそんなことを気にしなかった。

敵が商売なら、こっちはファイトだ。

取引きは終ったんで、オレは汗をながしに浴室へ入って行った。そのときのローラ

は、まだ本当に疲れたみたいな恰好で、枕に顔をうずめてつっ伏していた。

頭から水をかけられると、精神的に息苦しい。それればかりでなく、耳までろくにやしない。耳に水をいれまいとすると、注意がそっちに向いて、聴覚が薄らぐんで、注らしい。

そのときも、だからそんな調子だった。

水をとめて身体をふいていると、オレの耳に、ローラが何かいってるらしい声が聞こえた。

あわててシャツに袖を通し、ズボンをはいて出てみると、寝台の上のローラが、こっおき上った恰好で、銅像みたいに鯱ばっている。

そして、ローラの鼻っ先のところに、黒い服を着た、五呎そこそこぐらいの男が、こっちに背をむけて、これもつっ立っている。

その男がうしろをこっちに向けているのでオレはそいつが何か兇器でローラを脅しているのではないかと一寸考えた。

浴室の戸の音で、二人の視線がこっちへ向いた。ローラは動かなかったが、その小男はオレを睨みつけると、そろそろ右のひじをうぐるりと向きをオレの方へかえた。

オレはそいつをみて安心した。小男めは、拳こそ握っていたが、両手には、ピストルもナイフも握っていなかった。

もっとも、このごろの「殺し屋」は、音の出るパチンコとか、血の流れるナイフを使わないと聞いている。手袋をはめた手で締めるのが一番安全だそうだ。

そして、その小男は、灰色の手袋を両手にはめていた。

オレが黙って一歩一歩近付いて行くと、男は低い声でローラにいった。

「おい、こいつは何だ?」

「何だって知りてえのか。じゃァ教えてやろうか」

オレはズボンのベルトを固くしめ直した。

「オレは客さ。お前も客か?」

オレはわざと肩をいからし、見下げるようにそういうと、用心しいしい近づいて行ったいつでも相手がポケットへ手をつっこんだら一発先に顎をぶんなぐってやろうと、姿勢を少しも崩さなかった。

「お前の出る幕じゃねえ」

背がちっこい割に、物おじをしない奴で、オレを睨みつけると、そろそろ右のひじをうしろへ引こうとした。

分ってるさ! ポケットの玩具でも出す気だろう。

オレが一発食わすと、呆気ないくらい奴めは、絨毯の上へひっくり返った。そいつを、襟首をつかんでもち上げると、何の軽いこと。吊し上げてソファへもってって投げると、痛そうに頭をなでて、口はきかない。

「こいつか?」

オレはローラに聞いた。

ローラはシーツで胸を蔽っていた。まだ下着一つつけていなかったんだ。

「わからないわ、ノックもしないで、いきなり入ってきて――」

「よし」

オレは小男の横っ面を思いきり一つぶんなぐった。横倒れになったから、上からのしかかって押えつけ、ポケットを探ぐると、案の定ピストルが出てきた。そいつを鼻っ先へつきつけて、オレはローラに命令した。

「縛っちまえ。うん、そのシーツを千切った奴でいい」ローラは一寸ためらったが、思い切って寝台をおりると、オレたちの方へ尻をむけて、歯でシーツを何本もに噛み切った。

そしてローラは裸の姿で男のうしろへまわると、まずそいつで口へ猿ぐつわをかました。奴は妙な顔をしてオレをみた。多分、うしろへまわって縛ろうとしたローラの乳房が、奴

の後頭部にキスしたのだと思ったから、オレはニヤリと笑ってやった。

素直にしばられているところをみて、オレは、こいつ只の鼠じゃあるまいと、少々感心した。

ローラは猿ぐつわをはめ、両手両足をうしろで縛ると、さも憎たらしげにそいつを横につっころがした。それから御念のいったことに、しばった両足をLの字に曲げさせると、うしろ手の両手と両足を、もう一度くくりつけた。これじゃあ起きようにも起き上がれない。

「どうする？」

オレはピストルを上衣のポケットにつっこむと、ローラにいった。

「服を着るわ――」

なるほど、まずそれが第一だ。

「それから？」

「壁の写真をはがしてよ。逃げ出すわ、ここを」

それも一案。

オレが壁の写真を一枚一枚はがしている間に、オレのうしろで衣ずれの音がした。感覚が鋭くなっているときだったから、その音でローラが今何を身につけているか、オレには容易に想像できた。

荷物は小型のトランク二つだった。

「大分前から用心していたの。大部分、お友達のとこへ預けてあるわ。いつでも逃げられるように用意していたのよ。あの時以来ね」

この最後の言葉を、ローラは、まるで縛った男に聞かせるように、はっきり発音した。そして最後に、頂戴と手を出したから、オレははがした写真をローラに手渡した。

もっとも、全部わたしたわけではない。キャビネの一枚だけ、そっと左手でポケットへ頂戴していた。

「荷物を下にたのむわ」

オレが両手でトランクをぶら下げると、ローラはそのオレの腰に手をまわして、キスしようとした。

そのときオレはみつからないのは、もう生きていなかったからだったことを。

右のこめかみに穴があいていた。煙硝くさかった。

だが、兇器のピストルは、そこら辺に発見されなかった。

反射的に、オレは奴からとりあげたピストルのことを思い出して、ポケットを探った。

ない！

ローラだ！　チップだといってキスしやがって、しまったというような顔で、

「おねがい、忘れものしちゃったの。洋服箪笥のひきだしに、ネックレスを忘れてきたわ。とってきてくれるでしょう？」

否やはない。で、エレヴェーターでオレは引っ返した。

部屋に鍵はかかっていなかった。

しばられた男は、相変らずL字型で、ソファの上につっ伏していた。

ところが、いくら探しても、ローラのいうネックレスはみつからない。思いちがいだろう。オレは簡単にそう割り切って、部屋を出ようとした。

身動き一つしなかったのは、もう生きていなかったからだったことを。

右のこめかみに穴があいていた。煙硝くさかった。

だが、兇器のピストルは、そこら辺に発見されなかった。

反射的に、オレは奴からとりあげたピストルのことを思い出して、ポケットを探った。

ない！

ローラだ！　チップだといってキスしやが

ったとき、オレのポケットから抜いたんだ。手袋をはめていた。そして、オレを下へ追いやってから、こいつを射ったんだ。だから、あのピストルには、殺された男と、オレの指紋しかついていない。もし、ピストルが発見されたらオレは——畜生！

## 手がかりは見一つ

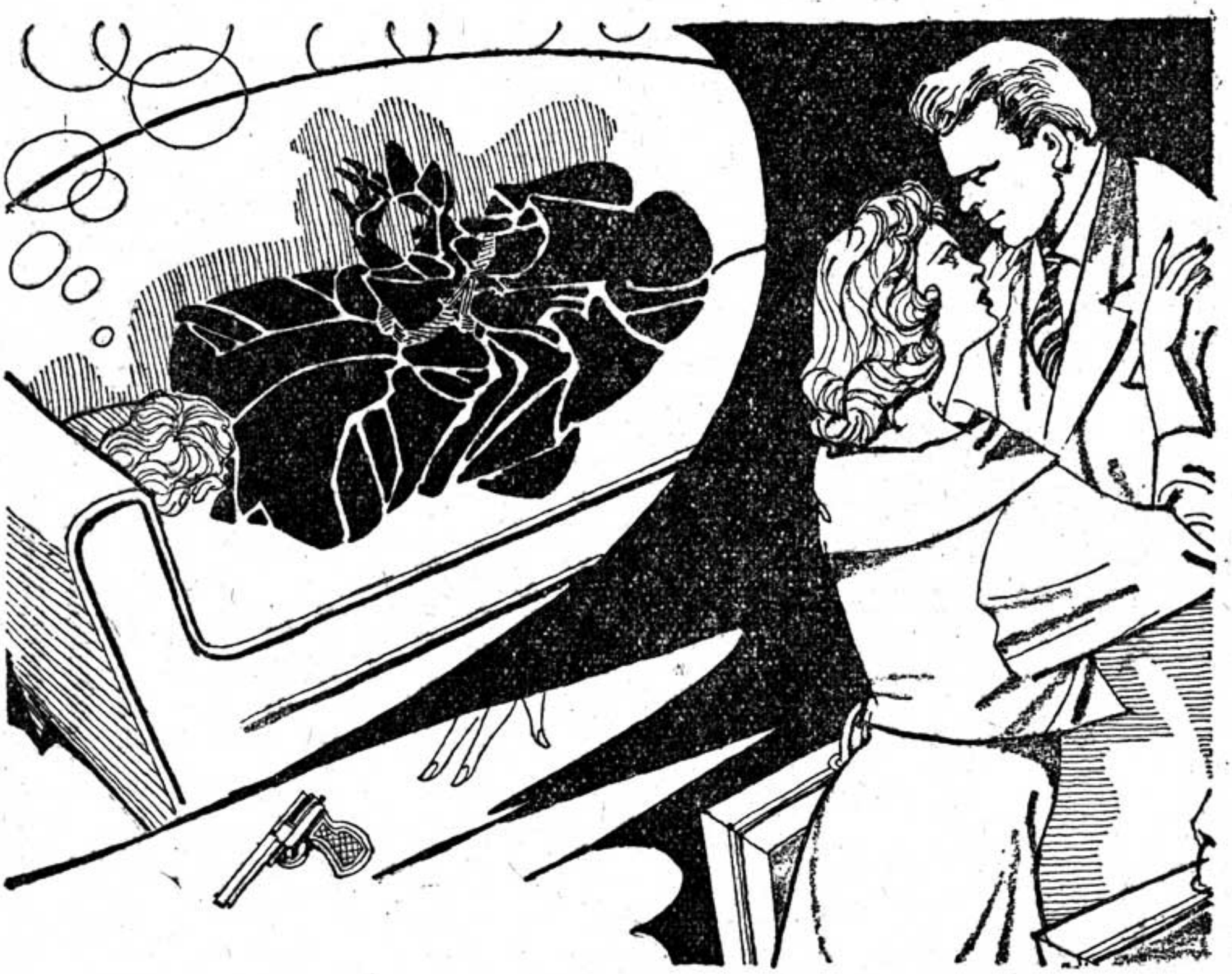
「又、尻ぬぐいか？」

オコーネル部長はオレをからかった。

「いい目をみたあとだから、少しはお灸も身体のためだ」

冗談じゃねえ。

オレがあわてて下へ行ってみると、案の定トランクもローラも姿を消していた。管理人のはなしだと、二週間くらい前に部屋をかりて、そのときだって荷物はトランク二つだけだったといった。ローラ・コールマンなんて名もヨタにきまっている。これじゃア、藁の山におちた一本の針をさがすのよりむつかしい。



だが、一つだけ手がかりはある。ローラのヌード写真だ。まさか自分で裸をとったのではあるまいし、とられた以上、撮影者はいるはずだ。素人のとった写真じゃない。

これだけはオコーネルにもかくしておいた。うっかりすると証拠として没収される危険があったからだ。

「被害者の身元はすぐわかったよ。奴は、フレッド・パーキンスといって前科者だ。ゆすりの前科三犯。二十日ほど前、刑をおえて拘置所を出たほやほやさ」

「ゆすり？」

オレは首をひねった。由来、ゆすり屋ってのは人を殺さないもんだ。ゆすり屋は、人にたかるのが商売だが、自分が殺されそうにならぬ限り、人は殺さない。人を殺せばペイにならないことを知っている商売人だ。

二日ほどとめおかれたが、オコーネルが身元引受人になってくれたし、保釈金も立替えてくれたんで、オレは青空を再び拝める身分になった。

「恩に着るぜ。きっとあの女をしょっぴいてくる」

オレはオコーネルに約束した。

「当てにしてないぜ。今度は死体安置所でお前のつらをみるんじゃねえのかな？」

滅相もない。

しかし、あの女は危険だ。原因は何だか分らないが、とにかく男を一人片付けた。そのオレがどう思道具に、オレを使いやがった。オレを使いやがったんだ。ってるかはもう百も承知だから、ひょっとすると、今度は別の鴨に身体をまかせて、うるさいオレを片付けようとするかもしれないとはいえ、まず第一に、女の所在をつかむことだ。オレはタクシイ会社を次から次へとまわってしらべた。女も抜目なかった。アパートの前で車を拾って、五六丁行ったところで、その車をすてた。そこまではつかめたがそれからあとはまるで雲。

その次は、「マイアミ事件」の方をしらべてみた。事実、ローラなどという女は、その事件と全く関係がなかった。というのは、ローラが自分の正体をかくすために、わざと新聞記事をネタにして、でっち上げたことをまことしやかにオレにしゃべりやがったんだ。

だから、ローラが殺った男は、こんな風に考えてみると、組合が廻した「殺し屋」でないことはたしかだ。

では何故ローラは、あの小男を殺したのか？　そして、小男は、一体何の用があってローラをたずねてきたんだろう？

少くとも「殺し屋」の話は別にしても、ローラは、あの小男がやってくるのを予知していたわけだ。でなけりゃァ、あんな芝居をしてまで、自分のそばへオレを引きつけておくわけはない。

必ず、あの小男とローラとは、何かの関係がある。

オレは寝台に寝そべって、ローラのヌード写真をもう一度しみじみ眺めてみた。

陽のよく当っている、どこかの庭園の一角エヴァソフトのマットに腹ばいになったローラは、左手で頬杖をついて顔を斜め正面にむけ、笑っている。全裸だ。はねあげた両足が今にも交互に動きだすんではないかと、そんな気がして、オレは写真を睨んでいた。

手がかりはこれだけだ。

といって、裸の女の写真だけではどうなるというんだ！

いや、そうじゃない。忘れていた。ローラはモデルをしていたといった。写真家に当ってみると、案外ローラの正体がわかるかもしれない。何故こんなことを忘れていたんだとオレは舌打ちをしておき上った。

寝台がきしった。あのときの寝台のきしりを思い出して、オレはやるせなくなってしまった。

憎らしいたァ惚れたってことよ。シェークスピアの言葉は、ある意味で真実だ。たしかにあの女は憎い。両手で首をしめてやって、あえぎあえぎベロを出すのを見下したら、さぞいい気持だろう。しかし——。

うそをつけ。お前はそのベロをみたら、ローラの首をしめた手を、ローラの腰にまわして、ベロを口一杯すいこんでから、ローラのジッパーに手をかけるにきまっている——。

オレだって、考えてみりゃァ只の男の一人なんだから……。

## 切札は、これだ

二週間近くかかったが、到頭オレは探し当てた。

このおかげで、オレは一つ教訓を身につけた。

探しもンをするのなら、何も足もとばっかり探しまわるもんじゃない。そこらへおとしたと思った探しものが、意外にも高い棚の上にのっかっていることがある。

オレの探し出したローラもそうだった。便宜上、オレはローラとよんでおく。

話には聞いていたが、凄え大邸宅なんで、滅多に物おじしないオレも、客よせのところであたりを今更のようにみまわした。

「お約束でございましょうか？」

鼻が木でできてるような侍僕がオレに聞いた。

「とにかく逢いたいんだ。マイアミからきたといやァ、きっと逢って下さるよ」

侍僕は、ぜんまい仕掛の人形みたいに廻れ右をすると退って行った。

朝鮮戦争のおかげで一山あてたという奴だけあって、成金趣味がホールに、これみよがしに飾ってある。金もつかいようだ。これじゃァ全く、金のありがた味はない。何でも金ピカに飾り立てりゃァ、人がびっくりすると思ってやがるんだ、成上り根性丸出しさ。

ぜんまい仕掛が戻ってきた。

「お逢いになるそうでございます」

当り前さ。もし逢わねえといったら、例のヌード写真を、このお人形の鼻っ先へつきつけて、こいつはどこのどなたさまか、お前知ってるかいって聞いてやるつもりだったんだこっちは。

通されたのは、庭に面した明るい部屋だった。ひらき戸をあけるとポーチになっていてすぐ庭に出られる。

オレは待っている間、何気なく庭をみていたが、ハッとした。どうもみたようなところだと思ったら、何のことはない。ローラはこの庭でヌード写真をとっていたんだ。

泉水から一寸石塀によったその芝生に、マットをしいて腹ばいになり、ポーズをつけてとらせたんだ。

うしろで、微かにドアの音がした。

オレはふりむいた。

濃紫のサテンのアフタヌーンを身につけたローラが——いや、マクガイア夫人が入ってきたところだった。

しかし、たしかにあの女だのに、どうも印象がかわっていると思ってよくみたら、第一髪の毛が変っている。前は金髪だったのに、そのときは漆黒に染められていた。

目だけはもと通りだったが、眉のひきかた口紅のぬり方がちがって、ぐっと年よりもふけてみえた。

今の方が本当なのか、あのときのローラが地なのか、オレはふいっとそんなことを頭にうかべた。

口のききかたもちがっていた。ゆっくり、一語一語考えるように、マクガイア夫人が口を開いた。

「マイアミから、おいでだそうでございますね。それで、御用の筋は？」

オレと承知で逢っているのに、とぼける気かと思ったんで、オレはむっとした。しかしまァまァとおさえ、こっちもできるだけ芝居をしてやれと思ったんで、

「しばらくでした。おくさん」

女は、眉一つ動かさない。

「どこで、お目にかかりましたかしら？」

「へえ、忘れたんですかい、つれないね」

今度は眉をひそめた。何て下劣ないいかたをする男でしょうって表情を、はっきり顔に出しやがった。

こうなれば狐と狸の化かしあいさ、切札は最後で充分だ。

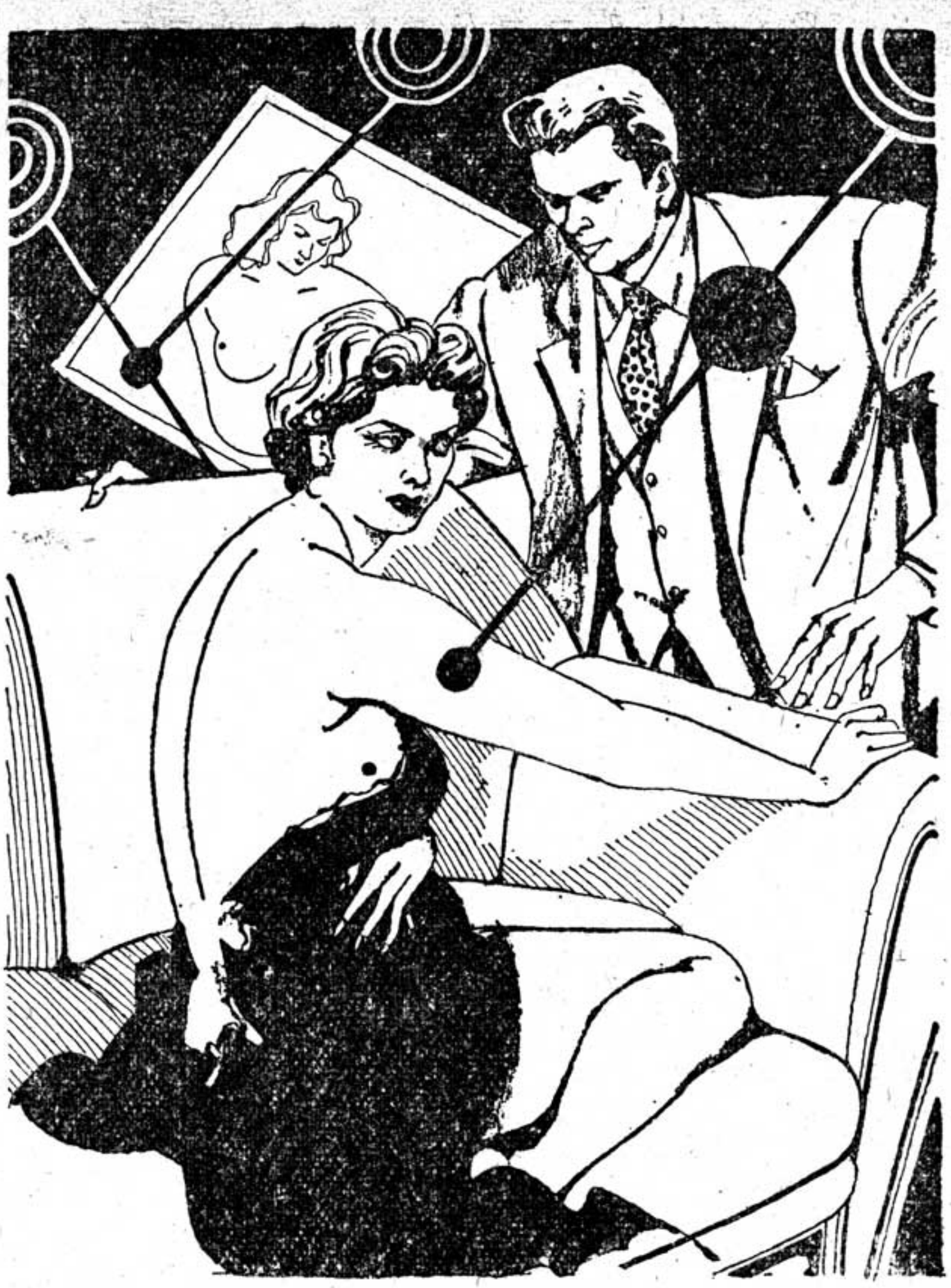
「ひどい目にあわせたな。すんでのことで、

オレは人殺しにされたぜ」
「何のおはなしでしょう?」
「さあ、何のおはなしでしょうネ」
オレは近よって行くと、わざと鼻をびくつかせた。
「香水だけは、あんときと同じだぜ。いいか——」
女は一歩身をひいた。
「とって食おうといわねえぜ、ローラ」
「失礼ですけど、お人ちがいじゃございませんの」
また顔色一つ変えない。
察するところ、こっちの出かた次第で、あくまで白を切りとおす気と睨んだ。
「お前の殺した、あの男は、何だったんだ?」
「……」
「自分の口からまともにいえねえさ。こっちが代りにいってやろう。あいつはお前の亭主——いや、亭主は、おっと失礼、れっきとしたマグガイア氏夫人に対して、これは失礼ないいかただったが、とにかく、奴はお前さんの亭主みたいな存在だった」
はじめて一寸色をなしたが、その表情もすぐに消えてしまった。
「何かのお間違いじゃございませんか?」
「そう、お間違いあそばしたのは、お前の方さ。オレを甘ちゃんとお間違いあそばしたんだぜ。いいか——」
オレは到頭、切札を出す気になった。
ポケットから、例のヌード写真をつかみ出すと、女の目の前につきつけた。
「こっちの切札はこれさ」
女は、小さく、あっと口の中で叫んだ。

## オレの方はいいともさ

しかし、それも一瞬だった。
チラリと写真に目をやった女は、何故か安心したように頬を綻ばせた。
「この写真と私と、どういう関係がございますの?」
まき返して出てきやがったな、相手の方がつなるほど、考えてみりゃァ、この女があのよい。こんな写真だけじゃァ、正にその通りだった。この庭だともいえる男を殺したことの証明にならない。女はしかすると、アリバイだってこしらえているかもしれない。
オレは、それでもひかなかった。
「よし、そんならいい」
相手の鼻っぱしをくじく手しかなかった。
オレは一歩前にふみ出すと、いきなりローラの服の襟元へ両手をかけた。ひじが左右にくの字に曲ったと思うと、サテンの服が、鳩

アパートへ奴がやってきたんだって、予め打ちあわせをしておいたんだ。金を出すとか何とかうまいことをいい、その前に、オレだって、オレじゃなくったって一向に構わないが、ゆすりのひもをとりおさえられる男をたらしこみ、ああいう段取りで相手を殺し、罪をオレみたいな奴におっつけようとしやがったんだ。
こうは思ったが、オレは始めっからひきさがるつもりはなかった。
「なるほどね、おくさん。顔の輪廓は似ているけど、髪かたち。化粧はまるでちがっている。しかしだぜ、この場所だ。ほら、そこの庭で写した奴じゃないか。庭はちがうっていう気かね?」
「ここの庭だという証拠でもありまして?」
又しても、まき返しだ。
正にその通りだった。この庭だともいえるし、この庭ではないともいいぬけはできる。
オレは、それでもひかなかった。
「よし、そんならいい」
相手の鼻っぱしをくじく手しかなかった。
オレは一歩前にふみ出すと、いきなりローラの服の襟元へ両手をかけた。ひじが左右にくの字に曲ったと思うと、サテンの服が、鳩



尾のあたりまで音を立てて裂けた。
女は、棒立ちになったまま、声一つあげなかった。
オレはつづいて女のスリップの紐をひき千切ると、右の乳房をつかみ出した。
「みろ、これだけはごまかせないぞ！」
右の乳房の下に、小豆粒くらいの黒子があった。
「どうだ、これでもちがうというのか」
女はよろめいた。そして、長椅子に身をしずめると、両手で顔をおおった。
オレは、むき出しになっている女の背中の色の白さに、ほんのわずかの間だったが注意を奪われた。
「どうしよっていうんです、あなたは――」
蚊のなくような声と共に、女は顔をあげた。その顔は、涙でぬれていた。
何故泣くんだ！　こんな女が、後悔して泣くとは思われない。
「どうするってのは、オレの科白さ」
女は急にベラベラとしゃべり出した。はだけた襟元をあわせようともせず、胸にたまっていた文句を一気にぶちまけはじめた。
「そりゃァ私がわるかったわ。でも、あなたに罪を冠せようと思ったのは、殺したすぐあとだけのはなしよ。分ってくれる？」
「分ンねえよ」
「ピストルのことを忘れているわ」
そうだった。たしかにピストルのことは忘れていた。いまだに、兇器のピストルは、どこからも発見されていない。オレの指紋のついているはずのピストルが――。
「ピストルは、もって帰りました。指紋も消してしまいました。だから、あなたは犯人じゃないんです。私が殺人犯人なの。何故、私

がそんなことをしたと思って?」

オレは分らなかったから首を横にふった。

「これが、そうさせたの」

女は、たった今、オレが引っぱり出した乳房を、自分の手の平にのせて、ぎゅーっと握りしめた。

「忘れられなかったわ、あなたのこと。でも私の方から逢いには行けないし、きっと、あなたが、私のところへ来てくれると思って、本当は今日の日を私はたのしみに待っていたのに。それなのに――」

「それなのに?」

女は立ち上った。そして、オレの首に腕をまきつけてきた。

「ひどい人! 人の顔をみるなり、何ていったのよ。何故、こうして抱いてくれなかったの。人殺しだからおそろしかったなンていうんじゃないでしょう?」

前にもいったけど、やっぱりオレは、この女の首をしめられないたわ。

女の舌がオレの口の中で散歩した。むき出しの乳房が、服の上からオレの胸をこそぐった。

いつの間にか、オレたちは抱きあったままソファの上に横になっていた。

ジッパーに手をかけるまでもなかった。

外では小鳥がないているようだったが、オレは二十分くらい、全く世間を黙殺してしまった。

「帰るぜ」

立ち上ったオレは、何か拍子ぬけして、こうほんやり呟いた。

「私も一緒に行く」

「オレのとこへか?」

「しょわないでよ。警察へ」

「自首する気なのか?」

女はうなずいた。それからいった。

「今日まで自首するのを控えていたわけが、これであなたに分ったでしょう」

そういうと、もう一度オレの首を抱いて、前とは又ちがった舌の動かしかたをした。

オレの方は、これでいいんだけど……。

# 裸女芋虫

――アキエはバスからでた。春子のさっきのポーズがしゃれて見えたので、マネをしてみた。乳房と腰にぐるりとタオルをまとって浴室のドアをあけた。

居間に一歩踏みこんだ。

「あっ!」

声をあげて、胸のタオルが半分落ちた。

# 不浄の森

お蘭は急に緊張した顔になった。妙だ……何かしら神経にピイーンと触るものがある。

下唇を噛んだ。

眉がひそんで考える眼になると、フイにはっと気がついた。

舛――が聞こえて来ない! つい今し方厠に立つまでは、軽く断続して聞こえていた隣室――老女浦風のイビキがぴたり止っている

ソファの上に、白い素肌を光らせた大きな芋虫が、うねうねとうごめいているのだ。

「フ、フミちゃん！」

白い芋虫が、彼女の顔を仰いで悲鳴をあげた。腰にタオルをまとっただけの裸体に、縄がぐるぐると巻きついている。

うしろ手に縛られた春子だ。そばに鳴海が椅子に腰かけて煙草をふかしている。

異常な危険を感じて、アキエは裸も忘れてドアにとびついた。

鍵が掛っている。逃げられない。

「さあ云え。そのフミとは、どんな字を書くんだ！」

鳴海が春子にせまった。

「そんなこと知らないよ！　フミだからフミって呼んでるンだ！」

わめく春子の頬に、ピシリと男の手が鳴った。

「風に美しいって書くのよ。あたしの本名よ。それがどうしたの」

捨てバチになってアキエの風美が云った。

「しゃれた名だな。めったにない名だな。いい名前だ。風美、お前の過去はこの女から聞いたぞ！」

「あたしは何も悪いことなんかしてないよ」

「お前、おれの顔に見覚えがないのか」

「あっ！」

風美の顔色が、サッと変る。

「やっと思いだしたな。ずいぶん探したよ」　―地獄の乳房より―

不吉を誘う暗示だ。

不安――疑惧……ドス黒い翳が、見る見るお蘭の胸一杯に拡がって行った。

こうなるともう、じっとしている女ではない。音もなく、すッと立って、向うの襖を激しく開いていた。

老女浦風の臥床は、もぬけの空であった。

「やられたっ」

相手は想像以上の怪物である。ほんの一瞬の油断――夜中厠へ立った、その僅かな隙に老女浦風を拐って消えたのである。

そんな事ができるだろうか？　お蘭は、まだ半信半疑、おのれの眼を疑って、こすったり、うろうろ見廻したり……しかし、浦風の消失は、夢でも錯覚でもなく、厳然たる事実があった。

お蘭は知らぬ。この時浦風は、大奥裏――不浄の森の中にいた。

江戸城に七つの抜け穴があるとされている。その一つが、この森に隠されているとかで、昼夜を問わず、人の出入は厳禁されているのである。

森であった。ただし――ここに例外が一つある。

将軍家お糞係りの女中がそれで、不浄の森の名の由来である糞穴がこの森の一角に、深々と掘られ、ここには将軍家の糞のみが捨てられる。

汚物といえども、将軍家の体内から排泄される物は、余人のそれとまじえることが許されぬ仕組で、お糞係りの女中で、一々この森まで捨てに来るのであった。

―忍び夜秘帖より―


**飯田豊吉著・異色官能サスペンス「地獄の乳房」を喜多玲子装幀の単行本として、ぜひ御通読ください。暗黒街にまき込まれた美少女の危機、ゲイグイ迫る迫力篇です**

**（定価二五〇円・〒四〇円）**

**本誌に連載された隠密覚書が二冊の単行本になっているのを御存じですか？　島本春雄著「乱れ夜探り」に続いて「忍び夜秘帖」も発売中です！**

**（定価二六〇円・〒四〇円）　発行所あまとりあ社**

# まぼろし侍 破魔暦帖

## 宵越しの金

千加の頭の上で、陽が照っていっぺんに、二人の女の顔を思いだした。
彼女は、ただ、ぶらぶらと歩いていた。一人は、小えんである。
何もかも、千加は、見る眼がたのしかった。もう一人は、一二度行ったことのある黒門町の御医師、井上玄丹の
昨日までとはくらべものにならないくらいにだ。娘のお蔦の顔だった。
(あの男は、だれのものでもない……、あたしの男さ)千加は、あたりを見た。
なんの目的もなく、歩くということは、千加には珍らしかった。顔(今日からはあたしがあの男を飼うんだ)
を合わし、すれ違う男女が、昨日までは全部カモだったのだ。すると、道行く人々が、金を運んでいるカモに見えて来た。
カモが、ただの人間になって歩いているのに、千加は会い、すれ違(一体どこをお千加さんは歩いてるんだい……)
い、去っていく後姿を見送った。そこは、浅川阿部川町であった。
そうだ……道理で、線香くさい人間が多いと思った。
千加は、道の真ン中で立ちどまった。右へ歩けば寺町だ。東本願寺をはじめ、数え切れないほどに、大小
大道破魔之介が、素浪人だったのに気がついたのであさまざまの寺が並んでいるのだ。
る。千加は、引っ返そうかと思った。振り返ると、御書院番の組屋敷から出て来たらしい侍達が歩いてくるので、千加はそのまま歩き出した。
(一体、今までだれがあの男を喰わしていたんだろう?)
そこは、商家の裏であった。
千加は、いて、千加は、おや? と足を停めた。

そこに、下女風の娘が立っていて、千加に気づいて、ハッと顔色を変えたのだ。

締めてある戸をあけて、姿を消すと、中からぴしゃりと締めた。

千加は苦笑した。これは自分に関係があることではないと思った。顔見知りの女ではなかったし、そうこの道を歩いたことはない。

千加は歩きだした。

寺が、道の向う側を、ずっと横に占領していた。

どこかの僧が、歩いてくる。

千加はくるりと後戻りした。

坊主に会って、後戻りする。また千加はるで何かのようだとまた千加は苦笑した。

さっきの、店の裏口に出た。

ふと、さっきピシャリと締められた戸口を見た。

何気なく歩き過ぎようとして、千加の足が止った。

戸が締っている。が、その戸と柱の合せ目の上に、何やら刺さっている。

それが、何であるかわかると、千加は、

変だわと思った。

かんざしだった。珊瑚珠がついている。その珠を貫いているのは銀脚だった。

何のために……

ふと、千加は後を振り返った。

やぞうをふところにこしらえた、堅気でないらしい男が、じっと、千加を見つめて立っていた。

千加は、素知らぬ顔をして歩きだした。

(場違いを歩くもんじゃあないやね)

男の顔が、千加の気に入らなかったのだ。

いつもの千加なら、ちょっとひと仕事したかもしれなかった。もちろん、大した金をふところにおさめている男ではなかった。ただ、その男が気がついたら間抜けな顔をさせてやればいいのだ。

しかし、千加は、そんな気が起らなかった。自分でも不思議な気持だった。

(女って、男に体ごと惚れると、こうも変っちゃうもんなのかしら)

急に、家に残して来た破魔之介が気になって来たのだ。

(急ごう、お腹を空かしてどこかへ消えてなくなるならないものでもない)

千加は、自分もひどく空腹をおぼえていた。

戻ると、まだ雨戸は締まっている。

千加は、ガラガラと雨戸を開け放った。

「朝から姐御は散歩かな」

破魔之介は、寝足りた恰好で、千加の煙管で煙草を吸っていた。

「散歩ってほどでもないけど」

千加は、鏡台に向って化粧にかかった。

それから、御飯の支度をするつもりだ。

破魔之介は、その千加を見ていて、鏡台からはなれた千加が、いきなり袖をたくし上げて、紅のしごきで襷をしたので、ニヤニヤ笑った。

「襷十字に綾なして、尻を端折って……」

「馬鹿！　裾は端折りはしないよ」

「そうか、私はまたてっきりそうすると思ったのだが」

「これから御飯をつくるんだよ」

「いちいち亭主にこれから飯の支度をすると断る女房があるのかな」

うるさい……とどなろうと思ったが、千加は、破魔之介の言葉についニンマリとしてしまった。

——女房だってさ……、しっかりしなよお千加さん、あんたのことさ……

それから見様見真似で、千加は御飯の支度をした。

どうやら、たべられる御飯ができたのに千加は満足だ。

「御飯だよ、顔を洗っておいで」

「大丈夫かな？」

破魔之介は、ニヤニヤ笑いながら蒲団から起き上った。

「何がさ」

と、千加は、その破魔之介を見ながら、きっと眦りに力が入る。

「ご馳走になるのはありがたいが、あとで腹をこわさぬかと心配していたのだ」

破魔之介は、しゃあしゃあといって、帯をしめている。

「死ぬんならいっしょじゃあないか」

「ほう、ばかに大げさなことになったな。飯を喰うたびに死んでりゃあ大変だ」

★小ぬか雨の庭先で雪見灯籠にくくられた美女の前に怒り狂う母娘！千加は息を呑んだ！

破魔之介は千加にいうと、そこにある手拭いをつかんで、路地へ出た。

共同井戸には、近所のお内儀さんが二人ばかり洗濯していたが、破魔之介を見ると、場所をゆずってくれた。

「お早よう」

と、破魔之介は声をかけて、提げて来た手桶に水を汲んで顔を洗う。

お内儀さんは、顔を見合せて、その破魔之介が手桶に水をいっぱいにしてぶら提げて戻る後姿を見送った。

「さて、ご馳走になるかな」

破魔之介は、膳の前にすわる。

無言で、千加は御飯を盛る。まだ怒っているのだ。

破魔之介も、黙ったまま箸をうごかした。

「何も、ろくなものもなくて気の毒だけど」

「結構だ。喰いつけないものを出されるよりこの位がちょうどいい。あまり美味いものを出されると、今朝方、どこへお千加さんが散歩に出かけたか気になるからな」

「まさか、あんたを寝かしといて稼ぎに行きやあしないやね」

「当分この位のご馳走で結構だ」

千加はそういう破魔之介を見て、本当にいつもこんなものを喰わして置いたら、この男はこの家が厭になってしまうに違いないと思っている。しかし、ふところには稼がないとこの位の支度もそうそうつづけていられないのだ。千加は宵越しの金を持たない女であった。

## 三人組

——深沈とふける四ツ半過ぎである。阿部川町の油屋、叶屋の裏口に、三つの影が動いた。塀はもう飛び越えたのである。

一人が、裏戸に手をかける。簡単にゴトリとうごいた。物音はそれっきり、あとはただ影の如くに三人の男の姿が中へ消えた。

無言で押し入った三人組は、まるで屋内の案内にくわしいように、足音も立てずに、まず奉公人の寝ている部屋に押し込んだ。

乱暴に枕を蹴っ飛ばす。びっくりして眼をこすった小僧の目の前に匕首がキラリとひらめいて、

「騒ぐな！」

と、ドスのきいた低い声。

行灯に火がともっていて、盗っ人かぶりの男が三人、と見ると、出しかけた声もひっ込んだらしい。そいつの口へそこらにある布を突っ込んで、猿ぐつわをはめて蹴ころがす。待ってた奴が後手に捻じ上げてくくり上げる。

と、次の奴の枕を足で蹴っ飛ばす。

こうして次々と、四人の店の者を声の出ぬように猿ぐつわをはめて座敷の真ン中に背中合せにまとめといて兵児帯で結び合せた。

一人が、そいつらの番に残った。

あとの二人が奥へ押し込んで行く。
ほどなく、寝間着姿の主人夫婦が、背中を七首で脅かされながら、出て来た。どちらも帯もしめぬ前を両手で合せて、奉公人に眼で迎えられて、主人の権威も誇りもなくなっている。
「坐れ！」
一人の男が声を出した。
へなへなと、主人夫婦はひざをつく。
「縛るのか」
「そうさな。やっぱりふん縛ったほうがいいだろうな」
泥棒同士の会話だ。
その会話に、お内儀はハッと顔を上げた。
「お願いです。しばる前にどんな紐でもいいですから腰にしめさせてください……」
裸に一枚着ただけの寝間着の前を、必要以上に左右の手で合せつけて哀願した。
「冗談じゃねえや……俺達がほどいたんならともかく、そいつはそこにふるえている旦ツクかてめえの手でいそいそとほどいたんだろう。何も今さらそれを気にすることもねえだろう……」
「お願いです……！」
「両手を合せて俺達を拝んで見ろよ」
うしろにいた奴が、ひざでドンとお内儀の背中を突いた。
ヒェーッと、胸を合せていた手をはなして前に手をつく。
「とにかくこいつは先に縛っちまおうか」
亭主のほうを、奉公人と同じように後手にくくって猿ぐつわを噛まして蹴ころがした。
「さあ、お前の番だぜ」
嘲笑いながら、ふるえて胸を掻き合せているお内儀の右手を、ぐいとつかみ上げた。
「あれ……」
「こっちの手も上げる〳〵
左手もつかみ上げて、頭の上でぐるぐるっと両手首をくくってしまった。

「金はどこへしまってあるんだ」
「お金は上げますからほどいてください……」
「金はどこだと聞いてるんだ」
「立たせろ。案内させるんだ」
「立て！」
「ヒイッ！」
お内儀は、両手をつかまれて無理に立たせられると、悲鳴を上げた。

寝間着の前があけっぴろげになって、白いむっちりした胸のあたりがあらく呼吸している。

「ここは奉公人の部屋だ。金はあるはずはねえ」

「歩かせろ、金箱がしまってあるはずだ。油のほかにたまにはその体で寺町の坊主どもに内職もしやがったろう」

「歩くんだ、お内儀さん。明りはうしろから持ってってやるから、いくらかその恰好でも歩きいいだろう」

また一人をあとに残して、他の一人が行灯を持ち、一人がお内儀の後手の縄尻をつかんで廊下へ出た。

ほどなく、元の男達がふン縛られて転がされている部屋に、金包みを持って、前ひろげのお内儀を先にして戻って来た。

金包みを、畳の上に置くと、

「さて――」

と、ふるえているお内儀の顔を見て、ニヤリと微笑したどうやら、その男が三人組の頭株らしい。

「女を出してもらおうか。こういったからってお前を気に喰わねえとはいわねえよ。ただこっちは三人なんだからな」

「台所に寝てます……」

お内儀はふるえた声でいった。

「そうか、お前達、台所へ行ってしょっぴいて来い」

その男を残して、他の二人が部屋を出ていく。

すぐと、二人の女を追い立てて来た。七首に脅されて、二人とも声が出ないらしかった。

頭株の男が、お内儀の顔を睨んでいった。

「この家には娘がたしかいるはずだが、どこに寝てるんだ」
「いやあしません、娘なんか……」
「かくすな！　親に似ねえといいたいが、お前に似た美しい娘が一人いると聞いているんだぜ」
そいつは、横坐りにしているお内儀の前にひざをついた。
「かくすなってことよ」
「……」
「どこにいる！」
ぐいぐい、崩折れようとする上体を引起し、腕をつかんだ手に力を入れた。
「ひ、ひとり……」
「いるんだろう……」
「その娘です。右側の……」
お内儀は、眼の前にすわって、両手を背中に捻じ上げられている女中の一人を眼で指していった。
「これが……？」
「そうなんです。嘘か本当か、左側の娘にきいてください……」
「おかしな話だ。娘を女中同様に扱ってるのか……おい、そっちの娘、瞬りの娘はこのお内儀がいってるように確かに主人の娘か……」
「そうです……」
女中が、ふるえる声で返事した。
頭株は、じろりと、お内儀に眼を戻した。
「いいんだな、この娘ならなぶりものにしても」
「ええ……」
お内儀は、腕をつかんだ手に力が入ったのに、あとの半分を呑み込んだ。
「馬鹿野郎！」
男の手が、お内儀の顔をはげしく殴った。
「あっ……」
「この娘はてめえの本当の娘じゃあねえんだ。先妻の娘だってことはこっちはわかってるんだ。てめえの娘なら困るが、先妻の娘ならいいようになぶりものにしてもいいなぞと、よくもそう不人情なことがいえるな。てめえの娘はやわらけえものでつつんで大事にしてやがって家探ししたってきっと見つけ出して、いいように玩具にしてやるからそう思え」
言葉が終ったとたんに、男の足がお内儀の肩を蹴りつけた。
「あっ……」
と、お内儀はぶざまに仰向けにひっくり返った。
「おい、もう一人の娘はどこにかくれてるんだ」
「し、しりません……」
女中が、ふるえて答えた。
「さあ、早くいわねえと裸にひんむくぜ」
「あの……」
と、先妻の娘が、おずおずと顔を上げた。
「何だ、どこにお嬢さまはかくれているんだ。お前の眼の前でその娘に悲鳴をあげさせて、今まで同じ姉妹でいながら下女同様にいじめられていた仇を俺が取ってやるからさっさといえ」
「いえ、かんにんしてやっておくんなさい。かわりにあたしの体は……」
「なぐさんでいいけど、もう一人の娘はかんべんしろっていうんだな……」

！　おう、どこまで継母に苛め抜かれたんだ、お前さんは……」

そこで、隣りの女中を見つめた。

「どこにもう一人の娘は寝てるんだ」

「し、しりません……」

「どうしても俺は聞き出すぜ。かまわねえからそいつを素っ裸にひんむけ」

あれーっと、声を上げたが、すぐ口につめものされて、口をしばられた。寝間着の細帯を解き、くるりと裾から逆に剝ぐと、みごとな腰から背中へと、かんたんにむき卵となった。

あばれるのを、背中に捻じ上げて両手首をくくりつけた。

「さあいえ！　二度ともういわねえぜ。返事をする気がありゃあ首を縦に振れ。ちょっとでも間を置けば、腰のものもひんむくぞ。さあ、いうかいわねえか」

こくりと、いい終らぬうちに女中は首を縦にうなずいた。

猿ぐつわを、男がほどく。

「どこだ」

「天井裏です」

「畜生！　そんなかくし部屋があったのか。どこから行くのか、先に立って案内しろ」

素っ裸の女中を、追い立てるようにして、

「二人はここで待ってるがいいぜ」

## 見せ物灯籠

ほどなく、長襦袢を寝間着がわりにした、美しい娘が、小突かれながら入って来た。

「この娘だな、このお内儀にできた娘は」

こくんと、先妻の娘のおたきはうなずいた。

「よく見てるんだ。それからそこに固まっている男達もな。どうせこの娘にあごでさんざ使われたんだろう。日頃のうらみをすーっと消してやる。さあ裸になるんだ」

ドンと突き飛ばした。

「かんにんしてやってくださいまし……」

「いけねえ」

おたきの願いをすぐと断って、

「裸になれ」

前かがみにうずくまっているのを仰向けに引き倒した。これも寝てるところをこの騒ぎに蒲団をかぶってふるえていたのをつれて来られたのだからかんたんだ。

「お前と仲好くさせてやるぜ」

後手に縛って、母親と背中合せにつないだ。

「かんにんして……」

と、恐ろしさと恥かしさで、娘のほうはふるえて哀願したが、母親のほうはもそもそ動くだけだ。とうに口はきけないように猿ぐつわがしてある。

「おう、可愛い声を出すじゃあないか……」

二人の横に膝をついて、つと両手を伸ばした。

「うう！」

「かんにん……！」

と、つながれた二つの裸形が、はげしくもがく……

「さあ、もういいだろう」
と、男は、立ち上ると、
「その娘も後手にくくれ」
「合点」
おたきは、どうやらいま見せられたおそろしさから、抵抗することなくおとなしく後手にくくられ、猿ぐつわを噛ませられた。
母親を結んでいる紐を解くと、ぐいと苦しい息をしている娘のほうの体を抱き、
「お前達もここじゃあ何がなんでも落ちつけめえ、その内儀さんと、そっちの女中をつれて他の座敷を借りようぜ」
そのまま、三人は、それぞれ女を抱えてその部屋を出ていった。
それからちょっとの間が過ぎた。
やがて、三人の男が、その部屋へ戻ってくる。
三人の女はつれて来ない。
「いつもこんな部屋や台所にいたんじゃあ息もつまるだろう、奥の一番いい座敷に好きなだけ坐らせてやるぜ」
主人と、四人の奉公人と、女中がわりにされている先妻のおたきがふるえながら追い立てられて奥の主人夫婦の座敷へ入れられ、それぞれに一本の帯につながれ、その先を柱にしばられた。
行灯はなかった。
だが雨戸が開け放たれていた。ぴたりと締めきってある障子を通して、にぶい明りがさしていたのだ。
「さあ、俺達は貰うものは全部貰っちまったんだ。ここで消えてなくなるが、朝になりゃ近所の者が自由にしてくれるだろう。それまで退屈しのぎだけはさせといてやるぜ……」
さらりと、庭に面している障子をあけた。
せまい庭だが、よく整っている。
六人の男女は、自然に庭を見て、あっと後手にしばられた体をうごかした。
雪見灯籠を左右からはさんで、白いうごくものが立っている。
お内儀と、その娘のおこよだった。白い裸体のまま、頭上に伸ばした手が結ばれて、そこの灯籠の上でくくってあるものと見える。
裸体は反り身になっている。無理して足先が地につく灯籠の高さがそうさせるのである。
それに、どいつの悪戯か、灯籠には灯が入っている。
小さな焔が、チロチロと燃え立っている。
いつか、空には黒い雲が出ていて、細い雨脚が、音もなく、あたりを濡らしはじめていた……。

## お千加探索

泥棒がいい置いた通り、翌日、戸が開かぬ油屋には、近所の人が昼近くなってやっとこの異変に気づき、異変はそれから一刻のうちには人の耳から入って口からまた世間へ噂されていった。
巾着切りの千加は、それを耳にすると、すぐ家へ戻って行ったが、破魔之介の姿はどこへ出かけたか見えなかった。
千加は、昨日の朝、といってもうだいぶ陽が高くなってだが、その泥棒が入った油屋の裏を通って見て、裏口で娘が立っていたのも見たし、それからすぐ引っ返す時に、そこの戸と柱の間に銀かんざしが珊瑚の玉をとめてはさんであったのを見たのだ。

図

「――まるでね、あの先妻の娘に同情した泥棒が、あの母娘に思い知らすように押入ったみたいだった……」

「それによ、いつもは厳重な戸締りが、ちょうどあの夜はこわれちまって、まあ一晩ぐらいは大丈夫だろう、明日になったら錠前屋に頼もう、こう思ってたところへ運よく押入られたらしいんだ……」

「運よくじゃああるめえ……」

「だってお前、あの娘のおこよ、それにあとで女中部屋で見つかった女中にせよ、どういう因果か体はいいし、顔は美しいときやがるぜ……」

そんな立話が千加の耳に入ったのだ

――あの時の娘は本物の女中だったかしら……それともあれが先妻の娘かな……

千加は、なんとなく、あの珊瑚の珠をつけた銀かんざしが、戸と柱の間にはさまっていたのがおかしいと思った。

そこから賊が押し込んだのなら、あれはここの錠前をこわして置いたからと、中の誰かが手引きした疑いがあると思う。

――店の者かな……女中かな……

とにかく行って見ようと、千加は、出かけた。今にも降りそうだから傘は持っていく。

阿部川町は、さして遠くない。

油屋は、休業だった。

裏口へ廻る。昨日はそこの塀の木戸が開いていたから裏口が見えたが、しまっているから中は見えない。

道行く人が、その千加を横眼で見て通り過ぎていく。

「――いい女だな、これがあのおこよかもしれねえ、内儀さんのほうだろう」

「冗談じゃあねえ……」

その言葉が千加の耳に入ったからたまらない。

いきなり、くるりとそっちを向いた。
「トンチキッ――」
「いけねえ、意地の強い内儀さんだ……」
そのまま、駈け足で逃げてしまった。
止んでいた小雨が、また霧のように降りはじめて来た。
千加は傘をひろげた。が、すぐすぼめて、そこの木戸を押して見た。
うまい工合に、内側へ開いた。
千加は、中へ入って横木をしめた。
さて、はいってしまって、千加はこれからどうしようと思った。
泥棒に手籠めされた油屋の内儀さんに間違えられるのが癪で身をかくしたのだが、そこの裏口がぴっちり締まっているのを見て、手をかけて錠前がかかってるのを調べてしまうと用はないのである。
ついでだから、ここのお内儀さんの顔を見てあたしと似てるかどうか調べてやろうか……
千加は手にした傘を見えない物蔭にかくして、ふところから手拭いを出すと姐さんかぶりにした。
細いぬか雨が、降りかかるのだ。
大胆に、千加は奥へ歩いて行った。
その足がぎくりと停った。
何か、ヒェーッといったような女の悲鳴が耳に聞えたようなのである。
千加は、物かげをえらんで、悲鳴がしたほうへ近づいていった。
家は、どこも障子がぴたりと締まってあるのに、一箇所だけ、廊下の障子が二枚、開いている所がある。
そこに、店の者らしい男の顔が並んでいる。みんなは、前を見ている。
はて、何を見てるのだろうかと、千加はそっちの方を見た。植木が邪魔をして見通せない。
と――、
「ヒェーッ……」
と、女の悲鳴が、今度ははっきりと千加の耳に聞えた。
つづいて、何かを打っているような音……
千加は、その悲鳴がしたほうへ忍んだ。廊下の男達は、悲鳴が起っているほうへ眼を注いでいるから、危険はない。
あれだな……と千加は、雪見灯籠の頭が見えたのに、噂話を思い出した。
油屋の内儀さんとその娘が、素っ裸にしばりつけられた雪見灯籠だ。
「――ピシリッ……」
「ううう……！」
その物音と、呻き声が、そこからした。
千加は、またすすんで、あっと顔色を変えた。
雪見灯籠に、一人の半裸の娘が、両手を大きくひろげてしばりつけられている。
その前に、女が二人、てんでに物差しをつかんでいる。
「――さあ、どうして強情なんだろうね……お前が昨夜の泥棒を手引きしたのはわかってるんだ。それだから、あの男達はお前には手もつけないで帰ったんだよ……」
「白状しちゃいなさいよ」
そういった娘が、手に持っていた物差しで、雪見灯籠にしばられている裸の娘の横腹をピシリと叩いた。

物差しだから、音ほど痛くはないだろうが、裸の娘にはそれ以上、店の男達に見物されている羞恥があったろうし、小ぬか雨は、頭から水をぶっかけられたあとのほてりを覚えないで、じわじわいつまでも冷たく裸体を冷やすのが辛いだろうと、千加は思う。

打ち手は、奉公人の前でこんなひどいことができるんだから、主人のお内儀と、実の娘に違いない。

どちらもなかなか美しい顔をしているのだ。それが、さも憎らしそうに、雪見灯籠にしばりつけられて自由のきかぬ娘を責めているのだ。

が、責められている娘も、いい体をしていたし、これがまた物差しを持っている娘に劣らず美しい顔をしている。

しかし、男を知っている体だなと、千加はすぐ気がついた。それに昨日の朝、裏口で見かけた娘である。

珊瑚の珠のついた銀足のかんざしをしてるかとよく見たが、たとえあのかんざしが、裸の娘の所有だとしても、こういじめられていたんでは、とうにあたりに落ち飛んでいるに違いない。

また、ピシリ、ピシリと、交互に裸の娘に物差しが当てられた。

小雨に濡れた裸体は、すっかりしめって水気を持っているから、にぶいが音はあざやかにひびく。

——どうしよう?

千加は考えた。今までの千加なら飛び込んで、はげしい啖呵をあの裸の娘を折檻している母娘に浴せていただろうが、その千加がふと考えたのだ。

千加の胸に、破魔之介の顔がさっきから浮かんでいたのだ。

千加ほどの女も、体で男の情を知ると、いつのまにか、必要以上に男を頼りにするものらしい。

——そうだ、これは女のあたしが出しやばる幕じゃあないや……。

千加は、そろそろと後戻りした。

その耳に、雨に濡れそぼれた娘の肌を打つ音がひびき、切れぎれに上げる娘の悲鳴が聞える。

元の裏木戸まで千加は戻った。かくして置いた傘を持って、木戸の横木を抜いて塀の外へ出る。

雨は、細かく降りつづいている。

千加は傘をさした。頭にかぶった手拭いを取って、濡れた肩や袖を拭って、ほっと歩き出そうとした。

そして、千加はぎくりとする。

すいと後から傘の内へ入った男が、

「静かにするんだな、姐さん……」

ヒヤリと、匕首をつきつけられたような、ドスのきいた低い声だ。

「お前さんは……」

「ご免よ」

前から、別の男がすっと傘の内へ入った男が、

「黙って歩くんだ。よそ見には半端な相合傘に見えるぜ……」

千加を真ン中にはさんで、男達は歩き出した。本当に、抜身の匕首が、千加の横っ腹にチョイチョイと当っている……。

## 油屋火事

「はてな?」

と、破魔之介は、吸いあきた莨の煙を吐いて、千加の長煙管を放り

出すと、半分あくびをした。
ビショビショと、板庇を、雨が叩いていて、身も心ものうくなってくるようだ。
いくらなんでも、千加の帰りが遅いようだと、心配になって来たのだ。
ドンドン、誰か表の格子戸を叩いている音がする。
「用があったら開けてもらいたい。そのかわりお千加は留守だぞ」
「ご免よ」
千加は留守だと聞えたはずである。
破魔之介は、立って玄関へ出て行った。暗いから行灯を提げて、その明りで土間に立っている男を見た。
見知らぬ男である。
眼が鋭く光る男だと破魔之介は思った。
――千加の同類の眼だな、これは……。

「千加は留守だぞ」
「へい、どこへ行ったか知ってますかい？」
「知らぬ」
「油屋の昨夜の騒動は聞いたでしょうな……」
「泥棒が入ったという話かな」
「そうですよ。三人組。美しい内儀さんと娘をなぶりものにしたって話で……」
ニヤリと笑った。
「そうだって話だな……」
破魔之介は、どうしてこの男がそんなことを話すのか、わからなかった。
「手引きをしたのは先妻の娘のおたきって娘でね。この雨が降るんで油屋は戸を締めていて、奥庭に幽霊が出てるって妙な噂ですぜ。幽霊ってのはその娘さ。雨が降るのに庭の雪見灯籠に素っ裸でしばられて、おふくろと腹違いの妹に折檻されての悲鳴が切れぎれに塀の外へ洩れたってのが真相です……」
「待て……それが何か千加に関係があるのか？」
「何ね、あっしはその油屋の近所でお千加の阿魔が厭な男達にはさまれて相合傘で歩かされているのを見たんで……」
「お前さんは、千加の何だな……」
「今はただの仲間さあね……」
「ただの……な……」
破魔之介は、男の顔を見て微笑した。
「で、友達甲斐にどこかへ千加が連れて行かれたか見

届けてくれたか……」

「旦那、あっしはそうするほど千加には恩は受けてねえんですぜ」

「ありがとう、それだけで沢山だ」

「あのあんばいじゃあ、お千加の阿魔は今頃はいい夢を見てるかもしれねえ……」

破魔之介は、男をほっといて奥へ入った。大小を腰に落すと、ふっと、畳に置いた行灯の火を吹き消した。

玄関には男はもう見えない。

――千加を欲しがっていた男だ……妬いて妙なことを知らせに来て腹癒せにしたかったんだろう……。

魔破之介も、油屋の件は知っていた。傘をさして、阿部川町へ向って歩いた。ショボショボ、雨は降りつづいている。その黒い空に、いきなりパッと、破魔之介の歩いて行く先に真っ赤な火の手が上った。

「――火事だ……！」

破魔之介は、思わず駈け出している。

「――火事だア！……火事だア――」

大声を上げて、雨の降る道を跣足で駈けて行く男がある。

ジャンジャン――と、半鐘が鳴りはじめた。

破魔之介は、やっと火事の現場に駈けつけた。

幸い、風がなく、小雨が降ってるから、大火事にはならずにすむらしい。

黒い煙りが、モウモウと立ちのぼって、油の燃える臭気がこもっている。

火元は、昨夜泥棒に見舞われた油屋だった。

「――どいたどいた、どいたッ――」

火消人足が、廻りを囲んで、附近の家並の屋根に上り始めている。

その燃えている油屋の前に、五六人、これは油屋の奉公人らしい影がふるえていた。

その中の一人の女の影が、あたりを見ると、ついとできた人垣を抜けて、一度、燃えている油屋を見つめて、駈けつける野次馬と逆に火事場から遠のいて行った。

「――おっと、待ってもらいたいな――」

娘は、ぎょっと立ち止った。

その上に、さしていた傘をさしかけて、微笑したのは破魔之介だった。

「――雪見灯籠を抱いてさんざ濡れたあとでまた雨に当たるのは毒だ……」

娘は無言でいた。

「どうやら店の者は助かったようだが、奥で戸締りをし過ぎて寝た親娘三人は焼け死んだらしいな……」

「――お侍さんは……あたしが火つけをしたというんですか……」

「何もいわぬ。人づてに聞いた話でも、なかなかひどい目に合ってたそうじゃあないか。火をつけたとしても私はとがめはせぬ……」

「どこへつれて行くんです」

「行き場があるのかな……？　あんなにされてもあの店を出て行かなかったのを見かけなかったかな……裏の方で……美しい女だ、まだ顔は洗いっぱなしの化粧はしてなかったはずだが……男がいるのかな……たとえば、昨夜お前の店へ入った泥棒の内の一人とか……」

「――しりません……」

「いえ……そんな……」

「その女だよ、今、お前が思い出した女だ……」

「なければ一緒に来るがいい。幸い、今夜私と一緒にいる女が消えてな。多分、蒲団も、押入れの中には二組はあるはずだ……」

破魔之介は微笑した。娘の顔が、そう語ったのだ。

逃げられぬと、観念したらしい娘は、破魔之介と一つ傘に入って、千加の家まで来た。

「しりません……それよか、あたしをどうする気なんです……」

破魔之介は、娘を奥へ上げて、行灯に火をつけた。

「あいにくとこの家には庭はあっても雪見灯籠はないのさ」

「――濡れた着物が気持悪かったら、そこらのやつと着換えてもいいぞ」

ハッと、娘の顔色が変った。

衣桁には、千加の着物が、派手な赤い裏を見せて無造作にかかっている。

「案内してもらおうか、厭というなら何も庭に出すまでもない。その柱にしばりつけても結構こっちは愉しめるというもんだ……」

「いえ……」

破魔之介は娘に構わず、酒の支度をする。

「せっかくだ、酌をしてもらおうかな」

娘は無言で酌をする。

それから、破魔之介も無言で、盃を空けては娘に酌をさせて酒を呑んだ。

――はて？……だれも尋ねて来ぬとすると、俺がこの娘をここへ連れて来たのを見られなかったのかな……。

それなら、こっちから出掛けねばならぬ。

「昨日の昼前だ。お前は年の頃なら二十五六の女がぶらぶら散歩に出たのを見かけなかったかな……裏の方で……美しい女だ、まだ顔は洗いっぱなしの化粧はしてなかったはずだが……」

「――しりません……」

「その女だよ、今、お前が思い出した女だ……」

破魔之介は微笑した。娘の顔が、そう語ったのだ。

「しりません……それよか、あたしをどうする気なんです……」

「あいにくとこの家には庭はあっても雪見灯籠はないのさ」

ハッと、娘の顔色が変った。

「案内してもらおうか、厭というなら何も庭に出すまでもない。その柱にしばりつけても結構こっちは愉しめるというもんだ……」

## 踊らされる足

――その頃……

千加は、後手に縛り上げられた姿で、三人の男に囲まれて、しきり

に悪態を吐きつけていた。
「――こんな所に匕首で脅して連れ込みやがって、どうしよってんだよ……ちくしょうッ……」
「どうしようかって、そいつをさっきから考えてるんだ」
「お前さんだね、昨日の昼前、油屋の裏口の所で行き会ったのは…」
「そうだ、だからおいそれとお前を帰すわけにはいかねんだよ」
「ぐるになりやがって油屋へ押し込んだのはお前達なんだろう…！」
「やっぱりそう思うかね」
「ほかに思えないようなことをしやがって……」
「おたきはさんざあの母娘には下女がわりにいじめられたんだ、あの位のことはやっても何も罰は当るまい……」
「お前達はさんざいいことをして、罰は当らなかった……だけど、あの娘はこの雨の降るのに、昨夜お前たちがやったように、あの雪見灯籠に裸にしばりつけられて、さんざぶたれて悲鳴をあげてたんだ…」
「しってるぜ、そいつは……」
「えっ？」
千加は、びっくりしてその男の顔を見つめた。
「あのままずらかっちゃあいかにも俺達と示し合せたように見える。だが、あの位の折檻には命は落すまい……かえって近所の人達は、また無理難題をあの娘に母娘でつけて苛めてると同情するんだ。それからこっちへ逃げて来てもおそくはないんだ」
千加は、笑いながらいう男を睨みつけて、これは一筋縄ではいかない男だと、おそろしくなった。
「どうだい、おとなしく酒の酌でもする気になったかい……」
「だれが……」
「両手の縄を解かなきゃあ、いつまでもそのままで威張っていられると思うと間違いだぜ。このまま殺してしまうのももったいねえ体をしてると踏んでるんだからな」
「ふン、どうせ下司野郎が三匹揃ってるんだ。着物はひんむくは、あんまり素晴らしい裸体なのに、そんな時になって眼がつぶれないように気をつけるがいいんだ――」
「そう急がさねえでも希み通りにしてやるぜ。昨夜は女も三人いたが、今夜はお前一人だ。裸にひんむいてから順番争いするのも何んだから今の中にくじでも引いて決めとくぜ」
「畜生！　本当にあたしをなぐさむつもりかい！　前のあたしならみごとにこのまま死んでやるんだが、今は大道破魔之介という色男ができたんだ。死ねないし、かといってお前達のなぐさみものになるのもお断りだよ――」
千加はそう叫んだが、もちろん、このままこの下司な獣達から無事に自由にされるとは思えないのだ。
やっぱり舌を噛んで死んじまおうかと本気で考えているのだ。
しかし、死ぬのにはやっぱり未練がある千加だ。
――何で、破魔之介はあん時留守だったんだろう……。
そう考え、もしあの時、破魔之介が柳橋の小えんを尋ねるか、黒門町の井上玄丹の娘に会いに行っていたんなら、死ぬにも死ねないと千加は思う。
「――そろそろおたきも来る頃だが、すこしおそいようだな」
盃を、ぐいとあけると、
「それまでこの女をすこし愉しむか……」
「兄貴、おたきさんが来るってのに……」

「早合点するな、さんざっぱら好き放題に悪たれを吐かしたんだ。今度はこの女の口からこっちで愉しい声を喚いてもらうのさ。その女から細紐を二本ひっこぬけ」

「よしきた」

「ちくしょう……」

と千加は身をもがく。

「今は裸に剝かねえから心配するな」

それでも、細紐を二本、腰からひっこ抜かれると、ばかに頼りなくなるのが女である。

「さあ、そいつの先でこの女の足首をしばるんだ。別々にだぜ」

「あっ、何をしやがるんだ……！」

「酒の肴にちっとばかり愉しむんだ。どうだ、しばったか」

「しばった」

「女を仰向けに引き倒せ！」

あっと、千加の体が仰向けに押し倒される。あわてて起き直そうとするのを、

「おい、そっちの紐を引っぱるんだ」

片足にくくった細紐をひかれて、千加は悲鳴をあげてまた倒れた。

「ただ引っぱりっ放しじゃあおもしろくねえ。適当に阿魔の足が踊るように引っぱるんだ」

千加は、何をされるのかわかると、頭の中だけでなく、体全体がカーッとなった。

起き上ろうとすると、左右の足首にしばった紐を、まるで大きな魚でも鉤の先に引っかけたように拍子を取って引っ張るのだ。帯は解かれてないが、紐を二本ひっこ抜かれている。こんなことを何度か繰り返されていれば、着てるものは腰のあたりまでまくり上ってしまうだろう。

それでも、起き上らなければならない。

「——ちきしょうッ——、ちきしょう——」

千加は何とか、せめて俯つ伏せになりたいと思う。

「どうだ、すこしイキがいいようだが」

紐をゆるめて、千加が起き上りかけると、意地悪く足首にしばった紐を引っぱる。いっぺんにひどく引っぱらないから、何度も千加は起き上ろうと努力するし、そのたびに、どうと裾を乱して仰向けにひっくり返り、だんだん着物がくずれて太股のあたりまで神秘めいた白さをあらわにする。

その時——。

その座敷の締め切ってある襖が一寸ばかり音もなく開いた。

もちろん、羞恥地獄の千加は気づかず、この美しい年増盛りの女をなぶっている男達も気づかない。

サッと、その襖が大きく左右にひらいた。そのとたんに、縄が蛇のようにそこの欄間に飛ぶ。

あッと、男達が気づいた時、後手にしばられた娘が首に縄の輪をかけられて、ううっと今にも窒息しそうな声をあげ、背伸びした。

「——どうした、この娘は首を吊られて死ぬが黙って見物をきめ込むか——」

破魔之介は、手に持った縄尻を引きつゆるめつ、ニヤッと男達を見廻して微突した。

「うう——ッ」

と、おたきは反り身に爪先立って、悲鳴を上げた。

次号予告

# まぼろし侍破魔暦第六話

## 黄金女仏

黒木忍

破魔之介ゆかりの女達が奪われ柔肌に耐えがたい辱かしめを受けているさからえば黒髪は燃え上るだろう…破邪の士知るや？何者の仕業か？

「お前だ、この娘の男は……、黙っててていいのかな」

破魔之介にいわれた男は、

「おい、この阿魔の紐を解け」「ついでに両手を自由にしてもらおう」

破魔之介も、おたきの首の縄をはずして、後手の縄目を解く。

「――お前さん……！」

千加が叫びながら破魔之介に抱きつくのを見て、破魔之介の手はおたきをぐいと突き飛ばしていた。

「――畜生！　生かして返すな！」

だっと、破魔之介と千加を匕首が取り囲む。

こんな男達は簡単だった。破魔之介は三人の男の右腕を仲好く折ると足許に呻かして置いて、

「おたきといったな、どうせ心底からその男に惚れちゃあいまい。油屋から奪わせた金で後は死んだ三人の墓でも立ててやったらどうだ」

破魔之介は、ピシャリそこを襖を締めて、

「千加、ちゃんと帯をしめろよ」

「どこへ行っていたんだよ、柳橋か黒門町へ行ったんなら承知しないから……」

千加は、自分の体を邪険に扱って、いったん解き放した繻子の帯をシュッシュッシュッと結び直しながら、きかぬ気の眼が破魔之介の顔を睨んだ。

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げ書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者の為に小部数取り揃えてあります。（二〇八頁―二一三頁を御覧下さい）既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録をおのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって〝裏窓で見た、目録送れ〟とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛御申込になれば無料ですぐ送ります。

◇直接購読を御希望の方は、三ケ月分・三百六十円、又は六ケ月分・七百二十円を本社営業部宛にお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。（送料小社負担）

◇その場合は、御送金と同時に何月号より何月号までとハッキリ御指定下さい。

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は、書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えします。

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。

# 原稿募集

◉小説・読物＝三十枚～四十枚程度
他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。

◉アブチック・スリラア＝三十枚～四十枚程度
（小説は現代・時代、どちらでも結構です）

◉あぶちっく・みすてりい＝三十枚～四十枚程度
他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。原則として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。
掲載の分には相応の原稿料と、掲載誌一部をお送りします。

―原稿送り先―
東京都中野区江古田1の2302
久保書店内 **裏窓編集部**


# 裏窓

定価 百二十円・送料十二円
（地方売価百二十三円）

第四巻・第五号
五月号
（毎月一回一日発行）

昭和三四年四月二五日
昭和三四年五月一日

印刷 須磨利之
発行 山田忠雄
編集人
発行人
印刷所 向上印刷株式会社
発行所 株式会社 久保書店

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野（38）六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番